
金の満月が昇る時

灯里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金の満月が昇る時

【Nコード】

N8121X

【作者名】

灯里

【あらすじ】

満月でなくていい、三日月でもいいから、せめて貴方の傍に居させて下さい。

……誰に否定されたとしても私は生きることが望んでいいですか？

テイルズオブヴェスペリア原作沿い二次創作小説。

自サイトより加筆、修正したものを掲載しています。

オリジナルキャラが登場します。設定は濃いです。傾向としてはシリアスで友情重視、ユーリ寄り。

オリキャラ設定（前書き）

ネタバレに注意してください。

オリキャラが使う術や技も本編にないものがあります。

オリキャラ設定

エリシア

『たとえ誰に否定されても、私は……生きていたい』

名前：エリシア・クレセント

年齢：18歳

身長：163cm

武器：クレケンスルーナ（魔銃）

サブ：スロウナイフ

クラス：魔銃士

愛称はエリィ。薄紅掛かった金色の髪と満月色の瞳を持つ少女。遠距離、中距離から銃によるサポートは勿論、攻撃魔術や治癒術も心得ている。

一人称は私。ギルド“獅子の咆哮”の首領、レオンの娘でレイヴンとは顔見知り。魔導器を使わずに治癒術や魔術を操ることが出来る。

性格はお人よしで、基本的に厄介事には首を突っ込む。が他人の気持ちを考える事を忘れず、場合によっては一歩引いた態度を取ることも。

ユーリいわく彼女もほっとけない病らしい。幼くして母を亡くしたためか料理が得意。

以下、術・技設定です。

特技・奥義

アクアレーザー

地を這う水流を直線に放つ特技。水流は敵を貫通する。

グランドクエイカー

地を揺らさんばかりの純粋なエネルギーの奔流を大地に叩き付け、地割れを起こす特技。

ヴォルトアロー

凝縮した雷を放つ特技。放たれた光は紫の軌跡を描き、敵を追尾する。

ノクターナルライト

打ち出した光で敵を貫く特技。光は敵を貫通する。変化↓（ライトバースト）

ツインバレット

二丁の銃を連射する特技。変化↓（フォースバレット）

グラビティダウン

放たれた闇を結晶化し、槍に変えて対象に突き刺した後、重力の檻を発生させる特技。

ストームワルツ

連続でスロウナイフを投擲した後、凝縮した風を解き放つ奥義。
変化↓（シルフィードローア）

フレアフォース

敵を貫通する極太の炎のレーザーを放つ奥義。

クリスタルレイ

氷のエネルギーを天に放ち、絶対零度の氷の矢を雨の如く降らす奥義。

変化↓（セルシウスクラウン）

プリズムバレット

鳥の形を取った光を打ち出す奥義。光は対象に触れた瞬間、爆発する。

バーストアーツ

アストラルライン

出力を最大限まで高めて凝縮したエネルギーを放つ。光は直線を描き、触れた敵にもダメージ判定あり。

ボルカニックライン

光が炎に変化。ヒット数が増加。エネルギーが通過した後に爆発する。

フリージングライン

青を帯びたエネルギーを放ち、触れた敵を凍結させる。

エアリアルライン

風属性がついた『アストラルライン』。衝撃波で敵を吹き飛ばす。

ジオニツクライン

光に触れた敵をクリスタルに封じ込めた後追撃を放ち、破壊する。
破片にもダメージ判定あり。

術

ファーストエイド

味方一人の傷を癒す下級魔術。 変化↓（メディテーション）
「聖なる活力、ここへ」

ヒール

味方一人の傷を癒す中級魔術。 変化↓（ヒールウィンド）
「燦然たる癒しの光を」

キュア

味方一人のあらゆる傷、怪我を治す上級魔術。 変化↓（フェアリースークル）

「其は命脈を繋ぐ明澄たる光華」

レイズデッド

味方一人を瀕死状態から回復させる上級魔術。
変化↓（リヴァイヴ）

「彼の者を死の淵より呼び戻せ」

リカバー

味方一人を状態異常から回復させる下級魔術。変化↓（レストレ
ーション）

「卑しき病みよ、退け」

ナース

御使いが齎す聖なる光によって味方全員を癒す中級魔術。変化↓
（ナイチンゲール）

「白き天の使い達よ、その微笑を我らに」

リザレクション

強大な癒しの法陣を具現化させ、範囲内の味方を癒す上級魔術。
「万物に宿りし生命の息吹をここに」

ホーリーソング

味方全員の攻撃力と防御力を上昇させ、体力も回復させる上級魔
術。

「響き渡るは玲瓏たる天使の歌声」

デルタレイ

光球を三つ作り出し、敵一体を攻撃する下級魔術。
「鮮やかなる光珠、敵を討て」

クリスタルアーク

光輝く水晶の枢に敵一体を封じ込め、炸裂した破片で攻撃する下
級魔術。

「深淵にて佇む煌姫、彼の者を永遠の眠りに誘え」

ウィンドカッター

風の刃で敵を切り裂く風属性下級魔術。変化↓（フランベルジュ）
「舞い踊る風霊、刹那にて軌跡を描け」

レイ

幾筋もの光柱を発生させて攻撃する中級魔術。
「澄み渡る明光よ、罪深きものに壮麗たる裁きを降らせよ」

シャイニングスピア

輝ける光の槍を顕現させ敵を貫く中級魔術。変化↓（ブリリアン
トランス）

「仇為す者には光輝なる槍を」

トラクタービーム

範囲内の全ての敵を持ち上げ、地面に落としてダメージを与える
中級魔術。

「水天の境を見失いし業深き者よ。我が罰を示さん」

エアスラスト

圧縮した風の球体に敵を封じ込めて切り裂く風属性中級魔術。変
化↓（フラムルージュ、アクエリアス）

「悠久を旅する優風、今此処に楔を打ち下ろせ」

グランドクロス

光の十字架で邪悪を滅ぼす上級魔術。変化↓（インブレイズエン
ド）

「聖なる十字よ、悪しき魂を滅ぼさん」

ジャッジメント

神の名の元に汚れた魂に裁きの光を降らせる火属性上級魔術。変

化↓（クラストーレイド）

「煌翼を纏いし星辰の女神よ、不浄なる魔を滅せよ。降り注げ光の雨」

ゴッドブレス

天空に描いた魔法陣から強大なエネルギーの奔流を落とす風属性上級魔術。

「大いなる蒼穹^{そら}に抗うか小さき子よ、滅びの本懐を遂げるか、天界の審判此処に呼び覚まさん」

プリズムソード

光を纏った煌めく光剣を対象に突き立てる光属性上級魔術。変化↓（ディヴァインセイバー）

「七色の光秘めし聖剣よ、彼の者が背負いし咎と共に貫け」

シャイニングクルス

敵の頭上に十字の光槍を落とす上級魔術。変化↓（クリムゾンノヴァ）

「愚かなる咎人よ、光の洗礼を受けよ」

秘奥義

ビッグバン

創世の光を顕現させ、大爆発を起こす秘奥義。

「創世にして原初の光。女神が紡ぎし力の一欠片。凍て付きし永劫の指針よ、今始まりの時を再び刻め！」

テトラグラマトン

連結させた銃に四大精霊の力を乗せて撃ち出す秘奥義。

「お願い、ウンディーネ、イフリート、ノーム、シルフ——みんな力を貸して。行くよ、クレケンスルーナ、フルパワー！」

プロローグ

この世界、テルカ・リュミレースは決して人にとって暮らしやすい世界ではない。

自然溢れる大地には魔物が徘徊し、街は魔導器の恩恵なくしては存在出来ず、天災一つで容易く滅び去るであろう。

人々の殆どは魔物の恐ろしささえ知ることもなく、シルトプラスティア結界魔導器に守られた小さな世界の中で一生を終えて行く。

そんな世界の東——マイオキア平原の中心に位置する帝都ザーフ
イアス。

下に行くほど家々は粗末になって行き、上になるほど建物は豪華に、華美になっていく。

それは弱き者は虐げられ、一部の人間のみが恵まれた環境を手に入れるという、まるで世界そのものを表す真理だった。

そして一際目立つのが、中央に突き立った剣を囲むようにして広がる純白の光輪。シルトプラスティアこれこそ狂暴な魔物から人々を守る結界魔導器が放つ光である。

結界魔導器があるからこそ、人は魔物の脅威に曝されることなく平和に暮らし、安心して眠ることが出来るのだ。

雲一つない青空を見上げた少女はうん、と背伸びをした。年の頃は十七、八歳だろうか。愛らしい、整った顔立ちの少女だ。

長い睫毛に縁取られた瞳は、天に輝く満月の如き黄金色。そして肩を流れる長い髪は薄紅掛かった金色だ。

服装は白を基調とした服に短いスカート（動き易いように中にスパッツを履いてある）、ロングブーツ。右の耳には赤い宝石が嵌められた金色の耳飾りが太陽の光を受けてちかりと煌めいた。

しかしいつまでもものんびりともしてられない。街道とは言え、魔物が襲ってこないとも限らないのである。

まあ、そうなった時は倒せばいいのだが。少女はそつと腰にあるホルスターに触れ、自らが立つ丘の上から大きな街を見つめた。

この世界唯一の国。その帝都ザーフィアスまではもう直ぐだ。

少女は緩んだ気を引き締めると帝都に向かって歩き出した。

そこで待つ出会いが自らの運命、ひいては世界の命運すら左右することになると、彼女はまだ知るよしもない。

青年は物憂げな視線を外に向けていた。窓枠に持たれ掛かり、足を伸ばした格好は見れば何とも危なそうである。

年齢は推測するに二十歳前後か。背中まで届く艶やかな黒髪に紫掛かった黒い瞳。胸元が開いた黒い服に整った顔立ちの青年だったが、どこか不敵な面構えをしているとも言えるかもしれない。

帝都ザーフィアス。青年がいるのは、その中でも所謂下町と称される場所である。貴族たちが住む街の上段より綺麗な訳でも整っている訳でも当然ない。

だが彼はこの下町とここに住む人々が好きだった。それは生まれ育ったということもあるし、青年の性にも合っているからだ。

その時、青年の隣に横たわっていた白と青の毛並みの大きな犬の体が少しだけ動いた。と同時に階段を登る音がすると、凄い勢いで部屋の扉が開けられた。

「ユーリ！ 大変だよ！」

「でかい声出して、どうしたんだ。テッド？」

青年——もといユーリ・ローウェルは声の主に振り向くことすらしなかった。せずとも声と階段を上がる足音で分かるからである。ユーリはそこでやっと訪問者に目を向けると、予想通りの少年だった。

少年——テッドは息を切らしながら、ユーリが腰掛けている窓に近付くと、ある一点を指差した。

「あれ、ほら！ アクエフラスティア 水道魔導器がまた壊れちゃったよ！ さっき修理

してもらったばかりなのに」

つられるようにして視線を向ければ、下町の中心付近、恐らく広場の辺りから勢い良く水柱が上がっていた。

あれだけの水が吹き上がっていれば水浸しどころで済まないだろう。

「何だよ、厄介ごとなら騎士団に任せとけて。そのためにいんだから」

「下町のために動いちゃくれないよ。騎士団なんか！」

そんな少年の様子にも目も暮れず、ユーリはさも眠たげに欠伸を噛み殺した。

言った本人も騎士が下町のためになど動かないのは分かっていた。そう、ただ一人を除いては。

「世話好きのフレンがいんだろ？」

「もうフレンには頼みに行ったよ！でも会わせて貰えなかったの！」

フレンとはユーリの親友であり、この下町で共に育った幼なじみである。

彼は騎士団に所属する騎士であり、現在は隊長を務めているという。かく言うユーリも数年前までは騎士団に居た元騎士なのではあるが。

「はあ？　オレ、フレンの代わりか？」

ユーリは顎に手をついてため息をついた。わざわざ会いに行かなくとも真面目で心配性な友人は騒ぎを聞き付け、直ぐさま駆け付けてくるだろう。

それはそうとフレンに会わせて貰えなかったというのも変な話だ。

「いいから早く来て！ 人手が足りないんだ！」

思案しているユーリなど意に介さず、少年はユーリの服の袖を思い切り引っ張った。

引っ張られている本人もああ、これは伸びるなと思いつつも動くとはしない。

そうこうしていると、ユーリともテッドとも違う別の声がする。

「テッドお！ テッドお！ 降りてきなさい！ あんたも手伝うのよ！」

一階から聞こえた声の主は目の前の少年、テッドの母親である。いつまでも降りてこない息子に痺れを切らしたのだろう。それにしてもタイミングが悪い。

テッドはこの時ばかりは母を恨みたくなった。

「ちょ、ちょっと待ってよお……もう……ユーリの馬鹿！」

半ば消え入りそうな声で言い返すが、母が聞くはずもなく。

しかしユーリは未だ外を見つめたまま、一向に動こうとはしない。テッドはようやく諦めたのか、馬鹿、と言だけ悪態を付くと勢いよく扉を開けて飛び出して行った。

「騒ぎがあつたらすつ飛んで来るやつなのに……あの調子じゃ、魚しか住めない街になっちまうな」

視線の先には、広場の中央に立つ噴水に似た水道魔導器。水を汲み上げ供給する井戸の役割を果たすそれからは今や大量の水が吹き出し、勢いは未だ衰えることを知らない。

ユーリは視線を窓から外すと部屋の隅にあるベッドの上で寝ている存在に声を掛けた。

「起きてるか、ラピード？」

ぴん、と立った耳がぴくりと動き、閉じられていた水色の瞳が露になる。

齢五歳になろうかという犬は、準備万端だというような顔をしていた。

「なら行きますか」

ユーリは壁に立てかけてあった剣を手にとると、窓枠に足を掛け、二階から飛び降りた。

水道魔導器の前には騒ぎを聞き付け、下町の人々が集まっている。皆急拵えの土のうを周辺に積み上げているが、気休めでしかなく、未だ溢れ出る水の勢いは止まりそうもない。

「なんだ？ どでかい宝物でも沈んでんのか？」

笑いながら尋ねるユーリが茶化しているのは間違いない。

まあ、彼らしいといえばそうなのだが。

隣で作業していた男がどこか面白可笑しく答えた。この辺りは下町の特有の“ノリの良さ”だろう。

「ああ。でもユーリには分けてやんねえよ。来んの遅かったから」

「はっはっはっ。世知辛いねえ」

その間も手を休めることなく土のうを積み上げてるが、それでもユーリの足元も足首まで水に浸かっている。

勿論下町にも用水路が引かれてはいるが、濁った水がとめどなく流れており、いつあふれてもおかしくない。

「そう。世知辛い世の中なんだよ。魔導器修理を頼んだ貴族の魔導士様もいい加減な修理しかしてくんないしな」

「……ハンクスじいさん頑張ってるな」

貴族街に住むモルディオ、と名乗る魔導士に修理してもらったのはつい数十分前の出来事である。

しかし修理から数分と経たぬ内に水道魔導器から大量の水が噴き出して来たのだ。

ユーリの視線の先には率先して土のうを運ぶ老人の姿。いい年して水遊びという柄ではないだろうに。あれで腰でも痛めた日にはどうするのか。

「責任感じてんのさ。修理代、先頭立って集めてたのじいさんだから。じいさんもばあさんの形見まで手放して金を工面したつてのに」

「その結果がドカンとはね。けど魔導士が手抜き修理すんのは、じいさんの責任じゃねえよ」

男はまあな、と相槌をうつと、土のうを運んでは積み上げるといふ作業を繰り返す。

手伝わけてでもなくその様子を眺めていたユーリに老人——ハンのクスの鋭い声が飛んだ。

「これ、ユーリ！手伝わないなら近付くな。危ないぞ！」

「じいさん、魔核見なかったか？ 魔導器の真ん中で光るやつ」

この水道魔導器にはあるはずの物がなかった。

魔核コアと呼ばれるそれは魔導器の力の源ともいえるものである。

その魔核と魔核を収める筐体コンテナの二つが揃って初めて、魔導器は魔導器として機能するのだ。

「ん？ さあのう？ …… ないのか？」

「ああ。魔核がなけりゃあ、魔導器は動かないってのにな。最後に魔導器触ったの、修理に来た貴族様だよな？」

下町の人々が魔核がないことに気付かなかったのも、ある意味では仕方がない。

魔導器は貴重品でありながらも人々の生活に浸透しているが、エアルを制御する魔核やそれに刻まれた術式が専門的であることもあり、殆どの者は魔導器が何で動いているのかなど知らないのである。普段から武醒ボーディブラステイア魔導器を使っているユーリだからこそ気付いたといえるだろう。

「ああ、モルディオさんじゃよ」

「貴族街に住んでんのか？」

「そうじゃよ。ほれ、もういいからユーリもみんなを手伝わんか！」

しかしユーリはうんとは言わなかった。

魔核が戻らなければ根本的な解決にならないし、新たに水道魔導器を手に入れるなど不可能だ。

ならば自分がやるべき事は皆の手伝いではなく魔核を取り戻すこと。

居場所も分かっているなら話は早い。逃げられる前に捕まえなければ。

「……悪い、じいさん。用事思い出したんで行くわ」

言うなりユーリはハンクスの制止の声も聞かずラピードを連れて歩き出す。

ハンクスはその背中に無茶だけはするんじゃないぞと呟いた。

プロローグ（後書き）

連載開始しました！かなりの長編になる予定です。

牢屋の中からこんにちは

困っている人は助ける。それが彼女の信条だった。

お人よしだと言われることも多いが、それは彼女に取ってあたり前のことなのである。

ザーフィアスを訪れた理由、父のお使いともいえる頼み事を終えた少女――エリシアは街中を歩いていった。

後はダングレストに帰るだけなのだが、何しろ彼女にとっては初めての帝都。気にならないといったら嘘になる。

エリシアが直ぐにダングレストに帰っていれば、運命はまた違ったものになっていたかもしれない。

そんな彼女の耳に恐らくは子供の悲鳴が届いた。

振り向いた先には、十歳くらいの少年が数人の騎士に追い掛けられていたのである。

エリシアは父がギルドの首領であることも相俟って騎士にあまり良いイメージを抱いていない。

となればとる行動はただ一つ。

「ちょっと貴方たち！　こんな子供相手に何やってるの！　まったく……大人げない」

少年を庇うように騎士たちの前に立ち塞がったのである。

まさか邪魔が入るとは思っていなかった騎士たちがぼかんと間拔けな顔をしてエリシアを見つめていた。

「う、五月蠅い！　その子供は貴族街の家の窓を割ったあげく自分はやっていないと嘘をついたのだ！」

騎士の言葉に少年はふるふると頭を振って否定した。

エリシアはこれみよがしにはあ、とため息をつく。あらかた近くにいた少年を勘違いして追い回していたのだろう。

腐った騎士と子供。どちらを信じるかと問われれば自分は躊躇いなく子供と答えるだろう。

「止めて。今にも泣きそうじゃない。大丈夫、君は何も悪くないよ。さ、私と一緒に行こう」

完全に騎士たちを無視して男の子の手を取って歩き出す。

しかし彼等はエリシアと少年を取り囲み、武器を突き付けたのである。どう考えてもやり過ぎだ。

「なに？ それが騎士のすることなの？」

少女の顔には静かな怒りの色が刻まれている。

エリシアは少年を後ろに下がらせるとゆっくりと腰の二つあるホルスターの一つから陽光を弾く銀色の銃を取り出した。

何をするかと思えば、照準を石畳に合わせて……撃った。

「ノクターナルライト」

銃口に一瞬だけ浮かび上がった光の魔法陣。

次の瞬間、打ち出された光が騎士たちの足元で弾け、目も眩むような閃光が彼等の視界を灼いた。勿論当てるつもりのない威嚇射撃であり、目くらましである。

その隙にエリシアは再び男の子の手を取って駆け出した。

しかし彼等は諦めることなく追って来る。この辺りだけは感心したいものである。自

分一人なら騎士たちを撒くのは造作ないが、少年がいるためそれも難しい。大の男と少女、少年の足では遅かれ早かれ追い付かれてしまう。

最後の手段は、実行使だがそれをすれば確実に賞金首である。エリシアは仕方なく足を止めると堂々と騎士たちの前に姿を現した。

「やっと観念したか。これはれっきとした公務執行妨害だ。私たちと共に来て貰おう」

「この子の言うことを信じてくれるなら一緒に行く。でも駄目だった言うのなら……私には貴方たちを排除することなど簡単よ」

エリシアに気圧されたかのように後ろに下がる。

するりとホルスターから抜かれたバレルが銀色に煌めいた。

勿論本気ではない。賞金首などまっぴら御免だ。

「わ、分かった。分かったからその物騒な物を下ろせ！」

言葉通りに銃をホルスターに収めると、少年に逃げるように目配せする。

少年の姿が見えなくなったのを確認すると抵抗する気がないことを示すために両手を上げた。

鼻を突くかびの臭いと湿った空気、背中に当たる硬い感触にユーリは意識を取り戻した。

目に入るのは頑丈な鉄格子。あの後モルディオの屋敷に乗り込んでみればローブを目深に被ったやつが今にも屋敷を引き払おうとした直前だった。

そのモルディオをラピード追い詰めたまではよかったが、煙幕で逃げられる始末。ラピードが機転を利かせて奪った荷物の中に魔核はなかったのである。

しかもご丁寧に職務に忠実な（胸糞悪いキュモール隊のことである）警備の騎士が駆け付け、揚げ句の果てにはたこ殴りにされる始末である。

お陰で殴られたそこかしこが痛んだ。

「……で、その例の盗賊が、難攻不落の貴族の館から、すんごいお宝を盗んだわけよ」

「知ってるよ。盗賊も捕まった。盗品も戻ってきただろ」

思案に耽っていたユーリの耳に入ってきたのは、隣の独房の人物と恐らくは看守との会話。

囚人と仲良くお喋りとは看守も暇なものである。

「いやあ、そこは貴族の面子が邪魔をしてってやつでな。今、館にあんのは贋作よあ」

「馬鹿な……。ごほんつ。大人しくしている。もう直ぐ食事だ」

「そろそろじつとしてるのも疲れる頃でしょーよ、お隣りさん。目覚めてるんじゃないの？」

どこか名残惜しそうに話を切ると看守は隣の牢から離れ、ユーリがいる独房の前を通って姿を消した。

予想もしなかった隣からの声に、ユーリは寝転がっていたベッドから起き上がった。

自分が起きていることに気付いていたとは、ただのおっさんではない。

別に驚くほどのことではないのだが。

「そついう嘘、自分で考えんのか。おっさん、暇だな」

「おっさんは酷いな。おっさん、傷付くよ。それに嘘ってわけじゃないの。世界中に散らばる俺の部下たちが、必死に集めてきた情報でな……」

「はっはっ。ほんとに面白いおっさんだな」

相手も軽い調子なもので、つられてユーリも笑いながら答える。その時、かつんかつんと複数の足音が二人しかないはずの独房に反響した。音が聞こえた方は一つしかない入口兼出口から。

靴音からして一人はグリーブ。これは看守だ。もう一つはそれよりも軽い。恐らくは少し踵の高いブーツ、女か。

「大人しくここに入ってる」

がちやりと鉄格子が閉まる金属音。

鍵が落ちる音だけを残し、靴音と気配は遠ざかって行った。

新たなお隣りさんの登場に、牢の中は再び静寂に満たされる。それを唐突に破ったのは隣のおっさんの声だった。

「で、お隣さんのお隣りさん。だいじょーぶ？　ちなみに美女が可愛い女の子だとおっさん、嬉しいんだけどな」

そんな都合がいいわけがない。ユーリは半ば呆れて声も出ないが、この状況で何とも緊張感のないおっさんである。

しかし幾ら気を張ったところでここから出られる訳ではないのだが。

「この状況自体、大丈夫じゃないと思うけど」

返って来たのは牢獄によく響く若い女の声。

声だけでは何とも言えないが十代後半から二十代前後だろう。しばらく何かを噛み締めるような沈黙が続いたかと思うと、二人仲良く同時に声を上げた。

「ん？」「ん？」

「もしかしてレイヴン？」

「エリシアちゃん？」

二人の声音には僅かに驚きの色がある。

特に彼女、隣のユーリにも分かるくらい動揺が伝わって来た。酷く驚いているのかもしれない。

「何だ。つまりあんたら、知り合いつてことか？」

「まあ、そういうことになるわけよ」

「それよりも……おっさん情報通なんだろ？　ここから出る方法を教えてくれ」

ふと下町の様子が気になった。

（ハンクスじいさん頑張り過ぎていないといいのだが……。しかしじいさんの性格を考えると無茶しているだろうな）

「何だか知らないけど、十日も大人しくしてれば、出して貰えるでしょ」

十日も待つていれば、それこそ下町は水浸しでは済まない。

水道魔導器が壊れたままでも少しの間なら飲み水などの生活用水は何とかなるだろう。

だがそれにも限界がある。

脱出、青年の名は

「えっ！ 十日もこんなカビ臭い所に居なきゃいけないの私！？」

そんなの聞いてない。エリシアは思わず頭を抱えなくなった。湿気臭い独房に柔らかさのカケラもない硬いベッド。鉄格子の外に見えるのは何の愛想もない灰色一色。

十日の間、風呂どころか水さえ浴びられないなんて、年頃の少女に耐えられるはずがない。

それに十日もこんな所に入れられたらダングレストに戻るのも当然遅くなる。

「エリシアちゃんてば一体何やらかしたわけ？」

同じように捕まったレイヴンには言われたくない。

しかし聞かれたからには正直に話そうと帝都に來た理由（隣の牢の人物の前でもあるため父の素性は伏せたまま）と捕まった訳を話した。

「お人よしなこった」

「私にしては当たり前のことだけど？」

隣の牢の人物が呆れたような、だが僅かに感心したかのような声を投げかけた。声から判断するに若い男か。そうは言われてもエリシアにとっては当たり前のことである。

硬いベッドに腰掛けながら首を傾げた。エリシアとて後先考えず飛び出すわけではないのだが、追われていたのが子供だったから、なのかもしれない。

「そういう所からしてお人よし、だろ？ にしてもモルディオのやつ、どうすっかな……」

青年——ユーリの呟きに首を傾げる。

モルディオというと“あの”モルディオだろうか。変人で有名な天才魔導師リタ・モルディオ。弱冠一五歳にして魔導器、エアル研究の第一人者。そんな天才と独房の彼と何の関係があるのだろうか。

「モルディオってアスピオの？ 学術都市の天才魔導士とおたく、関係あつたの？」

「知ってるのか？」

つい口を滑らしたかのようなレイヴンの答えに、隣の彼は驚いた様子で尋ねる。半分独り言のつもりだったからだろう。

だがレイヴンは直ぐには答えず、エリシアも余計な口は挟まずに耳を澄ませておっさんの言葉を待った。

「お？ 知りたいか。知りたければそれ相応の報酬を貰わないと……」

いつものレイヴンと何ら変わらないおどけた口調である。

「学術都市アスピオの天才魔導士さまなんだろ？ ごちそうさま」

この辺りは彼の方が一枚上手だったようだ。

レイヴンが言わなくてもエリシアが答えていただろうが。エリシアはレイヴン、みつともないと思いつつ二人の会話を聞いていた。

「い、いや、違う。違うって。美食ギルドの長老の名だ。いや、待て、それはあれか……」

「レイヴン、しどろもどろになってる」

噴き出すのを堪えながら、だが耐え切れずに笑いが漏れる。

その時、独房に騎士が身につけるグリープ特有の金属音が反響した。一般の騎士のものとも少し音が違う。

エリシアが気付いた時、彼女の前を一人の男が通り過ぎた。

灰色の髪をした三十代であろう男だ。

端整な面差しに足元まで届く鮮やかな橙色の外套。ちらりと見えた腰の剣は華美な装飾はないものの、作りはしっかりしているし、シンプルだが随分と装飾も凝られている。

本来ならこんな独房に来るはずのない騎士。

エリシアは知らないが、ザーフィアスに住む者なら必ずと言っていいほど彼の名を知っている。騎士団長、アレクセイ・ディノイア。帝国騎士の頂点に立つ男である。

騎士は“彼”がいる独房を通り過ぎ、そして止まった。レイヴンがいる独房だろう。

というか今牢は三つしか使われてないため、隣の隣で止まったのならレイヴンの牢以外では有り得ない。

「出る」

「いいところだったんですがねえ」

次にエリシアとユーリの耳に聞こえたのは、鉄格子が開く独特の音。

（む、レイヴンだけ出してもらっちゃって。というか私が捕まった理由は話したのに、レイヴンが帝都の独房にいる訳を聞いて置けばよかった）

しかも明らかに高い位だと分かる騎士がお出迎えである。次に会ったら絶対に問いただしてやろうと、エリシアは心に決めた。

「早くしろ」

アレクセイに連れられ、歩いて来る隣のおっさん——もとい三代半ばほどの男がユーリの視界に入った。

浅黒い肌に無精髭を生やし、異国を思わせる変わった服を着崩している。

黙っていればそれなりに整った顔立ちなのだが、その飄々とした雰囲気と、服装も相まってどこか胡散臭さが拭えない。

「おっと」

男はユーリがいる独房の前で躓いたふりをしてしゃがみ込んだ。ユーリは近くまで駆け寄ると二人にしか聞こえないであろう小さな声で問い掛けた。

「騎士団長直々なんて、おっさん何者だよ？」

「……女神像の下」

だが男はそれに答えず、懐に入れたままだった手を出すと持っていた何かを床に滑らせた。

古びた金属の鍵。もしか独房の鍵か？

アレクセイ直々に迎えに来たことといい、全くもって得体の知れ

ないおっさんである。

「何をしている」

「はいはい。ただいま行きますって」

アレクセイの声に男はすっと立ち上がり、緩やかな足どりでユーリの前から姿を消した。

残されたユーリは、二人の気配が去ったのを確認して自分の手の中にある鍵を見て独りごちた。

「……そりゃ抜け出す方法、知りたいと言っただけだな」

彼も脱獄する気はさらさらないが、下町の様子は気になる。それに朝までに戻れば問題ないだろう。

とは言え直ぐに行動に移すわけにもいかない。抜け出すにしてもここは城の中。当然巡回の騎士も多い。

ユーリは騎士団時代を思い出し、巡回ルートや交代の時間を確認することにした。

レイヴンが居なくなったことで独房の中は一気に静かになった。

それはユーリが考え事をしているからであるが、エリシアはそんなこと知るよしもない。

つい迫り来る睡魔に身を任そうかとうつつらうつらしていた時である。隣の鉄格子が開く音がしたのは。

慌てて眠気を覚まし、鉄格子に歩み寄った。

隣の独房から出て来た人物は足音を一切立てず、見事に気配を消している。

二十歳過ぎの青年だった。胸元が開いた黒い服に背中まで届く艶

やかな黒髪。顔立ちはかなり整ってはいるものの、どこか不敵さを含んでいる。

エリシアは数秒間、呆然と青年を見ていたが（見とれていた）、我に返ると思わず青年の服を掴んだ。

「ちよつと待つ……」

「静かにしろ」

口は塞がれているので当然喋れない。分かったというように何度も頷くと、やっと手を離してくれて息苦しさから解放された。

声を出しかけた自分も悪いが、少しは手加減して欲しい。危うく窒息するところである。

エリシアは何度も空気を吸い込むと今度は小声で聞いた。

「貴方、どこに行くつもりなの？ 戻って来る気はあるんだろうけど……」

「下町だよ。様子が気になるんでね。しかし何で戻って来るつもりだつて分かったんだ？」

端から見ればかなり奇妙な光景であるのは間違いない。

幸い看守は眠けているらしく、二人のやり取りには気付いていなかった。何故分かったという彼にエリシアはにこりと微笑む。

「本当に逃げるつもりだったら夜まで待たないでしょう？ 例え見つけたとしても、貴方の腕なら騎士だって相手にならないもの」

この青年はかなり“使える”。

気配を完璧に絶ち、足音を完全に消すなど並の者に出来ることで

はない。本当に青年が逃げるつもりなら、彼は夜など待たずに堂々と脱獄するだろう。

短い会話の中からエリシアは彼ならそうするだろうと確信出来た。

「……参ったな。あんた、名前は？」

ユーリは困ったように、或は驚いたように頭をかいた。この少女、可愛い顔して洞察力はあるらしい、と。

エリシアは今だユーリの服から手を離さぬまま、満月色の瞳を煌めかせて答えた。

「エリシア。エリシア・クレセント。下町の様子、見に行くなら私も連れて行って」

理由が分からず首を傾げるユーリに、エリシアは全ての経緯を話した。

父から頼まれていたことを終えた後、偶然下町を訪れた時、水道魔導器から水が大量に噴き出している事態に遭遇したのだ。

下町の人々と一緒にずぶ濡れになって土のうを積み上げ、何とか水が収まったのを見届けてから下町を後にしたのもつかの間、エリシアは騎士に追われている少年を助け、ここに連れてこられたのだ。

「仕方ねえな。オレはユーリ。ユーリ・ローウェル。じゃ、行くか。エリシア……エリイで良いか？」

「え、いいけど……」

しかしどうやって出ればいいのか。ユーリがどんな方法を使っても独房の鍵を開けたか知らないが、全ての鍵は入口で寝ている看守が持っているのだろう。

すると彼は半信半疑で持っていた何か——鍵をエリシアがいる部屋の鍵穴に差し込んだ。

かちやり、と鍵が開いた音がした。

ユーリもまさか開くとは思っていなかったのだろう。まじまじと鍵を見つめ、呆れ半分に呟く。

「おいおい。どんな鍵だよこれ」

暗がりでは分からなかったが、ユーリと向かい合って彼が怪我をしていることに初めて気付いた。

唇の端は切れて血が滲んでいるし、腕には打撲の跡が紫色の痣になっている。平気そうにしているのが痛くないはずがない。

「怪我してるみたいだけど、大丈夫？」

「あ？ ああ。捕まった時にやられちゃってな」

「——聖なる活力、ここへ。ファーストエイド」

エリシアはユーリの痣が残る頬に触れると意味ある言葉——俗に魔術や治癒術を行使する時に要する詠唱——を呟いた。

触れた手を中心にして広がるほのかな光の粒子。金色の煌めきを放つ光が集束すると傷口が瞬く間に塞がり、紫に変色していた痣も生来の肌の色に戻る。

だがユーリの瞳は感謝よりも驚愕に彩られた。エリシアが治癒術を使えることには驚いたが、それ以上に彼を驚かせたのは彼女の耳に付けられた金の耳飾り。赤い宝石が嵌められたそれは間違いなく武醒魔導器だろう。

それは確かに作動していなかった。魔導器がなければ治癒術は使

えないはずなのに。

そもそも普通は魔導器が作動しているかなんて確認しない。よくよく見なければ分からないものである。ユーリは思わずエリシアの肩を掴んで引き寄せていた。

「えっ？」

エスコートは不得意？

頭が真っ白になって何も考えられない。目の前に端整なユーリの顔があった。睫毛は意外と長くて綺麗な紫掛かった黒瞳は生命力溢れる強い輝きに満ちている。

呆然とするエリシアに我に返ったのかユーリは直ぐに手を離れた。

「……悪かった。傷、サンキュな」

ユーリはばつが悪そうに頭をかくとそつぽを向いたまま礼を言う。その様子がおかしくて思わず笑ってしまった。

「うっん。ユーリって照れ屋なの？」

「はっ？　ばつ……ちげえよ！　そんな事より行くぞ」

眠りこけている看守の前を通り過ぎ、隣に位置する倉庫からユーリの剣とエリシアの銃を取り戻した。この銃も勿論、魔導器であるから本体である筐体と魔核がなければ作動しない。

だが幸い魔核は取り外されていなかった。

「それも魔導器なのか？」

「そつ。大気中のエアルを変換して光や炎とかを撃ち出せるの。武器も取り戻したことだし、行きましよ」

エリシアは銃に異常がないかもう一度調べると、腰のホルスターに収めた。二人は地下牢を抜け、巡回の騎士に見つかることなく城内を移動した。それも元騎士だというユーリのお陰だろう。

最低限の明かりのみが残された廊下は暗く、予想よりも警備は厳しかったが、ユーリやエリシアにしてみればざる警備でしかない。とは言っても堂々と城の正門から出ることは出来ないし、裏門も二人が居る場所より少し遠い上に見つかる可能性を考えると避けた方がいい。

「そーいや、エリィ、あのおっさんと知り合いだったんだよね？信用出来そうか？」

一応貰った鍵はちゃんとした（開いたという意味で）物だったが、看守に嘘八百を並び立てていたことを考えると微妙なところだ。ユーリはまだあのおっさんを信じていいのか測り兼ねていた。

「んー、多少胡散臭いかもしれないけど、嘘はつかないと思う」

ああ見えて天を射る矢の幹部である。理由は分からないが、様々な情報に通じているらしい。アルトスク

ユーリは騎士団にいた頃の記憶を探ってみると女神像は多分あっただろう。

だが詳しい場所を覚えていない。二人が階段を上がり、一階に出た時である。何者かが言い争う声が聞こえて来たのだった。

まさかこうも早く見つかるとは思いませんでした。体力には多少自信があつたが息が乱れる。やはり正式な訓練を受けた彼等を振り切るまでには至らない。少し開けた場所に出た瞬間、仕方なく少女は振り返った。

自分を追い掛けて来たのは二人。帝国騎士であることの証である鎧と兜。その手には鞘に収まったままであるが剣が握られている。一人の少女を前にするにはあまりに物騒ではないか。

二人なら自分だけでも何とかなるかもしれない。少女は向い来る騎士たちを油断なく見据えた。

「もう御戻りください」

それはまるで仕方のない子供を宥めるような口調だった。だがそう言われて素直に戻る気はない。自分がフレンに伝えなければ……。少女は頑なに首を振り続けた。

「今は戻れません！」

「これはあなたのためなのですよ」

何が自分のためだと言うのだ。外の世界すら知らぬまま箱庭の世界で生きて来た。何一つ自由にならないことがもどかしかった。あなたのため？ そんな言葉は聞き飽きた。

「例の件につきましては、我々が責任を持って小隊長に伝えておきますので」

「そう言っただけあなた方は何もして下さらなかったではありませんか！　お願いです。行かせてください。このことは直接フレンに伝えなくては……」

責任を持って伝えようと口先だけ。どうして誰も動いてくれないのか。フレンの命が危険に曝されているのに。

少女は後退しながらも懇願した。

少女からフレンという名が出た瞬間、静観していたユーリの表情が変わった。エリシアとユーリが出くわしたのは、明らかに貴族だと分かる少女を追う騎士という構図。

真っ先に飛び出そうとしたエリシアを止めたのはユーリだった。様子を見る、ということらしい。そうこうしている内に騎士たちはじりじりと少女に近付いて行く。

「怪我をしたくなければそ、それ以上、近付かないでください」

少女は服の中に隠し持っていたサーベルを引き抜いた。出来れば使いたくなかったが、この状況ではそんな事は言っていられない。

遂に騎士たちが少女を取り巻く空気が一変した。

「お止めになられた方が……お怪我をなさいますよ？」

だが少女は一步として退かなかった。サーベルを構え、騎士たちを睨みつける。

それでも剣の訓練は欠かしたことはない。騎士たちにも引けは取らないと自負している。

「剣の扱いは心得ています」

「致し方ありませんね。手荒な真似はしたくありませんでしたが……」

二人の騎士は遂に鞘から剣を抜き放った。それと同時に通路の方が騒がしくなる。

少女の目に駆けて来る騎士たちの姿が見えた。

「おい！ 居たぞ！ こっちだ」

これ以上は……もう。そう思った時だった。

衝撃波とまばゆい光が騎士たちを襲った。思わぬ方向からの攻撃に反応が遅れ、白塗りの壁に叩きつけられる。

まともに攻撃を受けた騎士はぴくりとも動かない。どうやら気絶したらようだ。

この衝撃波は武醒魔導器があって初めてなせる技である。フレンが扱う、騎士団の技。この状況で自分を助けてくれる人物がいるならば、それは一人しかない。

「フレン……！？ わたしを助けて……？」

だが振り向いた視線の先にいたのは、思い描いた金髪の騎士ではない。

胸元が開いた黒い服を纏った長い黒髪の青年と、薄紅掛かった淡い金色の髪に短いスカート姿の少女。どちらも見覚えのない人物である。

「だ、誰？」

「貴様！ 何者だ！」

それは後から来た騎士たちも同じようで、青年と少女に剣を突き付け、半ば叫ぶような形で問いただした。

しかし当の二人はまったく意に介していないようで、つまらなさそうな顔で騎士たちを見つめた。

「あえて言うなら通りすがり？」

「違いねえ」

そんな二人の会話に構わず、騎士の一人が青年に切り掛かる。

青年はごく自然にすう、と後ろに下がると、勢い余って体勢を崩した騎士の鳩尾に拳を叩き込んだ。

もう一人は同僚が瞬く間に倒されたことに動揺して後退するが、これまた少女が持つ銀色の銃から放たれた光が直撃し、のびている騎士と同じ末路を辿った。

「人の話しは」

「最後まで聞けつてな」

笑いながら言う少女と青年は息一つ乱れていない。

こつとも簡単に騎士を退けた二人に少女は驚きを隠しきれなかった。

「それにしても隣の誰かさんは、エスコートがなってない気がするない？」

「そりゃ、手厳しいことで」

ユーリは剣を鞘に収めつつ、半ばふざけてため息まじりに言った。いつの時代の騎士団でもエスコートは教えてくれないと思ったのは内緒だ。

エリシアは傍にあった壺を手に取り、物騒にもユーリの頭上に振り上げようとしている彼女に気付き、ホルスターから銃を抜いた。

銃口から放たれた光はあやまたず壺を粉碎する。見事な装飾が施されていた高そうな壺も粉々になればごみと同じだ。

ばれれば脱獄と器物破損で最悪である。どうか請求が来ませんようにと思う辺り、エリシアらしいのかもしれない。

「はあ、間一髪ね」

「何すんだ！」

壺は文字通り粉々に砕けたのだから彼女にも怪我はない。……のだが仮にも助けて貰った相手にあれは如何なものか。

「……だって、あなた方、お城の人じゃないですよね？」

少女は小首を傾げて間の抜けたことを問うた。エリシアとユーリが城の人間に見えると言うならその人物の目はきっと硝子玉かもしれない。飾り物だろう。

ユーリはあの胸元が開いた身軽な服装だし、エリシアは白い服と動き易いようにかなり短いスカート、ロングブーツという格好である。

「そう見えないってんなら、それまた光荣だな」

「ユーリ・ローウェルとその他一名！ どこへ逃げたのであるかー！」

その時、近くから聞こえて来た間抜けな声。

ユーリを追っかけ回すのが仕事らしいアデコールとボツコスのも
のだろう。声はまだ近いとは言えないが、油断は出来ない。

「馬鹿もーん！ 声が小さい！」

「ちっ、またあいつらか。もう牢屋に戻る意味、なくなっちまった
よ」

エリシアはさあと血の気が引くような気がした。その他一名とい
うのは間違いなく自分のことだろう。

これが父にばれることがあれば、自分は叱り飛ばされるに違いな
い。いや、叱られるだけで済めば僥倖だ。想像しただけで脂汗がに
じみ出る。

「ね、ユーリ。もしかしくなくてもその他一名って私のこと……だよ
ね？」

「だろうな。これでエリイも晴れてオレの仲間入りってことだ。ま、
諦めな」

「諦めたくない！」

につ、と笑うユーリに不思議そうに小首を傾げている少女。先に
逃げたレイヴンを恨みたい。

エリシアの魂の叫びにユーリは苦笑するだけだった。

招かれざる客

「ユーリ・ローウェル？　もしかしてフレンのお友達なの？」

ユーリの名を聞いた少女は驚いたように彼を見た。

ユーリもそうだが、どうやら彼女も“フレン”とやらの知り合いらしい。見るからに貴族である彼女とユーリに共通の友人がいるのなら、それは騎士ではないのか。

先程の少女を追い掛けていた騎士たちも、責任を持って小隊長に――と言っていたので間違いはないだろう。

「ああ、そうだけど。それ、フレンに聞いたの？」

「はい」

どうやら事情を知らない自分が加わる話してもなさそうなので、エリシアはのびている騎士たちから剣を取りあげて、高そうな置物の後ろに隠しておいた。

ついでに彼等が持っていた捕縛用の縄を拝借し、身動き出来ないように二人一組、背中合わせで縛って置く。

「ふん、あいつにも城の中にそんな話する相手いたんだな」

「あの、ユーリさん！　フレンのことでお話が！」

ここで疑問が一つ。彼女は何故、騎士たちに追われていたのだらう。

彼等は本来なら少女を守る立場だろう。それとも彼女の言う話しを“フレン”に伝えられては困るのか。

今までの状況だけで全てを察することは出来ないが、訳ありだということとはエリシアにも分かった。おまけに少女はかなり焦っているようだ。

「話しの腰を折るようで悪いけど、どうして騎士団に追われてるの？」

「それなんだよな。あんた一体何なんだ？」

一通りの作業を終えてエリシアは二人に歩み寄る。ユーリも不思議そうな顔をして少女を見つめていた。

だが時は二人に時間を与えてはくれない。近付いて来る複数の気配。こちらの、というよりも彼女の場所がばれている。

見つければ少女はまだしもエリシアとユーリは間違いなく牢獄に逆戻り。それだけは避けたいところだ。脱獄がばれた以上、今戻った所で最悪な事態になることは変わらない。ならば彼女についていくだけである。

「事情も聞きたいけど、のんびりしてらんないな。まずはフレンの所に案内すればいいか？」

ユーリは舌打ちすると同意を求めるように少女を見る。ここで長々話している訳にはいかない。間もなく騎士たちがやって来るだろう。

幾分か自分が置かれた状況に付いて行けていないが、彼女ははっきりと頷いた。

「あ、はい！」

「いくぞ」

走り出したユーリにエリシアと少女が続く。

先程感じた気配が段々と近くなって来る。早くこの場を離れなければならぬ。

「ユーリ、フレンって人の部屋、どこか知ってるんだよね？」

「知らなきゃわざわざそんなこと言わねえよ。ってエリイ、当然のように付いて来てるけど、いいのか？」

ユーリが話しながら隣のエリシアを見た。言わばこれはエリシアには全く関係のないことである。ならば彼女が付き合う道理もないはず。

困っている人を助けるのに理由は必要ない。自分でもお人よしだと思いつつ、エリシアはにっ、と笑ったのだった。

「今戻っても最悪な事態には変わらないし。それとも私、そんなに薄情に見える？」

どうやらフレンの部屋は二階にあるらしい。エリシアとユーリ、薄紅色の髪の少女を加えた一行は巡回の目を盗みながら階段を上り、二階を目指した。

エリシアにしてみれば城の部屋など全て同じに見えるが、元騎士のユーリと彼女は区別がつからしい。

「この辺り……だったような……」

少女は長い廊下の中央付近で立ち止まると、きよろきよると辺りを見回した。

それを見ていたユーリが呆れ口調で一言。

「……あんたの立ってるそこがフレンの部屋だろ……？」

これにはエリシアもあれ、と首を傾げそうになった。果たして大丈夫なのだろうか。

城に住む貴族であっても把握している訳ではないらしい。周囲を確認して扉をノックする。……が反応はない。

案の定、部屋はもぬけの殻だった。

フレンがどんな人物かは知らないが、部屋の状況を見る限り、ユーリとは正反対の几帳面で真面目な人物だと推測出来る。あくまで推測に過ぎないのだが。

「やけに片付いてるな……こりゃあ、フレンのやつどっかに遠出かもな」

「その可能性が高いと思う。ベッドも使われた形跡がないし、状況

を見ると数日は部屋を空けてる」

何か手がかりはないかと部屋を見回すが、目立つものはない。明かりが付いていた形跡もないし、ベッドや棚の中まできっちりと整えられている。

彼が出て行ったのは少なくとも数時間単位ではない。恐らく数日単位か。

「だろうな」

「そんな……間に合わなかった」

「んで、一体どんな悪さやらかしたんだ？」

ユーリが茶化すように笑うが、彼女が何かをしたとは思えづらい。勿論、彼も本気ではないだろう。

身なりからして貴族の少女がわざわざ一騎士に伝えなければならぬ事とは何なのか。

「そんな、ユーリじゃあるまいし」

「悪かったな」

笑いながらエリシアがユーリを横目で見る。ユーリは、あのな、お前、オレを何だと思ってるんだ。そう言い返したい衝動に駆られた。

エリシアはこほんと咳ばらいを一つ。このままだと埒があかない。追っ手やら何やらがここを嗅ぎ付ける前に事実関係をはっきりさせておかなければ。

「まあ冗談は置いておいて。つまりフレンと言う人に危険が迫っている。貴女はそれを伝えに行きたいと。そういうこと？」

「は、はい！」

どうやら詳しいことは話してくれないらしい。聞いた所で分かりはしないだろうが、彼女がそう判断したなら自分から言うべきことはない。

余計な詮索はすべきではないし、エリシアもそうだが、誰しも言いたくない事の一つや二つはある。

「お願いします。ユーリさん、エリィさん、わたしも連れて行ってください。今のわたしには、フレン以外に頼れる人がいないんです。せめて、お城の外まで……お願いします、助けください」

彼女は両手を正面で組み、祈るように二人をみつめた。そんな顔をされたら断るに断れない。もっともエリシアには最初から拒むという選択肢はないが。

助けを求める者の手を拒むな。それがエリシアのモットーであり、父の教えである。

「訳ありなのは分かったからせめて名前くらい聞かせてくんない？」

「そう言えば聞いてなかったか。あ、私はエリシア。エリシアでもエリィでも好きに呼んで」

ユーリはどつかりとフレンのベッドに腰掛け、少女に聞く。幾らなんでもリラックスし過ぎな気もするが、友人という話だから遠慮はないのだろう。

エリシアは少女の方を向き直り、自己紹介をした。名を尋ねる時

はまず自分から名乗れ。どこかのギルドの誰かの言葉だった気がする。貴族の方は知らないが、これが普通の礼儀というものだろう。少女の方はというと、妙に畏まってぺこりとお辞儀した。

「は、はい。わたしは……ひゃあっ」

“それ”は唐突に起こった。少女が言いかけたのと、扉が衝撃で吹き飛ばされたのはほぼ同時だった。

ユーリが前に出る。いつでも剣を抜けるように手は鞘に沿えたまままだ。

エリシアもホルスターから銃を抜き、油断なく扉の外を見据えた。

「オレの刃のエサになれ……」

一言で言い表すなら“異様”な男だった。体にフィットする奇抜な服装に黒に黄、赤と染め分けられた髪。

明らかに招かれざる客だと分かる男は両手に抜き身の剣を下げていた。

一見ただけで分かる。男が放つ痛いほどに冷たい殺気。隙だらけのように見えて寸分の隙のない構え。彼は間違いなく暗殺を生業とする者だ。

「オレはザギ……お前を殺す男の名。覚えておけ、死ね、フレン・シーフォ……！」

月の光に照らされ、うつすらと浮かび上がる男の顔と携えた刃。男は一番手前にいたユーリとの距離を一瞬で詰め、袈裟がに切り上げる。ユーリは首筋を狙った一撃をあわやの所で剣で弾いた。息を付く暇もなく、次々に繰り出される連撃を全て捌く。

厄介な事に一撃こそ軽いものの、スピードは早く、正確に急所を

狙つて来る。打ち合うユーリと男。それはまるで美しき剣の舞이었다。

刹那の攻防を見せつけられているエリシアは手を出せずにいた。今ここで割って入ればユーリの邪魔になるからだ。加勢しようにも男とユーリの距離が近すぎて銃は使えない。術も同様である。せめて男がユーリから離れてくれれば……。

「いい感じだ」

「はあ？ 何がだよ。こっちはちつともよくねえよ。つーか相手、完璧に間違ってるぜ。仕事はもっと丁寧にやんな」

今まで表情すら浮かべていなかった男はにやり、と笑った。さながらお気に入りの玩具をみつけた子供のように。

ユーリは不敵な、余裕めいた表情で銀色の弧を描いて迫る刃を受け止める。月明かりだけが照らす室内に激しい音を立てて火花が散った。

どこをどう見れば自分とフレンを見間違えるのだろうか。

「そんな些細なことはどうでもいい！ あははっ！！ さあ、上がってキタ！ 上がってキタゼエエエエ！」

「急に変わりやがったな」

男の異変を察知したユーリは急所を狙う剣を弾き返し、後方に飛んだ。

それまで呆けていた少女が慌ててサーベルを構える。

「わたしもお手伝いします！」

「駄目！ 今貴女が行っても邪魔になるだけ。下がってて、私が…行く」

エリシアは咄嗟に飛び出そうとした少女を止めた。
彼女ではあの男の相手は荷が重い。二人の様子に気付いたユーリの声が飛んだ。

「よせ！」

その瞬間、ユーリにほんの少しだけ、隙ともいえない隙が出来た。そしてそれを見逃す男ではない。今までとは比べものにならない速さでユーリに肉薄する。

防御が…間に合わない。ユーリは負傷覚悟で迎え撃とうとする。

「くっ！」

『父さんより全然弱い！』

確かに男は強い。太刀筋も傭兵などに比べて圧倒的に早い。

だが、父に比べたら足元にも及ばないではないか。

エリシアは二人の間に割って入り、ユーリの前に立ち塞がる。

蛇のようにうねる刃を紙一重で避けるが、完全には避けきれずに髪が数本床に落ちた。

しかしエリシアはそれに構わず男に銃口を向ける。

淡く浮かび上がる白き光の魔法陣。銃口から放たれた白い光が闇を照らした。

「ノクターナルライト！」

対照的な友人

エリシアが銃から放った光は、万物の根源たるエアルを物理的な力に変えて撃ち出したもので、武醒ポイディプラスティア魔導器を介して操る、術や剣技と同じものだ。

純粋なエネルギーの奔流とも言えるそれは、出力を落としているとはいえ、直撃すれば怪我はまず免れない。先程の騎士たちと同様、受ければ壁に叩き付けられていただろう。

しかし男は両手を交差させて踏み止まる。

だがエリシアは男の姿を見る前に精神を集中させ、術を紡ぎ出していた。この程度では倒せないと踏んでいたからだ。

エリシアの周りに描かれる立体魔法陣。暗闇の中で鮮やかな緑の光を放つそれには、難解な紋様が浮き出ている。

男が体勢を立て直す隙を与えるほど彼女も甘くない。エリシアは銃を持った手を突き出した。

「——舞い踊る風霊、刹那にて軌跡を描け！ ウィンドカッター！」

生み出された風の刃は弧を描き、男を切り裂くはずだった。

だと言うのに、真空の刃は腕を浅く切っただけで留まった。多少は出血してはいるが、それだけだ。常人なら視認してから避けられるものではない。

だが男はそれをかわした。

それでもエリシアは素早く銃を連結させると男に照準を定めた。銃口にエアルが集束し、淡い燐光を纏う。そう、全てはこの時のためのフェイク。

「雷よ、ヴォルトアロー！」

銃口から迸る雷霆。それは真っ直ぐに対象に向かう。男は避ける所か何と床を蹴り、前に出る。ちつ、と雷光が掠り、右頬を焼いた。男は勝利を確信したように勝ち誇った笑みを浮かべる。

分かっていたのは男だけではない。エリシアもまた笑っていた。同時に紫の光は今度こそ、背後から男を直撃した。

「残念。それ、追尾性だから」

「……えげつねえな」

ユーリが後ろから呟いたがエリシア無視。父との稽古に比べれば何てことない。

ただ、稽古は実戦とは違う。流石に殺しを生業とする者との命のやり取りには焦ったが。

「ひやははは！ もっともっとだあ！ さあ、続きをやるぞ！」

体から白煙を立ち上がらせながらも、男は立ち上がった。

服は焦げ、破れている所もあるが、瞳から闘志は失われていない。それどころか楽しげに笑っていた。

油断してはならない。手負いの獣は危険だ。

その時、男の背後に気配。現れたのは、暗闇の中で禍々しく光る赤い眼に、黒装束に身を包んだ男。突然の乱入にユーリとエリシアは身構えるが、二人の警戒とは裏腹に男が口を開いた。

「ザギ、引き上げだ。こっちのミスで騎士団に気付かれた」

ザギと呼ばれた男は反応すらない。

一度も後ろを見ることもなく、無造作に剣を振るった。

不意を突いた攻撃に黒衣の男は、身を反らすことでそれをかわす。

「き、貴様」

「オレの邪魔をするな！　まだ上り詰めちゃいない！」

ザギは未だ剣を構えたまま、ユーリとエリシアを見つめている。気付かれたと言うことは遠からず、城内は彼等と少女を捜す騎士たちで溢れ返るだろう。

ユーリは舌打ちしたいのを堪えて二人の会話を聞いた。

「騎士団が来る前に退くぞ。今日で楽しみを終わりにしたいのか？」

それまで微動だにしなかったザギの体がぴくりと動いた。狂気を思わせる不気味な笑みも消えている。

楽しみを終わりにしたいか、の一言が効いたらしい。

ザギはユーリとそしてエリシアを一瞥すると身を翻し、城の中に消える。黒衣の男も彼に続き、足音を起てずに駆け出した。

ザギが放つ底冷えする殺気が遠ざかっていく。それを確認するとユーリはゆっくりと息を吐き出した。見れば剣を握っていた左手はじつとりと汗をかいている。

終わったのだと意識した途端、体を脱力感が襲った。

いくらユーリが騎士団にいたとは言え、暗殺者とおぼしき人間と対峙したのは初めてである。緊張するのも当然だ。

「ここもゆつくりできねえのな。おい、エリイ、切り結んでる時に割って入るのは危ねえだろ。だけど……ありがとな」

あの時、エリシアが二人の間に割って入っていなければ怪我をし

ていたか、最悪死んでいたかもしれない。

ユーリは躊躇うことなく礼を言った。生憎そんな事で傷つく矜持など持ち合わせていない。

「ごめん。つい動いちゃって。見ているだけでも何となく釈だったし」

「あの、ユーリさん、エリイさん」

恐らく、ユーリならザギという男にも遅れはとらないだろう。例えエリシアが手を出さなかったとしても。

いつの間にかサーベルを収めていた少女が、怖ず怖ずと口を開く。

「分かったよ。一先ず城の外までは一緒だ」

そうこうしている内に、早くも外が騒がしくなってきた。

裏を返せばこの期を逃すつもりはない。訓練を受けた騎士たちは想定出来ない事態に弱く（フレンは別だが）、混乱時なら出し抜くのもたやすい。

頷いた少女は自らをエステリーゼと名乗り、深々とお辞儀をした。

「はい、あの、わたし、エステリーゼっています」

「んじゃあ、エリイ、エステリーゼ、急ぐぞ」

「了解！」

「あの、申し訳ないのですが、着替えさせて頂いていいですか？
近くにわたしの部屋がありますから」

エステリーゼにつられて服装を見ると、高そうな青いドレスは邪

魔な上に目立つ。

わざわざ見つけてくださいと言っているようなものだ。それにヒールのある靴では動きづらだろう。

「いいんじゃない？ 流石にその格好で城から出れないしね」

「だな」

思わずその格好で街中に出た時を想像するが、目立つやら何やらの次元の問題ではない。明らかに浮くことは間違ない。急がなければいけないが、着替える時間はあるだろう。

二人はエステリーゼの後について行く形になる。先程の男たちのお陰で騎士たちの数は多いものの、簡単にやり過ごせた。

「それにしても呆れるくらいざる警備よね。一応、帝国の象徴たる“城”なのに」

こつも簡単に動き回れるならざる警備と言っても間違っていない。これが彼等の警戒体勢なのか。ユーリの方は慣れているのか呆れるよりも馬鹿にしているようである。

「ま、名ばかりと言っても過言じゃねえからな騎士は。内側は腐ってるんだよ。そんな奴らばっかだからフレンが苦労すんだよ」

誰よりも真面目な友人。かつて理想を抱いた青年たちは騎士団へと身を投じた。

しかし腐敗しきった騎士団に一人は去り、一人はそんな現状を変えるために上を目指した。

前者がユーリ。後者がフレンだ。

騎士を辞めたことに後悔はない。フレンは上に行って人々の未来

を守ればいい。

だが今苦しんでいる人々は誰が助けるのだ。

「ここがわたしの部屋です。では着替えて来ますね」

「ちゃんと見張ってるから安心して着替えて来て」

はい、と返事をして、エステリーゼは部屋の中に消えた。

周りに騎士たちの姿はない。油断は出来ないが、騎士たちは彼女が部屋には戻らないと判断したのだろうか。

エリシアは壁に背を預けたままユーリに尋ねる。ユーリやエステリーゼの会話から想像は出来たが、ユーリの口から直接聞きたかったのだ。

「……フレンってどんな人なの？」

「そうだな……誰よりも真面目で真っ直ぐな奴だよ。羨ましいくらいにな。オレはあいつに勝てたためしがねえんだよ。剣でも何でもいや、料理だけは別か。それでいてユーリ、大丈夫？　なんて言って手を差し出してくる」

悔しいくらいに余裕があつて真っ直ぐで。だからフレンには上に行つて、弱き者が虐げられる世界の仕組みを変えて欲しかった。ユーリはとても柄ではない。

苦い顔をするユーリを見てエリシアの口から思わず笑い声が漏れた。

「でもユーリはそのフレンって人、好きなんだね」

「まあな。でなきゃずっとつるんでねえよ」

「お待たせしました」

扉が開き、エステリーゼが現れる。

着替えたエステリーゼはドレス姿の時とは全く印象が違った。今も品は良さそうに見えるが、少なくともお嬢様が着る服ではない。後ろで纏めていた髪も下ろしているだけで随分イメージが違う。

白を基調としたジャケットは肩が膨らんだ作りになっており、アウセントに黄色のラインが引かれている。彼女の髪と同じ薄紅色のスカートは、見る者に花の蕾を思わせた。

「どう、ですか？」

「……似合わねえな」

「……ユーリ。大丈夫、ドレスよりずっと似合ってるから」

失礼なことを口走るユーリを半眼で睨み、エステリーゼに視線を向ける。

似合っている、は嘘ではない。エリシアの心からの言葉だ。まだ会って間もないが、こちらの方がずっと彼女らしいと思った。

エステリーゼにもそんなエリシアの心が届いたのか、ぱあっと顔を輝かせた。

「エステリーゼ、エステリーゼ……ちょっと呼びづらくない？」

「そうでしょうか？」

小首を傾げるのは栗鼠のようで非常にかわいらしいのだが、箱入り娘というのは、いや貴族の少女は皆、“こう”なのか。

それとも彼女が特別なのか、エリシアはいまいち『貴族の娘』と
いうのが掴みきれていなかった。

「じゃ、エステルってのはどうだ？」

「うん。良いと思う。エステル？」

「……エステル、エステル」

エステリーゼにすれば不思議な気持ちだった。彼女の周りの人々は皆、例外なく自分をエステリーゼ様、と呼んでいた。

誰も呼びづらい等と言ったことはない。考えればそれは当たり前であるが、エステリーゼ——エステルにしてみれば嬉しかった。

自分を愛称で呼んでくれる人なんていなかったから。あのフレンでさえも自分をエステリーゼ様、と呼んだから。

「エステル？ 急ごう」

自分を気遣う声にエステルはふと我に返る。こうやって思案に耽るのは悪い癖だ。

慌てて顔を上げると、自分を待っているエリシアとどこか斜めに構えたユーリが目に入る。

「ぐずぐずしてるとおいてくぞ」

どこか呆れ混じりの声には僅かの優しさが含まれていた。エステルの表情が徐々に笑みへと変わる。

生まれてからずっと箱庭の世界で生きて来た少女は、城では決して手に入らぬ何かを噛み締めるように頷き、駆け出した。

「はいっ！」

至宝抱く女神像

「女神像、ですか？」

その肝心の場所をエリシアは勿論、ユーリも知らない。彼の場合は忘れていたのだが、はい脱出出来ずに牢屋に逆戻りだけは避けたい。

城に住んでいるエステルならもしやと思い、聞いてみたのだが。エステルは少し考え込むような表情を見せ、やがて思い出したように顔を上げた。

「はい。確かにありますが、それが何か？」

「多分だけど、女神像まで行けば城から出られると思う。案内してくれる？」

そう言った直後、鏡のように磨かれた廊下に反響する複数の足音。誰か来る。

いざとなればエステルの部屋に隠れる手があるが、あまりよろしくない。第一、誰かが来た場合、二階、それも密室では逃げ場がないからだ。

そして二人とも、先ほどのザギとの戦闘で思った以上に疲れていた。

「エステル、取りあえず案内してくれ。時間はあまりねえみたいだからな」

「分かりました」

エステルが続いて、北側にある階段をあくまで静かに駆け降りる。周囲の警戒も忘れない。階段で見つかればそれこそ逃げ場はないし、隠れる場所もあるはずがない。

廊下の突き当たり、エステルが騎士に追い詰められていた所と同じような作りの開けた場所。ほのかな明かりが照らす中央に女神像はあった。

恐らくは名匠の手によるものだろう。背にはまるで本物であるかのように精緻な翼が広がり、織手と呼ぶに相応しい手には帝国の至宝、デインノモス宙の戒典が握られている。

こんな事態でなければゆっくり眺めていたのだが、そんな訳にもいかない。

「それにしても、どこに抜け出す手掛かりあるんだよ」

あのおっさん信じなければ良かっただろうか。ため息を付きかけたユーリを余所にエリシアは、女神像が置かれている床にしゃがみ込んだ。

直接手で触れてみるとやはり、僅かに引きずったような跡がある。

「おい、エリイ、何してんだ。見えるぞ」

何が、とは言えない。ちなみにエステルは全然分かってないようで、ただきょんとしている。エリシアはユーリに見えるように、平然とスカートの裾を掴んで持ち上げてみた。

「これ？ 下履いてるから別に見えてもいいけど？」

白のミニスカートの下には動き易いように黒のスパッツを履いてある。

するとユーリが何だか凄く微妙な顔をした。まるで期待外れだった、とでも言いたいのだろうか。

「……色気ねえな」

「悪かったわね！ それよりもここ、動かすから手伝って」

一度ユーリには女心というものを説かなければならないと思いつつ、女神像を指差す。

二人で女神像を退かすと、下から現れたもの。それは階段だった。まずユーリ、エステル、エリシアの順で降りていく。

鼻を突くかび臭さと湿った空気。石造りの通路には鼠に似た魔物が徘徊していた。

正直な話、エリシアとユーリがいた独房と変わらない。

女神像の下に隠されていたのは整備されてはいるものの、かび臭さが拭えない地下通路。女神像の下に隠されていたことを考えると、皇族のための隠し通路なのかもしれない。

「本当に隠し通路なんてあったんですね」

エステルは目を輝かせて言うが、本当に貴族というのは分からない。

こんな水っぽくてかび臭い通路の何処が良いのだろう。それはユーリも同じようで、エステルを見た後、エリシアに向けて小さく首を竦めた。

「エステル、油断は禁物だから」

銃を構えたエリシアに、慌ててエステルは後ろを向く。すると鼠

より二回りは大きい鼠の魔物が倒れていた。しかもぷすぷすと白煙を上げて、である。

肉の焦げる（生焼き）臭いが辺りに漂う。

エリシアやユーリはともかく、エステルは少し気分が悪くなったが、我慢して引き攣った笑顔を浮かべた。

だが魔物は一匹だけではない。

「すみませんエリイ、ありがとうございます」

「にしても魔物、多いつつの！ 蒼破刃！」

ユーリの剣から放たれた青い衝撃破が、纏めて魔物を吹き飛ばす。エリシアも後ろから銃と魔術を巧に操って、ユーリを援護する。エステルも二人に負けじとサーベルを振り上げた。

「いきます！ スターストローク！」

「これであらかた片付いたか」

エステルがサーベルを振り上げると、ユーリの蒼破刃とよく似た、だが少し違う地を這う白い衝撃破が生まれた。それは真っ直ぐに魔物に直撃する。

ユーリは剣を鞘に戻して周囲を確認した。もう気配は感じない。

その時、先を歩いていたエリシアが何か見つけたようであつ、と声を上げた。

「どうした？」

「出口よ」

エリシアが見上げる先には、地上へと続く一本の梯子が伸びていた。

視界を妬く光にユーリは思わず目を閉じる。

梯子を上った先は閑静な住宅街。皮肉にもユーリが突き止めたモルディオの屋敷前だった。

ユーリはエステルとしんがりのエリシアに手を貸して引き上げる。

「うわ、まぶしっ……」

「あゝあ、もう朝かよ。一晚無駄にしたな」

結局朝までに戻るつもりであっても、間に合わなかったというところか。そんな解釈の仕方は割と楽観的なものかもしれない。

エリシアは自分が酷く空腹であることに気付いた。昨日の夜、独房で出された夕食にも殆ど手を付けていないし、魔物やあのザギとか言う男との戦闘で体を動かしたせいもある。

そしてエステルと言えば、忙しく辺りを見回していた。別段、変わったものがあるわけでも無いのだが、彼女の瞳には好奇の色が見える。

「そんなにキョロキョロしてどうしたの？」

「窓から見るのと全然違って見えます」

それは当然だろう。

しかしエリシアが気になるのはエステルの物言い。これではまるで城から出たことがないみたいではないか。

「そりゃ大袈裟だな。城の外に来るのが初めてみたいに聞こえるぞ」

「……そ、それは……」

「ま、お城に住むお嬢様ともなれば好き勝手に出歩けないか」

ユーリの声に我に返ったエステルは言い訳しようとして、だが何も思い付かずに視線を宙に泳がせた。

確かにユーリの言う通りだが、エステルが思わず呟いた一言はそういう意味ではなかった気がする。ユーリもそれを分かっている、わざと助け船を出したのかもしれない。

「は、はい、そうなんです」

嘘であることがバレバレである。

どもっているし、何より視線が宙に浮いたままだ。城から一步も出たことがないとは、あながち間違っていないかもしれない。

「ま、とりあえず脱出成功ってことで」

「お疲れ様っ」

エリシアはユーリが出した手に、自分の右手を勢い良く合わせる。きちんと小気味良い音が響いた。所謂ハイタッチ、である。

二人を見たエステルはまたしてもきょとした表情で尋ねた。

「それ、何ですか？」

予想もしなかったエステルのあまりのお嬢様ぶりに、エリシアとユーリは苦笑いを隠しきれなかった。

フレンの行き先

「ハイツッチだけど？」

「ハイツッチ……ですか？」

「で、エステルはこれからどうすんの？」

首を傾げる彼女は、まるでハイツッチという言葉の意味を理解してないようである。エステルだけというより他の貴族も知らないのだろうか。

これからどうするのか、それはエリシアも気になっていた所だ。既にフレンは部屋にいなかったし、部屋が片付いていたことから、暫く城に戻るつもりはないのだろう。そうならば行き先は当然、境界の外である。

エリシアが窺うようにエステルを見ると、彼女は躊躇うこと無く口を開いた。

「フレンを追います」

部屋を抜け出して（しかもサーベルを持ってまで）行動を起こしたり、思い切りの良さが彼女のいいところなのかもしれない。

エリシアはエステルに付き合うのもいいかと考え始めていた。別段目的がある旅でもないし、純粋に彼女が気に入ったからだ。

それに、彼女一人でフレンを追うのは流石に無茶すぎる。

「フレンって人の行き先、知ってるの？」

「先日、騎士の巡礼に出ると話していましたから……」

「あゝ、あれか。帝国の街を回って、善行を積んでこいつてやつ」

エリシアはさっぱりだが、ユーリは知っているらしい。ユーリも訓練生時代に聞かされたことがある。結局その前に辞めたが、規則やら何やらに厳しい友人は律儀にも街を回るらしい。

最初に目指す街は決まっていたと思うが、何分真面目に聞いていなかったことと、数年も前の話だ。ユーリは一々覚えていない。

「はい。だから花の街ハルルを目指します。騎士の巡礼では最初にハルルに行くのが慣わしですから」

「となると、結界の外か」

ユーリは青く澄んだ空を見上げる。見えるのは人々の暮らしを守る輝く光輪。結界魔導器の恩恵を受けぬ外の世界には狂暴な魔物が徘徊している。

結界の中は安全だがそれ故に自由もなく、全てが管理されている。それは正に箱庭の世界と言えるだろう。

一步街から出れば結界魔導器の守護はなく、自分の身は自分で守るしかない。夜も安心して眠れず、気が休まることもない。正に弱肉強食の世界。魔物に襲われ、命を落とす者も少なくないのだ。箱庭の世界を出るにはそれ相応のリスクがつきまとう。

「二人は結界の外を旅したことがあります？」

「私はまあ、ザーフィアスの人間じゃないし。つい一日ほど前に来たところ」

エリシアも昨日の朝はまさか、一日の内に騎士に捕まり、揚げ句

の果てには脱獄するなど夢にも思わなかった。次にレイヴンを見つけたら、絶対に問い詰めてやると心に誓ったエリシアである。

もともと野暮用で訪れただけであり、用が済めばすぐにでも故郷の街、ダングレストに帰るところだった。

「少しの間だけならな。興味はあるけど、下町を留守にするわけにはいかないしね。オレも下町に戻るから、それまで一緒だな」

「ありがとうございます」

頭を掻くユーリに、律儀にお辞儀をするエステル。エリシアを含めた三人は連れだつて歩き出す。少し不謹慎だと思うがエステルのは、雲一つない青空のように晴れやかだった。

一行は貴族街を抜け、一番下層にある下町まで下りて来た。途中でルブランとアデコール、ボツコスが性懲りもなく追い掛けて来たが、あの二人はユーリが投げたつぶてを受けて仲良く気絶したという訳である。

そんな三人をハンクスが出迎えた。あれほど水が吹き出していた水道魔導器も今は出る水が無くなったのか、すっかり地面も渴いている。

「おお、ユーリ！ どこに行つとつたんじゃ！」

「ちよいとお城に招待受けて優雅なひと時を満喫してた」

とユーリは冗談めかして言うが、少なくともそんな訳ではないことはハンクスにも分かる。

今までユーリ以外を注視していなかった老人は、視線をエリシアとエステルに向けた。

「何を呑気な……おお、あんたは昨日手伝ってくれたお嬢さんじゃないか。ユーリ、お前さんの知り合いか？ そっちの娘さんは見たことないがのう」

「ま、そんなとこだ」

話を向けられたエステルはハンクスの前まで歩いて来るとぺこりとお辞儀した。エステルの身なりもあり、これではされた方が畏まってしまう。

案の定、ハンクスはしばらくの間、目を瞬かせていた。

「こんにちは、エステリーゼと申します」

「いや、こりゃご丁寧に……それよりも騎士団じゃよ。下町の惨状には目もくれずお前さんと誰かを探しておったぞ。やはり騎士団と揉めたんじゃない」

エリシアは申し訳なさ過ぎて愛想笑いを浮かべるしかない。揉めたというか、結局は脱獄するはめになったとは口が裂けてもいえない。

元はと言えばエステルが原因だが、今それを持ち出したってどうにかなる話でもない。

脱獄もそうだが、大方エステルが自分たちと共にいることを、気絶させた騎士たちが話したであろうせいもある。

ハンクスが言ったユーリと誰かの誰かは間違いなく自分だろう。エリシアは思わず頭を抱えなくなった。これは何が何でも捕まる訳には行かない。ここまで来ればもう半ばやけくそ、もしくは意地だ。

「ま、そんなとこだ。ラピードは戻ってるか？」

「ああ、何か袋をくわえておったようじゃが……」

ユーリは辺りを見回して、何かを探しているらしい。二人の会話から推測するにラピードとは名前らしいが、くわえていた、ということは人間ではないのだろうか。

エリシアは黙ってユーリとハンクスの会話に耳を傾けた。

「後で取りに行って振ってみな。いい音すんぜ。モルディオも楽しんだ。ま、逃げちまったけどな。家も空き家だったし、貴族って肩書きも怪しいな」

「……という事はやはりわしらは騙されて……」

妻の形見の品まで売り払ったハンクスには言いづらいが、それが事実だ。

水道魔導器も魔核がなければ動かない。ある程度の貯水はしているだろうが、それも長くは続かない。ならばユーリがすべきことは一つ。

「騎士団は何もしてくれねえし、やっぱ泥棒本人から魔核取り戻すしかねえな。心配すんなよ。ちよっくら行って直ぐに戻ってくつから」

頼みのフレンもいないのでは騎士団が下町のために動いてくれるはずがない。新しい魔核を手に入れる余裕がなければ、モルディオ本人から取り戻すしかない。アスピオに行けば何らかの手掛かりは見つかるはずだ。

エリシアとエステルは驚き、彼らの会話を聞いているしかない。

「はん。誰が心配なんぞするか。ちょうどいい機会じゃ。しばらく帰ってこんでいい」

ユーリとハンクスの会話を聞いてエリシアはユーリが下町の人々に愛されているのだと実感した。それはエステルも同じようで、微笑を浮かべて二人のやり取りを見守っていた。

と、その時である。

「ユーリ・ローウェル！ お縄だ、神妙にお縄につけ〜！」

シュヴァーン隊、小隊長ルブランの声が聞こえたのは。アデコールとボツコスの声が聞こえないのは、気絶した二人を置いて来たからに違いない。

ユーリが盛大にため息をつき、エリシアはどこかげっそりした様子でルブランの姿を見た。皮肉を言う辺り、まだ元気なのかもしれないが。

「仕事熱心ね。私にとっては迷惑なだけだけど……正に騎士の鑑よね」

「それ後の二人にも聞かせてやれよ。ま、こういう事情もあるから、しばらく留守にするわ」

本当に適当に諦めてくれればこちらも楽だというのに。馬鹿にされたままでは気が済まないと言うのか。

ユーリとエリシア自身は丁重にお断りしたい限りだ。

「やれやれ、いつもいつも騒がしいやつだな。これで金の件に関しては、貸し借りなしじゃぞ」

「年甲斐もなくはしゃいで、ぼっくりいくなよ？」

「はんっ、お前さんこそ、野垂れ死ぬんじゃないぞ」

二人のやり取りを聞いていると、思わず笑ってしまう。

ユーリはハンクスに片手を上げて答えると、外に向けて走り出した。

その間にも下町の人々が屈伸をしたり、腕を伸ばしたりと準備体操を始める。彼らの瞳は輝いており、まるで玩具を見つけた子供のようにだ。

「ユーリ、早いってば！ それじゃあハンクスさん、私たちも行きますね」

「あ、待って下さい！」

エリシアはハンクスの方に向き直ると小さくお辞儀する。エステルも同じように、彼女は深々と頭を下げた。

二人の少女に頭を下げられ恐縮しつつも、これからの彼女らの苦勞を考え、苦笑した。

「あやつの面倒を見るのは苦勞も多いじやろうが、お嬢さんらも氣をつけてな」

「ユーリならしっかりしてますから大丈夫ですよ。はい、ありがとうございます」

エリシアにしてみれば、どちらかと言うとエステルの方が心配なのだが。そんな所で、追い掛けて来たルブランの姿がはつきりと見

え、礼を言つと慌ててユーリを追う。

それを待っていましたと言わんばかりに、下町の人々がまるで砂糖に群がる蟻の如く、ルブランに集まって行く。

「これじゃあ実力行使出来ない分、下手に手に負えないわね」

「ばかも〜ん！ 通れんではないか！ 公務の妨害をするでなくいい！」

声を高々に叫んでいる、が下町の人々には通じない。

老人がルブランを見て拝み倒したり、子供がわーい、騎士様だあとはしゃいでいる辺り彼等もノリノリらしい。ようやく人垣を抜けたルブランはまだ近寄って来る人々を押し退け走って来る。

「げっ」

と思った刹那、どこからか現れた犬が華麗に足払いを掛ける。足元に注意していなかった中年騎士は派手に転んだ。

足払いを掛けた当人はユーリの前で誇らしげに胸を反らせた。ルブラン自身は何が起こったか分かっていないようで尻餅を付いたまま、ぽかんと間抜けな表情を浮かべている。

「な、なにことだ！」

「ラピード……狙ってたろ。おいしいやつだな」

彼がユーリの言っていたラピードで、相棒なのだろう。

狙ってたろ、と笑うユーリに応えるようにラピードも一鳴きした。

「どこまで一緒が分かんねえけどま、よろしくな、エリイ、エステル」

「あ、はい。こちらこそよろしく願います、ユーリ、エリイ！」

「こちらこそ。取りあえずの目的地は北のデイドン砦かな」

「しばらく留守にするぜ」

「行つてきます」

これまでは一人旅だったからエリシアは、エステルとはまた違う意味でこれからの旅に心躍らせていた。

ユーリとエステルは今一度名残惜しむように、ひと時の別れを告げるようにザーフィアスの町並みを見つめた。エリシアが初めてダングレストを旅立った時も二人のような心境だったのかもしれない。

「じゃ、行きましょ」

三人の前に行儀よく座っていた犬ことラピードが元気よくわん、と吠えた。

一人はまだ見ぬ世界に心躍らせながら、また一人は直ぐに戻るお使い感覚で、一人は一時の三人旅を楽しむようにザーフィアスを旅立った。

その先に待ち受ける運命を今の三人はまだ知らない。

デイドン砦

帝都を出た三人の前には、雲一つない鮮やかな青空が広がり、なだらかな平原は緩やかな曲線を描いている。

城の中では決して見ることの出来ない景色にエステルは緑の瞳を輝かせた。

城での日々は少しの自由もない窮屈な生活だった。エステルの立場を考えればそれは仕方のないことだろう。それでも読書の時間だけは別だった。本を読んでいる僅かな時だけ『』という立場から解放されたから。

「淒く空が青いですね。私、外の世界に憧れていたんです。いつも本の中でしか旅が出来なかったから」

「旅は今まで見えて無かったものが見えてくるから私は好き。……貴族も色々大変なのね」

エリシアは騎士と同じく、貴族には良い印象を抱いていなかったが、彼等には彼等の苦勞があるのだろう。こうしてエステルと出会わなければそんな事、思いもしなかった。

久しぶりの“外”にエリシアは猫のように目を細め、うんと背伸びをした。

「えっ、そ、そんなことないですよ？」

「何で最後疑問形なんだよ」

ユーリから鋭いツツコミが入る。このエステルという少女は会話していて微妙に変なところがある。それは今のような疑問形な話し

方であつたり、とんちんかん言動であつたりとだ。
とその時、今まで大人しくしていたラピードが牙を剥き、唸り声を上げた。

「じゃ、ちゃっちゃっとな片付けちゃいましょ」

エリシアは銃を抜き、ユーリが鞘から剣を抜く。エステルはやや緊張しながらサーベルを構えた。ラピードも背負っていた鞘から小振りの太刀を抜き、臨戦体勢に入る。

現れたのは栗鼠を大きくしたような魔物。目がくりくりして見て目は可愛いが、魔物は魔物。侮ってはならない。
結界魔導器の加護が及ばぬ外の世界にはこういった魔物が徘徊しているのだ。

「よつと」

ユーリは器用に剣をジャグリングさせて切り付ける。
左腕に付けている武醒魔導器が淡く輝いた。

「蒼破刃！」

剣から放たれた青い衝撃破が魔物の体を穿つ。
ラピードもユーリに負けてはいない。素早い動きで敵を翻弄し、鋭い体当たりをお見舞いした。

「ノクターナルライト！」

「これで終わりです！ スターストローク！」

エリシアの銃から生み出された白い光と、エステルが振り上げた

サーベルから放たれた衝撃破が一つとなり、残った魔物を薙ぎ払った。

エリシアがエステルに向けて手を上げると、彼女は人差し指でちよんとエリシアの手の平に触った。

「あははは……」

「前途多難、だな」

またもやエリシアとユーリが呆れを通り越して苦笑したのは言うまでもない。

ラピードですらこりや駄目だと前足で頭を掻く。当のエステルは何か間違いましたかと思議そうに二人を見つめていた。

「――舞い踊る風霊、刹那にて軌跡を描け。ウィンド・カッター」

掲げた右手から生み出された一陣の風が立ち塞がる魔物を切り裂いた。

瞬間、エリシアは身を翻し、銃の引き金を引く。白銀の銃口から打ち出された光が、今正に牙剥かんとしていた魔物の体を焼いた。

「だあっー！ うざい！」

戦闘ももう何度目になるだろう。数えるのも面倒になって来た。エリシアは半ばやけくそ気味で銃を乱射しながら悪態を付く。

「そうばやくなって。これ終わったら休憩にしようぜ。三散華！」

振り上げたユーリの拳が魔物の顔面を強打する。襲い掛かってくる魔物を退けた三人と一匹は見渡しが利く所に座り、ようやく一息ついた。

ぐう、とエステルのお腹が控えに自己主張する。

ザーフィアスを出てから戦闘の連続ではそれも仕方ない。それが自分のお腹の音だと気付いたエステルは俯き、顔を真っ赤にして謝った。

「す、すみません」

「はい、ユーリ。私もお腹空いた」

エリシアも一人で世界を旅する以上、グミや携帯食料、保存が利く缶詰めに水は持参している。

だが全て一人分だし、何より携帯食料は美味しくない。

「あのなあ。オレに言っただって飯は出て来ないっての……おっ」

荷物を整理していたユーリが声を上げた。

帝都を出る時に皆から渡されたものだが、地図にグミなど旅に必要な物が一式揃っている。用意周到さにユーリは思わず舌を巻いた。それに加え、食べ物らしき物まで入っている。試しに容器を開けて見ると綺麗にサンドイッチが並べられていた。卵やハムにキュウリが挟んだものなどゆうに四人分はあるだろう。

「美味しそう」

「わんっ！」

「じゃ、頂くか」

元氣よく声を上げる辺り、ラピードもお腹が空いていたのかもしれない。幸い玉葱は入っていないようで、これなら彼も食べられるだろう。

腹が減っては戦は出来ぬとよく言ったものだ。慣れない旅では体力も気力も消耗する。

貴族のエステルも居ることであるし、適当に休憩しつつ進むのが一番だろう。

三人と一匹は、作ってくれたであろう人にお礼を言ってサンドイッチを頂いたのだった。

三人がデイドン砦に着いたのは、太陽が真上に近くなる昼前のことだった。石造りの重厚な砦は、外敵を阻むかのように鎮座している。

この砦は行商人たちが行き交う交易地でもあり、魔物の侵入を阻むための拠点でもある。

だがそれにしては帝国騎士たちの姿が多いのは、気のせいではない。

「ユーリとエリィを追って来た騎士でしょうか？」

「少なくとも先回りしてたつてことはないと思う。帝都から来る旅人を見てる訳でもなさそうだし」

騎士たちがエリシアたちの方を見る様子はない。

しかし比較的のどかな砦に似合わないこの物々しい雰囲気は一体何なのだろう。騎士は皆、武器を手に今にも戦いに赴けるのではないのかという格好である。

「ま、あんま目立たないようにな」

「はい。わたしも早くフレンに追いつきたいですから」

言いつつ物珍しさからかエステルの視線は騎士団の詰め所やら、砦の見張り台やらに向けられている。砦の周りを見回してから分かったのだが、騎士だけでなく、行商人や旅人の姿も多い。

「エステル、ちょっくら情報収集してくるわ。行くぞ、エリィ」

「え、ちよつ、ユーリ！」

行商人の集団に夢中になっているエステルを尻目にユーリはラピードだけを残し、ひよいと猫のようにエリシアの首根っこを掴んで引きずって行った。

一人残されたエステルがラピードと顔を見合わせぽつりと一言。

「ユーリ？ エリイ？ ラピード、二人はどこに行ったんでしょうか？」

「何かあったのかな？ 私が来た時はこんな事なかったんだけど…」

「いつちよ聞いてみるか？」

エリシアが砦を抜けた時は騎士の数も多くなかったし、物々しい雰囲気だったということもない。北門前で佇む旅人たちの顔はどこか不安そうだった。行商人の一人に尋ねてみれば、思いも寄らぬ答えが返って来る。

「何でも砦の向こうに魔物が出たらしい。お陰で足止めを食ってるんだ」

非常によろしくない状況である。エリシアたちとて、ここで足止めを食う訳には行かない。

追っ手は勿論、フレンがハルルに向かったのは数日前。下手をすれば居ないハルルに可能性もある。

刹那、見張り台に設置されている鐘がけたたましい音を響かせた。

「早く入りなさい！ 門が閉まるわ！」

頭上にある見張り台から女性の声が響く。

遠くに見えるのは、巻き上げられる砂塵。門を指して必死に旅人や行商人たちが走り込む。

「……よし、待避は完了した！ 門を閉めろお！」

同じく見張り台に立つ騎士が叫ぶが、明らかに外に残された人々がいる。今門を閉めれば逃げ遅れた人々は、確実に間に合わない。

それに気付き、隣の見張り台から鋭い声が飛んだ。

「閉門を待ちなさい！ まだ残された人が……」

騒ぎを聞き付けてか、門の前には多くの人々が集まっていた。エステルとラピードの姿もある。

魔物大群により砂埃が舞い上がる光景を呆然と見つめ、エステルはぽつりと呟いた。

「あれ、全部、魔物なの……」

エリシアもまたエステルとは違う意味で驚いていた。本来ならこれほどまでに魔物が出没する季節ではない。

事実、エリシアがここを通り抜けた数日前は、別段魔物の数が多いという訳でもなかった。

一方のユーリはというと多少驚いてはいたようだが、それよりも

彼は自嘲めいた笑みを浮かべていた。

「帝都を出て早々にとんでもないもんにあつたな。オレ、なんか憑いてんのか？」

何だか本当にそんな気がしてきた。独房にぶち込まれかと思えば、エリシアと共に脱出することになり、何の因果か親友を知る貴族の少女を助けることになるわ目まぐるしい一日である。

逃げ遅れた人を残し、無情にも門が閉められようとしていた。ユーリが地面を蹴り、ラピードと共に走り出す。

ラピードの鞭のような尾が門を閉めようとしていた騎士の体を打った。

「な、なんだ、おまえ！ うわっ、うわっ！ 止める！」

「エリイとエステルはそこで待……って、おいっ！」

思わぬ乱入者に騎士は腰が抜け、思わず座り込む。ラピードの陰で門は半分が閉まった辺りで止まった。

ユーリが二人を振り返ったその時だ。エリシアとエステルがユーリを追い越した。

そもそもユーリは自分がそう言われて、はいそうですかと待っていると思っているのだろうか。魔物の大群を前にしても不思議と恐怖は感じない。

迷いはなかった。いや、迷うという選択肢自体、エリシアの中には初めから存在しなかった。

どちらも変わらず

「ユーリは女の子を、エステルはあの男の人をお願い！」

「はいはい……」

後ろからユーリの呆れたような声が返ってくる。それでもユーリだけを危険な目に合わせる訳にはいかない。自分だけ安全な所にいるなんて真っ平御免だ。

エリシアとエステルは急ぎ、男性と少女の母親らしき女性に近寄った。女性は怪我はないものの、腰が抜けたようで地面に座り込んでいる。

「立てますか？」

「ご、ごめんなさい。腰が抜けて……」

エリシアは女性に肩を貸して立ち上がり、早足で歩き出した。エステルは足を押さえてうずくまる前に膝をつき、怪我の状態を見る。出血はしているようだが、そこまで深刻な傷ではないことに一先ず息をつく。

「た、助けて……立てなくて……ひっ！ 魔物が、魔物が！」

「大丈夫ですよ」

取り乱す男性を落ち着かせるように声を掛け、術式を展開する。両手を前で組んだエステルの足元に現れる魔法陣。治癒魔術特有の金色の紋様が一際強く輝いたかと思うと傷は跡形もなく綺麗に房

がつていた。

ユーリもまた泣きじゃくる女の子を抱えて走る。

「……あ、た、立てる」

「早く避難してください」

エステルも走り出した男性に続いて、門の中に走り込んだ。見れば猪に似た魔物がシルエットが分かるくらい直ぐそこまで迫っている。

とその時、ユーリが助け出した少女が門の外を指差して叫んだ。

「お人形、ママのお人形！」

少女が指を差した先には確かに、人形が落ちている。本来なら取りに行くなんて自殺行為だ。それは分かっている。

エリシアは反射的にエステルが飛び出そうとするのを止め、地面を蹴って走り出そうとする。

だが誰かに強引に手を掴まれそれも叶わない。

「お願い、行かせて！」

「ここで待つてろ！」

ユーリは掴んでいたエリシアの手を離し、またも外へと疾走する。背後から聞こえる声を無視して。ユーリが行かなければエリシアが行っていただろう。

もう一刻の猶予もない。急ぎ、ぽつんと落ちている人形を拾い上げた。

「まったく、めちゃくちゃ目立ってんじゃないか！」

しかしぼやいている暇はない。既に門は閉まり掛けている。背には魔物の大群、前は閉門間近の大門。ユーリが助かる術はただ一つ。

「ユーリ！」

二人の声を受け、一人がどうにか入れるかという隙間にユーリは滑り込んだ。と同時に大きな地響きを立てて門が閉じられた。

砦の中にまで魔物が門に体当たりする音が響いて来る。頑丈に作られているため破壊される恐れはないが、それでも本能的な恐怖を呼び起こされる気がしてならない。

安心して一息ついた三人の元に助けた男性と母子が歩み寄った。

「娘共々助けて頂いて、なんとお礼を言えいいか」

「でも本当に無事で良かったです」

母親は娘と手を繋いだまま頭を下げる。エステルも慌てて同じように頭を下げた。

エリシアはしゃがみ込むと、優しい手つきで人形を大事そうに抱えている女の子の頭を撫でる。

女の子は気持ち良さそうに目を閉じると次の瞬間、花が咲くような笑みをエリシアに向けた。つられてエリシアも女の子に笑い掛ける。

笑顔が見たいから。ただそれだけでお節介だと思いつつも困っている人を助けてしまうのだと思う。

「怪我まで治してもらって、本当に助かりました」

男性もまた頭を下げる。魔物との戦闘で分かったことだが、エリシアと同じくエステルも治癒術を扱うことが出来るらしい。

エステルはただ守られているだけのお嬢様ではない。剣の腕も騎士に引けは取らないし、治癒術も扱える。実力は言うまでもなく十分だった。

三人が去った後、気が抜けたのか、エステルはぺたりと地面に座り込んだ。今になって恐怖を感じたのか握った手は小刻みに震えている。

「……みんなが無事で本当によかった。あ、あれ……」

「安心したとたんそれかよ」

ユーリとエリシアもエステルの隣に腰を下ろした。

無理もない。彼女は箱入り娘だった訳でこんな経験、初めてだろう。それにしても思い切りが良すぎる所もあるが、無謀ということでもない。

「エステルは何もかも初めてだから仕方ないよ。でもちゃんと自分も大事にしないと。見てて危なっかしいから」

「それはエリイもだろ。オレから見たらエリイもエステルも変わんねえよ」

エステルを見てみると冷や冷やするというか何というか。後先考えない辺りは昔のエリシアとそっくりであるとは口が裂けても言えない。

ユーリからすればエリシアも見てて十分危なっかしい。この少女は本当に自覚してないのか。

人形を取りに飛び出しそうになったり、危険を省みずガキとかいう男の間に割って入ってくるわけで下手すればエステルよりも危険な気がする。

「エステルよりはマシ……だと思っけど？」

「でも結界の外って、狂暴な魔物が沢山いて、こんなに危険だったんですね。ここに結界魔導器を設置出来ないんでしょうか？」

マシで一旦考えた辺りエリシアにも自覚があるのだろう。ならば尚更自覚のないエステルよりも始末が悪い。ユーリも人に言えたことではないが、彼女も相当なお節介らしい。

そこへ一仕事終えたラピードが帰って来てちょこんとユーリの横に行儀よく座った。

魔導器、取り分け結界魔導器は数ある魔導器の中でも特に値がはるものである。人々が生活している街でもない限り、帝国は一瞥にわざわざ取り付けようとは思わないだろう。

「そりゃ、無理だろ。結界は貴重品だ」

「例えあったとしても帝国は、設置はしてくれないでしょう？ いっただって一部の人間だけが恩恵にあやかり、弱き者は虐げられる。それが今の世界の“仕組み”だから」

その仕組みを作ったのはこの世界唯一の国、紛れもない帝国。腐敗しきった騎士団や評議会などあてにならない。

帝国には自由も平等もない。だから父は帝国を捨て、騎士を辞め、ギルドを作ったのだと。

エリシアだって帝国の全てを否定している訳ではない。ただ彼等の中にはどうしようもなく救いようのない人間がいるのも事実だ。

語るエリシアはユーリが見てもどこか冷めたというか達観したような顔をしていた。

「魔導器を生み出した古代グライオス文明の技術が甦ればいいのに……」

エステルがぼつりと呟く。

古代グライオス文明。千年以上も前、エアルの存在を発見したクリティア族は魔導器を発明した。現在使われている魔導器の殆どがこの時代のものであると言われている。

それに加え、現在の技術と知識では筐体は別だが、魔核の生産は困難であり、発掘に頼るしかない現状だ。刹那、立ち上がった三人の前に槍を手にした騎士が近付いて来た。

「その三人、少し話を聞かせてもらいたい」

何やら騒がしい。どうやら騎士と男二人が言い争っているらしく、その内顔に傷のあるフードを被った男が声を荒げた。

二人とも身のこなしだけを見ても手だれであると分かる。

「だから、何故ここを通さんなのだ！ 魔物など俺様がこの拳でノックアウトしてやるものを！」

見覚えのある二人を見つけたエリシアは思わずユーリの背中に隠れた。

あまり出会いたくない相手である。個人的にもそうだし、立場的にもだ。この際、ユーリやエステルに不審に思われても構わない。それよりも今は隠れる方が重要である。

「エリイ？」

「ちよつとこのままでいさせて」

気付かはしないだろうが、エリシアはユーリの肩に手を置いて顔を半分だけ出して様子を伺う。

端から見れば奇妙な光景だが、エリシアにしてみれば他人の目よりも、あの二人に見付かることの方が色々と面倒なのだ。

「簡単に倒せる魔物じゃない！ 何度言えば分かるんだ！」

「貴様是我々の実力を侮るというのだな？」

騎士がどうか説得しようとするが、フードの男の隣に佇んでいた鳶色の髪の男が口を開いた。地の底まで響くかと思う声は、騎士を気圧すには十分だろう。

男は言うなり、背中の剣というには大き過ぎるそれを抜き、正面で掲げる。そして騎士の制止を振り切って渾身の力で地面に叩きつけた。

衝撃で砂埃が舞い、辺りを砂色に染める。余程力で叩き付けられたのだろう。地面は剣の形に陥没していた。

「邪魔するな！ 先の仕事で騎士に出し抜かれた鬱憤をここで晴らす！」

「おい！」

一触即発の状態に三人に声を掛けた騎士も、他の作業をしていた者もそれを中断して駆け寄った。騎士らは果敢にも槍や剣を突き付けているが、仮にもギルドの首領である男にしてみれば烏合の衆同然だろう。

「これだからギルドの連中は！」

一人の騎士が呆れたように言うが、そこは聞き捨てならない。別にギルドに所属している者全員が彼等のように血の氣が多い訳ではないのだ。本当に思わずばやいてしまう。

「ギルドって言うより魔狩りの剣なただけど……」

「何か言ったか？ にしてもあの様子じゃ、門を抜けるのは無理だな。騎士に捕まるのも面倒だ。別の道を探そう」

心の中で思っていたつもりだが、口に出してしまったらしい。ごまかすためにも、とりあえず愛想笑いをしておくことにした。

エリシアはユーリの背に隠れたまま、その場を後にする。二人の姿が見えない所まで来るとほっと胸を撫で下ろした。

カウフマンの提案

「ねえ、あなた。私の下で働かない？報酬は弾むわよ」

情報を求めて皆内を歩き回っていた一行に（というかユーリに）話掛けて来たのは、護衛らしき人物を引き連れた赤毛に眼鏡の女性。だが当のユーリは女性を軽く一瞥しただけで問いには答えず視線を逸らす。エリシアはと言えば、またしても内心焦っていた。

彼女はギルド、幸福の市場の首領カウフマンである。魔狩りの剣を率いるクリントと違い、直接の面識はないものの、獅子の咆哮のレオンハルト関係者だと知られれば色々と話がややこしくなる。

そんなユーリの態度に後ろに控えていた護衛が眉を寄せた。

「社長に対して失礼だぞ。返事はどうした」

「名乗りもせずに金で吊るのは失礼って言わないんだな。いや、勉強になったわ」

「名乗る時はまず自分からが礼儀よね。　　というか私たちを無視して
る時点で失礼だと思わない？」

おどけて言うユーリにエリシアもエステルとラピードに目を向けて言っちゃった。

一旦はまた隠れようとも思ったが、こそこそしている方が怪しいし、もればた時はその時だ。どうせなら堂々としていよう。

「お前ら！」

いきり立つ寸前だった護衛を女性——カウフマンは差し出した片

手で制した。

怒っている訳ではない。静かに笑っているだけだ。

「予想通り面白い子ね。それと貴女も。確かに先に名乗って置くべきだったわね。私はギルド『幸福の市場』のカウフマンよ。商売から流通までを仕切らせてもらってるわ」

一口に商売から流通と言っても侮るなかれ、様々な情報に通じてなければならぬ。

それは商品の相場であつたり貴重な情報であつたりと色々だが、下手をすれば魔狩りの剣などよりずっと敵に回せば厄介だ。

「ふーん、ギルドね……」

ユーリが生返事をするが、ザーフィアスに住んでいる者がギルドの人間にあまり良い印象を持っていないことが分かる。それはある意味エリシアが騎士を良く思っていないことと同じだ。

その時、一行の耳に魔物が門に体当たりするけたたましい音と地響きが届いた。

カウフマンは苦笑しつつ肩を竦めて見せる。

「私、今、困ってるのよ。この地響きの元凶のせいだ」

「あんま想像したくねえけど、これって魔物の仕業なのか？」

その間にも地響きは未だ鳴り止むことなく、大地を揺らしている。もしそれが魔物の仕業だというのなら、正に人の手に負えるものではないだろう。

「ええ、平原の主のね」

「どこか別の道から、平原を越えられませんか？ 先を急いでるんです」

今まで黙っていたエステルが遂に痺れをきらせて口を挟んだ。

彼女にしてみれば一刻も早くフレンの後を追いたいということだろうが、それが出来ればカウフマンとて既に砦にはいないだろう。

「さあ？ 平原の主が去るのを待つしかないんじゃない？」

エステルだけは気付いていないが、そう言う彼女には何か含みがある。フレンがハルルにいる場合、ここで足止めを食うのはあまりよろしくない。

だが焦ってもどうにかなる事態ではないことも確かだ。そこでエリシアは諭すようにエステルに言う。

「エステル、焦っても仕方ない。まずは落ち着いて」

「待つてなんていられません。わたし、他の人にも聞いてきます！」

しかしエステルは言うないなや走り去って行った。

おすわりの体勢だったラピードがユーリに目配せした後、長い尻尾をたなびかせてエステルを追う。

エリシアも彼女のことは気になったが、ユーリを放って行くことも出来ず、結局留まることにした。ラピードもついているなら心配ないだろうと踏んだからである。

「流通まで取り仕切ってるのに別の道、ほんとに知らないの？」

ユーリの問いは暗に何か知っているだろうとの確認でもある。エ

リシアもまたカウフマンは絶対に何かを知っていると確信していた。世界の流通を一手に引き受ける“幸福の市場”の情報網は伊達ではない。でなければ世界の流通を取り仕切ることなど出来はしないのだ。

「主さえ去れば、あなたを雇って強行突破って作戦があるけど、協力する気は……なさそうね」

「おい、エリイ、何て顔してんだよ」

「何でもない。でも護衛なら他のギルドに頼めばいいんじゃない？ 蒼き獣とか。後は……暁の雲に獅子の咆哮とか」

他のギルドの護衛を引き受けるギルドは、エリシアの父が率いる獅子の咆哮を始めとして、蒼き獣や暁の雲などがある。

特に獅子の咆哮は護衛を専門としており、五大ギルドではないが、それに匹敵する知名度を誇るのだ。

「そーそ。そんなに護衛が欲しいなら、騎士にでも頼んでくれ」

「冗談は止めてよね。私は帝国の市民権を捨てたギルドの人間よ？ 自分で生きるって決めて帝国から飛び出したのに今さら助けてくれないでしょ。当然、騎士団だってギルドの護衛なんてしないわ。他のギルドに頼みたくても通れないんだから意味ないわ」

そもそもギルドとは帝国のやり方に反発する自治組織である。騎士団や評議会の腐敗、人々を省みない政治に不満を持つ者は多く、そんな彼等は帝国の市民権を捨て、帝国の関与を受けないダングレストを始めとした街を作り上げた。

彼等の街は帝国の中にありながらも治外法権であり、帝国の法は

一切通じない。彼等は帝国からの自由を得た代わりに与えられるべき全てを捨てたのだ。

「へえ、自分で決めたことにはちゃんと筋を通すんだな」

言うユーリの顔は微かに驚きの入り混じった笑みを見せた。

ギルドの連中もそれほど悪い者たちではないらしい。少なくともちゃんと筋を通す人物はユーリは嫌いではない。

「そのくらいの根性がなきゃギルドなんてやってらんないわ」

確かにそうかもしれない。ギルドの首領をやっていくとなれば中途半端では無理だ。相応の覚悟と責任、根性がある。

父も笑いながらよく言っていたから。エリシアはそこで始めてカウフマンに好印象を持った。

「なら、その根性で平原の主も何とかしてくれ」

「ここから西、クオイの森に行きなさい。その森を抜ければ平原の向こうに出られるわ」

クオイの森。ザーフィアスとハルルを結ぶ深い森。確かにそこなら砦を通ることなく、北に抜けられる。

エリシアが旅の途中、小耳に挟んだ話では霊が出るとか、呪われているやの普通なら係わり合いになりたくない噂ばかり。

正直な所、エリシアは魔物よりも幽霊の方がよっぽど怖い。出来れば通りたくないのだが、見上げたユーリの顔は不敵な笑みに彩られていた。

「けど、あんたらはそこを通らない。ってことは、何かお楽しみが

あるわけだ」

暗にそういう訳である。でなければ何の見返りもなしに情報をくれたりはしないだろう。ユーリにも大体の察しはつく。

ユーリにしてみれば何があるうとも構わないのだが、隣のエリシアは諦めたような哀愁漂う顔をしている。

「察しのいい子は好きよ。先行投資を無駄にしない子はもっと好きだけど」

「礼は言っとくよ。ありがとな、お姉さん。仕事の話はまた縁があれば」

手を振ってユーリが歩き出したため、エリシアもまた礼を言っ
てユーリの隣に並ぶ。カウフマンが思い出したようにエリシアを呼び止めた。

嫌な予感がして顔だけを動かして振り向く。呼び止めた本人は満面の笑みでこう言った。

「お父様によろしくね」

流石は幸福の市場の首領だと言うべきだろう。

一瞬言葉に詰まったがそこはエリシアも仮にもギルドの首領の娘である。いつも父がしているように胸に手を当て優雅に礼をした。顔には余裕の笑みを浮かべて。

「ええ、伝えておきます」

「……血は争えないってこういうことなのかしらね」

「知り合いか？」

「ううん。直接の面識はないけどあっちが知ってたみたい。それは置いてクオイの森って呪いの森とも呼ばれているみたいで……出るらしいよ」

知り合いか、と問うユーリに首を振る。エリシア自身はカウフマンと話したことはない。向こうが一方的に知っていたのだろう。獅子^{オンハルト}の咆哮の娘、というのは自分が思うよりずっと知られているのかもしれない。

ユーリはまだ何か気になっているようだが、エリシアにしてみれば遠慮したい。愛想笑いを浮かべ、どうにか話を逸らす。

魔物はまだいいが、“あれ”は勘弁願いたかった。そもそも得体の知れない、よく分からないものが嫌なのだ。ユーリはと言えばふーんと生返事を寄越すだけ。

「……もしかして怖いのか？」

「わ、私が？ そんな事ない。幽霊でも何でもばこにしてやるから」

精一杯笑おうとしているが、顔が引き攣っていることにエリシア自身は気付いていないらしい。

それがユーリの笑いを誘い、少し意地悪だと思いつつ後ろを指差した。

「エリイ、後ろに何かいるぞ」

その一言で面白いように笑顔が引き攣った。

途端、弾かれたように走り出したかと思うとエリシアはユーリの胸に飛び込んで来た。ちよつと遊び過ぎたかと後悔しつつ、子供にするように彼女の頭を撫でてやる。

「冗談だ。悪かった。まさかそんなに怖がるなんて」

思わずしがみついてしまったエリシアは恥ずかしくて顔を上げられない。

ぼこぼこにすると言い切ったのに情けないとも思う。というかユーリにはバレバレだったようだが。ユーリはまるで子供にするように頭を撫でてくれる。

子供扱いされているみたいで嫌なのだが、ユーリの手で撫でられると何故か安心した。

落ち着いた所で顔を上げると、彼にしては珍しく何の皮肉もない笑顔のユーリと目が合う。笑われているのに不思議と腹は立たない。

「落ち着いたか？」

「うん、大丈夫」

頷いた直後、まだユーリに抱き着いたままな事に気付き、慌てて体と手を離す。恥ずかしく顔から火が出そうなくらいエリシアは動

揺っていた。

この年になつても思うが怖いものは怖いのだ。分かり易く百面相をするエリシアをユーリは笑いを堪えつつ見つめている。

戦闘の時は頼もしいのに時に見せる一面は年頃の少女そのものだ。

「おし、エステル探しに行くか」

「きつと疲れて座り込んでると思うよ」

だから今は気付かない振りでもしておこう。

ユーリはエリシアが付いて行きやすいよう、ゆっくりと歩き出した。

案の定エステルは地面に座り込んで一息ついていた。隣にはお目付け役のラピードが行儀よく座っている。俯いた彼女は元気がないように見えた。

聞かなくとも分かるが、砦を通らずにハルルに行く方法は見つからなかったのだろう。

「エステル」

「……ちよつと休憩です。魔物が去るまでこんな場所で待ったりしませんから」

ユーリが声を掛けても、エステルは目を合わせようともしない。

焦るなと言われたことにまだ怒っているのだろうか。

「あつそ。じゃあ、二人で抜け道に行くことにするわ」

「エステル、行こう。……私はあんまり気乗りしないけど、ね」

ユーリは言うだけ言うと、背を向け入口へと歩き出す。

エリシアはエステルを気にしつつ、後ろを振り向きながらユーリに続く。正に寝耳に水であったエステルは立ち上がって慌てて二人の後を追った。

「え？ 分かったんですか？ 待って下さい！」

呪いの森

鬱蒼と生い茂る木々は踏み入る者を拒むように佇んでいる。天を目指すように伸びた枝と葉のお陰で空は見えず、所々隙間から漏れる日の光が森を照らしていた。

時折聞こえる鳥とも獣ともつかない遠吠えは立ち入る者に恐怖を与えるには十分だ。その例に漏れず、エリシアの顔もまた引き攣っている。

だがエステルは全く彼女のそんな変化には気付いていない。

「……この場所にある森って、まさか、クオイの森……？」

辺りを見回しながらエステルは呟く。城にあった本で読んだ覚えがある。

何分それも古いもので真偽さえ怪しいものだが。

「へえ、エステルよく知ってるね」

「クオイに踏み入る者、その身に呪い、ふりかかる、と本で読んだことが……」

城育ちのお嬢様ということで世間知らずなのだろうが、エステルは意外に博識である。

物騒な噂のお陰で、クオイの森には近隣の人間も滅多に近寄らないという。

森の奥へと続く道も街道のように舗装されている訳でもなく、正に獣道というのに相応しい。

「なるほど、それがお楽しみってわけか」

言いつつ、ユーリの足は既に森の中に向いている。

エリシアも精一杯の強がりで彼の後に続くが、右手と右足が同時に出ていることに本人は気付いていないのだろ。一方のエステルは何やら躊躇っているようで、微妙な表情をしていた。

「行かないのか？ ま、オレはいいけど、フレンはどうすんの？」

「……分かりました。行きましょう！」

砦が通行出来るまで、待っていてはとても間に合わない。覚悟を決めたエステルは力強く頷いた。生命力溢れる雑草を掻き分け一行は進む。先頭をラピード、これは彼が犬である故の聴覚と嗅覚を持つため、にエリシア、エステルと続き、しんがりをユーリがつとめる。

エステルが真ん中なのは、彼女が一番実戦経験や諸々で皆より劣るためと魔物に襲われたとしても対応しやすいようにだ。

ただエリシアは周囲を油断なく警戒しているものの、今度は左手と左足が同時に動いている。

森の奥に進むにつれ、木々の間から光が射す場所も少なくなり、得体の知れない鳴き声がこだましていた。

『私、絶対父さんみたいに強くなるから！』

それが幼い頃の私の口癖だった。皆を率いて戦う父の姿は本当にかっこよくて、自分もいつかは強くなって父の役に立ちたかった。わざわざ銃や術を選んだのも非力な自分の弱点を補うため。旅に出るまでは、空いた時間を見つけては毎日のように稽古をつけて貰っていた。

思えば父とはもう一年近くも会っていない。ザーフィアスへの用事も父のギルドのメンバーから聞いただけであるし。

自分はある頃から強くなれたのだろうか。父と並ぶまでとは到底行かない。けどそう、背中を追うぐらい出来ているとエリシアは思う。

何だか騒がしい。

半ば覚醒しつつある意識の中でエリシアの耳は言い争う男女の声を捉えた。

「ユーリ！ 女の子の顔をそんなにまじまじと覗き込んだじゃいけませんよ」

「はいはい、分かってるって。にしてもまだ目、覚めないのな」

このまま眠りたい衝動に駆られたが、意を決して重い瞼を上げる。誰かが自分の顔を覗き込んでいた。ただ逆光に遮られて表情までは分からない。

半分寝ぼけた意識では正常な判別すら出来なかった。

「お、起きたか？」

その声でやっと頭が覚醒し、目が慣れたようで自分を覗き込んでいた人物が誰だか分かった。ユーリである。

それと同時に自分の頭が何か柔らかいものの上に乗っていることに気付く。

起き上がろうとすると、後ろから出て来たエステルの手止められた。

「駄目です。まだ横になっていないと。エリイ、倒れたんですよ」

どうやら柔らかいものはエステルの膝だったらしい。

倒れた、との言葉でエリシアは初めて、自分は倒れたのだと理解した。そう言われれば、気分が悪くなって……。その先は思い出せない。

「ん、ありがとう、エステル。でも私は大丈夫」

「駄目です！ もう少し休みましょう！ ねえ、ユーリ」

こんな所は結構強引なエステルらしいと思う。実を言えばまだ少し気分が悪かった。

エステルに話を振られたユーリもまた同意する。

「だな。もう少し休んでいいと思うぞ」

「……じゃあ五分だけ」

そこまで言われるなら、お言葉に甘えて休ませて貰うことにする。眠ってしまわないようにエリシアは軽く目を閉じた。

自分が倒れたのはエステルによるとエアルが原因らしい。何でも濃すぎるエアルは人体に影響を与えとか。その証拠にエステルも気分が悪くなったと言っていた。

ユーリやラピードはぴんぴんしていたが、エステルいわく体質が関係あるらしい。五分ほど休ませて貰ったエリシアは立ち上がって歩き出す。

「じゃあ、ユーリって鈍いんだ」

「繊細じゃなくて悪かったな」

と軽く頭をこずかれる。すると今まで黙って歩いていたラピードが立ち止まり、低い唸り声を上げた。つられてラピードの視線の先を見ると、草むらが僅かに動く。

かと思うと何かが飛び出して来る。

「エツグベアめ、か、覚悟！」

飛び出して来たのは少年だった。ぴんと跳ねた鳶色の髪と同色の瞳。その小さな体には不似合いな大きな鞆を下げている。

まだ十代前半かと思われる彼は、身の丈ほどもあるハンマーを振りかぶった。

しかし悲しいかな少年の力では振り回されるのがおち。

「うわっ、とつとつ！」

予想通り少年の体はくると回転する。突然の出来事に呆然とするエリシアとエステルに代わって、見兼ねたユーリは剣を抜き、切っ先を無造作に差し出した。

金属同士が触れ合う特有の甲高い音を立ててハンマーが地面に落ちる。

「うあああつ！ あうっ！」

ハンマーが手から離れたことで少年は体重を支えきれず、盛大に尻餅を付いた。

だがそれでも勢いを殺せず、そのまま地面に大の字に倒れる。

「う、いたたた……」

倒れた少年の視界に、自分を覗き込む犬の姿が見えた。口にはキセルをくわえ、片方の目には大きな傷が走っている。

青い瞳で自分を見下げる犬を魔物と勘違いしたのか、少年は叫び声を上げて固く目をつむった。エリシアたちの姿など目に入ってもいないのだろう。

「ひいっ！　ボ、ボクなんて食べても、美味しくないし、お腹壊すんだから。ほ、ほんとに、たたすけて。ぎゃああー！！」

「忙しいガキだな」

呆れ口調だがラピードを止めない辺り、実にユーリらしい。エリシアは仕方なく少年の側に屈んでみる。エステルもエリシアの隣に並んだ。

「ラピードは魔物じゃないから平気よ」

「はい、大丈夫ですよ」

「あ、あれ？　魔物が女の人に」

「ったく。なにやってんだか」

視線をラピードから二人に移した少年は、戸惑っているらしく、目を白黒させている。

エリシアとエステル、そして呆れたようなユーリの声に、少年はやっとラピードが魔物ではないと気付いたらしい。

ズボンに付いた土を払うと立ち上がり、一人前に胸をはって自己紹介をする。

「ボクはカロル・カペル！　魔物を狩って世界を渡り歩く、ギルド『魔狩りの剣』の一員さ！」

その瞬間、エリシアの瞳が僅かに陰った。その事に気付いたのはユーリのみ。

エリシアは何も魔狩りの剣、全てが気に入らない訳ではない。

ただ彼等のやり方に疑問を感じるのだ。魔物だからという理由だけで人に害を出さない魔物までも狩るという彼等のやり方が。

この少年は違つかもしれない。それでも魔狩りの剣というだけで、自分が先入観を持ってしまふのもまた事実だ。

「オレはユーリ。それにエリイとエステル、ラピードだ。んじゃ、そういうことで」

だがユーリは適当に名乗り、ラピードを連れてそそくさと森の出口に向かって歩き出す。

エリシアもまた、出来れば魔狩りの剣の一員には係わりたくないのが本音である。

「魔物結構出るみたいだから気をつけてね」

エリシアはユーリとラピードの後に続いた。

エステルは迷ってまだおろおろしていたが、置いて行かれては堪らない。とりあえず謝って二人の後を追う。

「あ、え？　ちょっとユーリ、エリイ！　えと、ごめんなさい」

「へ？　……って、わゝ、待って待って待って！」

少年——カロルは何故か、慌てて三人の前に回り込んだ。
何かまずいこともあるのだろうか。

「三人は森に入りたくてここに来たんですよ？　ならボクが……」

「いえ、わたしたち、森を抜けてここまで来たんです。今から花の街ハルルに行きます」

一時はどうなるかと思ったが、本当に道中、何もなくて幸いだ。
出来ればこの森には二度と入りたくないというエリシアは切実に思う。
森を抜ければハルルの街は直ぐそこである。

「へ？ うそ！？ 呪いの森を？ あ、なら、エッグベア見なかった？」

「見てないと思う。ねえ、ユーリ」

「ああ、見てねえな」

しかしエッグベアと言うと、この少年が相手にするには少々物騒な魔物である。

体格も当然彼より大きいし、狼などとは比べものにならない鋭い牙と爪の攻撃を受ければ一たまりもない。

何か理由があるのだろうか、それを聞けば厄介ごとに首を突っ込むのと同義だ。

「そっか……なら、ボクも街に戻ろうかな……あんまり待たせると絶対に怒るし……うん、よし！ 三人だけじゃ心配だから、魔狩りの剣のエースであるボクが街まで一緒に行つてあげるよ」

カロルと名乗った少年は、何やらぶつぶつ呟いた後、一人で納得してうん、と声を上げる。

次に三人の方に向き直ると大きな鞆に付いている武醒魔導器ボーディプラスティアを見た。
せた。

「ほらほら、なんとたつてボクは、魔導器だつて持つてるんだよ」

そう言われてもユーリとエステルもデザインが違うものの、左手に腕輪型の武醒魔導器を付けているし、エリシアも耳飾りとして付けている。

それにラピードだって持っているのだ。三人と一匹の魔導器を見たカロルが仰天した。

「あ、あれ、皆なんで魔導器持つてるの！」

普通、魔導器というのは帝国が管理している。そのため、貴族ではない一般の人間が魔導器を手にする機会は無いに等しい。

例外はエリシアやカロルのように帝国の法の及ばないギルドの間である。

ちなみにユーリはと言うと、騎士団を辞める際に無断に拝借して来たらしいとか。

「話しに夢中になるのは良いけど、後ろには気をつけた方がいいわね」

エリシアの右手にはいつの間にか抜いたのか魔導器――銀色の銃がある。

カロルが武器を手に慌てて背後を振り向けば、白煙を上げて倒れる魔物の姿。カロルが気配に気付かなかったのは話しに夢中になっていたことと、魔物が植物に擬態していたせいもある。

「エースの腕前も剣が折れちゃ披露出来ねえな」

ユーリが言うようにカロルのハンマー（形だけを言えば剣に似ている）は先程、ユーリが剣で止めたお陰で刃先が無残に折れている。

「いやだな。こんなのただのハンデだよ。あれ？　なんかいい感じ

？」

カロルが試しに素振りをしてみると、なかなか良い感じた。しかし三人と一匹は少年を待つてはくれない。既にカロルを一人残して、森の出口へと向かっている。

カロルは置いて行かれない一心で三人の姿を追って走り出した。

「ちょ、あ、方向分かってんの？ ハルルは森出て北の方だよ。まあ、置いてかないでよ」

閉ざされた森の中、ほんの十分ほど前にエリシアたちが休憩していた開けた場所に一人の男の姿があった。

緩やかに波打つ銀色の髪に、紅玉のように鮮やかな瞳。纏った長衣は瞳同様血の色を思わせる赤。手には精緻な細工が施された抜き身の剣を下げている。

どうやらただの剣ではないらしく、刀身は赤と白のグラデーシオンをしており、見る者が見れば何故彼がと驚愕したに違いない。

こんな所で何をするのかと思えば、男は朽ち果てた魔導器に向かって剣を掲げた。

花の街ハルル

カロルを加えた一行は、クオイの森を出て、街道沿いに北上した。ハルルに到着したのは空が赤みを帯び始める夕刻に近い時刻である。街に入った瞬間、本来あるはずのものがなく、ことにエリシアやユーリは気付く。空にはザーフィアスを初めとする街には必須と言っているはずの結界魔導器シルトブラスティアの輝きがない。

エリシアの記憶では、街の中央にある大樹が結界魔導器の役割を果たしているはずだが……。

入口からでもよく見える大樹は、色褪せて今にも枯れそうな程に元気がない。異変はそれだけではなく、街の周囲には魔物を警戒するように武器を携えた者たちの姿が見受けられる。

「この街、結界ないのか？」

「そんなはずは……」

ないと言いかけたエステルは空を見上げるが、どこにも結界魔導器シルトブラスティアの存在を示す光輪はない。

茜色に染まりつつある空が広がっているだけだ。

「ユーリとエステルはハルルは初めて？」

「この街はね、ここからでも見えるでしょ？ あの大樹が結界魔導器の役割を果たしているの」

カロルが二人を振り返って尋ねる。そもそも彼はハルルから来たのだから、結界が消えている理由も知っているのだらう。

その理由をエリシアがカロルに代わって解説する。
数ある結界魔導器の中でもハルルの魔導器は特殊で大樹と融合しているらしい。

だがそれ故に、花が咲く時期は結界が弱まったりと普通の魔導器では考えられないイレギュラーな事態も多いという。

「樹の結界？」

「魔導器の中には植物と融合し、有機的特性を身に付けることで進化するものがある、です。その代表が、花の街ハルルの結界魔導器だと本で読みました」

ユーリの問いにエステルは、目を閉じ、まるで本を朗読するようにすらすると語った。

流星は帝都と言うことが。城には魔導器に関して詳しく綴った文献もあるらしい。

「……博識だな。で、その自慢の結界はどうしちまったんだ？ 役に立ってねえみたいだけど」

辺りを見回せば、人通りは少なく、ちらほら見かける住民も皆一様に疲れた様子で地面に座り込んでいる。

普段結界に守られているからだろうが、いざ結界がなくなれば、ハルルの街は狂暴な魔物から身を守る方法は限られて来る。その一つが住民による見張りなのだろうが、魔物はこちらの都合など構いなしだ。

いつ来るか分からない魔物に対して常に気をはって置くというのは想像以上に辛いことである。

「毎年、満開の季節が近付くと一時的に結界が弱くなるんだよ。ち

ようど今の季節なんだけど、そこを魔物に襲われて……」

「結界魔導器がやられたのか？」

ハルル自体は他の街と比べて決して広い訳ではない。それでも全てを守るには無理がある。巡礼に訪れた騎士たちが魔物を退けたのだが、寧ろ人を守ることを優先させた結果が結界の消失だった。

普通の結界魔導器なら、こうはなっていなかったかもしれないが、ハルルの結界魔導器は先も言ったように特別なのだ。

結界の消失など前例がない。全て手探りの状態なのである。

「うん、魔物はやつつけたんだけど、倒した魔物の血を樹が吸っちゃって、徐々に枯れ始めてるんだ」

倒した魔物の血が土に染み込み、ハルルの樹を弱らせてしまった。植物や木は地面から養分や水分を吸収する。ではそこに毒となる魔物の血が染み込んでいたら？ 強力な毒素を備えたそれを浄化することは簡単ではない。カロールが呪いの森と言われるクオイの森にいたのもこれが一重の原因である。

やや落ち込んだ様子で話していたカロールの前を一人の少女が通り過ぎた。

「あ！」

「どうかした？」

エリシアが聞いても、カロールは何やら少女が去った方を見つめている。動き易そうな戦闘向きの服装だったことから恐らくは、同じ魔狩りの剣のメンバーなのだろうか。

カロールは数秒思索した後、慌ただしくあの少女を追って駆け出し

た。

「ごめん！ 用事があつたんだ！ じゃあね！」

「勝手に忙しいやつだな。エステルはフレンを探すんだよね……」

振り向けば、後ろにいたはずのエステルの姿がない。どこに行つたかと思えば怪我人の手当てだ。かいがいしく世話を焼いている。勿論、それは彼女の美点でもあるのだが、少しは自重してもらいたいものだ。

「大人しくしとけてまだ分かってないらしいな。それにフレンはいいのかよ」

「んー、多分だけでもうこの街には居ないわね。そのフレンって人」

呆れたようなユーリに、エリシアはそう断言した。ざっと見回した所、警備に当たっているのも武器を携えた住民であるし、怪我人の治療もままならない状況のようでもある。

他の騎士ならともしらず、ユーリやエステルの言う“フレン”なら率先して人々を助けるのではないか。

「かしんねえな。ま、駄目もとで探してみるか」

「でもまずは怪我した人の手当が先かな。エステルだけじゃ手が回らないみたいだし」

女性たちで手分けして怪我人の治療に当たっているようだが、治療術を扱えるのは当然エステルだけ。無理をするのは目に見えている。

無理をするという点ではエリシアも同じ、しかし彼女の場合は下手に自覚がある故に厄介だ。

「ユーリも早く！」

エリシアは怪我人の近くに膝をついて既に治療を始めている。ホントに城で厄介なもん拾っちゃったな、しかも二匹だぞ、とラピードにぼやきながらユーリは半ば投げやりに返事をした。

「あー、はいはい」

エリシアが手を組んだ先から生み出される煌めく金色の粒子。目にも鮮やかな光は、傷口に集束すると瞬く間に出血を止め、傷を負う前の綺麗な肌に戻した。

隣には彼女と同じように傷ついた人々を癒すエステル姿もある。ユーリも包帯を巻いたりと自分に出来ることを手伝った。

「はい。これで大丈夫です」

手当てを終えたエリシアはさながら天使のようににこりと微笑んだ。子供も大人もその場にいた人々は、二人の少女によって齎された魔法の光を驚きの表情で見つめている。

エリシアやエステルのようにここまで治療術を扱える者は非常に稀だ。例え騎士団の者でも同じようにはいかないだろう。

「なんとお礼をいえばいいのか」

全ての怪我人の手当てを終えた後、街の代表らしき老人が皆に代わって頭を下げた。

申し訳なさそうに礼を言う老人に二人は慌てて頭を横に振る。

「いえ、本当にいいですから」

「私たちがしたくてやったんです。そこまでお礼言われることでは……」

「ま、そうだな」

二人に同意するようにユーリも頷く。自分たちが何かしたくて勝手にやったこと。そこまで申し訳なさそうに言われれば逆にこちらが恐縮してしまう。

人を助けるのに理由はいらない。エリシアはそう思っているし、これからもその考えを変えるつもりもない。

「謙虚な方々だ。騎士団の方々にも見習ってほしいものです」

「まったくですよ！ 騎士に護衛をお願いしても何もしてくれないんですから」

老人がため息をつく、他の人々からも怒りの声が上がる。本当に騎士のやることなのか、と街の中でも随分と話題になった。

住民では魔物から身を守ることさえ難しいのに、騎士たちは素知らぬふりを通したのだ。

「まあ、帝国の方々には私らがどうなろうと関係ないんでしょうな」

「うそ……そんなはずは……」

ないとはエステルも言い切れなかった。フレン以外の騎士はそうなのだと心の中で理解もしていたのだ。

フレンの命が危険だと訴えた時も彼らは貴族の『の戯言だとたかを括って、聞こうともしなかったのだから。』

「あ、でも、あの騎士様だけは違っていましたよね？」

と人々の輪の中にいた若い女性が思い出したように言う。

数日前から街に滞在していた巡礼の騎士一行。他の騎士たちとは違い、彼らは住民たちを魔物から守ってくれた。

「おお、あの青年か。彼がいなければ、今頃私らは全滅でしたわ。今年は結界が弱まる時期が早く、護衛を以来したギルドが来る前に襲われてしまいましたな。偶然、街に滞在していた巡礼の騎士様御一行が、魔物を退けて下さったのです」

礼儀正しく、正に騎士の鑑と言っても過言ではない青年だった。彼らの活躍により魔物の殆どは退けられ、住民たちだけでも何とかやっていけるだろう。

それも結界が直るまでの時間稼ぎにしかないが。

「ん、巡礼の騎士つてもしかして……」

確かフレンもそうだったのではないか。エリシアの記憶が正しければの話だが。

フレンがユーリやエステルから聞いたような人間なら間違いなくその巡礼の騎士がフレンなのだろう。

流石ユーリの親友、エステルの知り合い。やはり彼も二人のようなお人好しなのだろう。ユーリに言えば、エリシアが言えたことではないと言われそうだが。

「その騎士様って、フレンって名前じゃなかった？」

言いながら、ユーリがよっこらせと腰を上げて立つ。

老人は旅の人間であるユーリがその騎士の名を知っていたことにやや驚いた様子で頷いた。

「ええ、フレン・シーフォと」

「まだ街に居るんですか!？」

「いえ、結界を直す魔導士を探すと言って旅立たれました」

結界魔導器を直そうと思えば、魔導器に精通した魔導士を探すしかない。

しかしハルルの結界は特殊であるため、普通の魔導士に直せるかどうかも分からない状況だ。

だが少しでも確率があるのなら、と騎士の青年は部下たちを連れて街を出た。ほんの数日前の出来事である。

「行き先までは分からないか」

「東の方へ向かったようですが、それ以上のことは……」

東、東と言えば魔導士たちが集まる学術都市アスピオの方角だ。

恐らくフレンはそのアスピオに向かったのだろう。あそこならハルルの結界魔導器を直せる魔導士もいるかもしれない。

「そうですか。でも、ここで待っていれば、フレンは戻ってくるんですね」

フレンがハルルに戻って来ると分かったことは、一先ずは良かった

たと言える。そうならばエステル随分短い冒険もここで終わりと
いうことが。

「よかったな。追いついて」

「以外と早く手掛かり掴めたね。んー、エステルの用事が終わらな
らこれからどうするかな？ ユーリさえ良かったら一緒に行ってい
い？」

魔核泥棒を追うのなら人数は多い方がいいし、何よりエリシア自
身がユーリと一緒にいたかった。ダングレストにいたせいか、今ま
で年の近い知り合いなんてそういなかったから。

もつとユーリや勿論エステルのことを知りたい。きつとこの旅も
直ぐに終わる夢のようなもの。だけど、あと少しだけ一緒に居ても
いいのだろうか。

自分の中に生まれつつある思いに戸惑いつつも、エリシアはそう
切り出した。

「オレは構わないってか大歓迎だけどいいのか？」

正直、彼女の銃の腕や魔術を考えると、同行してくれるのはユー
リにすれば有り難い。

だがそもそもエリシアはユーリと何の関係もないのだ。

いくら彼女が好意で言ってくれたとしても、これ以上こちらの事
情に巻き込むのはどうかとユーリは思ったのだ。するとエリシアは
軽く手を振って答えた。

「いいのいいの。どうせ行く宛てのない旅だしね。それとも迷惑？」

父からの頼みはもう済んだし、次の目的地も特に予定はない。

けれどユーリが迷惑だと言うのなら、大人しく引き下がろう。エリシアはユーリを困らせたい訳ではない。

そしてユーリも迷惑だなんてある訳がない。つくづくお人よしだと思いつつ、ユーリは右手を差し出した。

「いや、そいじゃ改めてよろしくな、エリイ」

「うん！」

エリシアは嬉しそうに頷いて、差し出された手を握る。ユーリの手は父を彷彿させる、しなやかで力強い手だった。

かなり今更だが、何となくやっぱり男の人なのだと実感する。別に忘れていた訳でもないのだが、別段性別を意識していなかったからなのかもしれない。

「おし、ハルルの樹でも見に行こうぜ。エステルも見たいだろ？」

「私も見たいな。近くで見たことないし」

「あ、はい！ でもいいんです？ 魔核泥棒を追わなくても」

エステルとしては是非とも、貴重な結界魔導器を見ておきたい。

近くで見れるとなると滅多にない機会であるし、城に戻れば恐らくもう二度と自由に歩き回るのは許されないだろう。

それまでにしっかりと外の世界を目に焼き付けたかった。

「樹見てる時間くらいはあるって」

エステルの言うことはもっともだ。しかし魔核泥棒——モルディオと名乗っていたそうだが、もし本当にモルディオならば間違いな

くアスピオにいる。

つまり目的地がはっきりしているなら急ぐ必要はないということだ。

「そうと決まれば早速、ね。はい、エステル」

ずっとエステルの目の前にエリシアの右手が出される。彼女の笑顔は、見ているだけで思わず笑い返したくなる、太陽を思い出させる笑みだ。

一瞬、意味が分からずぼうついていたエステルだが、エリシアの意図を理解したようで、ふわりと微笑んで彼女の手を取った。

天高く聳える大樹

三人が街中を歩いていると、走っていたはずのカロルが橋の上で何やらぶつぶつと呟いている。

自信満々に言い切っていた少年と同一人物とは思えないほどの落ち込みようだ。全身から落ち込んでますオーラを漂わせる彼の周りだけ心なしか暗い気がした。

「はあ、人違いか……ギルドのみんなも居ない……随分待たせたかなかなあ。怒って行っちゃったんだ……満開に咲くハルルの花……。見せてあげたかったのに。そうすれば、きっと……」

「カロル、どうしたんです？」

人違いと言うのはカロルの前を横切った少女のことだろう。ギルドの皆、つまりハルルの住民が頼んで置いたギルドの護衛とは魔狩りの剣ということか。

あまりの落ち込み様にエステルが心配して声を掛けるが、全く気付いていない。エステルの声が耳に入っていないようである。頭を抱えて、地面ばかりを見つめて尚も呟いていた。

試しに今度はエリシアがもう一度、名を呼んでみるがやはり反応がない。もうおしまい、ホントにおしまいだ、と呟き、近付きがたく、暗い雰囲気を漂わせている。

「一人にしといてやろうぜ」

「うん。何だか深刻そうだし」

カロルが魔狩りの剣のエースではない事は分かっているが、彼に

は彼なりの苦勞があるに違いない。ならば部外者が立ち入るべき問題ではないし、ユーリが言うように一人にしておくのが最良だ。

一行が視線をカロールから外した時、前から子供たちが走って来る。手には木剣を持った少年たちの瞳は好奇心に満ち溢れていた。

「これで魔物と戦えるぞお！」

「フレン様みたいに、魔物もやっつけよう！」

「お〜！」

まさか本気で街の外に出ていくつもりなのか。あながちないとも言切れない。

エリシアは思わず子供たちの前に立ち塞がった。所謂仁王立ちである。その姿は意外なほど板についていて、ユーリから見ても妙に貫禄があつた。

「こーら！ 子どもが危ないことしちゃ駄目」

鮮やかな手並みでエリシアが少年たちから木剣を取り上げる。その隙に、ユーリが逃げ出そうとしていた一人の首根っこを掴んで持ち上げた。

持ち上げられた少年は暴れるが、子供の力ではびくともしない。

「はいはい。エリイの話をちゃんと聞こうな」

「あのね、君たちの気持ちは分かるけど危ないことしちゃ駄目だよ。もし君たちが怪我しちゃったら、きつとお父さんもお母さんも悲しいと思うけどな」

エリシアにも経験があるからこそ分かる。幼い頃、少しでも父の役に立ちたくて無茶をしたことがあった。

魔物を倒そうとして大怪我をしたのだ。凄く怒られてその後、父はよく無事だったと涙を流して抱きしめてくれた。

痛いのは勿論、痛かったが、怪我より何より父を悲しませてしまったことが一番辛かったのである。

だからエリシアは、この子たちを同じ目に合わせたくないのだ。しゃがんで視線を合わせ、悲しそうに笑うエリシアに子供たちも何かを感じたのか、しゅんと肩を落とす。

「街の皆を守るのはもっと、そのフレン様みたいに強くなってからね。分かったら、危なくない所で遊んで来ること!」

「うん、ありがと。お姉ちゃん!」

「おい! 早く来いよ!」

エリシアは太陽を思わせる笑みを浮かべ、木剣をそれぞれに返す。少年たちの顔がぱあっと輝いた。口々に礼を言い、街中に消えて行く。生き生きとした少年たちはまるで小さな嵐のようだった。ふうと一息ついたエリシアだが、二人の視線に気づく。ユーリは感心して、エステルは尊敬の眼差しで見つめている。

振り向いた先の二人の視線に居心地が悪いというか、いたたまれなくなり視線を逸らした。

「……私も同じだったから。無茶して、怪我して初めて分かった。自分を心配してくれる人たちのこと」

暫くの沈黙の後、エリシアは視線を逸らしたまま、ぼつりぼつりと自分の経験を語った。自分のことを話すのは少し照れ臭いけど、

何故か悪い気はしない。

「……ま、無くして初めて気付くものもあるだろうな」

ユーリもまた随分と無茶をしたことがある。騎士団に入る前も、騎士を辞めた後も、そして今でも。無くしたものは数えきれない。気付かされた事も何度もあった。

大切なものは無くしてから気づくのだ。その時にはもう遅い。

「無くしてから初めて気付くもの、ですか……」

エステルにはいまいち分らない。想像出来なかったといえば正しいだろう。もし自分が地位を捨て、このまま城に戻らなければ、いつか自分はその選択を後悔するのだろうか？

だがいくら考えても、答えを見つげ出すことは出来なかった。

「でも、あんな子供まで……。早く、結界が戻ればいいのに」

エステルはそう願わずにはいらなかった。あんな子供たちまで戦おうとしていた。

この結界が早く直ればいい。でなければ今のハルルの状態は長く続かないだろう。限界は住民たちが思う以上に近い。

「そうだな」

「本当に……こんな状態、きつと長くは続かない。もうみんな、限界だもん」

エステルに同意しながら、エリシアは自分に出来ることがないか考えた。街の人のためにも何とかしたい。その思いはある。

けれど専門の魔導士ではないエリシアには結界魔導器のことなど分かるはずもなく。

エリシアとて理解している。自分一人に出来ることなどたかが知れてると。

だが分かっているにも無力感に苛まれてしまうのだ。

（そう、お前一人じゃ何も出来ない、誰も救えないんだと言われて
いる気がする。結局、私は父さんみたいになれないのかな……？）

「エリイ？」

つい自嘲めいた笑みが零れた。何を今更、そう思う自分もいた。
名前を呼ぶ声にふと我に返り、慌てて顔を上げると、ユーリの紫掛
かった黒い瞳と目があつた。ユーリはそれ以外、何も言わない。

彼の瞳を見ていると、全てを見透かされるような、そんな感覚に
襲われる。居心地が悪いというか、いたたまれなくなって、エリシ
アは視線を逸らした。

見れば何かに気付いたらしいエステルも不思議そうに自分を見つ
めている。

「ごめんごめん、と言って一人歩き出す彼女の後ろ姿を見つめなが
ら、エステルは複雑な表情で口を開いた。

「どう思います？ ユーリ」

「エリイにも色々思う所があるんだろ」

思えばユーリはエリシアのことは全くと言っていいほど知らなか
った。せいぜい知っているのは名だけ。城の牢獄で出会い、半ば成
り行きでここまで来た。

ユーリには少し眩しく、太陽のように明るい少女。胡散臭いおっ

さんと知り合いだったり、地理にも詳しいかと思えば銃や魔術の扱いに長けている。

では自分は、彼女の何を知っているつもりだったのだろう。その考えに至ったユーリもまた、自嘲気味に唇を歪めた。

「近くで見るほんと、でっけー」

ハルルの街の中央にそびえ立つ大樹は、ユーリが感嘆の声を上げるほどに強大だった。幹は人何人が囲めば取り囲めるだろう。それすらも想像出来ないほどに大きい。

見上げなければとてもではないが木全体は見えなかった。

「もうすぐ花が咲く季節なんですよね」

本来なら生命力満ち溢れ、薄紅色の花を咲かせるはずの木にはやはり、元気がない。近くで見ればそれがよく分かった。

木の下、根の埋まった地面は普通の色ではない。茶であるはずの

土は赤黒く変色している。それがカロルが言っていた魔物の血なのだろう。

「どうせなら、花が咲いているところ見てみたかったな」

「結界が直つたら皆でお花見してみたいね。きっと凄く綺麗だよ」

ユーリの言葉に頷き、エリシアも樹を見上げる。ハルルの樹が元氣を取り戻した時には、ユーリやエステル、ラピードとお花見出来たらいいなと思う。

お昼も勿論いいけれど、夜はもっと綺麗なのだろう。薄紅色の花が闇に浮かび上がって美しく、風流ではないのかと。

「そうですね。満開の花が咲いて街を守ってるなんて素敵です。お花見もぜひやりましょう！あの、ユーリ、エリイ、わたし、フレンが戻るまで怪我人の治療を続けます」

エステルならそう言うかとエリシアも分かっていた。きっと怪我人を見れば、いても立ってもいられないのだろう。

フレンが結界魔導器に詳しい魔導士を連れて来るまでは住民たちによる見張りが必要だ。

ならば当然怪我人も出る。住民たちも治療術を扱えるエステルが存在は有り難いはず。

「なあ、どうせ治すんなら、結界の方にしないか？」

「ユーリ、今、なんて言った？私の聞き間違いじゃなければ、結界を治すっておっしゃりませんでした？」

樹を見上げていたユーリがぼつりと呟く。エステルとエリシアは

思わず我が耳を疑った。

今、どうせ治すんなら結界の方にしないか、と聞こえたのは幻聴か。

最後の方が敬語になっているが、エリシアは自分では気がついていない。目を点にしてユーリを見ると案の定、彼は笑っていた。悪戯を思い付いた子供のよう。

「言っただって。魔物が来れば、また怪我人が出るんだ。今度はさっきのガキたちが大怪我するかもしれねえ」

「それはそうですけど、どうやって結界を？」

フレンたちですら治せなかったというのに。魔物の血を浄化出来れば恐らく、ハルルの樹は治る。しかし樹を枯れさせた原因である毒素を浄化しようにも、樹を侵す毒素が分からなければ治せない。だがそんな時間などなかった。治癒術では無理なのだ。決して万能の奇跡の力ではないのだから。ではどうすればいい。

「それなんだよなあ」

「ユーリも考えてなかったのね。治癒術じゃあ治せないし、かと言って他に方法はない……か」

いくら考えても良い案が浮かぶはずもなく。こうしている間にも樹は死に始めているのだ。

その時、三人の目の前を俯き、不幸オーラを漂わせたカロルが通り過ぎた。いち早く彼の姿に気付いたエステルが慌ててカロルを呼び止める。

「あ、カロル！ カロルも手伝ってください！」

「……なにやってんの？」

「結界を治す方法、考えてるの。カロール、さっき言ってた魔物の血を浄化する方法ってない？」

振り向いたカロールの顔は酷かった。この世の不幸を一身に背負ったかのように引き攣っている。

カロールはこう見えて歳の割に博識なのだ。何でもハルルの樹が枯れかけている原因を突き止めたのも彼らしい。

カロールならもしかしたら、と思ったのだが……。

「あるよ、そのためにボクはエッグベアを……でも、誰も信じてくれないよ……」

魔狩りの剣の皆もそうだった。誰一人としてカロールの話に耳を傾けてくれなかった。僕は皆のように強くない。だけど、知識だけはあるつもりだった。

（分かってるよ。僕が臆病でどうしようもないってことくらい）
顔を上げようとしないうちにカロールにユーリは、しゃがみ込み、目線を合わせた。

「なんだよ、言ってみなつて」

「パナシアボトルがあれば、治せると思うんだ」

パナシアボトルというのは万能の解毒剤と呼ばれる貴重なものだ。確かにあらゆる毒を浄化すると言われるパナシアボトルがあれば何とかなるかもしれない。

その前に問題が一つある。あらゆる毒を浄化するとなれば当然、

それなりの値段がするといふものだし、この街の雑貨屋に在庫があるかどうかも怪しい。

揺れる心

「パナシールボトルか。よろず屋にあればいいけど」

「品切れだったよ。ボクが確認しない訳ないじゃん」

雑貨屋に足を向けかけた三人と一匹をカロールが投げやり気味に止める。言われてみればそうかもしれない。

もし在庫があるならわざわざ危険を侵す必要はないし、カロールもそこまで考えなしではないだろう。そこでエリシアにある考えが浮かんだ。

「さつきエッグベアを探してたって言ったけど、何か関係があるの？」

「あるよ。パナシールボトルの材料にエッグベアの爪が必要なんだ……結局、見つからなかったけど」

それで納得が行く。だからカロールは一人で森にいたのか。先程カロールは皆は信じてくれなかったと言っていた。つまりは魔狩りの剣のメンバーはカロールの話を信じず、彼は一人で呪いの森に足を踏み入れたということなのだろう。

しかしエッグベアなどそうそう見つかる魔物ではないし、仮に見つかったとしてもカロール一人では倒せない。少なくとも今のカロールでは、という意味だが。

「オレたちが手伝えは何とかなるだろ」

「えっ？」

思わぬユーリの言葉に、俯いていたカロルが顔を上げる。するとユーリもエリシアもエステルも笑っていた。

自分を馬鹿にするような笑みではない。純粹な好意だろうか。

「そうですね！ 名案だと思います」

「でも出発は明日ね。もうすぐ日が暮れるから。夜の森は危険だし」

ユーリだけでなく、エステルもエリシアも行く気満々らしい。ラビードでさえ何度も尻尾を振っている。

カロルは不思議でなかった。何故、どうしてこの人たちは自分の話を信じてくれるのだろう。仲間たちでさえ信じてくれなかったのに。

「どうしてボクの話信じてくれるの？」

「他に手がないんでしょう？ それともカロル、嘘付いてるの？」

「違うよ……違うけど」

エリシアが言うように他に方法はない。でも分からない。

カロルだってやれば出来るんだと、ギルドの皆に分かってもらいたかったのだ。満開になったハルルの樹を、彼女に見せたかっただけなのに。

俯く少年の頭にユーリの手が乗った。

「なら問題ねえだろ」

顔を上げると、ユーリがにやりと笑っており、エリシアとエステ

ルも同じように笑う。その笑顔に脱力したカロールもまた同じように笑った。いや、苦笑した。

その後、カロールを含めた一行は、宿屋に向かうと二人一部屋、四人分の部屋を取り、少し早めの夕食を取った。

ユーリは剣を磨き、エステルは一階にあった本を借りて熱心に読み耽り、カロールは一心不乱に何かを書いている。エリシアは皆の邪魔をしないよう静かに、気付かれないように宿屋を出た。

既に日は暮れ、空には金色の月が輝いている。

その時、何かの気配に気付いて背後を振り返れば、何とラピードが立っていた。

「ラピードも散歩、一緒に来る？」

元氣よく、わんと返ってくる。どうやら自分だけでなくラピードも暇だったらしい。何をする訳でもなく、エリシアはラピードと街中をゆっくりとした足取りで回る。

街の中心部は勿論のこと、街外れにも見張りのために火が焚かれ、住民たちが武器を携えて見回りに当たっていた。

一人と一匹はそのままぐるりと街を一周すると、ハルルの樹へ向かった。月明かりに照らされた大きな葉はエリシアが立つ地面に大きな影を落としている。ここにも勿論、見張りの住民がいたのだが、エリシアが見張りを代わると申し出たのだった。

一時間仮眠を取って戻ると言っていたから、そう長い時間でもない。ラピードと一緒に幹に背を預けてハルルの街並みを眺める。

「星が綺麗。これなら明かりなんていらさないか」

真上に差し掛かろうとする月は、明々と全てを照らしている。淡い、包み込むような優しい光だ。ラピードが気を利かせてわんと相槌を打つ。

ふと何かを思いついたエリシアは立ち上がり、そつと幹に手を当てた。

「絶対に治してあげるから、お願い、もう少しだけ頑張って」

「何してんだ？」

返事はあるはずがないのだが、それとは別にもう既に耳慣れた声が樹の後ろから聞こえてきた。無造作に剣を引っつかんだユーリである。

もしかユーリも散歩だろうか。それともエリシアとラピードが居ない事に気付いて、ここまで来たのか。多分、前者だろう。

「えー、決意表明みたいな感じ？ ユーリこそ、夜の散歩？」

「まあ、な。それと誰かさんが一人で宿を出たから様子を見に。つってもラピードが一緒なら心配なかったけどな」

エリシアの顔が強張る。エステルとカロルは大丈夫だと思っていたが、やはりユーリにはばれてたらしい。別に悪いことをした訳でもないのだが、何故か申し訳ないような気分になるから不思議だ。変な顔になっていくエリシアを横目に、ユーリはよっこらせと少女の隣に腰を降ろした。

二人の頭上に広がるのは満天の星空。月と星の光が街全体を照らしているため、明かりがなくてもはつきりと見える。それでも火を焚いているのは魔物除けのためだろう。

「ここは星がよく見えるな」

エリシアもハルルの樹から手を離し、ユーリの隣に座って空を見上げた。雲一つない綺麗な闇と銀の天蓋。これなら明日の天気は心配ないかな、と取り留めのない事を考える。

思い返せば怒涛の一日だった。牢に入れられたかと思えば予定外の脱出劇。貴族の少女、エステルとの出会いに謎の男の襲撃まで。

半ば成り行きで旅に同行した。本当に目まぐるしい一日だった。僅かな疲労感はあるけれど、疲れを上回る楽しさがあった。

落ち着いてみれば何となくなのだが、ユーリと二人で話をするのは緊張する。

「ユーリ」

「エリイ」

意を決して口を開けば、見事にユーリの声と重なった。何となく恥ずかしくなつてユーリから視線を逸らせる。

「な、何？」

完全に声が裏返つていた。ここは緊張する所じゃないのに。エリシアは更に顔が上げられなくなつて俯く。見えるのは暗い地面と寝そべつたラピードの尻尾だけ。

「……いや、エリイのこと、何も知らなかったなつて思つて。……エリイはギルドの人間なのか？」

ユーリの口から出た声は自分でも信じられないくらい、僅かに震えていた。全く情けない限りだ。武醒魔導器を持ち、戦闘慣れもしている。幸福の市場の首領の知り合いとなればギルドの人間以外の答えは考えつかなかった。

では何故、答えを聞くことを躊躇うのだろう。真つ先に尋ねなかつた理由は、答えを聞けば彼女が去つてしまうのではないかと、そう思つたからだ。

「私は違う。父さんがギルドの人間つてだけだよ。魔術も銃の使い方も全部、父さんから教えてもらったの。……元騎士だった父さんから」

ユーリが確信しているのならもう、隠す必要はない。だけど私の口から出た声は私のものとは思えないほど冷たかつた。質問も何も許さない、突き放したような拒絶だつた。

そんなエリシアにユーリは言葉を失う。いや、失つた訳ではない。

だが、今の彼はエリシアに掛けるべき言葉など見つからなかった。

別に嘘をついていた訳ではない。ただ何故か罪悪感に襲われた。あの後、直ぐに交代の人が戻って来てエリシアは、適当な理由をつけて逃げるようにユーリの前から立ち去った。

逃げる必要なんてないのに一人で慌てて馬鹿みたいだと思う。直ぐ宿屋に戻る気は起きなくて、街中を歩いて時間を潰した後、宿屋に戻ってシャワーを浴び、直ぐさまベッドに潜り込んだ。

エステルは隣のベッドで健やかな寝息を立てている。エリシアは固く目を閉じ、何度も眠ろうと試みた。

だが三十分経とうと一時間経とうと、羊を数えてみても眠れない。むしろ目は冴え渡って来たくらいだ。

「駄目……外の空気吸ってこよう」

仕方なく立ち上がってエステルを起こさないように部屋を出る。微かな明かりが灯るロビーには誰もいない。……いや、誰かいる。長い黒髪に黒い服。闇に溶け込みそうで白い肌が浮き上がっているように見えた。

ユーリ・ローウェル。今、一番会いたくない人だ。

『戻ろう……』

だって何を話せばいいかなんて分からない。黙っててごめん？
それとも迷惑だった？
けれど意思とは裏腹に身体は動かない。まるで見入られてしまったかのように。

「エリイ……」

少女の存在に気付いたユーリの声で、エリシアは我に返る。弾かれたようにユーリに背を向け、走り出した。

それは考えも何もあつたものではない。反射的な行動だった。

「エリイ！ 待てって！」

途端、右腕を掴まれたかと思えば、エリシアはユーリに抱き寄せられていた。この一日で随分と馴染んだ青年の香りが鼻腔をくすぐる。

体が熱い。自分を抱きしめる腕から逃れようと身をよじるが、力で敵うはずもなかった。

「離して！」

「駄目だ。離したら逃げるだろ。そもそも逃げる必要があるか？」

ユーリの言う通り、確かに逃げる必要なんてない。ただ怖かっただけ。

ユーリの口から叱責の言葉が出ることを見てエリシアは口をつぐんだ。すると伸びて来た長い手がエリシア頭を優しく撫でた。

「ごめんな」

「……ユーリが謝ることなんてない。怖かったの。ギルドの人間だつて知られたら二人の態度が変わるかもしれないって。……私のこと嫌いになつた？」

分かつてる。ユーリもエステルもそんな人間ではないと。

でも本当にそう言い切れるのか。世の中に絶対なんてない。だから怖かった。拒絶されるなんて耐えられない。

このまま何も言わずにただのエリシアでいたいと願った。隠し通せるはずがない。エステルはともかく、ユーリは鋭いんだから。

エリシアは笑おうとして失敗した。いつの間にか瞳から流れ落ちた涙が頬を伝う。視界が涙で滲んで見えない。

怖くてユーリの顔なんて見れたものじゃない。

「あれ、おかしいな。何で泣いてるんだろ」

拭っても拭っても、絶え間無くこぼれ落ちる涙。どうして泣いているんだろ。

ユーリと魔核を取り返せばそこで別れておしまい。なのにどうしてもこんなに悲しいのか。こんな気持ち、初めてだった。

ユーリの長い指がエリシアの涙を掬う。その仕種があまりにも優しく、また泣きそうになった。

「オレもエステルもそんな事でエリイを嫌いに何かならねえよ。だから泣くな」

「本当に……？」

「オレが嘘ついた事、あったか？」

見上げたユーリは悪戯っぽく笑っている。ない、一度もない。

こんなに簡単なことだったのか。自分一人で勝手に沈んだり泣いたり、仕方ない奴だと思われてないだろうか。

一人百面相をするエリシアにユーリは声を上げて笑った。

「ほら、早く泣き止まねえと明日、腫れるぞ」

「う、うん」

エリシアが頷くと、ユーリはまた、ぽんと頭を撫でてくれた。父と同じように、いや、父よりも細かい手で。

安心したら急に眠気が襲って来る。自分でも現金なものだと思いが、こればかりはどうにも出来ない。自分が今、どんな状況にいるのかも忘れてエリシアの意識は闇に沈んで行った。

もう大丈夫

瞼を刺すまばゆい光にエリシアは目を開ける。真っ先に視界に入るのは宿屋の天井と自分が置かれた状況。自分はちゃんとベッドに横になっているし、丁寧にシーツまで掛けられている。

しかしよく考えれば自分で部屋に戻って来た記憶がない。

半ば覚醒した頭で考えれば昨日の夜中、ユーリと話をし、一人突っ走っていたことに気付いた。そして、どうしたのだろう。安心したら眠くなって……。

「あーっ!!」

そのまま寝てしまったに違いない。きっとそうだ。まさか勝手に歩いて部屋に戻ったなんてことは有り得ない。

すると今の絶叫で目が覚めたらしいエステルが瞼を擦って上体を起こした。

「エリイ、どうかしましたか……？」

起こしてしまって申し訳ないのだが、今のエリシアには他人を氣遣う余裕はない。自分のことで精一杯だ。

間違いなく、ユーリが部屋まで運んでくれたのだろう。そう思えば急に羞恥心が込み上げて来た。寝顔を見られたとか、変な顔してなかったとか、そんな考えばかりが浮かんでくる。

どんな顔をしてユーリに会えばいいか分からない。

「顔赤いですよ？ 熱でもあるんじゃないですか？」

顔を赤く染めるエリシアにエステルは見当違いな心配をして、お

でこに手をあててみる。が風邪を引いた訳でも熱がある訳でもない
ので熱いはずがない。

慌てて彼女の手を離そうとするが、

「えっ、あ、エステル、大丈夫だってば！」

「でも風邪は万病の元と言いますから、引きはじめが肝心なんです
！」

普通の人間ならそこで終わっていただろうが、しかしそこはエステル、中々引き下がってくれない。エリシアにしてみればそれ以上
触れて欲しくない訳で、でも彼女を邪険にも出来ない。

けれど、このままでは針のむしろだ。エリシアは尚も心配するエステルを半ば強引に部屋の外に出した。

「本当に何でもないから。ねっ！ 先に顔洗って食堂行って。私も直ぐに行くから」

「えっ、でも……」

それでも言い渋るエステルにエリシアは満面の笑みを浮かべたま
ま、有無を言わず扉を閉める。

心配性のエステルを追い出すと、部屋に備え付けられている鏡に
向かって笑ってみた。

『うん、大丈夫。私はちゃんと笑える。ありがとう、ユーリ』

カロルの話によるとパナシアボトルを作るには材料が三つ必要らしい。

まずはカロルも探していたエッグベアの爪に、ハルルの樹の花びららしいルリエの花びらとニアの実。花びらは長老に話を付けているということに残りはニアの実とエッグベアの実だ。

ニアの実はクオイの森で採れるらしく、一行は朝食を取った後、ハルルの街を出た。

「ねえ、どうして皆、ボーディプラスティア武醒魔導器持つてるの？」

カロルが言い出したのは、森の入口付近に差し掛かった時だ。そういえば初めて会った時もそんなことを言っていた気がした。確かにカロルの疑問はもつともなことではある。

魔導器はその殆どを帝国が管理しているため、武醒魔導器とて滅多に手に入らない。素人でも強力な魔術を使えるから、と言うのが一応の建前らしいが、行き過ぎて独占になっているだろう。

「んなもんカロルだって持つてるだろ」

「ボクはギルドに所属しているからいいの！」

カロルが言うようにギルドに属している者は、例外的に武醒魔導器を所有している。つまりはギルドの人間でもないエリシアたちが何故武醒魔導器を持っているのか疑問なのだろう。

こちらもちちらで、武醒魔導器を所持しているのはそれぞれ理由があるのだが。

「ラピードは前の主人の形見でオレのは、騎士団を辞める時に餞別として貰ったんだよ。んでエステルは貴族のお嬢様だから、エリイはお前と同じくギルド関係者ってことだ」

「へえー、そうなんだ。えっ！？ エリイってギルド関係者だったんだ！」

（うん、そうそう。レオンハルト 獅子の咆哮の首領の娘なのって言えるわけあるかー！ そうでなくとも魔狩りの剣と獅子の咆哮は仲よくないんだから、口が裂けても言えない。うん、絶対に言えない）

と心の中で叫んでみる。もともとエリシアの父が首領をつとめる獅子の咆哮と魔狩りの剣は折り合いが悪い。ここでわざわざそれを教える必要はないし、エリシアも出来れば言いたくなかった。

「あはははは……。まあ、私はカロールみたいにギルドに属してる訳じゃないけどね」

「ふーん、そうなんだ。でもボク、どこかでエリイを見たことあるような……」

カロールはというと、未だ答えに納得していないようで、顎に手を当てて何やら考えている。

エリシアにしてみればまったくもって思い出さなくていい。まだ本名が知られてないことがせめてもの幸いか。流石に“クレセント”の名は知られては一発だろう。

「ダングレストに住んでるならどこかで見たことあるって」

あはは、と笑ってカロールを見る。苦し紛れな言い訳のような気がしないでもないが、これ以外の名案なんてある訳もない。笑いながら冷や汗をたらだらかいていると、見兼ねたユーリが助け船を出してくれる。

「おい、そろそろ行くぞ」

「え、うん。そうかなあ……」

エリシアは真っ先に返事をして、ユーリとエステルの後に行く。カロールはまだうんうん唸っていたが、どうやら思い出せないらしい。やがて諦めてエリシアたちの後に付いて歩き出した。そんな彼に気付かれぬよう、ほっと胸を撫で下ろす。カロールが嫌いという訳ではないのだが、出来れば知られたくない。

「あつた！　これがニアの実だよ」

「一つでいいんじゃない？」

「そうだけど、こっちはこうするんだ」

カロールが手にしたのは橙色をした鮮やかな果実。一つあればこと足りるはずだが、彼は二つ地面から広い上げた。エリシアの問いに頷いたカロールは、ニアの実を鞆にしまうと持っていたもう一つを地面に置いてすり潰した。瞬間、辺りに立ち込める酷い香り。いや、香りというにもおこがましい臭気である。

「くさっ、お前くさっ！」

「ちょっ、何それ！　まるでボクが臭いみたいに」

ユーリやエリシア、エステルでさえ、慌てて鼻を摘んで後ろに下がるが、それでもこの臭いはつらすぎる。

この臭いを上手く言葉で表現出来ない。取りあえず臭い。それしか言いようがないのだ。

自分たちですらこの有様なのだ。人間より遥かに嗅覚が鋭いラピードは、それこそ鼻が曲がるくらいに臭いに違いない。

「エッグベアは独特な嗅覚をしてるから、この臭いにつられて来るはずだよ」

「それなら先に言ってください……」

涙目になったエステルが言う。ごもつともである。

せめて心の準備くらいさせて欲しいものだ。こっちは臭くて堪らないが、本人は結構平気らしい。

エリシアはカロルの服を掴んでひよい、と三人の背後に移動させた。

「臭いからカロルは私たちの後ろを歩いてね。前だと風で臭いが流れてくるから」

「えー！　酷いよ、エリイ」

「エリイの言う通りだな。この臭い、ラピードにはキツすぎるだろ」

魔物に詳しいカロルが言うのだから、この臭いがエッグベアをひきつけるのはまず間違いないだろう。

ラピードもユーリに同意するように、もしくは切実にわん、と鳴

いた。

皆に押し切られたカロールは仕方なく、しょんぼりと一行の後ろを歩いていた。すると悠々と前を歩くラピードを見て何か思う所があったらしい。

「そう言えばラピードって爪とか牙があるのに何で武器使ってるの？」

「そりゃ、爪や牙は犬の武器だからな」

「ラピードって犬じゃないの!？」

爪や牙は犬の武器だと事もなげに言うユーリに、ラピードを除く三人が驚きの声を上げたのは言うまでもない。ラピードは犬にしては少々大きい気もするが、どこからどう見ても彼は犬だ。犬に違いない。犬しか考えられない。

「ラピードは自分の事を犬だと思ってない。ラピードはラピードって生き物だ。だから必要とあらば、道具だって使う」

まるでその通りだと言わんばかりにラピードは胸を反らせて、わんと鳴いた。確かに普通の犬よりずっと賢いし、戦い方だって随分と様になっている。

もしかやユーリはラピードの言いたい事が分かるのだろうか。

「確かにラピードからは気位のようなものが感じられます」

エステルは妙に納得してラピードを尊敬の眼差しで見つめる。しかしキラキラした目で見つめるエステルにラピードは、全く興味を示さない。どうやらエステルには興味がないらしい。

「そつ、だから敬えよ？」

「そ、そうなんだ……」

取り留めのない話をしながら森の中を行くが、一向にエッグベアは姿を現さない。カロルの、と言うより臭いのお陰で他の魔物は寄って来ないようである。

「何だか嗅覚が麻痺して臭くない気がするかも」

もう鼻を摘まなくてもあまり臭くない。慣れとは恐ろしいものだが、それはそれで困るのだ。服に臭いが付いても分からないだろうし。

試しに袖を近付けて臭いを嗅いでみたが、臭くはない……と思う。どうやらエステルも同じ考えに行き着いたらしい。エリシアと同じように服を気にしている。

「そうですね。でもそれはそれでちょっと……」

「でしょ。カロールもそう思わ——」

エリシアが振り向いた瞬間だった。カロールの背後に彼の倍はある強大な影。ユーリもエステルも、カロールでさえも気付いていない。後から考えれば、銃を使うとかいくらでもやり用はあったと思う。だけどこの時は咄嗟にカロールの体を突き飛ばしていた。

「えっ？」

突き飛ばされたカロールは訳が分からず尻餅をつくと、エリシアと

強大な影——エッグベアを見比べる。

そんなカロルの目の前で、彼の代わりにエッグベアの一撃を受けたエリシアの体が宙に浮いた。

「エリイ！！」

不甲斐ない自分

カロルの悲痛な叫びにユーリとエステルは振り向いた。二人の視界に入ったのは、熊を思わせる魔物——エッグベアと尻餅を付いたカロルに、宙を舞うエリシア。一瞬で状況を理解し、走り出したユーリは反射的に彼女の体を受け止める。

既に意識はない。大きな外傷は見当たらないが、軽い脳震盪でも起こしたのか。抱え上げたエリシアの体は信じられないくらい軽かった。

「エステル、ラピード！ エリイを頼む」

ユーリはエリシアをエステルに預け、カロルに迫るエッグベアの爪を受け止める。

そして返す刃で斬り付けた後、闘気を纏わせた拳を突き上げ、エッグベアの巨体を吹き飛ばした。

「牙狼撃！ 何してんだカロル！ 立て！ 立って戦え！！」

エリシアが自分を庇って倒れたことで半ば放心状態だったカロルは、ユーリの叱咤で我に返り、武器を構える。

立ち上がるうとするエッグベアに向けてハンマーを力の限り振り上げた。

エッグベアの巨体が激しい音を立てて、木の幹に叩き付けられる。ほぼ同時に、とどめとばかりにユーリの剣から放たれた青い衝撃波がエッグベアの喉笛を深くえぐった。断末魔の悲鳴を残して巨体が倒れる。二人はエッグベアが絶命したのを確認するとエリシアの元に走った。

「エリイは？」

「怪我は治しました。たいしたことはないと思います。もう少しすれば目が覚めるかと」

それを聞いて一先ず安心する。枕代わりにラピードの体に彼女の頭が乗せられているが、ラピードは嫌がる様子はない。それどころか心配そうにエリシアの顔を覗き込んでいた。

エステルが大したことはない、と言うのならその通りだろう。少々世間知らずとは言え、彼女は優秀な治癒術の使い手だ。

「分かった。エステルとラピードはエリイと周囲を警戒してくれ。カロール、エッグベアから爪取るぞ」

言うなりカロールを連れ、もはや動かなくなったエッグベアから爪を切り取った。作業を終えたユーリは、カロールが浮かない顔をしている事に気付く。

「どうした？」

「ボクのせいなんだ。エリイはボクを庇ってエッグベアに……」

カロールは今にも泣きそうな顔で、眠るエリシアの顔を見つめている。不注意では済まされない。もしあの時、彼女が突き飛ばしてくれなければ、カロールが危なかった。大怪我をしていたかもしれない。だが代わりにエリシアが怪我をしたのだ。自分の代わりに。

己を責めるカロールにユーリは少年の頭に手を置き、乱暴に髪を掻き回した。

「気持ち分かるが、あんま気にすんな。エリイだってきつとそう

言うだろ」

頭がぼうとして何も考えられない。エリシアは自分が今、誰かに背負われているらしいとは理解出来たが、それ以外、何も考えられなかった。考える気さえ起きない。

背中から感じる体温はあつたくて、覚醒したばかりだと言つのに、心地よいまどろみに誘われる。まるで父のようだ。

いや、そんなはずがない。違う。父がここにいるはずがない。導かれるように目を開ければ、目の前は黒一色で染まっていた。これは誰だろう。

慌てて顔を上げれば、ユーリの頭が見える。覚醒したばかりで頭はまだ付いて来ていないが、ここがまだクオイの森の中だと言つことはエリシアにも分かる。

「あ、れ……」

「エリイ、目が覚めたんですね。気分はどうですか？」

前を歩いていたエステルが心配そうに尋ねる。カロールを庇ってエツグベアの前に立ちふさがったところまでは覚えているが、その先は思い出せない。大方気絶したのだろう。

意識を失った人間を運ぶには、エステルもカロールにも無理だ。背負っているのは消去法でユーリになるのは分かる。分かるが、意識

を失った人間が想像以上に重いこともエリシアは理解していた。つまり、凄く重かったのではないだろうか。

「あ、うん。大丈夫。……ユーリ、ごめんね。重かったでしょ」

「いや、全然。むしろ軽いぞ。ちゃんと飯、食ってんのか？」

「食べてます！……カロール？」

思わず敬語で叫んだエリシアは、カロールが浮かない顔で自分を見ていることに気付いた。

その顔は幼い頃、無茶して父に助けられた自分とuriふたつだったから。カロールはきっと自分を責めているのだろう。

「エリイ、ボク……」

「カロールは悪くないよ。私が力不足だったから。それにたいした怪我もなかったから、結果オーライってことでどうかな？」

「あん時はマジ焦ったぞ。あんまり冷や冷やさせんなよ」

カロールの言葉を遮ってエリシアは言う。彼は悪くない。注意力が散漫になっていたのは自分たちも同じなのだ。

カロールを庇って意識を失ったのも自分が未熟だったから。

冷や冷やさせんなよ、と言われ謝ることしか出来ない。ユーリの言う通りで、本当に申し訳なかった。頭が上がらない。

カロールも納得してくれたようでうん、と頷く。それにいつまでもユーリの背中を借りている訳にもいかない。現にユーリの両手は塞がっているから、魔物が出て来ても戦えないのだ。体の方ももう何ともないし、これ以上甘えることは出来なかった。

「ユーリ、もう大丈夫だから降ろして」

「ユーリ・ローウェル！ エリシア・フランベル！ お前たちがこの森にいることは分かっている！ 大人しくお縄につけー！！」

するとその時、森の奥から不吉な声が聞こえて来た。ユーリやエリシアにしてみれば、出来ることなら係わり合いになりたくない彼等である。そうだ、そうだー、と聞きたくない同意の声までおまけに付いている有様だ。

声の主たちは間違はなくルブラン、アデコール、ボツコスの三人組。ここまで職務に忠実な騎士も珍しいが、ほとほと迷惑な話である。

恐らく、仕事と言うより執念なのではとエリシアは思う。

本当に偽名で名乗っておいて正解だった。流石に騎士団に本名を教えるほど、エリシアとて馬鹿ではない。

「あいつら……結界の外まで追いかけてきやがったな」

「なに！？ どうしたの！？ ユーリたち何に追われているの」

「騎士にちよっと、ね……話せば長くなるけど、罪状は脱獄に誘拐、かな？」

呆れたような顔をするユーリを見て、カロルの顔がひきつる。エリシアは彼に説明しようとして、うまい言葉が見つからず、ありのままを話した。

きつとエステルを連れ出したことは誘拐になるのだろう。それが彼女の意思だろうが何だろうが、彼等にはお構いなした。器物破損よりずっと恐ろしい。

「えっー!!」

さらっと口にしたエリシアにカロルは無理もないが、驚愕のあまり口を開いて鯉のようにぱくぱくさせている。騎士に追われるなんて滅多にない経験だろうから。

「って事でカロル、エステル走るぞ」

「え、私は？ ユーリ、ユーリってば！」

ユーリはエリシアをおぶったまま、森の中を駆け抜けて行く。その後をカロル、エステルが続き、ラピードがしんがりをつとめる。エリシアの切実な叫びが最後まで聞き入れられなかったのは言うまでもない。

そのままハルルに戻ってきたまでは良かったが、結局、パナシーアボトルが完成したのは空に金の月が輝く夜になってからだ。

街の中央部にあるハルルの樹の前には多くの者が集まっている。長老を始めとして街の人々、ユーリとエリシア、エステルにカロルもその輪の中心にいた。

「い、いくよ」

大きめの瓶を慎重に抱えたカロルが皆の前に出る。ゆっくりと詮を外すと、中身を汚染された土にまいて行く。液体が地面に落ちた瞬間、土の黒ずみは薄れ、確かに元の土の色に戻っていた。カロルは同じように他の毒に侵された土の浄化を進める。

「結界よ、ハルルの樹よ、どうか蘇ってください……」

長老が懇願するように呟いたその時、カロルは全ての液をまき終わった所だった。それとほぼ同時にハルルの樹がまばゆい光を放った。

だがそれも一瞬のことで光は直ぐに消え、樹からは命あるものが放つ気配が感じられない

人々の中から落胆の声が上がる。カロルが慌てて足元を見た。確かに毒素は消えている。これで結界は治るはずなのに。それとも手遅れだったのか……。

「ど、どうして……薬の量が足りなかったの？ それともこの方法じゃあ……もう一度パナシーアボトルを！」

カロルの言葉に長老は静かに首を振った。材料であるルルリエの花びらがもう残っていないのだ。

皆、長老の言葉に希望を失い、重苦しい沈黙がその場を支配する。誰も動かない中、一人だけハルルの樹の前に歩み出る者がいた。

「そんな……そんなのって……」

「エステル？」

ユーリが訝しげにエステルを見るが、気にもせず樹に近付いて行く。そしてもう一人、樹に近づく影があった。エリシアである。

「昨日、治してあげるって約束したのに」

「お願い……」

前に出たエリシアはエステルの傍らに寄り添うように立つ。エス

テルは目を閉じ、胸の前で両手を組んだ。彼女がいつも治癒術を使う時と同じように。

刹那、エステルとエリシア。二人を中心として風が巻き起こった。同時に二人の体が光に包まれる。更に足元には金色の輝きを放つ複雑な魔法陣まで描かれているではないか。

「咲いて……」

「大丈夫。任せて」

「エステル！ エリイ！」

二つの声が重なった時だった。二人から生まれた美しい光が樹を照らす。

次の瞬間、長きにわたり街を見守り続けていたハルルの樹が人々の前にあった。蘇ったのだ。ハルルの樹が。

確信なんてなかった。でも何故かエステルと一緒になら何とかなると思ったのだ。

エリシアは自分に起こった異変を他人事のように感じていた。ふと隣を見れば腕を組んだエステルも同じように光っている。

エステルと自分の声が重なった時、樹は生氣を取り戻した。しおれていた葉が生き生きと伸び、くすんでいた幹も本来の色を取り戻す。

だがハルルの樹の変化はそれだけではない。今にも綻びそうな蕾が生まれたのだ。そして蕾は鮮やかな薄紅色の花を咲かせた。

明かりが照らす中、吹いた優しい風が花びらを街全体に運んで行く。薄紅色の花びらが舞う様は幻想的でまるで雨のようだった。瞬間に街全体が薄紅色に染まる。

二人の少女によって引き起こされた光景に人々は呆然と見入って

いることしか出来なかった。

「今のは治癒術なのか……」

「これは夢だろ……」

目を開けたエステルが体が傾き、尻餅をつくように座り込んだ。同じようにエリシアも立っていれらず堪らず隣に腰を降ろした。

誰よりも先に我に返ったユーリは真っ先に二人の元へ駆け寄る。

「二人とも大丈夫か」

「あ……ユーリ？」

「大丈夫……じゃないかも」

頭は痛いし、ふらふらするし気分もいいとは言えない。そして様子を見る限り、エステルも同じらしい。白状すれば喋るのさえ億劫だ。術を使いすぎた時や疲れた時に似ていた。

エリシアもエステルもユーリの手を借りて何とか立ち上がる。その間にも街の子供たちや長老にまで深々と頭を下げられた。

お礼を言われるのは苦手な訳ではないが、何分自分が何をしたのかも分からないのだ。カロールが嬉しそうに手を挙げ、ユーリも同じように手を合わせてハイタッチした。

「ユーリ」

「フレンのやつ、戻って来たら花が咲いててびっくりだろうな。ざまあねえな」

一行がハルルの樹から離れ、宿を取ろうと街の入り口近くまで来ていた時に“それは”ハルルの樹がそびえる街の中心部にいた。揃いの装束に身を包んだ奴ら。赤いゴーグルが闇の中で嫌に目立つ。彼等は城でザギと共にいた男と全く同じ不気味な服装をしている。すると男たちがこちらに気付いた。狙いはフレンではなかったのか。

「あ、あれ……城で見た」

「ちつ……フレンだけじゃなくてオレたちも狙われてるのかよ。オレとエリイはアスピオに行く。エステル、お前は どうする？ 自分で決める」

狙われているのはフレンだけではなく、自分たちもらしい。城であのザギという男を退けたからだろうか。難易せよ、長居は出来ない。ここで戦えば街の人々に迷惑が掛かるだろうし、恐らく彼らを退けたとしても意味はない。新手が送られるだけだ。

ユーリに問われ、俯いていたエステルは顔を上げる。そこには今までの彼女にはない決意が、輝きがあつた。

「……行きます」

「カロルはこれからどうするの？」

「ボクはカプワ・ノールに……」

カプワ・ノールはハルルから少し行つたエフミドの丘を越えた先にある。アスピオとは少し方向が違う。

ならば名残惜しいがここでお別れと言うことか。色々あつたが、エリシアはカロルが嫌いではない。むしろ面白い子だと思う。

魔狩りの剣だとか関係ないのに自分は初め、変な先入観に捕われてカロール自身を見ようとしていなかった。

「ここでお別れだね」

「え、あの、その……急ぎの用事でもないし、もう少し皆に付いて行ってもいいかなあって」

「決まりだな。あいつらに追い付かれる前に行くぞ」

これ以上、ハルルに滞在すれば街の人にも迷惑が掛かる。今はまだ気づかれていないが、それももう限界だろう。ハルルは決して広くはない。

月が天高く昇る中、一行は闇に紛れてハルルの街を後にした。

学術都市アスピオ

「太陽見れねえと心までねじくれるのかね。魔核盗むとか」

いくら何でもそれは身も蓋も無い気がする。とは言っても、魔導士というものは割とユーリの言う通りなので、口には出さなかったが。

結局、エリシアたちがアスピオに辿り着いたのは夜が明け、陽が高くなってからのことだった。学術都市の名で呼ばれるアスピオは、洞窟の中に作られた珍しい街である。

ただエリシアも知識として知っているだけで、来たことはなかった。何故ならアスピオは帝国直属の都市な訳で、許可証がなければ入れてさえくれないのである。

その事実をすっかり忘れていたエリシアは騎士たちとの会話でその事を思い出した。

「中に知り合いいるんだけど駄目か？」

「正規の訪問手続きをしていたのなら許可証が渡っているはずだ。その知り合いとやらからな」

機転を利かしたユーリに、エリシアは拍手を送りたい気分である。これならばもしや、と思ったが、門番の騎士から返って言葉は実にそっけないものだった。

その辺りは流石に徹底しているらしい。簡単には入らせてもらえない。

「いや、何も聞いてないんだけど。入れないってんなら呼んで来てくれ」

三人は黙って状況を見守ることしか出来ない。

許可証がない？　じゃあ入れません、さようならで終われる訳がなかった。モルディオの事は勿論だし、フレンがいる可能性だってある。それにここで諦めれば他に手がかりはない。八方塞がりだ。

「知り合いの名前は？」

「モルディオ」

ユーリがモルディオの名を口にした瞬間、騎士たちが固まった。恐ろしいものを見るような目つきでエリシアたちを見ている。リタ・モルディオはよほどの変人なのだろうか。もし彼らが兜を被っていないければその顔は青ざめていたことだろう。

「や、やはり駄目だ。書面にしてやり取りし、正式に許可証を交付してもらえ」

「ケチくさ……」

エリシアが思わず呟けば聞こえていたらしく、凄い目で睨まれた。流石に口には出せないで、この地獄耳、耳年増！　と心の中で叫んでやる。気が立っているのはきつとここまで気を張りっぱなしだったからに違いない。

いつあの黒装束が追ってくるか分からない。夜の闇の中、ずっと張り詰めた状態で疲れないほうがおかしいだろう。まともな休息を取っていないのだ。

「あの、フレンと言う騎士が訪ねて来ませんでしたか？」

「施設に関わる一切は機密事項です。些細な事でも答えられません」
それでも引き下がれないエステルは、せめてフレンが来たかどうかを確かめたくて尋ねる。

しかし正に取り付く島もない。モルディオと聞いた時のさっきの動揺は、どこに行つたのだろう。思わずそう言いたくなるほどの落ち着きようだ。

些細なことでも答えられない。騎士のいうことも分かるが、ここで引き下がってなるものか。

「フレンが来た目的も？」

「勿論です」

騎士は自信満々に答えるが、それはフレンが来たことを認めるということだ。完全に墓穴を掘っている。しかも彼はそのことに気づいていない。随分おめでたいものだ。

そこでエリシアはすかさず、何か言われる前に早口でまくし立てる。

「ふーん……なら、フレンはここに来たって考えていいのね」

「あ、そっか」

エリシアの言葉にカロールも合点がいったように頷いた。顔は兜で隠れているために分からないが、騎士たちは相当焦っているようである。フレンが来た目的も、と尋ねて勿論です、と答えればフレンがアスピオに来たことを肯定してということだ。

言っでは悪いがかなり間抜けである。油断し過ぎとも言えるだろう。

「し、知らん！ フレンなんて騎士は……」

騎士は慌てて首を振るが今更遅い。どんなに取り繕っても無駄だ。しかしフレンがここに来たと言うことは分かったが、中に入れてくれる訳もなく。邪魔そうにしつしつと追い払われる。犬じゃあるまいし。まあ、確かにラピードは犬ではあるが。

「じゃあせめて伝言だけでもお願い出来ませんか？」

「やめとけ、こいつらに何言っても時間の無駄だって」

墓穴を掘ったのが余程聞いたのか、騎士たちは頑として口を割らない。エステルは伝言だけでもと言うが、ユーリが言うように時間の無駄だろう。どうせ伝えてくれないだろうし、フレンがまだアスピオにいるかどうか分からない。

エリシアたちは仕方なく彼等の前から去り、別の入り口を探すことにした。

無理なら最終手段である。ちなみにユーリもエステルも、エリシアにも諦めるという選択肢はない。

「都合よく開いちゃいないか」

ドアノブに手をかけたユーリは落胆の声を上げた。

三人がいるのは騎士たちから少し離れた扉の前。恐らく魔導士たちが出入りするための裏口だろうが、そう都合よく鍵が開いている訳などなく。もし開いていたのなら、あまりに間抜けな話である。

「最終手段の強行突破してみる？」

正面が無理な以上、最初にユーリが言ったように壁を越えるしかない。が、エステルが納得してくれるかどうか。実際やるとなれば、絶対に駄目です、と言われるに決まっている。

エリシアが振り向くと、エステルは案の定、こう言った。

「フレンが出てくるのを待ちましょう。お願いして中から開けてもらえば……」

「フレンが出て来たとしても、モルディオは出てこないだろ。それにあいつ、この手の規則にはとことんうるさいから頼んでも無駄だって」

エステルが言いたことは分かる。ユーリも考えたが、フレンの性格を思い出して一瞬で却下した。真面目で思慮深いのは彼の長所だが、それは言い換えれば頑固で融通が利かないということ。

魔核泥棒を捕まえる、とちゃんとした理由はある。フレンは首を縦に振らないだろう。おまけに知り合いであるエステルを城から連れ出したのだ。何を言われるか分からない。

「もし本当に魔核泥棒なら絶対に出てこないわね。それにフレンだってまだ街の中にいるかどうか分からないし……」

話に夢中になる三人は、先程からカロルが扉の前でなにやらしている事に気付いていなかった。一番先にカロルに気付いたエステルが首を傾げて聞く。

「カロル、何をしてるんです？」

「よし、開いたよ」

鍵が外れる小さな音がしたかと思うと、一仕事を終えたカロルが胸を張り、輝く笑顔を向けている。

エステルは鍵を開けて入ることに難色を示したが、結局、見張りは嫌らしく入ることに合意した。

“そこ”は正しく本の海だった。見渡す限りの本棚な天井近くまで届いており、魔導器やエアルについての小難しい専門書で溢れ返っている。一方で子供向けのお伽話やら、娯楽本など様々な本が本棚の中に乱雑に納まっていた。

皆一様に似たような作りのローブを纏い、手に持った本を読み耽っている。

自分のことで精一杯なのか、それとも他人に注意を払う気がないのか、裏口からお邪魔したユーリたちを咎める者はいない。

「なんかモルディオみたいのが一杯いるな……」

「魔導士って言っても殆どが研究に時間を費やしてるみたいだから、依頼以外で外に出る人は少ないよ？」

呟くユーリにエリシアが言う。ばんばん実戦で魔術を使う、なんて早々いない。魔導士＝研究家でもあるからだ。アスピオは帝国直属の施設であるため、国の依頼があれば街を出るが、言い換えればそれがなければ外に出る機会は少ないらしい。

そんな中、エステルが一心不乱に本を読んでいる一人に話し掛けた。

「あの、少しお時間よろしいですか？」

「ん、なんだよ？」

エステルの声に気づき、眼鏡を掛けた青年は、やや迷惑そうな顔

をしながら顔を上げる。明らかに邪魔しやがって、という顔だが、彼女は気づかない。そこは流石のエステルだ。

エステルは不機嫌そうな彼など物ともせず尋ねた。

「フレン・シーフォという騎士が訪ねて来ませんでしたか？」

「フレン？ ああ、あれか、遺跡荒らしを捕まえるとか言ってた…」

「今、どこに!？」

彼の話からすると、どうやらこの街には居ないらしい。つまりタイミングが悪いことに、入れ違いだったということか。興奮気味にエステルが問い詰めるが、彼の返事は素っ気ないものだった。

「さあ、研究に忙しくてそれどころじゃないからね」

「そ、そうですか。……ごめんなさい」

「じゃあ、失礼するよ」

再び本に視線を落とそうとした青年の肩をユーリが捕まえる。フレンがここにいないことは分かったが、ユーリの方はモルディオの居場所を聞いていない。

今のユーリにはフレンの居場所よりモルディオの方が重要だ。

「ちょ、待った。もう一つ教えてくれ。ここにモルディオって天才魔導士がいるよな？」

ユーリが“モルディオ”と口にした瞬間、彼も門番の騎士と同じ

ように顔が引きつり、恐らくは無意識だろうが後退った。リタ・モルディオ。弱冠一五歳の少女は一体どんな人間なのか。根っからの研究者である彼らが恐れるほどの人物。

「な！ あの変人に客！？」

青年はと言うと、いくらなんでもそこまで驚くのだろうか、と言うくらい素晴らしいリアクションを披露してくれた。一行の会話は筒抜けのはずだが、皆自分の世界に籠っているため、誰も気付いていない。

それがあまりよく思われていないであろう“モルディオ”の名を聞いても同じだ。

「流石有名人、知ってたんだ」

「……あ、いや、何も知らない。俺はあんなのとは関係ない……」

青年はエリシアたちが居ることも忘れて、うわ言のように繰り返す。よっぽどトラウマでもあるのだろうか。

少なくともズレた眼鏡を直す余裕がないくらい動揺しているらしい。

「変人って知ってる時点で関係ないはないんじゃない？」

青年はエリシアの呆れた声にも反応せず、そそくさと一行の前を去ろうとする。

しかしそれは問屋がおろさない。ユーリがまたもや青年の肩を掴んで引き止めた。

「まだ話は終わってないって。どこにいんの？」

「奥の小屋に一人で住んでるから勝手に行けばいいだろ！」

半ば吐き捨てるように言うと、青年は再び持っていた本に目を落とした。もう話し掛けるなど暗に言っているようだが、用件が済んだ以上、こちらとて邪魔する気はない。

「サンキユ。早速行くか」

アスピオは学術都市と言われるだけあり、他の街とは一風変わっている。街中を歩きながらエリシアは辺りを見回した。洞窟の中に作られているため太陽の光は届かないが、代わりに淡い青の光が照明として設置されている。

建造物もいかにも図書館のように堅苦しい学術都市と言った作りだし、狭い場所に作られているせいか階段が多い。

だがそのお陰で意外にも早く、天才魔導士が住むと言う小屋が見つかった。他の建物と比べ、明らかに浮いていたからだ。

「ここみたい。絶対入るな、モルディオって書いてるし」

エリシアが指差したのは小屋の扉。

そこにはでかかと『絶対入るな、モルディオ』と殴り書きがしてある。ユーリはおもむろにドアノブに手を回し、開けようと試みるが鍵が掛かっていたため開けなかった。

「開かねえな」

「普通逆だよ、ユーリ。開かないなら魔術で壊してみる？」

「エリイが怖いです……」

「なに、悪党の巢に乗り込むのに遠慮なんていらないうて」

しかしそこでエリシアは術を使おうとして止める。ユーリはモルディオの顔は見えていないと言っていたが、それは本当にモルディオなのだろうか。アスピオの魔導士たちは殆ど街を出ることがない。おまけに皆、研究大好き人間である。果たしてそんな者たちが下町で盗みを働くだろうか。脱獄に誘拐、不法侵入まで加われば本当に洒落にならない。

モルディオの小屋にて

「だ、駄目です。これ以上罪を重ねないでください」

「なら、ボクの出番だね」

一人焦るエステルを尻目にカロルは、言うな否や扉を簡単に開けてしまった。その鮮やかな手際はとても十二歳の少年とは思えない。一体どこで習ったのだろうか。意外な特技だ。

エリシアも簡単な鍵なら開けれるが、こつも上手くは出来ないし、時間もカロルより掛かる。

「カロル、魔狩りの剣なんか辞めてそっちの仕事に就いた方が向いてない……？」

「ま、ちよろいもんだね」

ユーリはつかつかと扉を開けて中に入っていく。完全に不法侵入だが、全く気にしてないらしい。エリシアも心を決めてユーリに続く。こうなれば自棄だ。もうなんでもこいである。

エステルはというと、信じられないといった面持ちで二人を見つめていた。鍵を開けてアスピオの中に入った時でさえ、渋っていたのだから驚くのも無理は無い。

「ええい、脱獄に誘拐までやっちゃったんだから、今更不法侵入なんて怖くないんだから！」

「待つて！ ボクも行くよ」

「あ、待つてください！ もうどうしてこつ……」

カロールもユーリとエリシアに続き、最後まで渋っていたエステルも結局は入ることになった。小屋の中は一言で表すなら、まるで泥棒にでも荒らされたかのような有様だった。

二階建てのようだが、部屋の端には本棚から抜かれた本が山になつて積まれており、殴り書きされたメモやくしゃくしゃになった紙などが床に散らばっている。

「すつこつ……。こんなんじゃ誰も住めないよ」

足の踏み場もない床をどうにか進みながらカロールが呟く。実際のモルディオが住んでいるのだから、住めないは間違いだ。

だがカロールがそう言いたい気持ちも部屋を見れば分かる。これでは何がどこにあるかさっぱり分からないではないか。正に本の海である。

「その気になりやあ、存外どんなとこだつて食つたり寝たり出来るもんだ」

「住めば都とも言うしね。カロールだつてダングレスト、好きでしょ？」

エリシアやカロールの故郷、ギルドの巣窟と言われるダングレストはトルビキア大陸に位置することから、湿気が多く、雨が降ることも多い。他の大陸から来た者には鬱陶しいらしいが、住み慣れた者はそうは思わないのと同じことだ。それが当たり前、だから。

つまりモルディオにとっては普通なのだろう。

「あ、うん。そう言うことか」

「ユーリ、先に言うことがありますよ！」

中に入ってまで礼儀を気にするのはエステルらしい。勝手に入っている時点で礼儀も何もあつたものではないと思うのはエリシアだけだろうか。

しかし言い出したエステルはこれで結構しつこい。律儀なのだろうが、対応に困るのも確かだった。彼女の気持ちも分かるのだが、エリシアとユーリは既に指名手配されているのだ。

「こんにちは。お邪魔してますよ」

当のユーリはまるつきり感情の籠っていない、かなりの棒読みである。既に玄関から小屋の中に足を踏み入れているのは実にユーリらしい。エリシアもただ立っている訳にも行かず、ユーリの後に続いて中にお邪魔した。

「鍵の謝罪もです」

「もう勝手に入った時点で謝つても無駄な……」

「そんなことないです！　ね、エリィ」

エリシアが振り向けばエステルがにつこりと笑っている。反論は許しませんと顔に書いているではないか。

反論しようにもこれ以上、エステルの笑顔は怖くて見ていられない。普段、物腰は柔らかだし、怒ることもない。なのに時々怖い時があるのだ。

「え、そんな……はい、そうですね」

「カロールが勝手に開けました。ごめんなさい」

ユーリの口から出た声はまたも棒読みだった。エステルも先にユーリに言うべきではないだろうか。真っ先に小屋に入ったのは彼であるが、思いつつも声には出せない訳で。

カロールがユーリだって入ろうとしてたじゃん、との声が飛ぶがユーリは当然の如く無視。

「実行犯はカロールでユーリが主犯だと思っけど見つかったら、私とエステルも不法侵入で捕ま……やっぱり、これ以上罪が増えるのは嫌」

「バレなきゃいいんだよ。バレなきゃ」

頭を抱えるエリシアにユーリが軽く答える。

だが悲しいかなエリシアの神経はユーリほど図太く出来てはいない。それがなくても元騎士にしてギルド、獅子の咆哮の首領レオン・クレセントの娘と言う立場なのに。捕まって父に迷惑を掛けることだけはしたくない。

「そう言う問題じゃない。バレなきゃ良いんなら、全ての犯罪者は捕まらないから！」

「ま、そりゃそうだな。これだけ騒いでも何も無いってことは好都合。証拠を探すとするか」

ユーリはそう言うのと遠慮無しに小屋の中を調べて行く。ある意味、彼はマイペースなのだろう。人の話など全然聞いていない上に柵の中まで探る始末だ。

やっぱり自棄だと、自棄しないと腹を括ったエリシアも同じように調べて行く。すると壁立てかけてあった黒板が目についた。

「これは……」

「術式、ですね」

答えたのは未だ入口に佇むエステル。黒板には白墨で白い紋様が描かれている。それは一般人にはとても理解出来ない複雑なものだ。エステルの言うように描かれているのは術式だろう。魔導士なのだからおかしいことではないが、それにしても難しい。

「中に入ったらどうだ？ 寒いだろ、そこ」

ユーリの声に振り向けば、エステルはまだ入口に佇んだままだった。

少々頭の固い彼女はエリシアのように割り切れないらしい。ややユーリに批難めいた眼差しを向けている。

「これ以上、罪を重ねるわけにはいきません」

「そうだけど、入口に居ても中に居ても変わらないと思うよ」

エリシアの言葉にもエステルは頑として首を縦に振らない。その頑なさには彼女の長所でもあるのだろうが、少し融通を利かせてもいいのではないかと思う。そんな所も真面目な幼なじみにそっくりで、ユーリは苦笑した。まだエステルの方がフレンよりはマシだろうが、入り口にいても中にいても不法侵入した事実是不変。もはや中にいても入り口にいても一緒である。けれど、気持ちの問題なのだろう。

「不法侵入は、禁固一年未滿、又は一万ガルド以下の罰金、です」

「それにしても、きつたない字。ボクの方がキレイに書けるよ」

厳しい口調で言ったエステルだが、別の場所を調べていたカロルがやって来たかと思うと、黒板に書かれた字を見つてぼつりと呟く。黒板に書かれた字は所謂殴り書きだ。よほど焦っていたのか擦れて消えている部分まである。何にしても汚いというのは確かだ。

「字が汚いやつは心がキレイって言うけどな」

「なら、ボクは字も心もキレイなんだよ。エステル、術式の意味、分かる？」

そう返す辺り、カロルも結構言うらしい。カロルに言われたエステルはじつと黒板を見つめている。エステルは魔術に詳しいと言ってもその知識は殆どが治癒術だ。

だが黒板に掛かれた術式は見た所、どうも魔導器のもののようにだから、博識な彼女にも分からないかもしれない。魔導器分野は専門的すぎて流石のエステルもお手上げか。

「火を使った術式に似てますが、わたしにはちょっと……エリイはどうですか？」

「多分だけど、イラストョンに凄く似てる。でも魔導器の術式だと思っただけ……」

こればかりは専門の知識が無ければ分からない。エリシアとて魔導器の知識はそれなりにあると自負しているのだが、専門的過ぎて

殆ど理解出来なかった。

三人が黒板に注意を向けていたその時、ラピードが山積みになった本の山に向かって警戒心を露にした。

「えっ？　ぎゃあああゝっ！　あう、あう、あうあうあう」

カロルが声を上げたのと、本の山から白いローブ姿の小柄な人間が現れたのはほぼ同時だった。叫び声を上げて尻餅を付いたかと思うと、カロルは驚くくらい素早い動きでユーリの後ろに隠れた。

ローブの人物がカロルを一瞥すると低い声で呟く。

「……うるさい……」

両手を胸の前で組み合わせる――魔術を扱う前の予備動作。眼前に赤い、火の魔術を表す魔法陣が浮かんだ。

ローブの人物の意図を一瞬で悟ったユーリとエリシアは横に飛ぶ。ちなみにカロルは一人、魔術の射程上に残されたまま。

「え？　あれ、ちよつと！」

「泥棒は……」

虚空に描かれた魔法陣が一際強い輝きを帯びる。今になって状況を悟ったカロルはこめかみを冷や汗が伝うのが分かった。今から避けようとしても間に合わない。避ける前に魔術が発動するだろう。

「うわわわっ、待ってえっ！」

「ぶっ飛べ！」

待てと言われて待つはずもなく、魔術は完成した。カロール目掛けて打ち出される無数の火炎球。火属性下級魔術、ファイアボールだ。距離がある程度あったなら、避けることも可能だろう。

しかしカロールとローブの人物とは正に目と鼻の先、当然逃げる暇なんてあるはずもなく、火球はカロールを直撃した。白煙が生まれ、エリシアたちの視界を覆い隠す。

「ぎゃああ！　げぼげぼ。ひどい……」

白煙が収まった後、尻餅をついたカロールの姿がある。火炎球と言ってもちゃんと威力は抑えてあったようで、軽い火傷程度だろう。髪や服も焦げていない。多少、焦げていたとしてもそれはまあ、仕方がない。

エリシアはカロールに近寄ると両手を胸の前で組んだ。

「――聖なる活力、ここに。ファーストエイド。はい、いっちょ上がり」

「……ちよつと、あんた!？」

術の完成と共に金色の粒子が集束する。

すると突然、一部始終を見ていたローブの人物が驚きの声を上げ、エリシアの腕を掴んだ。その拍子に頭をすっぽりと覆っていたフードが外れる。

「お、女の子っ!？」

エステルが驚くのも無理はない。エリシアも声に出さないだけで十分驚いていた。フードの下から現れた顔は整ってはいるが、幼さを残した少女のものだった。

赤み掛かった茶の髪に、エステルよりも少し濃い緑の瞳。

だが彼女にはその年頃の少女にあるはずの子供らしさ、が全くと言っていいほど感じられない。

次の瞬間、いつの間に移動したのか、ユーリが鞘から抜いた剣を少女の喉元に突き付けていた。

「こんだけやれりゃあ、帝都で会った時も逃げる必要なかったのにな」

少女は詠唱から魔術の発動までのタイムラグが驚くほどに少ない。ここまで円滑に魔術を発動出来るなら帝都で追い詰められた時も逃げる必要はなかったはず。

すると少女は訳が分からないと言った様子でユーリを睨み付けた。

「はあ？ 逃げるって何よ。なんで、あたしが、逃げなきゃなんないの？」

ユーリが剣を納めるのと同時に少女は掴んでいたエリシアの手を離してくれた。もしかと思うが、初見で気付かれたのだろうか。そう言えばリタ・モルディオは魔導器研究の第一人者とも聞いたことがある。エリシアもまさか年端もいかぬ少女だとは思わなかったが、彼女は不快感を隠そうともせずに長身のユーリを睨みつけていた。

「そりゃ、帝都の下町から魔導器の魔核を盗んだからだ」

「いきなり、何？ あたしが泥棒ってこと？ あんた、常識って言葉知ってる？」

「まあ、人並みには」

どの口が言いかとも思ったが、ここでそれを口にしても仕方ない。少なくとも常識というものが僅かでもあれば、人の家の鍵まで勝手に開けた上にあまつさえ、家の中を漁るという行動は起こせまい。それはエリシアも同じであるため、偉そうなことは口が裂けても言えない。これしか方法がなかったとは言え、犯罪であることには変わらないのだ。

「勝手に家に上がり込んで、人を泥棒呼ばわりした揚句、剣を突き付けるのが人並みの常識!？」

この場合、人並みと言うよりユーリの常識ではないだろうか。話によるとモルディオなる人物は、ユーリとラピードに見付かって真っ先に逃げたと言うし、今の彼女の行動を考えるとそのモルディオが少女と同一人物とは考えづらい。

それに何より、先程からラピードが彼女に反応したのは、本の山から出て来た一度きり。つまり彼女は犯人ではない。もし彼女が魔核泥棒なら、ラピードは激しく吠え立てているだろう。

無論、ユーリも気付いているだろうが、何か考えがあるに違いない。エリシアは大人しく、話の行方を見守ることにする。

「ちょっと、犬！ 犬入れないでよ!」

「犬じゃなくてラピードね」

エリシアの指摘にラピードはわん、と一声鳴いた。それだけは譲れないらしい。

エステルも気位のようなものを感じると熱心に言ってたし。ラピードには重大な問題に違いないが、彼女にしてはどうでもいいことだ。

「どうでもいいわそんな事！」

「どうしても良くないって、ラピードには。ね、ラピード」

その通りだと言わんばかりに、ラピードはもう一度、わんと吠えた。

すると玄関から移動したエステルが少女の前に立って頭を下げる。それには流石の彼女も戸惑ったらしく、無意識だろうが後ずさった。

「な、なによ、あんた」

リタ・モルディオ

「わたし、エステリーゼって言います。突然、こんな形でお邪魔してごめんなさい！……ほら、ユーリとエリイ、カロールも」

ほら、と促すエステルには有無を言わせぬ何かがある。不可抗力とも言えないが、取りあえず謝った方が良さそうだ。勿論、エステルが怖いため、である。

ユーリは謝る気はさらさらなく、あさつての方向を向いているが、カロールとエリシアは素直に頭を下げた。

「ご、ごめんなさい」

「えーっと、勝手に入ってごめんね」

「で、あんたらなに？」

二人の謝罪を聞いた少女は盛大にため息をついた後、そもそもの理由を尋ねた。彼女の疑問はもつともである。

勝手に家に上がり込まれたかと思えば、見ず知らずの相手に剣を突き付けられる。少女が下町の魔核が盗まれた件と全く関係ないのなら迷惑極まりない話だ。

追い出されないだけまだマシではないか。

「えと、ですね……このユーリとエリイ、エリシアと言う人は、帝都から魔核泥棒を追って、ここまで来たんです」

「それで？」

正確に言えばエリシアは帝都から魔核泥棒を追って来た訳ではない。

そもそも一度、ダングレストに帰ろうと思っていたのだが、何の因果か脱獄の上に誘拐まで。当分は帰れそうにない。というか帰りたくない。とエリシアは切実に願う。怖くてとても父の顔を見られないからである。

ユーリたちは知らないだろうが、エリシアにしてみれば本当に恐ろしい。

「魔核泥棒の特徴つてのが……マント！ 小柄！ 名前はモルディオ！ だっただよ。で、実際のところどうなんだ？」

「ふん、確かにあたしはモルディオよ。リタ・モルディオ。でもそんなの知ら……あ、その手があるか。ついて来て」

ユーリが見た『モルディオ』は小柄で白のローブを纏っていた。顔も見えなかったため、性別も分からなかったらしい。言うまでもなく年齢も。

少女もといリタ・モルディオは呆れた様子でユーリを見ると、何かを思い出したようであ、と間の抜けた声を上げた。顎に手を当てた考え込む姿勢でユーリの前を通り過ぎる。

「はあ、お前、意味わからんねえって。まだ、話が……」

「いいから来て。シャイコス遺跡に、盗賊団が現れたって話、せっかく思い出したんだから」

リタは有無を言わさぬ口調で不服そうに言うユーリを遮った。そう言えば街中でも盗賊団がどのとか騎士がどのとか話していた気がする。

大方騎士というのもフレンのことなのだろう。リタが口にしたそのシャイコス遺跡に下町の魔核を盗んだ盗賊団なる者たちがいるのか。

「盗賊団？ それ、本当かよ」

「協力要請に來た騎士から聞いた話よ。間違いないでしょ」

間違いないでしょ、と言葉を返すとリタの姿が本の海に消える。

そこで四人と一匹は、リタに聞こえないよう細心の注意を払って小声で話を始めた。

やはりエリシアが街で小耳に挟んだ（盗み聞きともいう）話に間違いはないらしい。

『その騎士ってフレンのことでしょうか？』

とエステル。十中八九フレンに違いない。盗賊団を追うという選択をしたのならまずフレンに間違いないだろう。ユーリやエステルから聞いた『フレン』は盗賊団を放置しておくような人物ではない。しかし何故かユーリが憐れむような顔をしているではないか。

『……だな。あいつ、フラれたんだ』

『フラれたは流石にフレンが可愛いそうだと思うけど。普通に断られたって言ってあげればいいのに』

フラれたんだ、は流石に身も蓋もない。リタは天才魔導士なのだから、遺跡に同行を願うのも頷ける。魔導士の存在は必要だろうし、そもそもアスピオは帝国の直属の都市だ。要請を受ければ断れないはずなのだが。

何にしてもリタが断ったからと言って、別に嫌いだからという理由ではないはずだ。

『そう言えば、外にいた人も遺跡荒らしがどうか言ってたよね？』

これはカロルだ。魔導士たちの会話に耳を傾けていたのは何もエリシアだけではない。頼りなく見えてもその辺りはギルドに属しているだけあってしっかりしている。

盗賊団の目的はまず魔核^{コア}だろう。確かに辻褄は合っているような気もするが……。

『つまり、その盗賊団が魔核を盗んだ犯人ってことでしょうか？』

エステルが一つの可能性にたどり着いたその時、リタがエリシアたちの前に現れた。

魔導士たちが纏うローブから着替えたリタは何と言うかよく言えばエキセントリック、悪く言えば奇抜とも言える服装である。

赤み掛かった髪を飾るゴーグルにどこか異国情緒溢れる赤と黒を基調とした服。胸元にはペンやメモ帳、ルーペやメガジャーが入られており、右腕には細長い黄色のリボンが巻かれていた。

「相談、終わった？　じゃ、行こう」

言うなり、リタは一人すたと玄関に向けて歩き出す。聞いたところによると彼女は十五歳らしいが、これではエステルよりほどしっかりしている。……本人に言えば怒られそうであるが。

「とか言って、出し抜いて逃げるなよ」

「来るのが嫌なら、ここに警備呼ぶ？　困るのはあたしじゃないし」

ユーリが何気なく言うが、リタは表情を変えることなく、こちらを振り返った。緑の瞳からは何の感情も読み取ることとは出来ない。警備を呼ぶというのなら、彼女は本当にそうするだろう。

警備を呼ばれば困るのはエリシアたちであってリタではない。自分たちは勝手にこの街に入ったのだから、見つければ即追い出されるだろう。やっと手がかりを掴みかけた時にそれは不味い。

ユーリも何が賢明か、分かっているはず。

『行ってみませんか？ フレンもいるみたいですし』

『流石に警備呼ばれたら色々と面倒だしね。戦うにしても逃げるにしても都合、悪くなっちゃうよ』

エステルとエリシアは沈黙しているユーリに言葉を掛ける。警備をきり抜けられない、と言うことではない。ただここで逃げるにしても戦うにしても不利な状況にしか転ばないのだ。

その点、リタに同行すれば運が良ければフレンに会えるかもしれないし、下町の魔核を盗んだかも分からない盗賊団を探ることが出来る。

「捕まる、逃げる、ついてくる。どーすんのかさっさと決めてくれない？」

「分かった。行つてやるよ」

リタの催促にユーリはしばらく考えた後、頷いた。元から選択肢などないに等しいのだ。ならば答えは一つしかない。リタが、シャイコス遺跡は街を出て更に東よ、と教えてくれる。

一行はリタの小屋を出て、裏口へと向かった。

「あんたたち、こんな所から来たの…… 呆れた」

呆れた、とりたは本当に呆れたような顔をした。

こんな所というのはエリシアたちが入って来た裏口である。先程の騎士たちとのやり取りもあって、正面から出れないからだ。いくら騎士たちが抜けていても、彼らとエリシアたちが話したのはつい先ほどだ。流石に気づかれてしまう。その点、裏口からならばれる心配はない。

「正面には怖いお兄さんたちがいるからな」

「そうそう。自己紹介してなかったよね。私はエリシア。リタって呼んでもいい？」

冗談半分でユーリが言う。怖いと言うか間抜けというか。彼らとて先程見た顔をすんなり通してくれるほど馬鹿ではあるまい。

エリシアは戸惑うリタの手を取って柔らかく微笑んだ。今までの態度を見れば冷たくあしらうかと思いきや、リタは何も言わずに硬直している。

「どうしたの？」

不思議に思っただけ顔を覗き込もうとするが、ぱつと顔を逸らされた。僅かに頬が赤く染まっていたのは間違いではないだろう。

「別になんでもない。あんたの、エリシアの好きに呼んだら？」

「そうする」

魔導器しか信じてない。そう思っていたのにリタは、エリシア手を振り払うことなんて出来なかった。にこにこ能天気そうに笑っているエステルしてもそうで、人間なんて信じられないはずなのに。リタは己の中に生まれつつある思いに戸惑っていた。

アスピオから東に進むこと少し、一行の前に朽ち果てた遺跡が現れた。遺跡としての形は何とか保っているが、崩れ落ちているものも多い。雑草は伸び放題で、手入れも全くと言っていい程されていない。地面には石柱が無造作に転がっていたり、石畳はひび割れていたり、まさに古代遺跡と言った雰囲気だ。

皆の前を歩いていたらリタが立ち止まって振り返る。

「ここがシャイコス遺跡よ」

「騎士団の方々、いませんね」

エステルが辺りを見回しても人の姿はないし、気配も感じられない。

しかしラピードが見下ろした地面、石畳ではなく土が露出した部分には確かに複数の足跡がある。ただ靴跡だけで騎士か盗賊か判別出来る訳ではないため、意味がないと言えば意味がない。

「騎士団か、盗賊団か、その両方つてとこだろ」

「でもこの辺り一帯に人の気配ないよ？」

いくら気配を消すことに長けていたとしても、騎士はともかく、盗賊が完全に気配を絶てるとは考えづらい。と未だ熱心に足跡を見つめている四人に、痺れを切らしたリタが急かした。

「ほら、こつち。早く来て」

「モルディオさんは暗がりに関連込んで、オレらを始末する気だな」

ユーリが茶化すようにリタを見る。ユーリには他人の神経を逆なでする才能があるのだろうか。無論、知っていてやっているのだから、徹底ぶりにエリシアも苦笑せずにはいられない。

リタもリタで、しばらく黙ったかと思えば、幼さの残る端整な顔に不気味な笑みを貼付けていた。

「……始末、ね。その方があたし好みだったかも」

「不気味な笑みで同調しないでよ」

「な、仲良くしましょうよ」

リタの不気味な笑みを目撃したカロルは、つつ込まずにはいられない。というかそこは同意してはまずくないのだろうか。エステル

がそれでも何とか場を取り繕おうと微笑むが、その笑顔は完全に引き攣っている。

エリシアは纏まりと言うものが全くない（当たり前だが）一行に人知れずため息をつく。ラピードもエリシアに同意するようにくうん、と鳴いた。

大切なもの

それから暫くの間、辺りを探したが、一行は盗賊団はおるか騎士の姿さえ見つけることは出来なかった。しんと静まり返っている。遺跡はそれなりに広いのだが、見通しはそれほど悪くない。起伏の上に立っている訳ではないので、ある程度見通しが利くのだ。だと言っのに人っ子一人見つけられない。本当に騎士や盗賊たちがいるかどうかも疑わしいほど静かである。

「騎士団も盗賊団もいねえな」

「もっと奥の方でしょうか？」

「ううん。あれじゃあ進めないし、倒れた柱や石像を動かした形跡はないから違うと思う」

ユーリや眩き、エステルが向ける視線の先、エステルもつられるようにそちらを見る。遺跡の奥の方は足場が悪い上に石像や柱が倒壊しているために進めない。それに騎士団にしても盗賊団にしても、障害物を動かした形跡もないし、奥に進んだとは考えづらいだろう。では秘密の地下室でもあるのだろうか。エリシアが冗談交じりにそう考えていると。

「まさか、地下の情報が外にもれてんじゃないでしょうね。ここ最近になって、地下の入り口が発見されたのよ。まだ一部の魔導士にしか知らされてないはずなのに……」

どうやら推測は当たっていたらしい。それまで沈黙を貫いていたリタが顎に手を当て、唸るように呟く。

だが情報が漏れるにしても一部の魔導士にしか知らされていないのなら、内通者がいると考えるのが自然だ。でなければ情報が漏れるはずがない。

「それをオレらに教えていいのかよ」

「しょうがないでしょ。身の潔白を証明するためだから。……発掘の終わった地上の遺跡くらい盗賊団にあげてもよかったけど来て正解だったわ」

オレらに教えていいのかよ、と言ったのは腕を組み、石の壁に持たれ掛かるような格好のユーリ。機密に近い情報を何の関係もない自分達に教えていいのか、ということである。身の潔白を証明するためとは言え、会ったばかりの自分たちに。

リタの言葉から地上の遺跡の発掘は終わっているものの、地下は発見されたばかりで発掘も途中なのだろう。もし盗賊たちが地下室を知っているのなら、貴重な魔核を奪われるかもしれない。

「地面に擦れた跡があるねなら、早く追いかけないと。これを動かせばいいんですよ？」

リタが見つめている地面をカロルも見下ろした。そこには重い物を引きずったような形跡。その上には翼を広げた女神像。雨に打たれ、所々欠けた箇所もある。

カロルは自らの倍以上もある翼を背負った女神像を動かそうとするのだが、少年一人の力で動くほど、石像は軽くはない。びくともしないし、息が上がるだけだ。

「はあ、はあ」

「ほら、行くぞ。もうちつと頑張れよ」

「あ、う、うん……」

見兼ねたユーリも石像の台座に手を添えて手伝う。するとカロル一人では微塵も動かなかった象がゆつくりと後退して行く。最後の力を込めれば、なんと女神像の下から地下へと続く階段が表れた。しっかりとした石造りの階段にも入口で見たものと同じ、土のついた足跡が残っている。この足跡からも騎士か盗賊か判断するのは難しい。

「階段、ね。同じように複数の足跡。間違いないわね」

「カロル、大丈夫です？」

エリシアは階段の下を覗き込んで見るが、薄暗くてはつきりと見えない。

エステルが座ったまま、肩で息をする少年を心配する。息も絶え絶えと言った様子なのにカロルは、こ、これくらい余裕だよと言いつ張った。無理をしているのは誰の目にも明らかだが少年の小さな矜持だろう。

そんな気遣いとは無縁のリタはカロルなど気にもとめず、さつさと階段を下りていってしまった。

「じゃ、行くわよ」

遺跡の地下は思った以上に広く、下には土の代わりに水が湧き出ており、その上に石の通路が作られている。かなり頑丈に作られているようで、入り口近くに重大な欠損は見つけられない。

地上から差し込んだ光が青い水面を照らしていた。何者も侵しがない静謐な雰囲気。遺跡を目にするのも、何もかも初めての体験であるエステルは地下に広がる光景に息をのみ、ゆっくりと周囲を見渡す。

「遺跡なんて入るの初めてです……」

「そこ、足元滑るから気をつけて」

周りばかりで足元が目に入っていないエステルのために、リタがさりげなく注意を促す。エリシアはそんな彼女を見て密かに笑った。やはりリタは優しいと思うのだ。それが表に出ないだけで悪い子ではない。

嬉しそうなエリシアや何か言いたそうなユーリを含めた皆の視線に気付いたらしい彼女は、ふいと顔を逸らした。照れているのだろうか。

「なに見てんのよ」

「モルディオさんは意外とおやさしいなあと思ってね」

「うん、やっぱりリタは優しいね」

エリシアの言葉に今度はユーリが頭を抱えた。彼にしてみれば皮肉のつもりで、彼女のように褒めたつもりはない。エリシアも変な部分でどこかエステルと通じる所があるらしい。

勿論、エリシア本人はそのことに気づいてすらいなかった。鋭いことが多い彼女なのに、こんな所は鈍いのだ。

「はあ……やっぱり面倒を引き連れて来た気がする。別に一人でも問題なかったのよね……」

「リタはいつも、一人でこの遺跡の調査に来るんです？ 罨とか魔物とか、危険なんじゃありません？」

明らかに皮肉だと分かるユーリにふんわりと笑うエリシア。屈託のない彼女の笑みに少々毒気を抜かれたリタは深いため息をついて視線を遺跡に向けた。

いくら魔導士といえど、罨や魔物の相手をするには一人では危険なのではないのか。そもそも魔術とは仲間の援護があつてこそ真価を発揮する。詠唱中はどうしても無防備になってしまうからだ。

そうエステルが尋ねると、リタは事もなげにこう答えた。

「何かを得るためにリスクがあるなんて当たり前じゃない。その結果、何かを傷付けてもあたしはそれを受け入れる」

躊躇いなど微塵もない。リタははつきりと言い放った。犠牲もなしに何かを手に入れようなんて思わない。そう言いたいのだろう。とても十五歳の少女の言葉とは思えない。そう言わせるだけの何かを彼女は背負っているのだろうか。

「傷つくのがリタ自身でも？」

「そうよ」

「悩むことはないんです？ 躊躇うとか……」

歩き出したリタにエステルは尚も言葉を投げ掛ける。自分は悩んで、躊躇ってばかりだとエステルは思う。城から抜け出す時も、フレンを追うと決めた時も。だからエステルは迷いがなく、己の信念を持つリタが羨ましかったのかもしれない。

それは何もリタに限ったことではなく、エステルやユーリもそれに当てはまる。彼女たちは自分がすべきことを分かっているのだから。迷ってばかりの自分とは大違いだ。

彼女らは彼女らで、自分は自分だと分かっているのに、聞かずにはいられなかった。

「何も傷付けずに望みを叶えようなんて悩み、心が贅沢だから出るのよ。それに、魔導器はあたしを裏切らないから……。面倒がなくて楽なの」

リタは息継ぎもなしに言い切ると、一足先に歩いて行ってしまふ。心が贅沢だから。エリシアはリタの言葉を噛み締めるように、頭の中で反芻する。言い切ったリタはどこか寂しそうに見えた。

「なんか、リタって、凄いです。あんなにきつぱりと言い切れて」

「何が大切なのか、それがはっきりしてんだな」

ほうとリタを見つめるエステルにユーリが頷く。十五歳とは信じられないほど彼女は強い。何が大切かを理解している。大の大人でも難しいものを少女は分かっているのだ。

「私の勘違いかもしれないけど、少し悲しい顔してた。魔導器なら裏切らないって……寂しいよ」

「……そうだな」

ユーリもこの時ばかりは真剣な表情で同意した。

十五歳の彼女に魔導器は裏切らないとまでいわしめる理由。エリシアには想像も付かないが、一人でいる寂しさなら分かる。魔導器なら裏切らない。確かにそうだろう。

でも魔導器は人のぬくもりを与えはくれない、話しかけてはくれない。エリシアたちは何とも言えない気持ちでリタの後を追った。

神秘的な遺跡内には盗賊団の姿も騎士団の姿もない。いるのは魔物だけで結局、誰も見かけぬまま、遺跡の奥まで来た時だった。目の前に見上げるほどに強大な何か。遺跡を守るゴーレムに似た、それよりも大きい人型魔導器に、弾かれたようにリタが近寄る。

魔核がないのか、それとも壊れているのか、動く気配はない。

「あ、おい！」

「うわ、なにこれ?! これも魔導器？」

あまりの大きさにエステルが目を輝かせ、カロルは驚いて後退る。エリシアもゴーレムは見たことはあるが、これほど巨大なものは初めてだ。

リタは早速、己の世界に入っている。

「動く気配ないし、動力ないのかな？」

「こんな人形じゃなくて、オレは水道魔導器が欲しいな」

「ちよつと不用意に触らないで！ この子を調べれば、念願の自立術式を……あれ？ うそ！ この子も魔核がないなんて！」

ユーリが無造作に人型魔導器に触れると、じっくり眺めていたはずのリタから鋭い声が飛ぶ。

本来なら魔核が嵌まっている部分は空だ。何者かにより既に取り外された後である。もしや話にあった盗賊団の仕業かもしれない。リタががくりと肩を落とし、人型魔導器全体が見渡せる真正面に移動した。

するとその時、何かの気配を察したラピードが激しく吠え立てる。

ラピードの視線は、右上部に設置された通路に向けられており、そこにはアスピオの魔導士であることを表す白いローブにフードを被った人物がいた。

背格好からすると男だろうが、彼はエリシアたちに気づいて体を震わせる。何か後ろめたいことでもあるのだろうか。怪しいと言うほかない。

「リタ、お前のお友達がいるぜ」

「……友達ではないと思うよ」

どう考えてもリタの友人はなかった。そもそもここへは盗賊か騎士を追ってきたのだ。騎士であるはずがないし、アスピオの魔導士なら堂々としていればいい。それが出来ないということは、

残る答えは一つ、盗賊である。

軽口を言い合うユーリとエリシアに構うことなく、リタはローブの人物を鋭く睨み付けた。

「ちよつと！ あんた、誰？」

「わ、私はアスピオの魔導器研究員だ！ お前たちこそ何者だ！
ここは立ち入り禁止だぞ！！」

ローブの人物——男はわめき立てるが、リタは全く気にした様子はない。むしろ更に冷ややかな視線を男に向け、ふんと鼻で笑った。そう、この時点でおかしいのだ。裏口から入り、魔導士にリタについて聞いた際、彼は言っていたではないか。まるで珍獣でも見るような顔で、あの変人に客だと。

「はあ？ あんた救いようのない馬鹿ね。あたしはあんたを知らないけど、あんたがアスピオの人間なら、あたしを知らないわけないでしょ」

「流石リタね……」

腰に両手を当てて呆れるように、馬鹿にするように言う（実際どちらも正しいが）。無茶苦茶とも言えながないが、彼女らしいのかもしれない。

堂々とあたしを知らない奴はアスピオの人間じゃないとまで言い切ったことから、きっと自覚はあるんだろうとエリシアは勝手に納得することにした。

「くっ！ 邪魔の多い仕事だ。騎士といい、こいつらといい！」

男は懷から取り出した魔核を人型魔導器に嵌める。するとどうだろう。うんともすんとも言わなかったゴーレムの瞳に光がともったかと思うと、その太い腕で目の前にいたリタを吹き飛ばした。

一瞬のことで反応出来なかった少女の体が思い切り壁に叩き付けられる。

真っ先に近寄ったエステルが慌てて治療術を施す。掲げた手から溢れた暖かい光が傷付いたリタの体を癒した。ただ治療の様子を見守っていた少女はある事に気付き、思わずエステルの武醒魔導器が付けられている左手を掴んだ。

「あんだ……」

エリシアに続き、エステルまでも同じなのか。リタがずっと追いかけていた公式の手掛かりが目の前にある。

手を捕まれたエステルは訳が分からず、あたふたするばかり。

「え、えっ？」

「エステル、リタ！ 大丈夫？」

人型魔導器が無差別に振り回す腕を避けながら、エリシアが声を掛ける。

一杯一杯なカロールからはサボってないで手伝ってよ！ と涙声で叫ばれる始末だ。とその隙に男が必死に横を通り過ぎて行った。ユーリヤエリシアが止める間もない。

「あ、はい！ 大丈夫です」

「あゝ、もうしょうがないわね！ 速攻ぶっ倒して、あの馬鹿を追うわよ！」

追おうにも人型魔導器を放って置けない。リタは仕方なく立ち上がり、魔術の詠唱に入った。

「堅牢なる守護を、バリアー」

人型魔導器の攻撃を受け止めようとしていたユーリの耳にエステルの声が届き、眼前に透明な壁が生まれた。

しかしそれは直ぐに見えなくなる。ついで衝撃。

だが結構な質量を受け止めたにしては衝撃は思ったよりも少なかった。これも魔術のお陰か。

ユーリは、一步後ろに下がると魔導器に向けて剣を振り上げた。

生まれた衝撃波がまともに足に直撃し、人型魔導器はバランスを崩してうずくまる。

致命的なダメージには成り得ない。ちつと舌打ちし、仕方なく距離を取った。それはラピードやカロールも同じでユーリ同様、後ろに下がったまま、攻めあぐねているようだ。

「ささやかなる大地のざわめき、ストーンブラスト！」

「舞い踊る風霊、刹那にて軌跡を描け、ウインドカッター！」

ユーリが後退した時を見計らい、リタが手にした鮮やかな帯が回り、エリシアの周りに魔法陣が浮かぶ。二人の声が重なった瞬間、人型魔導器の足元から噴出した無数の石つぶてが直撃し、刃となった一陣の風が切り裂いた。

ダメージも限界を超えたのか、支えを失った巨体がぐらりと倒れる。地響き共に人型魔導器は前のめりに倒れたまま、ぴくりとも動かない。

エリシアは、もう戦う必要がないことを悟るとゆっくりと息を吐いた。

「終わったね」

「ああ、何とかな」

「魔導器の悪用は許さない！」

リタだけが言いようのない怒りにわなわなと拳を震わせていた。

好き勝手に、私利私欲に魔導器を扱う男が許せなかった。魔導器はただの物ではないのに。

動かなくなった人型魔導器に手を当て、謝るとリタは倒れた背中に上る。

類は友を呼ぶ

「あとは動力を完全に絶てば……ゴメンね……」

「リタも早く!」

「わかってるわよ!」

カロールが急かすが、リタは作業に集中すると完全に魔導器の動力を絶った。動力が無ければ流石の魔導器も動けない。本来ならこんなことはしたくないし、気は進まないが仕方なかった。また悪用されないという保証はどこにもないのだ。

悪用されるくらいなら、動力を止めた方がいい。魔導器が悪事に使われるなんて、リタには耐えられないのである。

「あんたも早く!」

「でも、フレンは……」

既に歩き始めたエリシアやユーリ、カロール。鋭いリタの声が飛ぶが、エステルだけが後ろ髪を引かれるのかその場から動けずにいた。気持ちは分からないではないが、ここにはフレンどころか騎士たちの姿も見えない。遺跡にはいないと考えるのが自然だろう。

「あんな怪しい奴が、うろろろしているところに騎士団なんていねえって」

「きつと入れ違いになったのよ。今頃アスピオに戻ってるかもしれない。急いで!」

まだ迷いのあるエステルに、ユーリとエリシアが言う。

急がなければ男に追い付けない。ここで逃がしてしまえば、魔核泥棒に繋がる手掛かりはもうないのだ。ユーリの友人と言うくらいなら、フレンは心配いらない。彼のことより先に男を捕まえなければ。

それに、遺跡にいないのなら、入れ違いでアスピオに戻った可能性だってある。

「は、はい！」

「あの子を調べたら自立術式を解析できたのに！」

慌てて頷いたエステルに対し、リタは悔しそうに唇を噛み締めている。

人形の魔導器をじっくり調べられなかったのがよほど心残りだったのだろう。エリシアは自立術式が何かは知らないが、リタの疑いを晴らすためにも男を逃がす訳には行かないはず。

しかしリタにとってはそんなことより、魔導器を調べる方が大事なのだろうが。

「そのためにボクらを戦わせたの？」

「当たり前でしょ」

カロルの指摘にリタは何を当たり前前の事を、と腕を組む。

良くも悪くも根っからの研究者なのだろう。調べるためにも動きを止めるしかない。つまりリタの目的ははじめから魔導器を調べることにあったのだ。

エリシアもここまで来ると呆れを通り越して感嘆すら抱きそうで

ある。エリシアはぽかんと口を開けたままのカロルに言葉を掛けた。

「研究者って結構そんな人多いみたい。私の知り合いもそうだし。一々気にしてたらもたないよ？ カロル」

「で、でも極悪人だよ！」

「泥棒探しのついでに手伝ってもらっただけよ」

「口じゃなく足使えよ！！」

極悪人だとカロルが言えば、リタは悪びれもなく言う始末。

結局は三人共mユーリに怒られる始末だ。はい、と頂垂れ、あるいはどうでも良さそうに返事をした三人は、大人しくユーリとラピードの後を付いて行ったのだった。

早足で逃げに行った男の姿を見つけたのは、入口に近い所である。

「あ、いたよ！」

巨大な蛙の魔物に壁際に追い詰められ、情けない悲鳴を上げていた。面倒臭いことこの上ないが、仕方がない。

ユーリが剣を抜き、先陣を切って駆けて行く。その後にラピードとカロルが続き、エステルとリタ、エリシアが後ろからサポートすると言いつつもパターンだ。

「蒼破！」

青い衝撃破が敵を薙ぎ、エリシアが銃口から放たれた光とリタが詠唱した炎の球が蛙を吹き飛ばした。先程の人型魔導器ならまだしも、蛙に対して遅れは取らない。

瞬く間に戦闘を終わらせた一行は、今の魔物のように男を壁際に取り囲んだ。

「魔核盗んで歩くななんてどうしてやろうかしら……」

男の真正面に立ったリタが歯を噛み締め、不気味な笑いで帯に手を掛ける。

震え上がった男が次に出した声は可哀相に（自業自得だが）、完全に裏返っていた。

「ひいっ！ やめてくれ！ や、やめて、もう、やめて！ 俺は頼まれただけだ……。魔導器の魔核を持ってくれば、それなりの報酬をやるって」

「お前、帝都でも魔核盗んだよな？」

ユーリがいつもより低い声で尋ねれば、男は必死に頭を振って否定する。エリシアの目から見ても、今のユーリは迫力があつた。犯罪者も思わず冷や汗をかくほどの怖さである。

男もすっかり震え上がったのか、腰が抜けて立てないらしい。

「帝都？ お、俺じゃねえ！ デ、デデッキの野郎だ！」

「そいつはどこ行った？」

「今頃、依頼人に金を貰いに行ってるはずだ」

これほどまでにぺらぺらと喋ってくれる様は、見ていて面白い。依頼人が誰かは知らないが、使う人間はもう少し選んだ方がいいだろう。完全に人選ミスだ。

あるいは絶対にばれないと言う自信から来るものなのか。どちらにせよ、こちらにすれば助かったのだが。

「依頼人だと……。どこのどいつだ？」

「ト、トリム港にいるっただけで、詳しいことは知らねえよ。顔の右に傷のある、隻眼で馬鹿に体格のいい大男だ」

ユーリが尋ねれば、男は簡単に依頼人について吐いた。

男が口にした依頼人の容貌にまさかそんな筈と思う。あそこは褒められたようなものではないが、そこまで最低な事はしないのではないか。

だが特徴全てが一致している。冷静にと言いついて聞かせてエリシアは問うた。

「……その男、片腕義手じゃなかった？」

「あ、ああ、そうだ！」

男は頭を何度も振って頷く。やはり予想通りだった。魔核を盗ませていた依頼人。

いや、まだ駄目だ。まだ弱い。証言だけでは証拠には成り得ない。決定的な証拠がなければ……。

唇を噛むエリシアにユーリが口を開いた。

「エリイ、心当たりあるのか？」

「分かんない。確信がないし……今は考えさせて」

「……分かった。何にせよ、そいつが魔核を集めてるってことかよ

……」

右手を頬に当て、考え込む仕種をするエリシアにユーリも否とは言えない。

黒幕が誰であろうとユーリのやることは変わらない。下町の魔核を取り戻す。

けれど、それはエリシアも同じだ。例え男が言う依頼人が自分の想像通りの人物だとしても、ユーリの手伝いを止めるつもりはない。エリシアがレオンの娘なら、嫌でも関わるのだから。

「何か話が大掛かりだし、すごい黒幕でもいるんじゃない？」

「カロール先生、冴えてるな。ただのコソ泥集団でもなさそうだ」

難しい顔をするカロールを見て、ユーリが笑う。帝都でも随分魔核が盗まれていたことを考えると、依頼人が手に入れた魔核は相当なものだ。大量の魔核を使って何をしようとしているのか。その辺りはまだ分からないが、ろくなことではないのは確かである。

盗賊団なんてちやちな集団ではない。ならば組織か。

「騎士も魔物もやり過ぎして奥まで行つたのに！ ついてねえ、ついてねえよ！」

男はそう言つて悔しげに地団太を踏んだ。

そんな事を言われても自業自得だから仕方ない。その執念を別の所に活かせばいいのではないか。そう思ったが、エリシアは魔核泥棒に言つてやる気にもならなかった。

「そりゃあ、ご愁傷様。それより自分の置かれてる状況、理解してる？」

「騎士？ やっぱリフレンが来てたんですね」

「ああ、そんな名前のやつだ！ くそー！ あの騎士の若造め！」

騎士と聞けば何でもフレンの名を出すエステルにエリシアは思わず苦笑する。騎士という二文字に反応するのだろうか。

くそー、とまたも叫び出す男にぷちん、と何かが切れた音がした。リタである。我慢の限界に來た彼女は遂に帯を振り上げた。

「……うつさい！」

ばちん、とかなり痛そうな音が遺跡内に響き渡る。振り上げられた帯が男に命中したのだ。

案の定、男は完全に意識をなくして床に転がった。ぴくりとも動かない。

氣絶しちゃったよ！ どうすんの！？ と慌てるカロールにリタは、ばたばたと手を振って適当に答える。

「後で街の警備に頼んで拾わせるわよ」

「じゃあ逃げないように念を入れとかないと」

悪戯を思いついた子供のように笑うエリシアが取り出したのは捕縛用の縄だ。

ユーリの記憶が正しければあれは、城で騎士から拝借したものだろ。まさか残りがあったとはユーリも思わなかったが。

街の警備に頼んで拾って貰うのはいいが、警備が来るまでに逃げられてはたまったものではない。突然荷物から縄を取り出したエリシアに、カロールだけが驚いている。

「何それ!？」

「ん、城で騎士から貰って来た残り。近くに魔物も居ないみたいだし、大丈夫でしょ」

待つこと約一分。そこには縛り上げられた上にまだ気絶している男の姿があった。これなら万が一目を覚まして自力で逃げる事は不可能である。

遺跡には魔物も徘徊しているが、この辺りの魔物はエリシアたちが通る時に殆ど倒してしまったため、心配ないだろう。一行は気絶している男を一人残し、シャイコス遺跡を後にした。

「……肝心のフレンはいませんでしたね」

街道を抜け、一行は薄暗い洞窟に戻って来た。ぽつりとエステルは呟く。

フレンが遺跡にいるかもしれないと足を運んだまではよかったが、結局は入れ違いのような形になってしまった。エステルには無

駄足かもしれない。

しかしエリシアやユーリたちは十分な収穫があった。魔核を盗んだ、いや、盗ませた者の手がかかり。

どうやら事態は自分たちが考える以上に深刻だったのかもしれない。今は考えてもどうにもならないが、依頼人がエリシアの予想通りの人物なら、大混乱になることはまず間違いないだろう。

「その騎士、何者なの？」

「ユーリの友達です」

「ふーん、あんたの友達ね。それは苦勞するわ」

リタはユーリを横目にしみじみと言う。類は友を呼ぶと言うし、幼馴染とも聞いたから、ユーリと付き合っているフレンもフレンなのだろう、と。

「でもユーリの友達ならきつと同類じゃない？」

「なんだよ？」

「嫌な顔するってコトは少しは自覚してるんだ」

笑いを堪えながらエリシアがユーリの方を見る。

すると凄く不機嫌そうな顔で言い返された。ユーリは眉間に皺を寄せて腕を組み、あのなあ、自覚してない訳ないだろ、と呆れている。

エリシアは少しだけ意外だった。てっきりユーリは自覚していないのだと思っていたからだ。表情に出ていたのだろう。エリシアを見たユーリは、少しだけふて腐れたような顔をしている。

「で、なんでそいつがこの街にいるの？」

そんなユーリが面白くてエリシアとリタ、エステルは笑い合っているとリタはほとんど咳払いして上手く話を逸らせた。

「ハルルの結界魔導器を直せる魔導士を探して……」

「ああ……あの青臭いのね……あたしの所にも来たわ」

青臭いは流石にフレンが可哀想だろう。まるでキュウリかピーマンではないか。

アスピオは魔導士たちの街。魔導士の中にハルルの結界魔導器を修理出来る人物がいなか探しに来たのだ。

「フレン、元気そうでした？」

「元気だったんじゃない？」

満面の笑顔で尋ねるエステルに答えるリタはかなりぞんざいだ。だが彼女が気を悪くした様子はない。そうですか、それはよかったですと無邪気に喜んでいる。

「騎士の要請なら他の魔導士が動くだろうし、もうハルルに戻ったんじゃない？」

「……まあ、結界魔導器のことだしね。長い間結界が無いままじゃフレンだって気になるだろうし」

エステルはしゅんと萎れた花のように元気が無くなった。

結界が無ければ当然、街は無防備になる。結界が直ったことを知らないフレンが急ぐのも無理はないが、ハルルに戻ったとなればまた入れ違う可能性もある。追い付けばいいのだが……。

笑えない冗談

「で？ 疑いは晴れた？」

さらりとリタが言う。

そもそも彼女がシャイコス遺跡に行くことにした理由は、自分の疑いを晴らすためだ。デデッキと言う男が下町の魔核を盗んだ可能性が高い以上、リタの疑いは晴れたと言っている。

もっとも、ユーリもはじめから彼女を疑っていた訳ではないだろう。

「リタは、泥棒をするような人じゃないと思います」

「思うだけじゃやってない証明にはならねえな」

ユーリが言いたいことは分かる。

だがリタはエステル言うように泥棒をするような人間ではない。それはユーリだって分かっているはず。知っていて、こんな態度を取っているのだ。同意を求めるようにラピードの方を見れば、勿論だと言わんばかりに青い瞳がエリシアを見返して来た。

「でも……！」

「いいよ、かばってくれなくて。けど、ほんとにやってないから」

「ま、お前は泥棒よりも研究の方がお似合いだもんな」

もう一度リタが犯人ではない言おうとしたエステルを止めたのは他でもないリタ。そんなリタを見たユーリは、呆れたように苦笑す

る。

遺跡の中で魔核のない魔導器を見つけた時もリタは魔核を盗むくらいなら、その時間を研究に費やす。それが研究者と言うものだと誇らしげに言っていた。

その時のリタは眩しくて、それは、ユーリにもちゃんと伝わったようだ。

「ユーリは素直じゃないんです」

「だって捻くれてるもん。多分、私やエステル代わりに疑ってくれているんじゃないかな」

ふふ、と笑うエステルにエリシアも頷く。

本当にユーリは人をお人よしだと言うけれど、彼だって随分お人好しだ。それでいて、その事を他人に気付かせようとはしない。いつも損な役回りを進んで買って出てくれている。

捻くれてはいるが、ちゃんと自分たちのことを考えてくれているのだ。

「……変なやつ。警備に連絡してくるから、先にあたしの研究所戻ってて」

「って言っても、あの怖いおじさんたちが通してくれるかどうか」

理解出来ないと言わんばかりに首を竦めるリタに、おどけたように騎士を顎で指すユーリ。

通行証が無ければ通せないと言われるに決まっている。またあの裏口から出入りかと思われた時、リタが懐から一枚の紙を差し出した。

何やら小難しい文章だが、紛れも無い通行証だ。アスピオの関係

者に発行されるものだから、これを見せれば騎士も文句なく通してくれるだろう。

「これ持ってって。それ見せれば、通れるから」

「サンキュ」

「いい？ あたしの許可なく街出たら酷い目に合わすわよ」

「はいはい」

リタはいい、と念を押すと、即座にアスピオの街中に消えて行った。

出会い頭にファイアボールをぶつ放されたカロルは既にトラウマにでもなったらしく、冷や汗をかいて青い顔になっている。

大方、酷い目、と言われてファイアボールで黒焦げにされたことを思い出したのだろう。

「……酷い目ってな、何かな？」

「カロルが体験したやつじゃない？ ファイアボールで黒焦げに違いないよ。それともストーンブラストで流血騒ぎか」

「……エリイ、あんまカロルを虐めんなよ」

「分かってますって」

エリシアは冗談のつもりだが、カロルは更に青い顔になっている。想像したに違いない。ユーリも一応、注意はするが、本気で注意している訳でもなく、笑いを堪えながらである。

リタの小屋ではなくて彼女いわく、研究所に再びお邪魔したエリシアたちは、大人しくリタの帰りを待っていた。

ユーリは床に仰向けになって寝転んでいるし、ラピードもすっかりリラックスモードだ。ユーリの隣に座ったカロルはキョロキョロと中を見回している。

エリシアは始め、本棚にあった本を拝借して読んでいたのだが、あまりに専門的過ぎて直ぐに断念した。今は仕方なくユーリの隣に座って銃のメンテナンスをしている。

エステルはどうやら落ち着かないらしく、座ることもせずに何度も行ったり来たりしていた。口ではああ言っていたが、やはりフレンのことが気になるのだろう。

「フレンが気になるなら黙って出て行くか」

「あ、いえ、リタにもちゃんと挨拶しないと……」

見兼ねたユーリが声を掛けるが、自分の行動を自覚していなかったらしいエステルは、驚いたように首を横に振った。フレンは心配だが、リタに何も言わずに出て行くという選択肢がないのだろう。

「なら、落ち着けて」

「ユーリの言う通りだよ。さっきからずっと行ったり来たりしてた。エステル、気持ちは分かるけど焦ってばかりじゃ、いざって時に失敗するよ」

二人に言われた彼女はようやく歩くのを止め、ユーリの前に腰を下ろした。今のエステルは焦って気持ちばかりが先行している。まず自分が落ち着かねば始まらない。

二人に言われ、エステルもやっと気づいたのだろっ。立ち止まって俯いた。

「そう、ですね……エリイの言う通りです」

「ユーリとエリイはその後、どうするの？」

「魔核泥棒の黒幕の所に行ってみっかな。デデッキってやつも同じところ行っみたいだし」

カロルの問いにユーリはしばらく考えた後、一つの考えに至った。正確な行方の知らない男を追うより居場所が分かっている黒幕を先に叩くべきだ。下町もいつまでも貯めた水で生活が出来るわけではない。早く取り戻さなければ。

魔核泥棒の黒幕の元には下町から魔核を盗んだデデッキもいるはず。

「私はユーリについて行くから。例え火の中、水の中、地獄でも何でも来いよ」

エリシアは銃を弄る手を止めて前を見る。ユーリに向けて任せると、片目をつむって見せた。

一方のユーリは仕方のない子供を見守るように呆れた、それでいて優しい、柔らかな表情をしていた。

「アテにしてるぜ」

「だったら、ノール港まで一直線だね！」

「トリム港って言ってなかったか？」

カロルの発したノール港と言う一言に首を傾げるユーリ。自分の記憶が正しければ、男はトリム港と言っていたはずだ。それとも聞き間違いだろうか。

「ユーリ、知らないんだ。ノールとトリムは二つの大陸に跨がった一つの街なんだよ。このイリキア大陸にあるのが港の街カプワ・ノール。通称ノール港。お隣のトルビキア大陸には港の街カプワ・トリム。通称トリム港ってね。だから、まずはノール港なの。途中、エフミドの丘があるけど、西に向かえば直ぐだから」

トリム港に行くには、エフミドの丘を通った先、カプワ・ノールを目指さなければならない。

何故ならトリム港は、今ユーリたちがいるイリキア大陸の向かい側、トルビキア大陸にある。という訳で目的地はまずノール港ということだ。

「わたしはハルルに戻ります。フレンを追わないと」

ハルルに戻ると言うエステルは笑っているが、少し寂しそうな顔をしていた。ザーフィアスからずっと共に居たのだからエリシアも同じ思いである。それに彼女を一人でハルルまで行かせるのも心配だ。

さて、どうしたものかと考えれば、エリシアの中にある一つの考えが浮かんだ。

「じゃあ、私たちもハルルに戻らない？」

エフミドの丘を目指すならハルルは通り道だ。ノール港を目指す前にせめてエステルをハルルに送るくらいはしてもいいだろう。そ

れはユーリも同じだったらしく、ああ、そうだなと同意してくれた。

「え？　なんで？　そんな悠長なこと言ったら、泥棒が逃げちゃうよ！」

魔核を追っているのはユーリとエリシアな訳だから、何も本人たちよりカロルが焦る必要はないだろう。口を開いたユーリも緊張感の欠片もないゆったりとした口調だ。

「慌てる必要はねえって。あの男の口ぶりからして、港は黒幕の拠点っぽいしそれに、西に行くなら、ハルルの街は通り道だ」

「えー、でもお……」

慌てる必要はない。あの魔導士もどきの話からすると、拠点は港だと考えられる。ならば急ぐ必要はないし、ハルルは通り道だ。エステルを送る時間くらいある。

尚も言い淀むカロルにユーリがにやりと笑う。面白いものを見つけた意地の悪い子供のような表情だ。

「急ぐ用事でもあんのか？　好きな子が不治の病で、早く戻らないと危ないとか？」

ユーリの言うカロルが好きな病弱な女の子、を想像したエリシアは堪え切れずに吹き出した。

いくら何でもそれは無いだろう。そう言えばカロルは、満開になったハルルの樹を見せたい人が居ると言っていた。それがユーリの言う彼の思い人なのか。

だがカロルは笑うエリシアにも気付かずに深いため息を付いた。

「そんな儚い子なら、どんなに……」

「待つてるとは言ったけど、どんだけ寛いでんのよ」

振り向けば、そこには仁王立ちをしているリタの姿。

怒気を孕んだリタの声にカロルの身体が僅かに強張る。一番寛いでいたユーリが立ち上がり、リタの前に立った。そして一言、彼女を疑った事を詫びた。

「疑って悪かった」

「軽い謝罪ね。ま、いいけどね、こっちも収穫あったから」

リタの方は疑われていた事をさして気にしていないようで、ユーリの謝罪も早々にエリシアとエステル、そして立てかけてあった黒板を見比べた。

年相応の少女の顔ではなく、魔導器研究者としての顔が覗いている。

「リタ？」

「んじゃ、世話かけたな」

彼女の表情からして、本当に何か収穫があったのだろうか。

エステルが不思議そうにリタの名を呼ぶが、ユーリが別れを切り出したため、リタは結局口を噤んだ。代わりに微かに驚いたような表情をしている。

「なに？ もう行くの？」

「もう少しリタと話したかったけど、急ぎの用事があるから。ありがと、リタ」

まず心配はないだろうが、カロールが言うように逃げられてしまうかもしれない。

エリシアは腕を組んでいたリタの手を取り、両手で包み込んだ。リタが満更でもないような気がするの、きっと自惚れではないだろう。

エステルもエリシアと同様にリタの前に立ち、律儀に腰を折って一礼をする。

「リタ、会えてよかったです。急ぎますのでこれで失礼します。お礼はまた後日」

「……分かったわ」

仲良きことは美しきかな

「見送りならここでいいぜ」

一行がリタの小屋を出て広場まで来た時だ。ユーリが後ろを歩いていたりタの方を振り向く。ユーリにつられるようにエリシアとエステル、カロールにラピードも振り返える。

しかし次に返って来た答えはエリシアやエステルだけでなく、ユーリをも驚かせるものだった。

「そうじゃないわ。あたしも一緒に行く」

「リ、リタ？」

「え、な、何言ってるの!？」

エステルが目を瞬かせ、カロールも後ろに下がって盛大に驚いた。当然だ。エリシアだって驚いている。

アスピオの魔導士は言わば帝国直属の研究者である。しかも天才魔導士と謳われる彼女が気軽に旅に出ていいものか。初めは冗談かと思ったが、リタは大真面目らしい。どこか不機嫌そうな顔でエリシアたちを見つめていた。

「まさか、勝手に帰るなってこういうことか？」

「でも形だけとは言え、リタは一応、帝国直属の魔導士なのよね？ 私たちについて来ていいの？」

リタは元から自分たちについて来るつもりだったのか。ユーリの

問いにあっさりとりたは頷いた。うんって、そんな簡単に！ と力ロルのツッコミが入るが、完全に無視だ。相手にされない少年が少し不憫に思える。

アスピオの魔導士の規程がどうなっているのかエリシアも知らないが、勝手にアスピオを抜け出していいものか。

だがそれはリタも同じようで顎に手を当て、押し黙った。考えること数秒、回転の早い彼女の頭は即座に同行する理由を探し出す。

「……んん……。ハルルの結界魔導器を見ておきたいのよ。壊れたままじゃまずいでしょ」

我ながら良い考えだとリタは思う。ハルルの結界魔導器は本当に心配だし、じっくり見てみたい。

本当の目的は彼女らの旅に同行する——正しくはエリシアとエステル、二人と共にいるためだ。例えばここで反対されても、ごり押しでもどうにでもなる。最悪、後をつけてもいい。

それほどまでにリタは真剣だった。何故ならずっと追い求めている公式の手掛かりが目の前にあるのだから。

何としても旅に同行する。すると返って来たのは予想外の自慢するような力ロルの声。

「それなら、ボクたちで直したよ」

「はあ？ 直したってあんたらが？ 素人がどうやって？」

眉を潜め、力ロルを問い詰める。魔導器は素人が簡単に直せるものではない。詳しい構造を知らなくても魔導器は使えるが、修理をするとなればリタのような専門家が中身を詳細に把握していなければ不可能。

ここにいる全員、魔導器を修理するだけの知識があるとは思えな

い。

「蘇らせたんだよ。バーンっと、エ……」

「素人も、侮れないもんだぜ」

「そうそう、何とかなったから、結果オーライかな」

うつかり口を滑らせそうになったカロルにユーリとエリシアが素早く声を重ねる。二人が機転を利かせたお陰で何とかごまかせた……はずだ。

相手がどこかの馬鹿ならともかく、やはり相手がリタだと難しい。訝しげな表情でこちらを見つめている。何か隠していることはお見通しということだろうか。

「ふん、ますます心配。本当に直ってるか、確かめに行かないと」

「じゃ、勝手にしてくれ」

半ば呆れ気味にユーリが呟くが、その言葉とは裏腹にユーリは笑っていた。

顔を輝かせたエステルが嬉しそうにリタの手を取る。突然の出来事にリタは目を白黒させるしかない。彼女はいまいち状況を理解出来ていないらしい。

「な、なに!？」

「わたし、同年代の友達、エリイだけなんです！ だからリタは二人目ですね！」

無邪気に笑うエステルに驚いたのはエリシアも同じだった。

自分はいつの間にか彼女の友人第一号に認定されていたらしい。勿論、嫌な気なんてしなかった。むしろ嬉しかったと言っていていいだろう。

ダングレストには友人もいるが、どちらかと言えば自分より年上ばかりで獅子の咆哮関連で男性が多い。ちゃんとした同年代の同性の友人はエステルだけだ。

「いつの間にか友人認定されたな」

「そうみたい。でも嬉しいよ」

苦笑するユーリにエリシアは微笑んだ。エリシアもエステルもリタも、置かれた環境や身分だって違う。

でも“友達”にはそんな事、関係ないのだ。

「あ、あんだ、友達って……」

ここまでしどろもどろになるリタも珍しい。相当動揺しているのだろう。

エリシアは笑いを堪えながら、ユーリの隣から二人の元に移動すると、エステルと同じようにリタの手に両手を重ねた。

「私とも友達になってくれる？」

「え、ええ……」

「よろしくお願いします」

まだ笑うとまでは行かないが、ほんの少しだけリタの表情が和ら

いでいる。今はそれだけで十分だった。エリシアとエステルも顔を
見合わせて微笑む。

「……仲良きことは美しきかな、か」

仲睦まじい三人の様子を見ていたユーリが呟く。

もしかしたら自分とフレンも他者から見たら、あんな感じだった
のだろうか。幼い頃、何でも二人で分け合ったことを思い出す。

小遣いで買った剣やパン。今は大きく違ってしまったけれど、そ
の思い出が色褪せることはない。

ユーリの呟きを聞き取ったカロールが首を傾げて尋ねるが、彼は笑
ってはぐらかすだけだった。

ハルルの街は無数の花弁で埋め尽くされ、一面薄紅色に染まっ
ていた。本来なら土があるはずの部分にも花弁が積もり、歩くために

は掻き分けて進まなくてはならない。

ひらり、と一枚の花びらがエリシアの前を舞い落ちる。

「げっ、なにこれ、もう満開の季節だっけ？」

「へへ〜ん、だから言ったじゃん。ボクらで蘇えらせたって」

薄紅色に染まった街と、中央にそびえるハルルの樹を見るなり、リタは驚きの声を上げる。

リタも何度か樹が花を咲かせる所は見ているが、ここまで蕾が開いた状態を見るのは初めてだった。

カロールが自慢げに言えば、リタはすかさず彼の頭に一撃を入れ、ハルルの樹の元へ走って行く。突然の痛みにカロールが悶絶しようがお構いなしだ。既にリタの興味はハルルの樹に移っている。

「おお、皆さんお戻りですか。騎士様のおっしゃった通りだ」

するとその時、ハルルの長老が姿を現した。長老はエリシアたちを見て顔を綻ばせる。

騎士様のおっしゃった通り、とはまたフレンと行き違いになったらしい。エステルが待ちきれずにフレンの行方を尋ねるが、長は申し訳なさそうに首を振った。

「……結界が直っていることには大変驚かれましたよ。わたしには何も……ただ、もしもの時はと手紙をお預かりしています」

長老がユーリに差し出したのは一枚の封筒。長老はまたいつでも来てください、と頭を下げると自宅へと戻って行った。

早速ユーリは渡された封筒の封を開けて中身を取り出す。そこには一枚の便箋と二枚の手配書が同封されていた。ユーリの手元を力

ロルが覗き込む。

「え？ こ、これ手配書！？ ってな、なんで？」

「ちょっと悪さが過ぎたかな」

「ユーリだけじゃなくてしっかり私の分まであるし……下手な似顔絵だけだね」

手配書にはユーリとは似ても似つかない黒髪の人物とこれまたエリシアには全然見えない、髪と瞳の色だけが同じ人間が描かれていた。

それぞれ、でかかたとユーリ・ローウェル、エリシア・フランベルと名前まで書かれてる。いくら何でもこの似顔絵から特定されるとは思えないが、この場合は絵より名の方が問題だ。

「い、いったいどんな悪行重ねて来たんだよ！」

「脱獄に器物破損に誘拐？」

カロルのツツコミに指折り数えながらエリシアが答える。後は公務執行妨害も入ってるのだろうか。それにしても悪行とは失敬である。

ユーリと同じにしないで欲しい。こっちは罪のない一般市民だ。巻き込まれた結果がこれである。後悔はしていないが、悪行とは言わないで欲しいのだが。

「疑問形じゃなくて間違いなくそれだな。しっかし、たった5000ガルドって。エリイは何故か3000ガルドだな」

もう一度手配書を見てみれば、やはりユーリの方が金額が高い。この2000ガルドの差は何だろう。エリシアにすれば別に安くても構わないのだが、何だか複雑な気分である。

「これって……わたしのせい」

手配書を覗き込んでいたエステルが呆然と呟く。

他人を気遣う彼女の事だ。ユーリとエリシアを巻き込んだ事に責任を感じているのかもしれない。

だがエリシアはエステルにそんな顔をして欲しい訳ではない。友人を悲しませたくないのは当たり前だろう。

「そんなことないって。エステル、あんまり気にしないでね」

「……はい。ありがとう、エリイ」

気にする事はないと軽く言えば、弱々しい笑みだが笑ってくれた。きつと辛い事も苦しい事も一人で抱え込むであろうエステルが心配だ。

同い年だと言うのにエステルは、世間知らずと言う所もあり、エリシアより年下に思える。だからユーリとは別の意味で気になってしまふのかもしれない。

「それで、手紙にはなんて？」

「僕はノール港に行く。早く追いついて来い。それと同封した手配書の彼女、君の知り合いかい？」

ユーリから便箋を受け取ったエステルが書かれた字を読み上げる。几帳面な彼らしい流麗な字だ。

しかしフレンは何故、エリシアとユーリと知り合いだと分かったのだろうか。それはともかく、手配書まで出回っているとなると手回しが早いものだ。

「早く追いついて来いね。ったく、エリイの事までお節介ってか余裕だな」

ユーリも賞金首になった割には随分余裕である。

賞金まで掛けられたとなると余計に捕まる訳にはいかない。ユーリはともかく、エリシアたかが3000ガルドで捕まってたまるものか。

「それから暗殺者には気をつけるようにと書かれています」

「ま、プロが標的を間違うはずないか」

手紙の内容から考えると、フレンの元にも刺客が行ったのだろう。それがあのザギと言う男かどうかは分からないが。こちらに警告する余裕があると言うことは、それほど心配するなという裏返しでもある。

文面から考えてもユーリとは正反対な性格なのだろう。だからこそ親友なのかもしれないが。

「なんか、しっかりした人だね」

「身の危険ってやつには気付いてるみたいだけどこの先、どうする？ オレはノール港に行くから伝言あるなら伝えてもいい」

ユーリの問いにエステルは直ぐに答えを返せずにいた。フレンが命を狙われている事を知っているのなら、もう会いに行く理由もな

い。目的が果たされた以上、城に戻るべきだとも思っている。
理解しているのに、いつしか外の世界に出て見て知りたい、もっと世界を見てみたい。そう思うようになっていた。

「わたしは……」

「ま、どうするか考えときな。リタが面倒起こしてないかちよいと見てくる」

言いよどむエステルを残し、ユーリはラピードを連れてリタが居るであろうハルルの樹に向かった。カロールも考えたい事があるからと街の中に消えて行く。

残ったのはエリシアとエステルの二人だけ。

「ちょっと歩こうか」

「はい」

気分転換に散歩もいいだろう。エリシアとエステルは連れ立って、花びらが舞う街の中を歩き出した。

選ぶ怖さ

すれ違ふ街の人、全てがエリシアとエステルに二人に挨拶をして通り過ぎて行く。ハルルの樹を蘇えらせた奇跡は街中と言っても過言ではないくらい、知れ渡っているようだ。

花卉がそよ風に舞い踊る様は美しく、何度見ても飽きることはない。

甘い香りを胸一杯に吸い込みながら、エステルはハルルの樹を見上げた。満開の花は、結界に守られたザーフィアスでは、城の中では決して見る事が出来なかった光景。

嬉しいと思う反面、付きあわせてしまった二人には申し訳ない。

「……あの、ごめんなさい。わたしのせいでエリイとユーリを巻き込んでしまって……」

気にするなと言ってくれたが、やはりエステルはどうしても謝りたかった。

エステルが城から出たいと頼んだせいで、エリシアは賞金首になった上に手配書まで作られたのだ。

俯き、エリシアの顔が見れないエステルに、彼女は顔を上げてくれと頼んだ。エステルが怖ず怖ずと顔を上げれば、そこにはふんわりと微笑むエリシアの姿があつた。その笑顔がエステルの記憶に残る母の面影と重なる。

優しく暖かで、それでいて彼女は心から自分を心配してくれるのだと分かった。

「大丈夫。私もユーリも大丈夫だからそんなに思い詰めないで。エステルは外の世界を見たいと願った。でもそれは悪いことなんかじゃない。寧ろ、ずっとお城に居たんだから当たり前だよ。私はエス

テルを助けた事を後悔なんてしてない。きっとユーリも同じじゃないかな？」

エステルが気に病む必要はない。城という鳥籠の中で生きて来たエステル。一切の自由もなく、世界を知らずに箱庭の世界で生きて来た少女が、外の世界を見たいと思うのは当たり前のことだろう。それを否定することなんて誰にも出来ない。誰がエステルを責めることが出来よう。

事が済めば城へ戻らねばならないと彼女は言う。ならば、つかの間の自由を、猶予をあげたって構わないはずだ。

「エリイ……」

「他人が言うからじゃない。エステルの気持ちは？ “エステル”はどうしたいの？」

エリシアは正面からエステルを見つめる。

肝心なのは彼女がどうしたいかだ。このまま城に戻ることも、未だ少し旅を続けることだって出来る。全ては彼女次第。

「わたしの気持ち……？」

「もしエステルがお城に戻るなら、私は一緒にザーフィアスまで戻る。旅を続けたいのなら、一緒に行こう？」

エステルがどちらを選んでもエリシアは彼女の意志を尊重しようと決めたのだ。

城に戻るなら、ユーリには悪いがザーフィアスまで送るつもりだ。もし旅を続けたいと願うなら、共に行こう。決めるのはエリシアではない。エステル自身だ。

「わたしは……」

「そんなこと言われても直ぐには決められないよね。そろそろ戻ろっか」

「はい……」

エリシアと並んで歩きながら、エステルはもう一度ハルルの樹を見上げる。二人でこの樹を蘇らせた時、自分にも何か出来ることがあるのだと思った。

でも何かをなすどころか、自分の気持ちすら整理出来ていない。エリシアが羨ましい。

彼女は自由で優しくて、エステルよりずっと強い。リタも同じだ。一人悶々と考えている最中も当然足は動いていた訳で、気付けばエステルは街の入口にいた。

「あ、エリイ、エステル」

「エステリーゼ様！」

カロルが二人に向かって手を振っている。それに応えながらエリシアは周囲を見回した。まだユーリとリタの姿はない。エステルは未だ答えを出せずにいるようで、心ここにあらずといった感じた。聞き覚えのある声が聞こえて来たのはその時だった。エステルの本当の名を知っているのは仲間を除いて、騎士しかない。

案の定、そこには三人の騎士の姿があった。橙色を基調とする鎧を纏った騎士は中年の男を真ん中に、それぞれ左右に小肥りの男と妙に細く背の高い男を従えている。

「帝都まで丁重にお送りするのである」

「あとはユーリを取っ捕まえればいいのだ」

そこまでは腑に落ちないながらも、思い出せなかったが、エリシアは二人の声を聞き、やっと彼等が何者かを理解した。

ユーリと自分を追い掛け回していたルブランにその部下アデコールとボツコスである。エリシアはすかさずエステルを庇い、彼女と騎士の間に割り込む。

「エステルの意見も聞かずに無理矢理連れ帰ろうなんて騎士失格ね、貴方たち」

「むむむ……我等の前に立ち塞がる貴様、何者である！」

背の高い騎士、アデコールがエステルを庇うように立ったエリシアに剣を突き付ける。ユーリと違ってエリシアが彼等の顔を知らないように、彼等もまたエリシアの顔を知らないのだ。

いくら何でも初対面の相手に武器を向けるとは、騎士としてどうなのか。

だがそちらがその気ならこっちだって遠慮はしない。エリシアはホルスターから銃を抜き、アデコールの鼻先に銃口を突き付けた。

「私はただのエステルの友達。仮にも騎士なら、一般人に武器を向けるのはいただけないと思わない？」

「うむむむ……。ユーリ・ローウェルと共にいると言うことは貴様、エリシア・フランベルだな！ ユーリ・ローウェル共々手加減せんぞ！……」

三人の騎士、もとい三馬鹿が何も言い返せずに唸っているとユーリとリタ、ラピードが坂を駆け降りて来る。

するとユーリの姿を見つけた中年騎士ルブランは、叫び声を上げてエリシアに剣を向けた。やはり直ぐに気付かれたか。

手配書が回っているのだから当たり前なのだ。あの手くそな絵ならもしやと思ったが、甘かったようである。小太りの騎士——ボツコスも持っていた槍を構えて臨戦体勢に入った。

「はっ！？ 意味分かんないんだけど！ 一体なんなのよ！！」

状況が全く飲み込めないリタはユーリとエリシア、エステルと三人の騎士を見るが何も分からない。

思わずカロルの頭を叩くが、返って来たのはちょっ、何すんの！ と少年からの批難の声。

「ユーリとエリイは悪くありません。わたしが連れ出すように頼んだのです！」

すんなり言葉を聞いてくれるほど、彼等の頭はやわらかくない。エステルの言葉だとしても、だ。

現にルブランは何を勘違いしたのか、ユーリとエリシアを鋭く睨み付ける。

「ええい、おのれ、貴様ら！ エステリーゼ様を脅迫しているのだな！」

「違います！ これはわたしの意志です！ 必ず戻りますから、後少し自由にさせて下さい」

「それはなりませんぞ！ ええい、致し方ない。どうせ罪人も捕ら

えるのだから」

エステルも引き下がらないが、それはルブランも同じである。やがて言い合いを不毛と感じたのか、それとも痺れを切らせたのか、ルブランは合図を送るとアデコール、ボッコスが一行に襲い掛かった。

ユーリに狙いを定めたらしいアデコールが斬りかかる。

しかしユーリは危なげなく剣をかわすとアデコールの顔面に裏拳を叩き込む。ユーリいわくデコとボコ、ボコの方はどうやらエリシアをターゲットにしたらしい。

二人以外には用がないと言うのか、彼等の視界にはユーリとエリシアしか入っていないようだ。エリシアはボッコスが振り上げた槍を銃を交差させて受け止め、詠唱していた術を解き放った。

「仇為す者には光輝なる槍を。シャイニングスピア」

エリシアの目の前に金色の魔法陣が展開する。

シャイニングスピア、その名の通り光輝く槍が抵抗すら許さずボッコスを地面に縫い止めた。体を外して服一枚で留めただけでも有り難いと思ってもらいたいものだ。

アデコールの方もユーリの剣から放たれた青い衝撃波、蒼破刃をまともにくらってぶざまに吹き飛んだ。

「任務ご苦労さん」

剣を鞘に納めたユーリが一言。もう彼等とは戦う気すらないらしい。と言う訳でエリシアも同じように銃をホルスターに納めた。

「しつこい男は嫌われるわよ?」

「ええいつ！ 情けな〜いつ！」

言った傍から無惨な姿を曝すアデコールとボツコスに代わり、ルブランが地面を蹴った。

状況を傍観していたリタの足元に、赤い魔法陣が浮かび上がる。真っ先にリタの異変に気付いたカロールがちょ、リタと止めに入るが、もう遅い。既に彼女は印を切る所まで来ている。

「戻らないって言うてんだから、さっさと消えなさいよ！」

刹那、ルブランを中心にアデコール、ボツコスを巻き込んでファイアボールが炸裂した。リタにしてみれば、三人組は飛んで火に入る何とやらだったらしい。

若干可哀想な気もするが、自業自得だと割りきっておこう。

「燃え尽きたね、心が……」

「……うん、ボクもそう思うよ」

ぽつりと呟いたエリシアにファイアボールの（というかこの場合、リタの）恐ろしさをよく知るカロールが遠い目をして同意する。

その時、後ろを振り返ったエステルが悲鳴に近い声を上げた。

「ユーリっ！ あの人たち！」

エステルの視線の先には、独特な黒装束に身を包み、赤いゴーグルを付けた男たち。何度も姿を現した暗殺者たちである。

もう居ないのかと思ったが、そうも行かないらしい。どうやら彼等も自分たちの存在に気付いたらしい。それを見たユーリが深々と溜め息をつく。

「やっぱり、オレらも狙われてんだな」

「今度はなにっ！」

「ど、どういうこと？」

呆れたようなユーリの声に、帯を翻したリタが苛立たしげに、カ
ロルが戸惑いがちに言う。彼等の狙いはフレンだけではなく、邪魔
をした自分たちも含まれているらしい。

勿論、リタやカロルは知る由もない。

「あのザギが居ないだけマシ、なのかな」

「そう、ですね……流石にあの人はちょっと……」

エリシアに同意するようにエステルが頷く。ザギと言う男なら、
間違いなく所構わず仕掛けてくるだろう。それが例え街中であらう
と関係ない。

まだザギがいらないだけマシだと言える。こんな街中で彼と戦うの
は危険過ぎるからだ。

「話は後だ！ カロル、ノール港ってのはどっちだっけ？」

「え、あ、西だよ、西！ エフミドの丘を越えた先に、カプア・ノ
ールはあるんだ」

ここで戦うわけにはいかない。

一足先にユーリとカロル、ラピードが走り出す。エステルはまだ
決めかねているようなのか表情は晴れない。

見兼ねたリタがエステルの手を取った。

「ほら、さっさと行く」

「でも、わたし……」

城にいた頃は何一つ選ぶことなんて出来なかった。それ故にエステルは自分で何かを決めることが怖いのだ。

何かを選ぶと言うことは、選ばなかった一つを捨てる事と同意義である。選ぶ取ることがこんなに怖いなんてエステルは初めて知った。

「……エステルは一人じゃないよ。だから怖がらないで。私もユーリもリタも皆がいるから。本当にしたいと思うことは何。旅を続けたい？ それともあの人たちと帰りたい？」

エリシアがじっとエリシアの瞳を見つめる。まるで何かを訴えるように。

その時、本当の意味でエステルの心は決まった。今ここで城に戻れば、自分は必ず後悔するだろう。城でしか出来ないこともあるかもしれない。

だが外の世界でしか出来ないことだってある。

大切なものを見つけるためにも、今は城に帰る訳には行かなかった。エリシアとリタが教えてくれたことだ。

「……今は、旅を続けます」

「賢明な選択ね。あの手の大人は懇願したって分かってくれないのよ」

リタはこれだから頭の固い大人共は、とため息をついた。

そしてユーリが状況についていけず、突っ立っていた三人——ルブラン、アデコール、ボツコスの前に立つとにやり、と唇の端を歪める。

「騎士団心得ひとつ！　『その剣で市民を護る』 そうだったよなあ？」

「その通りっ！！　いくぞ騎士の意地をみせよっ！！」

ルブランはユーリに同意するとアデコール、ボツコスの両名を伴って男たちに向かって行く。

生き生きとする騎士たちにエステルは後ろを振り返り、せめてごめんなさいと呟いた。

世界は広い

「ねえ、みんな……お腹空いたよ」

カロールがお腹を押さえて言い出したのは、ハルルを出てしばらく経ってからだ。ここまで遠くになれば、流石にもう大丈夫だろうし、カロールだけでなく皆、アスピオを出てから何も口にしていない。ラピードもカロールに同意するようにきゅーん、と一声鳴いた。エフミドの丘に入る前に腹ごしらえもいいだろう。食べられる内に食べておかなければ。何よりエリシア自身も既に空腹を感じ初めていた。

「そうですね。わたしももう……」

「魔物もないみたいだし、一旦休憩でいいんじゃない？」

「そうだな。休憩にするか」

「リタは火をお願い」

休憩場所は、街道から少し離れたところに決めた。

ユーリとカロールがまきを集め、エリシアとエステル、リタが食事の用意に取り掛かる。ラピードは周囲の見張り役だ。

たかが火と侮るなかれ、火を起こすのは意外と難しい。旅慣れていても結構時間が掛かるのだ。

「しょ、しょうがないわね。揺らめく焔、猛追。ファイアボール」

魔術で火をつけるにも威力の調節が必須な訳だが、天才魔導士の

リタにならおてのものだろう。

リタが素早く印を切った直後、魔術が発動する。掲げた手の先、玉が生み出され、積み上げられたまきは瞬時に燃え上がった。流石はリタ、火の調節は文句のつけ所がない。完璧だ。

その間に二人で切り分けて置いた具材を火が通るまできちんと鍋で炒める。鍋はカロールの大きな鞆の中にあつた。ちなみに折り畳み式で、かさ張らない優れたものだ。

「え、えつと、エリイ、次はどうしましょう？」

振り向けばエステルが鍋の前でオロオロしていた。彼女もやっと危なげなく包丁を扱えるようになったのだが、城の生活が中々抜けきらないらしい。

何たつて以前は、切つてもいない野菜をそのまま炒めようとしたのだから。

うん、やる気になってくれるのは嬉しいけど、実行する前に聞いてね、と口を酸っぱくして言い含めたお陰で、やっと聞いてくれるようになったのだ。

エリシアは荷物から缶詰を取り出してエステルに手渡す。

「次は買っておいたトマトソースを入れて煮込んで」

「はい」

せめて隣に誰かがついていれば、最悪の事態は避けられるだろうから。

数十分後、鍋の中で煮込まれているのはミネストローネである。父と自分の二人分か大人数なギルドの皆の分という、極端な量しか作ったことがなかったエリシアは少々加減が分からずに苦戦した。少なくとも見た目と香りには何ら問題ない。ミネストローネだと

ラピードは食べれないため、彼の皿にはラピード専用の犬ご飯が盛り付けられている。

見張りを頑張ってもらったこともあり、いつもより心持ち豪華だ。

「いただきます！」

「ユーリに作って貰えばよかったかも。別に私が仕切らなくても良かったんだけど、つい……」

エリシアはスプーンを口に運びながら横目でユーリを見る。

下町で一人暮らしをしていたためか、彼は一通りの料理を作ることが出来るとか。元騎士で剣の腕は言わずもがな、面倒見のよい兄貴分で、料理まで上手いとなると非の付けどころがない。

エステルはお嬢様だけあって料理は全然だし、リタも好んでは作らないと聞いた。

エリシアが作る必要はないのだが、癖というものは恐ろしい。思わず手と口が動いてしまったのだ。

「また今度な。ま、オレはエリイの料理美味いから好きだけど？」

「わたしも大好きです！」

「ボクも！」

「……悪くはないんじゃない？」

好きだと言ってくれるユーリにエステルとカロルも同意する。リタも満足してくれたらしい。

作り手であるエリシアからすれば、そう言っただけで嬉しい限りだ。誰かに美味しいと言って貰えるだけで作りがいがあるし、

伊達にクレセント家の台所を取り仕切って来た訳ではない。

嬉しいと同時に少しだけ照れ臭くて、エリシアは不自然に話の方向を逸らした。

「そう言ってくれると嬉しいな。……一休みしたら出発しましょ。
エフミドの丘は直ぐ近くだから」

食事後、一休みした一行は街道に戻り、エフミドの丘を目指した。
エリシアの言葉通り、暫くしない内になだらかな丘が見えて来る。
だがエフミドの丘にはハルルの街と同じくあるものがなかった。
エリシアだけでなく、カロールも“それ”に気付いたらしく、澄み
渡る空を見上げて首を捻る。

「おかしいな……結界がなくなってる。ここ通ったときはあったん
だけど……最近設置されたってナンが言ってたのに」

そう、カロールが言うようにエフミドの丘には最近、シルトブラステディア結界魔導器が
設置されたのだ。

しかし頭上には空を彩ると同時に結界の存在を示す光輪はない。

「人の住んでないところに結界とは贅沢な話だな」

つられるようにユーリも空を見上げた。無論そこにはザーフィアスやハルルのような光輪はない。

結界とは本来、人の住む街などに設置される。デイドン砦にすらなかった結界が丘にあるとは、何とも贅沢と言うか結界の無駄使いである。

そうでなくとも箱庭の世界を出て、外を旅する人間など稀なのに。

「あんたの思い違いでしょ。結界の設置場所は、あたしも把握してるけど、知らないわよ」

リタに限らずアスピオの魔導士は、結界魔導器が設置されている場所の殆どを把握している。

魔導士たちは帝国直属の人間だから当たり前だが、リタはエフミドの丘に結界が設置されたなどと聞いたことがなかった。

「リタが知らないだけだよ。最近設置されたってナンが言ってたし」

「私が通った時もあつたよ、結界。ところでナンって誰のこと？」

エリシアが初めてエフミドの丘を訪れた時に小耳に挟んだ話でも、つい最近設置されたらしいと聞いた。

カロールがつい口にしたナンという名前から推測するに少女なのだろう。ハルルの樹を見せたいと言っていた相手もその“ナン”なのか。

何となく聞いただけなのにカロールは明らかに焦っている。そこまですらで慌てなくても良いと思うのだが。

「え……？ え、えっと……ほ、ほら、ギルドの仲間だよ。ボ、ボク、その辺で、情報集めてくる！」

言うなり、カロルは脱兎のごとく駆けて行った。そんなに知られたくないのだろうか。かと思えばリタも、あたしもちよつと見て来ると言い残し、小走りで走り出す。

彼女が目指す前方には白煙を上げる魔導器の残骸が見える。結界魔導器とおぼしき魔導器は、修復が不可能だと分かるくらい、無惨に破壊されていた。

「まったく、自分勝手な連中だな。迷子になっても知らねえぞ」

「全っ然纏まりないわね。ユーリが言えたことでもないんじゃないね、エステル」

「えっと、はい。そうですね」

からかい半分のエリシアに話を振られたエステルも苦笑しつつ同意する。自分勝手の代表みたいなユーリに言われては二人も可哀相だ。

もっとも、彼の場合は自分勝手に見えても、いつも他人を思っている行動だとエリシアは知っている。

「あのなあ、エリィから見たオレってどんだけ極悪人なんだよ」

エリシアの思いなど露知らず、ユーリは勘弁してくれと頭を抱えるのだった。

リタは結界魔導器が白煙を上げる場所に近付くと魔導器を見下ろした。武器による損傷だろうか。魔導器には破壊された跡がある。

普段ならいないはずの騎士の姿もあることを考えると、何者かの

手により破壊されたと考えて間違いない。結界魔導器と何かを見間違ふことなど絶対にならないだろう。

ならば結界魔導器を破壊した人物は、これが結界魔導器だと知って破壊したのだ。

「こらこら、部外者は立ち入り禁止だよ！」

すると魔導器を調べていた男――恐らくは魔導士だろうが、リタを見つけて声を張り上げる。

しかし彼女もそれを予想していたようで、無造作に懷からアスピオの魔導士であることの証、紋章を取り出して男に突き付けた。

「帝国魔導器研究所のリタ・モルディオよ。通してもらうから」

「アスピオの魔導士の方でしたか！ し、失礼しました！」

奇抜な格好をした少女がアスピオの魔導士だと知った男の態度が文字通り一変する。

だが彼女は全く彼に興味を持たず、そのまま魔導器を詳しく調べ始めた。男が勝手をされては困ります、上に話と言ってはいるが、耳にも入ってないらしい。そんなリタを見ていたユーリが一言呟く。

「あの強引さ、オレもわけてもらいたいね」

「ユーリには必要ないかと、思うんですけど……」

「むしろあつたら困るってば。ストッパー役がいなくなっちゃうから」

「……エリイとエステルはもう少し自重しろっての」

突っ走るリタとエステルにエリシアもまあ、そうだろう。カロールもストッパーにはならないだろうし……。その前に、そもそもこんな事、真面目に議論しているのが馬鹿らしい。

ユーリからは呆れた視線を向けられる。自重出来るならとつくの昔にしているのだ。

エリシアは視線を逸らして向こう側を見ると、なんとカロールが息を切らして駆けてくるではないか。

「みんな、聞いて！　それが一瞬だったらしいよ！　槍でガツン！　魔導器ドカンで！　空にピューって飛んで行ってね！」

休む間もなくまくし立てるカロールに、エリシアたちは困惑していた。

興奮しているのか焦っているのか、カロールが言おうとしている事がいまいち分からない。魔導器を槍で壊した犯人が空に逃げた、とも言いたいのか。

同つように隣を見れば、ユーリもエステルも何やら訳が分からないと言った様子である。

「……誰が何をどうしたって？」

「竜に乗ったやつが！　結界魔導器を槍で！　壊して飛び去ったんだってさ！」

カロールの口から出た竜と言う単語にエリシアは首を傾げるしかない。竜と言えば勿論、人に害をなす“魔物”だ。そんな竜が人を乗せるなどと聞いたことはない。

信じられなかったのはエリシアだけではなかった。ユーリとエステルも口を揃えて首を振る。そんな話、初めて聞きました、と。

カロルは分かって貰えないもどかしさに歯を食いしばった。

「ボクだってそうだけど、見た人がたくさんいるんだよ。『竜使い』が出たって」

「竜使い……ねえ。まだまだ世界は広いな」

少なくとも見間違いではないのだろう。人が竜に乗るなんてにわかには信じがたいが、事実は認めるしかない。だからこそ世界は面白い、ユーリはそう思う。

とその時、魔導器を調べていたはずのリタが金切り声を上げた。

「ちょっと放しなさいよ、何すんの！？ この魔導器の術式は絶対、おかしい！」

「おかしくなんてありません。あなたの言ってることの方がおかしいんじゃない……あなたにだって知らない術式のひとつくらいありますよ！」

何事かとリタの方を見れば、魔導士が苦しそうにリタの腕を掴んでいたところだった。抑えつけている男の方が苦しうだとは変な話だが、普段体を動かすことすらしない魔導士なら頷ける。

術式がおかしいとの発言に魔導士は心外だとばかりに言い返した。リタも負けてはいない。魔導士の腕を払い退けて、破壊された結果魔導器を指差す。

「こんな変な術式の使い方で、魔導器が可哀そうでしょ！」

リタのように魔導器の専門家ではないエリシアには、一見しただけではどの術式がおかしいのか分からない。

けれど、ただの魔導士とリタ、どちらを信じるかと言われれば、エリシアは迷わずリタと答えるだろう。彼女の知識は本物だ。

「ちょっと、見ていないで捕まえるのを手伝ってください！」

魔導士の助けを求める声に、警備をしていた騎士が駆け付ける。このままだと非常にまずい展開になる気がした。

早くも最終手段かとエリシアが銃を抜きかけた瞬間、カロールが声を限りに叫んだ。

後から思う。せめてカロールが事前に相談してくれたら止めてあげたのに、と。

「火事だっ！ 山火事だっ！」

「山火事？ 音も匂いもしないが？」

「あーあ……確かに注意はリタから逸れたけどこれは駄目だわ」

だから言わんこっちゃない、とエリシアは思わず頭を抱えなくなった。つくならもつと、ましな嘘はなかったのかと問いただしたい気分である。

煙も上がってない上に、火事ではないのだから、焦げるような匂いなんてあるはずもない。

個人プレー大好きなんです

案の定、騎士たちは嘘をついたカロルを追い掛け走り出す。まさかこんなに早くばれるとは思っていなかったらしいカロルも慌てて逃げる。

当初の、リタから注意を逸らすという目的は果たせたが、これではカロルと一緒にいた自分たちも気付かれるかもしれない。さりげなく視線を逸らせたが、そうは問屋が卸さない。

「お前たち、さっきのガキと一緒にいたようだが……ん？ 確か手配書の……」

カロルと共にいた場面を見ていたのか、一人の騎士がユーリとエリシアの顔を見て唸る。自分たちの手配書は末端の騎士にも回っているらしい。

流石にあの手配書から自分たちの素性が分かるとは思わないが、ここで事を荒げてはともとももない。エリシアはなるべく自然に見えるように振る舞った。

「手配書？ 何のことですか？ 私たち、アスピオから来たのでその辺りの事情はちよつと……」

最後は困ったような笑顔を浮かべれば完璧だ。そう思った直後、ユーリがいけないことに気づく。居るのはエリシアの演技に感心しているエステルだけだ。

ユーリはと言えば、リタを捕まえようとしていた騎士を手刀で昏倒させると、他の人間には聞こえないよう耳元で呟いた。今だ、と逃げたリタを追おうともう一人の騎士が駆け出すが、そうはさせまいとラピードが背後から襲い掛かる。

「あ、こら、待て！」

「仕方ない、か。みんなホントに個人プレー大好きなんだから」

自分が頑張った意味が全くない気がするが、仕方ない。

槍を構える騎士に覚悟を決めたエリシアは、一瞬でホルスターから銃を抜くと騎士に向けて引き金を引いた。銃口から溢れる淡い光――エアルが凝縮されたものである。

威力は落としているので直撃してもせいぜい気絶がいいところだ。現に地面に叩きつけられた騎士はびくりとも動かない。そしてユーリとリタの姿も既になかった。律儀に謝るエステルの手を引いてエリシアも二人と同じ獣道に足を踏み入れた。

木々が生い茂る獣道をしばらく走った後、一行は足を止めた。辺りを見回しても人の気配はない。カロールに気を取られてくれたお陰でもあるが。

「ふゝ、振り切ったか」

「はあ……はあ……リタって、もっと考えて行動する人だと思ってました」

エステルもそしてリタも息が上がっている。

たいして疲れる距離でもないと思うのだが、旅慣れているエリシアとお嬢様、魔導士ではきつと体力が違うのだろう。エリシアの隣のユーリも息一つ乱れていない。

「確かにね。でもリタ魔導器のこととなると無茶しない？ シャイコス遺跡でもそうだったし」

小屋にあった白い魔導器にもビクトリアと名前を付けていたし、シャイコス遺跡では人型魔導器に吹き飛ばされたことだつてある。今だつて魔導器に夢中になつて騎士に捕まる寸前だ。

「……あの結界魔導器、完璧おかしかったから、つい……」

「おかしいつて、また厄介事か？」

ユーリと一緒にいると、つくづく厄介事に縁があるような気がするのだが、エリシアの気のせいだろうか。それともユーリではなくエステルなのか。疫病神が憑いている気がしてならない。もしかすると、三人ともなのかもしれないが。

「厄介事なんてかわいい言葉で片付けばいいけど」

「オレの両手は一杯だからその厄介事はよそにやってくれ」

ユーリは間違いなくエステルとエリシアを見た。

両手が一杯？　もしかしくなくても自分とエステルのことだろうか。迷惑かけてる自覚はあるが、ユーリのお荷物になつてゐるつもりはない。

何だか釈然とせずにユーリに詰め寄る。

「私！？　私とエステルなの！？」

「……だから自覚があるなら自重しろつての」

自覚があつても自重出来ないから“こう”なつてゐるのだが。反論らしい反論も見つからなかった（出来なかった）のでエリシアは大人しく黙ることにした。視線をユーリから外すのは忘れない。

「……どの道、あんたには関係ないことよ」

「ユーリ・ローウ〜エル！ エリシア・フランベル！ どこに逃げよったあつ！」

その時、聞きたくもないルブランの声が耳に入ってきて来る。恐る恐る声のする方を見れば、木々の間からしっかりとルブランの姿が見えた。それを見たりたが茶化すように笑う。

「呼ばれてるわよ？ 有名人」

「またかよ。仕事熱心なのも考えもんだな」

ユーリの口からはもう、呆れを通り越してため息しか出ない。エリシアも同感である。

この調子なら、それこそ地獄の底まで追って来るのではないのだろうか。

おまけにルブランだけではなく、アデコールの声までも。いい加減、諦めてくれれば有り難いのだが、あの三人のしつこさを知った今では有り得ないと分かっていた。

「あんたら、問題多いわね。一体何者よ？」

リタが呆れ半分にため息をついて首を振る。

エステル把事情と城での出来事を知らない彼女がそう思うのも無理はない。エリシア自身、ザーフィアスを訪れてから、厄介事が増えたと自覚しているのだ。

「えと、わたしは……」

「ユーリ、出てこい！」

事情を話すにも話せず、エステルが口ごもった瞬間、タイミングがいいのか今度はボツコスの声まで聞こえて来た。ザーフィアスから始まり、まさかここまで追って来るとはエリシアも思わなかった。

「そんな話はあとあと」

「リタはあの三人の執念深さを知らないけど、早く逃げないと追い付かれるよ。ザーフィアスから追って来たくらいだしね」

いざとなれば三人ともボコボコにしてもいいが、出来れば関わりたくもない。何かの弾みで正体がばれれば更に最悪である。

ふざけ半分に言ったエリシアは、僅かに感じた気配に銃に手をかけた。ラピードも長い尾を立てて警戒している。

しかし次の瞬間、聞こえて来た声は実に間抜けなものだった。勢い良く走り出て来たのは、騎士を引き付けていた（追い掛けられていた）カロールである。他の気配は感じないことから、上手く撒けたらしい。

「うわあああつ！ 待って待って！ ボクだよ！」

「……なんだ、カロール……びっくりさせないでください」

「そうそう。危うく撃ち抜くところだったかも」

カロールを見たエステルがほっと胸を撫で下ろす。エリシアはと言うと、笑って腰のホルスターに手を当てた。

こう見えて抜き撃ちには自信がある。撃ち抜くところだったのは流

石に冗談だが、お、おつかないよ、と青くなるカロルが面白いので黙っておこう。

「だからあんまエリイを怒らせるなよ？　ってことで面倒になる前に、さっさとノール港まで行くぞ」

「別に怒っても銃は乱射しませんから。……全く失礼よ、私は魔物か何かかったの。少なくともオタオタより無害よ！」

いくら何でも節操くらいはある。怒っても仲間相手に銃を抜くことはない。

ちなみにオタオタ、とは蛙の姿をした魔物である。自分で言うておいてなんだが、例えに蛙はないだろう。

「いや、それ例えになってないから！」

「カロル先生に言われずとも分かってるって！」

振り上げられた銀色の裸身が綺麗に魔物の身体を両断する。剣を持つ男は、息を付く暇もなく返す剣で振り向き様に斬り付けた。

体液を撒き散らす魔物は、断末魔の悲鳴すら上げられず崩れ落ちる。

彼は二体が絶命したことを確認すると剣を軽く振って鞘に納める。

「首領！」

そう呼ばれた人物は、三十代半ばほどの長身の男だった。戦士にしてはやや長めの淡い金色の髪に灰色の瞳。体つきはしっかりしているものの、大柄ではない。むしろ細身であり、すらりとしたシルエツトだ。

整った顔立ちが剣士と言うより城の貴族のよう。実際目にしなければ、誰も彼が鮮やかな手並みで魔物を倒したとは思わないだろう。細工が入ったシンプルなデザインの籠手をつけ、裾の長い、まるで騎士が纏う装束を身に付けていた。

「どうした？」

「これを……」

やって来た男が差し出したのは折り畳まれた一枚の紙。

促されるようにして紙を広げるとそこには一人の少女らしき人間が描かれていた。らしきと言うのも書かれた絵があまりに下手過ぎて髪の長さでしか性別を判別出来ないからだ。

似顔絵の下には特徴と名前が書かれている。名前はエリシア・フランベル。年齢は十代後半。薄紅掛かった淡い金髪に金の瞳。賞金は30000ガルドと。

それを見た男は思わずため息をついた。一人でザーフィアスに行かせたのがまずかったか。

しかし彼女とてもう一人前。何があったかは分からないが、手配

書が回っていると言うことはまだ捕まっていけないのだろう。

「エリシアちゃん、大丈夫ですかね？」

「……心配ない。あれももう一人前だ」

口ではそう言ってもやはり父として心配で仕方がない。自分がいつ死んでも一人で生きて行けるように鍛えて来たつもりだが……。しかし、早くに妻を亡くした男にとってはたった一人、残った愛娘なのだ。

「行くぞ」

「は、はい！」

ギルド、獅子^{レオンハルト}の咆哮の首領——レオン・クレセントは心情とは裏腹に、手配書を元通りに畳んで懐に入れると緩やかな足取りで歩き出した。

丘に眠る者は

エリシアたちはエフミドの丘を登っていた。結界が壊れているせいで、何度か魔物とも鉢合わせたが、難なく倒して進んでいく。

暫く歩いた所で、細い獣道が唐突に開ける。表れた光景にエステルやリタ、ユーリでさえも驚いた。

何故なら、視界一杯に青い海が広がっていたからである。太陽の光を受けて、きらきらと輝く様子は本で見るよりもずっと美しいとエステルは感じた。

エステルが感嘆のため息をつく中、リタもまた目の前の海に見入っていた。これが海、そして海と空の間、あれが水平線なんだと。

「ユーリ、エリイ、海ですよ、海」

「分かってるって。……風が気持ちいいな」

僅かに上擦った声から、顔を見なくともエステルがはしゃいでいるのが分かる。母なる海、全ての生命は水より生まれたと古い本で読んだことがある。生命を生み出すものであるから、海はこんなにも美しいのだろう。

海から吹き付ける穏やかな潮風がユーリとエリシアの長い髪を揺らす。

結界が破壊されたことにより、丘には魔物が徘徊している。戦闘の連続で少し汗をかいていたのだが、ユーリが言うように風が気持ちいい。

「海なら旅していると別段、珍しいものじゃないよ。でも改めて見るとやっぱり感動するね」

「本で読んだことはありますけど、わたし、本物をこんな間近で見るの初めてなんです！」

感動しているエステルを横目にエリシアも笑う。

ここは家や木々などの遮蔽物はない。見渡す限りの青い海は見慣れているはずのエリシアでさえ、一見の価値があると思う。

海だけではない。森も魔物も目に映る全てがエステルにとって物珍しかった。読書は好きだから知識はある……と思う。

だがその知識は残らず本で“読んだ”ものだ。本物を目にすることも叶わず、城で暮らして来た彼女には嬉しくてたまらなかった。

『良かった。エステル、もう大丈夫かな』

お節介で心配性な彼女は色々と悩むことや考えることも多いだろう。今、エステルが置かれている“状況”についてもそうだと思う。だけどエステルはちゃんと前に進めてる。それが一歩ずつでも、悩みながらも確実に。

そんなエステルを見ていたカロルが少しだけ得意げに言う。

「普通、結界を越えて旅することなんてないもんね。旅が続けばもっと面白いものが見られるよ。ジャングルとか滝の街とか……」

「旅が続けば……もつといろんなことを知ることが出来る……」

この世界の殆どの人間は外に出ることはなく、作られた箱庭の世界で生涯を終えて行く。

ギルドの人間とは言え、まだ若い、十二歳のカロルやエリシアなどの旅人は珍しいのだ。

エステルはカロルの言葉を噛み締めるように心の中で何度も反芻した。ザーフィアスからハルルまでここまで本当に色々な物を見て、

感じた。旅が続けばもつと世界を感じられる。そう思うと嬉しくてわくわくして来る。

「そうだな……オレの世界も狭かったんだな」

「ユーリでもそう思うんだね。でも私は狭くてもいいと思うの。自分の世界は私とみんな。それが“私の世界”だから。狭くたってユーリやエステル、リタにカロル、みんなの世界を合わせたら狭くないよ」

ユーリは感慨深げに海を見つめる。彼の世界はザーフィアス、その中の下町だった。海を見て思い知らされたのだ。どれだけ自分が見ていた“世界”がちっぽけであったかと。

エリシアから見たユーリはいつも堂々としていて、自分の世界が狭いと言うのは意外だった。

でも狭くたって良いと思うのだ。

エリシアにとって“世界”は私とみんな、だから。一人一人の世界は小さくても、合わせれば大きくなると思っている。

「……そうか、そうだな」

エリシアの言葉にユーリは目を閉じ、小さく笑った。

そうか、そんな考えもあるのかと。エリシアの発想は自分にはないものだ。屈託のない笑顔で言う彼女が少しだけ羨ましくて眩しかった。

「あんたにしては珍しく素直な感想ね」

「リタも、海初めてなんでしょ？」

殆どアスピオから出歩かない彼女も海は初めてらしい。その証拠に海を見た時、エステルほどではないにせよ、緑の瞳を輝かせていたから。

「まあ、そうだけど」

「そっかぁ……研究ばかりの淋しい人生を送ってきたんだね」

カロルの余計な一言にぴき、とりタの顔が引き攣った。

この少年も、余計な事さえ言わなければもつと頼りになるのだろう。わざと言っているのだろうが、流石に相手は選んだ方がいい。この後、どうなるかは大体想像出来た。

ちなみにエリシアの中での頼りになる人はユーリ、次いでリタであるが。知識面で言えばリタに続いてエステルなのだが。

「あんたに同情されると死にたくなるんだけど」

「でもカロルも意中の人にまだ振り向いて貰えないんでしょう？」

ほんの悪戯心から言ってみればカロルはだ、誰がナンなんか、と慌てて否定する。エリシアは笑いを堪えたまま、不思議そうな顔を作った。

「あれ？ 私、ナンとは一言も言っていないよ？」

「え、あの別に……エリイの馬鹿ぁ！！」

海が見える丘に少年の叫びがこだまする。少しの悪戯心から言ってみたのだが、カロルは思った以上にダメージを受けたらしい。げんなりしているではないか。

よほど、ナンが気になっているのか、それとも別の何かなのか。

「この水は世界の海を回って全てを見て来てるんですね。この海を通じて世界中が繋がっている……」

エステルは水面を見つめながら、感慨深げに呟く。

この水は自分が知らないものを沢山見てきたのだろう。胸に手を当て、忘れないようにしっかりと今の光景を目に焼き付ける。

とても素晴らしいことのように思えたのだ。エステルは自分がまだ世間知らずで、箱庭の世界しか知らないことを理解していた。だからこそ、水が羨ましかったのだ。

「また大袈裟な。たかだか水溜まりの一つで」

「リタも結構、感激してたくせに」

リタは思わず、手を上げて叩こうとする。カロルは慌てて両手で頭を抑えたが、いつまで立っても衝撃はやってこなかった。

カロルが顔を上げるとリタは何事もなかったかのように腕を組んでいる。それまで海を見つめていたユーリが一言。

「これがいっつの見てる世界か」

騎士の任務でフレンは各地を旅し、様々なものをその目で見て来たのだろう。親友が見ている世界は広くて、自分とフレンの道が分かたれたあの時から、どれほど離れてしまったのか。

エリシアはユーリを見て首を傾げる。さっきからユーリらしくない。そこまで考えて、おかしいことに気づいた。ユーリらしい、とは何なのだろう。そこまで深く知っている訳じゃないのに。

そう思うと胸の奥がちくりと痛んだ気がした。

「もつと前に、フレンはこの景色を見たんだろうな。追いついて来いなんて、簡単に言ってくれるぜ」

エリシアの想いなど露知らず、ユーリは未だ紫掛かった黒瞳を海に向けている。

本当にあの親友はたちが悪いが、実に彼らしいと思う。何が追いついて来い、だ。ユーリと彼が見ていた景色はあまりにも違う。

いや、だからこそ、やる気が出てくるというものだが。

「エフミドの丘を抜ければ、ノール港はもうすぐだよ。追いつけるって」

「そういう意味じゃねえよ」

フレンが言った『追いついて来い』とは、カロルが言うような意味ではない。

上等だ、とユーリは思う。どこか楽しそうな表情に変わった彼を見て、エリシアも気付けば笑っていた。別に良いではないか。知らないのなら、これから知ればいい。今はまだ分からない。

けど旅を続ければ、この答えが出るかもしれないのだ。

「さあて、ルブランが出てこないうちに行くぞ。海はまたいくらでも見られる。旅なんていくらでも出来るさ。その気になりやな。今だってその結果だろ？」

「……そうですね」

名残惜しげに海を見つめるエステルに、ユーリが声をかける。しつこい彼らのことだ。追いついて来ないとも限らない。気持ち分

かるが、あまり長い間、ここにいることは出来なかった。それに、海など旅をしていればいつでも目にすることは出来る。

頷いたエステルが何を思ったのか、彼女の表情からは窺い知るところとは出来ない。

ほら先に行っちゃうよ、とカロルが真っ先に走り出すが、

「慌ててると崖から落ちるぞ」

「いや、まさかそんなはずないでしょ……」

カロルもそこまでドジではないはず。

しかしユーリの言通りに足を滑らせたカロルが、うわあああつ！との叫び声を上げた。間一髪、落ちることはなかったが、それを見ていたリタが頭に右手を当て、はあつ、と息を吐き出す。

「バカっぽい……」

「それがカロルの良さなんじゃないの？」

「そうかあ？」

「そ、そうですよ！」

それがカロルの良さだと笑うエリシアに、首を傾げるユーリ、勢い良く叫ぶエステル。まさか背後でそんな会話が交わされているとは知らない少年は、ちよつと、何してんの！？とこちらを振り向く。

走り出したカロルと、彼の後に続くユーリとエステル、そしてリタが一斉にエリシアの方を向いた。彼女の視線の先には小さな石。海が見渡せる丘の上に作られた墓標だった。

「なんたる、これ？ ごめん、皆、先に行つて。魔物が出ても一人で大丈夫だから」

「そうですか？ 本当に大丈夫です？」

エステルが心配そうに首を傾げる。嘘ではない。

エフミドの丘には来たことがあるし、そもそもザーフィアスに来る前は一人で旅をして来たのである。そうそう魔物に遅れは取らないと自負している。

「大丈夫って言ってんなら心配ないだろ。エリイ、直ぐに追いついて来いよ。ほら、行くぞ」

「ありがと、ユーリ」

ユーリはそう言う尚も心配するエステルと皆を連れて坂を下つて行つた。この石はきつと、墓標の代わりなのだろう。では土の下に眠っているのは誰なのか。

エリシアは石の前にしゃがみ込むと目を閉じ、祈りを捧げた。別に神を信じている訳ではないが、死者には祈りを捧げるべきだと思うからだ。

「……何をしている？」

「何って祈ってるの」

目を閉じたエリシアの耳に何者かの声が届いたのは、それから直ぐのことだ。

祈ってるの、と答えたエリシアは思わず背後を振り返った。彼女

の真後ろに立っているのは一人の男。一見した所、外見はユーリより少し上だろうか。

磨き上げられた紅玉を思わせる瞳に、緩く波打つ長い銀色の髪は、太陽の光を反射して美しく煌めいている。血のように赤い長衣を纏った男は、ここからでも分かる長い睫毛に繊細な顔立ちをしていた。

「……ど、どちら様？」

顔を引き攣らせて尋ねても、彼の表情は変わることはなかった。

一体彼は何者なのか。集中していなかったとは言え、全く気配を感じなかったのだ。ただ者ではないことくらいエリシアにも分かる。この静けさはまるで、戦う前の父を彷彿させた。

「何故祈る？ 誰が眠っているのかも知らないだろうに」

「確かに知らない。でも誰か分からなくちゃ祈っちゃいけないの？ 貴方こそ、この墓の人の知り合い？」

立ち上がり、男を正面から見つめる。身長のお陰で見上げる形になるのだが。

するとどうしたのかそれまで一切表情を動かすことのなかった彼が僅かに笑った。

「面白い娘だな。この墓に眠っているのは私と共に戦った友だ」

「そつ、じゃあ祈って良かった」

笑ったと思ったのは一瞬で、男は直ぐに元の無表情に戻っている。会ったこともない人なのに、話していても不思議と変な感じはしなかった。

祈って良かった、そう言えば男は不思議そうな顔をする。彼の赤い瞳からは、本当に意味が分からないらしい事が伝わって来た。別に変なこと言っていないはずなのだが。

「何故だ？」

「こうやって来てくれる人がいたから」

場所も場所だから、誰も来ないのかと思っていた。この場所に葬られたのはやはり、それなりの理由があったからだろう。

それはエリシアが窺い知ることではないが、友人が訪れてくれるのはまだ幸せではないか。

「本当におかしな娘だな」

「娘娘つて、私にはちゃんとエリシアって名前があるの」

おかしな、と言われるほど、エリシアは自分が変わっているとは思っていない。それより男の方が随分と変わっているのではないか。彼が纏う雰囲気は浮世離れたと言っても過言ではなかった。見た所、武器らしい武器は薄紫をした刀身の一振りの剣のみ。美しい細工が施された剣は、どう見ても実用的ではない。

「そうか……」

「で、貴方は？」

両手を腰に当て、男を見上げれば意味が分からなかったのか、きよんとしている。

会話が成立してない気がしないでもないが、あえて気にないでお

こう。

「私が名乗ったんだから貴方も教えてよ。分からなかったら貴方としか呼べないじゃない」

「……デューク」

「そっか、デュークね。良い名前」

男はただ一言、デュークと言った。主語がなく、あまりに唐突だったこともあり、それが彼の名前だと気付くまで数秒。

エリシアはデュークに背を向けて、丘に佇む墓標を見つめた。この墓に眠る人物はどんな人なのだろう。デュークの友達なら、ユーリとフレンのように正反対な性格をしていたのだろうか。

「……もし人がお前のような者ばかりなら……フルも……」

「え？」

振り向いた時にはもう、デュークの姿はなかった。つい数秒前まで彼がいたと言う痕跡は、どこにも残っていない。丘には穏やかな風が吹いているだけだ。

足はあつたから幽霊ではない……と思う、思いたい。エリシアが無意識に首を振った瞬間、先に行ったはずのカロルの姿。心配して戻って来てくれたのだろうか。

「おい、エリイ！ 何してんのー！！」

「ごめん！ 直ぐ行くー！」

エリシアは叫びながら、もう一度だけ墓標を見る。デュークの友人の墓標は当たり前だが、何も語ることはなく、変わらぬまま丘の上にあった。

カプワ・ノール

結局、エリシアは、デュークと会ったことを誰にも言わなかった。そもそも何とさえいいだろう。彼の姿はすぐ消えていたし、それほど話をした訳ではない。

皆と合流した後、テントを張って一泊し、ノール港へと続く街道を歩いている。すると今まで晴れていたと言うのにノール港に近付ければ、見上げる空は今にも泣きそうだ。

ノール港に到着した時に、は既に冷たい雨が降り出していた。

「……なんか急に天気が変わったな」

「びしょびしょになる前に宿を探そうよ」

カロルは濡れないように頭に手を乗せるが、大粒の雨ではそれも無駄に等しい。

エリシアも雨で服が張り付くのは嫌だが、少しでも濡れた以上、今から急いで宿屋に行っても同じだ。カロルに続き、宿屋に足を向けたユーリはエステルがじっと街を見つめていることに気付いた。

「エステル、どうした？」

「あ、その、港町というのはもっと活気のある場所だと思っていたました……」

ユーリもエステルが見ていた街の中心街に視線を向けた。

ノール港はイリキア大陸の言わば流通の拠点である街だ。資源の豊富な海に囲まれ、漁業も栄えており、当然人通りも多いはずである。

だが今、目の前に広がっている光景はとても大陸の流通拠点とは思えない。しんと静まり返っている。この雨のせいもあるが、明らかに露店の数も少ないし、何より活気がないのだ。

「確かに、想像してたのと全然違うな……」

「それは仕方ないと言えば仕方ないんじゃない？」

ユーリの呟きにエリシアも同じように街中を見回した。自分も変わってしまったから、ノール港を訪れた事はなかったが、旅をしていれば色々と噂話は入って来る。

カロールも小耳に挟んだことがあったのだろう。何とも言えない顔で同意する。

「そうだね。ノール港は色々と厄介だから」

「どういうことです？」

「ノール港はね、帝国の圧力が……」

「金の用意が出来ない時は、おまえらのガキがどうなるかよく分かっているよな？」

エステル問いにカロールが答えようとした瞬間だった。明らかに柄の悪い大声が聞こえて来たのは。

一行がその声につられるように目を向けると、見るからに高そうだと分かる服を来た役人らしき人物と、帯剣したその護衛、そして地面にひざまずき、何度も頭を下げる男女の姿があった。

二人は夫婦なのだろうか。服が泥水で汚れるのにも構わず、一心不乱と言った様子で頭を下げ続けている。

「お役人様！！　どうか、それだけは！　息子だけは返してください！　この数ヶ月の間、天候が悪くて船も出せません。税金を払える状況でないことはお役人様もご存知でしょう？」

「ならば、早くリブガ口つて魔物を捕まえてこい」

頭と腕に包帯を巻いた夫は何度も懇願し、妻もまた地面に頭を擦り付ける勢いで頭を下げる。対して男たちはにやついた笑みを浮かべるだけだった。

リブガ口を捕まえてこい、と護衛は吐き捨てる。すると隣の役人も嫌な笑みを貼付けたまま、護衛の言葉にうんうんと頷いた。

「そうそう、あいつのツノを売れば一生分の税金を納められるぜ。前もそう言っただろう？」

二人の男たちは言いたいことだけ言うと、泥水に塗れた夫妻を見下ろしてその場から去って行った。

一連の場面を見ていた（と言うより見せられていた）リタがあからさまに眉をひそめる。

「なに、あの野蛮人」

「カロール、今のがノール港の厄介の種か？」

「うん、このカプワ・ノールは帝国の威光がものすごく強いんだ。特に最近来た執政官は帝国でも結構な地位らしくてやりたい放題だつて聞いたよ」

尋ねるユーリは意外に冷静だった。頷いたカロールは、この街がお

かしい理由を語る。

つまりはその部下の役人横暴な真似をしても誰も文句が言えないってことね、とリタが厳しい表情で吐き捨てた。

あの者たちは、人を何だと思っっているのか。弱き者は虐げられ、一部の力のある者だけがのさばっている。

自分にはどうすることも出来ない世界の仕組みにエリシアは唇を噛んで呟いた。

「……最低」

それは果たして、誰に対して呟かれたものなのか、彼女以外は知るよしもない。不条理な世界にか。あるいは名も知らぬ執政官にか。一方、エステルは呆然とうずくまる夫婦の姿を見つめていた。

「そんな……」

城にいた頃は、帝国の恩恵は全ての民に等しく与えられるはずだと思っていた。それが間違いだと気付いたのは旅を始めてから。ユーリが住む下町を見て、エリシアの話を聞いて。

それでも心のどこかでは信じていたのだ。“帝国”を。なのに、それは間違いだった。これが現実だ。デイドン砦でエリシアが言ったように、変えられない世界の仕組み——理だ。

「もう止めて、ティグル！ その怪我では……今度こそあなたが死んじゃう！」

「だからって、俺が行かないとうちの子はどうなるんだ、ケラス！」

唐突に聞こえた叫び声に振り向くと、立ち上がろうとする夫を、妻が必死で止める所であった。ティグルと呼ばれた男は止める妻の

手を振り払い、何とか出口に向けて歩き出す。

宿屋の壁に背を預け、両手を組んでいたユーリは無言で足を出し、男の足を引っ掛けた。

完璧な足払いに男はバランスを崩して思わず倒れてしまう。もともと怪しい足取りであったことも原因だろう。

「痛ッ……あんだ、何すんだ！」

「あ、悪い、ひっかかっちゃった」

ユーリは言いながらも、全く悪びれる様子もない。謝る気などはなからないのか正に棒読みである。

追いついて来たエステルが急いで男の前にしゃがみ込んだ。遅れてエリシアやリタも二人に駆け寄った。

「もう！ ユーリ！ ……ごめんなさい。今、治しますから」

「貴女も怪我してるみたいですね。見せて下さい」

エステルは胸の前で両手を組むと、足元に輝く魔法陣が生まれる。金色に煌めく聖なる光は、傷付いた体を優しく包みこんだ。

それを見ていたエリシアも、ケラスと呼ばれた女性の体に幾つもある擦過傷に気付き、有無を言わず手を取った。夫よりは軽いが、それでもこのまま治療しなければ傷が化膿してしまう。小さな傷とは言え、放置するのは衛生上よろしくない。

戸惑う女性に構わずエリシアは治療を始めた。彼女の足元にもエステルと同じ金色の魔法陣が浮かび上がる。淡い金色の光は瞬時に肌に刻まれていた傷を全て綺麗に治した。

「あ、あの……私たち、払える治療費が……」

傷一つない肌を見つめながら、ケラスが恐る恐る口を開いた。確かに治癒術士と医師を兼業する治癒術士はいるし、それで収入を得ている者も多い。それほど高額ではないが、彼らの事情を考えるとその治療費を払えるだけのお金もないのだろう。

「その前に言うことあんだろ」

「え……」

訳が分からないと言った様子でケラスは声を漏らした。ユーリは呆れたように息をついた。エステルやエリシアが金目当てに傷を治したとでも思っているのだろうか。

金の心配をする前に、二人に何かいうことがあるのではないか。

「まったく、金と一緒に常識まで絞り取られてんのか？」

「……ご、ごめんなさい。ありがとうございます」

「いえ、好きでやったことですから」

ユーリが言いたいことを理解したケラスは慌てて頭を下げた。申し訳なさそうな表情の彼女を見て、治癒を終えたエリシアが答える。エステルの方はまだ時間がかかりそうだ。元々怪我を負った部分が多いことと、予想以上に傷が深いことが関係している。いくら治癒術と言えど、深い傷を一瞬で治すのは不可能だからだ。

その様子を見つめながら、ユーリは視線を背後に向けた。黒い装束に赤い目がユーリの視界の端を過ぎる。仲間たちに気付かれぬように、彼は静かにその場を後にした。

「……ユーリ？」

真っ先に彼の不在に気付いたエリシアはユーリの名を呼ぶ。
しかし彼の姿はどこにもなかった。

仲間たちから離れたユーリは路地裏にいた。

煉瓦の壁に貼られた無数の手配書に積み上げられた木箱。降りしきる冷たい雨が容赦なくユーリの体を濡らす。先程、目にしたのは特徴的な黒衣に赤いゴーグルを身につけた男。

それは間違いなく城で、ハルルで見た暗殺者たちである。一見すると狭い路地には誰もいないように見える。

だが見えなくても感じるのだ。自分に向けられた殺気に気付かないほど、鈍くはない。無造作に剣を手にしたユーリが笑う。

「おいおい、それでもプロだろ？　いくらなんでもお粗末過ぎるっ
てな」

刹那、ユーリの前に姿を現したのは黒装束の男たちだった。数は三人だが、感じる殺気はそれだけではない。繰り出される斬撃を難無くかわし、抜き放った刃ではなく柄の方で刺客の腹部を強打する。しかしながら、相手も訓練を受けた者たちだ。その程度では倒れない。

ユーリは腹を押さえる刺客に足払いを掛けると、背後から襲い掛

かつて来た刺客の剣を跳ね上げ、剣から発生させた衝撃波——蒼破刃で弾き飛ばした。だと言うのに、刺客たちは何度も起き上がる。ユーリは思いきり地面を蹴り、助走を付けて高く跳んだ。かと思えばそのまま刺客たちの中心に飛び込み、剣を振り上げる。

「……めんどくせえ。まとめて終わりな！」

ユーリは振り上げた剣をそのまま地面に叩きつけた。

瞬間、剣の周りに円状の衝撃波が広がり、刺客たちに襲い掛かる。その手のプロでもある彼らは、衝撃を逃がすことには成功した。

だがそこに一瞬の隙が生まれる。彼らが怯んだ隙にユーリは即座に叩き付けた剣を、今度は地面に向けて突き刺した。

「もひとつ！」

ユーリを中心に生まれた金色の衝撃波が刺客たちを大きく吹き飛ばし、頑丈な煉瓦の壁に叩きつける。ちらりと見やった男たちは動く様子はない。完全に意識を失っているようだ。

終わったか、誰にともなく呟き、ユーリは小さく息を吐いた。が、頭上から感じた殺気に反射的に空を見上げた。民家の屋根から飛び降りて来たのは新たな刺客。

（勘弁してくれっての）

ユーリは心の中で悪態をつき、短剣の一撃を剣で受け止めるが、弾き返すには至らない。刺客たちは個々の力はユーリに及ばないものの、ユーリも先の戦闘で予想以上に体力を消耗していた。冷たい雨と使った技も理由の一つである。

ユーリが刺客の剣を受け止めた瞬間、別の角度からもう一つの刃が迫る。避けきれない。痛手を覚悟で飛び込むか、それとも……。

ユーリが覚悟を決めた瞬間、彼と刺客の間に入り、刃を受け止めた一本の剣。

剣の持ち主は輝く金の髪に青空と同じ色の瞳を持つ青年だった。まるでどこかの王子と言われても差し支えない整った顔立ちに、雨に濡れて光沢を放つ騎士団特有の鎧を纏っている。

刺客の剣などものもしない。一切無駄のない最低限の動きで攻撃を捌き、跳ね返す。突然の登場に唖然とするユーリを尻目に青年は晴れやかに笑った。

「大丈夫か、ユーリ」

「フレン！ おまつ……それはオレのセリフだろ！」

「まったく、搜したぞ」

その言葉で我に返ったユーリは、呆れた顔で青年を見上げる。剣を下げたまま、青年——フレンが言う。

搜したとフレンは言うが、どちらかと言うと、それは自分が自分が使すべきではないか。なんせあのお嬢様に付き合って、彼の行方を追っていたのだから。

「それもオレのセリフだ！」

叫ぶユーリに刺客は一旦剣を引いて後ろに下がる。もう一人の間と目配せをすると素早く地面を蹴った。

ユーリはちらりとフレンを見る。フレンも同じように彼を見た。二人の間に余計な言葉は必要ない。ユーリが小さく笑い、フレンもまた顔を綻ばせる。

二人は同時に、しかも寸分の狂いもなく同じ動きで刺客の剣を弾く。何度か斬り付ける。まるで合わせ鏡を見ているかのように二人の動きは完璧に同じだった。はっ、とユーリとフレンの口から息が吐き出される。

刹那、二人の剣から放たれた衝撃波が刺客を直撃し、奥に積み上げられた木箱に激突させた。

今度こそ辺りから殺気が消えた後、ユーリはやれやれと剣を鞘に納めた。

「マジで焦った。助かったぜ、フレン」

ユーリの目の前にフレンの剣が振り下ろされる。ユーリは反射的に剣を鞘から抜き、フレンの剣を受け止める。いくら何でも再会早々これはないだろう。

流石に友人に斬られるような事をした覚えはなかった。

「ちょ、お前、なにしゃがる!」

「ユーリが結界の外へ旅立ってくれたことは嬉しく思っている」

フレンは口では嬉しいと言いつつも、剣を振るう手を止めることはない。ユーリは相手の剣をことごとく捌きながら、軽く言った。

「なら、もっと喜べよ。剣なんて振り回さないで」

海賊帽の少女

「これを見て、素直に喜ぶ気がうせた」

「あ、10000ガルドに上がった。やり。ってエリイも上がってんな。後で教えてやるか」

フレンは剣の切っ先を壁に向けた。正確には壁に張られた紙に。紙には下手くそな似顔絵とユーリ・ローウエルの名が書かれている。ふと隣に張られた紙に目を向けると、そこには薄紅掛かった金色の髪の少女とエリシア・フランベル、賞金5000ガルドと殴り書きがしてあった。

後でエリシアにも知らせてやろう。色々吹っ切れたらしい今の彼女には、どうでも良いことかもしれないが。

「騎士団を辞めたのは犯罪者になるためではないのだろう」

剣を鞘に納めながらフレンは、ユーリに分かるように大きくため息をついた。

一方ユーリは彼に背を向け、色々事情があったんだよ、と返す。ユーリとて最初から犯罪者になるつもりで指名手配された訳ではない。言うなれば成り行きだ。詳しい話をしては日が暮れるし、許してくれるとも思えなかった。

そして案の定、そんな答えでは生真面目な幼なじみが引き下がるはずがない。

「事情があつたとしても罪は罪だ」

「まったく、相変わらず頭の固いやつ……あつ」

どこまでも変わらない幼なじみに、もうため息すら出なかった。そう、そうなのだ。フレンは確かに頼りになるし、剣の腕は言うまでもない。致命的な味音痴ではあるが、料理はレシピ通りに作れば驚くほど美味かった。何でも器用にこなし、一見すると欠点などなさそうなのだが、何よりも頭が固すぎる。

どうやって頭の固い幼なじみを説得するか。ユーリが思案した時、ナイスなタイミングで現れた別の人間の声が路地裏に響いた。

「ユーリ、さっきそこで何か事件があつたようですけど」

現れたのはティグルの治療を終えたエステルと恐らく、彼女一人で行かせるのはまずいと思つたのであろう、エリシアである。突然姿を消したユーリを捜しに来たのだ。

仲間たちを巻き込む訳にはいかず、一人で路地裏に来たことを知られれば怒られそうだ。

「ちょうどいいところに」

ユーリにつられるようにフレンも声の方を見る。フレンの姿を認めたエステルと、エステルを見つけたフレンが呆然と立ち尽した。どちらも驚いているのだろう。フレンはまさかエステルがここにいるとは知らず、エステルもまた彼に会えるとは思っていなかったのだ。

「……フレン！」

「え、エステル！？」

我に返つたのはエステルが先だった。状況が分からず目を白黒さ

せるエリシアそっちのけで走り出した彼女は、勢いよくフレンに抱き着いた。

「よかった、フレン。無事だったんですね？ 怪我とかしてませんか？」

「……してませんから、その、エステリーゼ様……」

「大丈夫、ユーリ？ 赤目と一戦やらかしたんでしょ。怪我は……ないみたいね」

無事確かめるようにエステルは、フレンの腕や胸をぺたぺたを触る。彼が戸惑っているのもお構いなしだ。フレンも戸惑いながらもエステルの好きなようにさせている。

そんな二人を一瞥し、入り口から歩いて来たエリシアがユーリに声を掛ける。

路地裏を見回すと、木箱はばらばらだし、凄惨有様だ。ここで戦闘が行われたというのは一目瞭然だ。黙って姿を消したことも考えると、相手はあの暗殺者たち。

ユーリも誤魔化しは無駄だと分かっているのだろう。素直に肯定した。

「ああ。探しに来てくれたのか？」

「だって勝手に居なくなっただから。それであの人がフレンね。ユーリとエステルから聞いた通りの人みたい」

エリシアの視線の先には、困ったように微笑む青年。ユーリのお馴染みで親友、確かに何から何まで正反対な感じがする。

エステルに心配されているフレンは戸惑いながらも嬉しそうだ。

確かに見た感じ、真面目そうではあるが、ユーリが言うように融通が効かないようには見えない。

「……こちらに」

フレンは何を思ったのか、そう言っでエステルの手を掴んだ。

え？ あ、ちょっと……フレン、お話しが……！？ と慌てているのもおかまいなしである。彼女の手を引いたフレンは、ユーリとエリシアを残し、足早に路地裏から消えて行った。

「行っちゃったけど、いいの？」

二人が去った方を見つめた後、視線をユーリに戻す。

エステルは勿論、ユーリも久しぶりに彼と会ったのだろう。再会したばかりなら、色々と積もる話もあるのではないかと思ったのだが。

「……城のお嬢様だからな。色々あんだろ」

「ユーリがそう言うならいいけど。エステルのことだから、きっと話は長引くんじゃないかな。折角だから街、見て回らない？」

あのエステルのことだ。城から出て何をしたとか初めて見たものとか話は弾むに違いない。それに自分たちには聞かれたくない話もあるのだろう。

彼女は貴族の姫で、こちらはしがない一般人。聞かれたくない、と言うよりは聞かせたくない話、かもしれないが。

「そつだな。雨も小振りになって来たことだし」

空を覆う雲は厚く、太陽の光はまるで見えない。

しかし先程と比べ、少しでも雨の勢いはましになった気がする。
ノール港は帝国の威光が強いこともあり、エリシアは殆ど見て回った記憶がない。一人なら不安だが、ユーリが一緒ならきつと大丈夫。それにもう賞金首になったのだから同じことである。

「あ、エリイ、賞金50000ガルドに上がったぞ。おめでとさん。ちなみにオレは10000ガルドな」

「なんで上がってるの!? ユーリも私もあれから何もしてないのに……」

さらりと言うユーリはまるで、世間話をするようなものだ。だからエリシアも一旦聞き流したが、賞金と言う単語が耳に引っ掛かった。

手配書が出回ったのは丁度ハルルの街に戻って来てから。それからエフミドの丘を越え、ノール港まで来た。罪は重ねてない……はずだ。

「そりゃあ、エステルがいるからだろ？」

「あ、そっか。つまりは雪だるま式……あ、悪夢としか考えられない」

エステルが城に帰らない限り、賞金は上がる一方だろう。言うことは今も上がり続けていると。

（嗚呼、カミサマ。そんなもの居るかどうかわからないけど、私が何をしたら言うんですか）

思わず恨み言が出たが、いもしない神に祈っても無駄だ。現実には容赦無いし、自分が置かれた状況も変わらない。嘆く前に行動を起

こすべきだ。

「ま、気楽に行こうぜ」

「そう、だね。今更何言ったってどうにかなるものでもないし。ユーリ、張り切って行こう。ほら早く」

一転、立ち直ったエリシアは、目をしばたかせるユーリの手を取って歩き出す。元気を取り戻した様子の彼女を見て、ユーリは気付かないよう小さな笑みを作った。

雨がしとしと振り続く中、カプワ・ノールで一番大きな館——この街を修めるラゴウ執政官の屋敷に向け、正面から堂々と歩いて行く少女の姿があった。

年の頃は十代前半から半ばにはまだ届かない。金色の髪を左右で三編みにし、頭の上にはレースを縫い付けた海賊帽をちょこんと乗せている。

着ている濃紺に白い縁取りの服も、大人用の上着をワンピース代わりに着ているような感じだ。

少女は口に串に刺さった何かをくわえたまま、門を通り過ぎようとする。

しかし、そうは問屋が卸さない。警備の傭兵に首根っこを掴まれ、

あうと悲鳴を上げた。

「何入ろうとしてんだ、このガキが」

「まあまあ、これでも食って落ち着け」

「いらねえよ。ガキが来るところじゃねえんだ、ここは」

少女が差し出したのは、今まで彼女がくわえていた、おでんと言われる食べ物である。男は掴んだままの少女をひよいと投げ飛ばした。

するとちょうど前を通り掛かったユーリとエリシアの前方から、何と少女が飛んで来るではないか。ユーリが慌てることなく少女の体を受け止める。

「おっと、っと……」

「むむ」

ユーリの顔を真正面から見た少女が何やら変な声を上げた。怪我はないようだが、もしかすると、どこかぶつけたのかもしてない。そう思っ、エリシアは案じるように顔を覗き込む。

「大丈夫？」

「うむ。何ともない」

石畳に下ろされた彼女は胸を張って答える。服装からして地元の少女ではないのだろう。服はどう見ても海賊のようだし、雰囲気が違う。そして、この街の子供とて、執政官の館には近付こうとはし

ないはずだ。

それにしても、いくら勝手に館に入ろうとしたとは言え、こんな子供に些か乱暴ではないか。そう思ったのはユーリも同じらしい。

「子供一人に随分乱暴な扱いだな」

「そうよ。貴方それでも大人？」

ユーリが受け止めていなければ、彼女は怪我をしていたかもしれない。おまけに彼女はまだ十代半ばほどだろう。そんな子供を相手にこの仕打はいくらなんでも酷過ぎる。

男はと言うと、二人の言葉をものともせずに吐き捨てた。

「なんだ、お前らは。そのガキの両親が何かか？」

目が点になったのは言うまでもない。どこをどう見れば、そんなふざけた答えが出て来るのか、是非とも教えて頂きたい。

ユーリはエリシアの額に青筋が立ったのを見逃さなかった。頼むから暴力沙汰は勘弁してくれよ、エリイと心の中で呼びかける。

「オレらがこんな大きな子供の親に見えるってか？　嘘だろ」

「……全く笑えない冗談をありがとう」

我慢、我慢よ、私、と言い聞かせて笑みを浮かべる。

ここがノール港ではなく、相手がただの傭兵ならエリシアは間違はなくぶっ飛んでいただろう。それはもう完膚なきまでに叩きのめしていた。負ける気など皆無だし、勝てる自信は大いにある。

「再チャレンジなのじゃ」

「あ、ちょっと……」

諦めが悪いと言っべきか。エリシアの制止も聞かず、少女は果敢にも正面突破を試みる。

しかし男が抜いた剣を鼻先に突き付けられては彼女も止まるしかない。あう、と短い声を上げて後ずさった。寸での所で止まったからまだ良いが、もし刃が彼女を傷付けたらどうするつもりなのだろうか。

「おいおい。丸腰の子供相手に武器向けんのか」

「ガキにはこれが大人のルールだってことを教えてやるだけだよ」

ユーリが咎めるが、男は悪びれる様子などこれっぽっちもない。いい大人が子供を相手に大人げないにもほどがある。エリシアは呆れたように男を見た。何が大人のルールか。そもそも大人なら、無闇矢鱈に子供を怖がらせることはないし、間違っても武器を向けることもない。

「その前に大人の懐の広さを見せてみなさいよ」

「えいつ！」

懐に何やら手を入れた少女は、取り出した物を石畳に叩き付ける。一瞬で辺りが煙——しかも黄色である、に包まれた。普通の煙幕ではないのか鼻をつくこの臭いは……。煙に包まれた向こうから男たちの、なにしゃがる！ うつぶ……。や、やりやがった……。との悲痛な悲鳴が上がるが因果応報だ。

煙で周囲が見えづらい中、ユーリが走り去ろうとした少女の手を

掴む。

「おいおい、ここまでやっというて逃げる気か？」

「美少女の手を掴むのには、それなりの覚悟が必要なのじゃ」

「じ、自分で美少女って言う貴方も凄いなと思うよ」

何とか声には出したものの、この臭いはちょっと辛すぎる。涙ま
で出て来る始末だ。ユーリが心配して大丈夫か、と声をかけてくれ
たが、全然大丈夫じゃない。クオイの森でニアの実の臭いを嗅いだ
時と同じだ。言葉にするのも難しい。とにかく臭いのだ。

少女は慣れているのか、それとも何かしているのか、平然と動い
ている。

「己の美しさを理解してこそ女の武器というものじゃ。名残惜しい
が別れの時、さらばじゃ」

さりげに凄いを言わなかっただろうか。少女は煙が消える前に
男たちの間を通り過ぎ、館の中へとかけて行った。

エリシアは吸い込んだ煙を入れ替えるようにに何度も呼吸を繰り返す。

その間にも、少女が屋敷に侵入した事には気付いたらしい男の一人
が悪態をつき、彼女を追って姿を消した。

「おい、お前らもさっさと消えるんだな」

「言われなくともそのつもりよ。ユーリ？」

「まったく……やってくれるぜ」

残った一人がエリシアたちを一瞥した。言われずともこの館に用はない。

ユーリは彼女の手をしっかりと掴んでいたはずだが、今彼の手に握られているのは少女を象った人形である。人形と言っても結構しつかりした作りだし、服や帽子まで再現されていた。

「へえ、あの子には私たちの助けは必要なかったかもね」

「かもな。そろそろ戻るか。フレンとエステルの話も終わった頃だろ……」

エリシアたちが助けずとも、彼女は彼女で上手くやったのかもしれない。ならば自分たちがしたことは、お節介だっただろうか。何にしても、今更考えても仕方がない。

結局街を見て回る時間は殆どなかったが、時間を潰すという目的だけは達成出来たと言えるだろう。

これ以上、面倒事に巻き込まれないためにも二人は執政官の屋敷を後にした。

執政官の噂

「用事は済んだのか？ そっちのヒミツのお話も？」

エリシアとユーリが、合流したリタとカロルと共に宿屋の一室を訪れたのは、執政官の館から戻った直ぐ後のことだった。宿屋の主人はフレンの名を告げるとすぐに案内してくれる。

豪華ではないが、きちんと整理された清潔感溢れる部屋の端には白いソファアが置かれてあり、フレンとエステルは向かい合う形で座っている。

「ここまでの事情は聞いた。賞金首になった理由もね。その君もまずは礼を言っておく。彼女を守ってくれてありがとう」

フレンはソファアから立ち上がりユーリとエリシアを見た。

エステルも彼と同じように立ち上がって、あ、わたしからもありがとうございましたと丁寧に頭を下げる。本当に律儀なのだろう。

ユーリはそんな幼なじみを見て苦笑していた。

「なに、魔核泥棒探すついでだよ」

「私もお礼を言われるほどのことでも。困っている人を助けるのに理由はいらないでしょう？」

ユーリがフレンは頭が固いと散々言っていたが、ちゃんと話が分かるではないか。

しかしエリシアの耳は、問題はそっちの方だな、と呟いたフレンの声を聞き逃さなかった。それはユーリも同じらしい。眉をひそめて首を傾げる。

一方、フレンはうって変わって固い表情をしていた。

「どんな事情があれ、公務の妨害、脱獄、不法侵入を帝国の法は認めていない」

「ご、ごめんなさい。全部話してしまいました」

一転して態度を変えたフレンに、エステルは申し訳さそうに頭を下げた。どうやら全ての罪はフレンに筒抜けらしい。エステルの性格で隠すのは難しいだろう。嘘もつけないだろうし。

勿論、エリシアがユーリと同じように賞金首であることも知っているのだろう。でなければ初めに礼を言った時、わざわざこちらを見ないはずだ。

「しかたねえなあ。やったことは本当だし」

「すごく落ち着いてるけど、つまりそれ相応の処罰を受けろってことだと思っけど……」

言いつつもユーリは表情も声音も変わっていない。そんなに冷静でいいのだろうか。どんな理由があれ、罪は罪。だから彼は罪を認め、おとなしく処罰を受けると言いたいのだろう。

エリシアの指摘にフレンも軽く目を伏せて頷いた。

「彼女の言う通りだ。いいね？」

「フレン!？」

どうして、とエステルの声上がる。ユーリとエリシアは自分を助け、ここまで守ってくれたのだ。そんな二人に恩を仇で返すよう

な事はしたくない。

しかし抗議しかけたエステルをユーリは無言で制し、何でもない声で言った。

処罰を受ける前に自分にはいや、自分たちにはまだやるべき事が残っている。

「別に構わねえけど、ちょっと待ってくんない？」

「下町の魔核を取り戻すのが先決とやりたいのだろ？」

分かっている、とばかりにフレンが頷く。なんだかんだ言っても流石は幼なじみ、以心伝心である。その通りだとユーリは不敵に笑って見せた。

その時、数回のノックと共に二人の人物が入って来る。

一人は茶色の髪をした小柄な少年だ。アスピオの魔導士が纏う白のローブを着込み、緑のフレームの眼鏡。背には身の丈以上もある杖を背負っていることから魔導士だろう。

もう一人は生真面目そうな雰囲気を漂わせる女性騎士。

女性にしては短めな赤茶の髪に切れ長の紫の瞳はまるで猫のよう。女性であることから、纏う鎧はフレンより若干金属部分が少なく、腰にさげた鞘には一振りの剣が納められている。

「フレン様、情報が……なぜ、リタがいるんですか！！ あなた、帝国の協力要請を断ったそうじゃないですか？ 帝国直属の魔導士が、義務づけられている仕事を放棄していいんですか？」

少年はフレンに視線を向けようとしたが、壁にもたれ掛かったリタを目にした途端、早口にまくし立てた。エリシアは窺うようにリタを見るが、心当たりはないようだ。リタの知り合いではないら

しい。一方的に知っているだけなのだろうか。

ユーリが誰かと尋ねるが、彼女の顔からするに返事は期待出来ない。そして案の定、リタは少年の顔に全く見覚えがなかった。

「……誰だっけ？」

「忘れたとか？」

「さー？ 悪いけど、全っ然見覚えないわ」

いつそ晴れやかに笑うリタに少年の口元が引き攣った。だって覚えてないのは仕方ないでしょ、っていうかあたしの記憶に残らないくらい存在感が薄いのが悪い。とトドメの一発も忘れない。

これはかなり精神にくる一発だ。覚えてないと言われるのは地味に痛い。

「……ふん、いいですけどね。僕もあなたになんて全然まったく興味ありませんし」

少年は少しだけ眉を潜めると、眼鏡を押し上げる。
負け惜しみのような言葉にも聞こえるが、リタは一向に気にしない。フレンはリタと少年の間に立ち、二人を紹介した。

「紹介する。僕……私の部下のソディアだ。こっちはアスピオの研究所で同行を頼んだウィチル。彼は私の……」

「こいつら……賞金首のっ!!」

ソディアと紹介された彼女は軽く会釈をして一行に視線を向ける。彼女の目がユーリを捉えた瞬間、既に剣に手を掛けていた。

ソディアは即座に剣を抜き放ち、ユーリと隣にいるエリシアに突き付ける。二人に向けられているのは紛れもない殺気だが、ユーリは気にした風でもないし、エリシアだって平気そうにしているではないか。

「剣を抜いたのなら本気でいかなきゃ。即座に敵の武器を弾き飛ばし、反撃を封じる。隙を与えてはならない」

相手を挑発するくらいだ、余裕があるのだろう。

ユーリに似た不敵な笑みを作ったエリシアは銃に手を掛けてはいないものの、その気になれば銃を取ることも、高速詠唱だって出来る。

いくら自分たちが賞金首だとしても、いきなり武器を突き付けられるのは気に入らない。そちらがその気ならこちらも容赦しない。まだ捕まる訳にはいかないのだ。

そしてそれはソディアも同じようである。気に入らないでも思ったのだろうか。剣を持つ手は僅かに怒りで震えていた。

しかし部下をこのまま放って置くフレンではない。ソディアの前に立ちふさがり、じつと彼女を見つめる。

「ソディア！ 待て……！ 彼は私の友人だ。勿論、彼女も」

エリシアが賞金首となったのも、エステルを助けた事が原因である。一応、その前に脱獄はしているが、脱獄だけでは賞金首にはならない。フレンもそれを知っていると考える方が妥当だ。

しかし今、ソディアにそれを説明しても彼女は納得しないだろう。それよりはとユーリと同じように友人と紹介してくれたのだろうか。ユーリとフレンは全く違うように見えてやはり似ている。そう思えば、少しだけ嬉しくなった。

ウィチルは兎も角、ソディアはフレンの説明に納得していないよ

うだ。

「なっ！ 賞金首ですよ！」

「事情は今、確認した。確かに軽い罪は犯したが、手配書を出されたのは濡れ衣だ。後日、帝都に連れ帰り私が申し開きをする。その上で、受けるべき罰は受けてもらう」

フレンの言葉にソディアは渋々と言った様子で剣を納める。

もしかしくなくても、エリシアもザーフィアスまで連行されるのだろうか。この言葉はどちらかと言えば、ソディアではなく、エリシアやユーリに向けられたものなのだろう。

「し……失礼しました。ウィチル、報告を」

「この連続した雨や暴風は、やはり魔導器のせいだと思います。季節柄、荒れやすい時期ですが船を出すたびに悪化するのは説明がつきません」

ソディアに促され、ウィチルが報告を始めた。それを聞きながら思い出したことがある。

先程会った夫婦、ティグルが長い間、天候が悪くて船も出せないと言っていた。

ウィチルの言う通り、季節柄、荒れやすい時期ではあるが、ノール港は比較的穏やかな気候である。エリシアの出身でもあるトルビキア大陸ならいざしらず、この大陸で雨や暴風が続くことはまずない。

「ラゴウ執政官の屋敷内にそれらしき魔導器が運び込まれたとの証言もあります」

ウィチルの報告にソディアが付け加える。

その魔導器が異常気象に関係していないはずはなかった。きな臭くなって来た所の話ではない。全てラゴウが仕組んでいたのだろうか。天候が回復しなければノール港の人々は漁に出れず、当然税金も払えない。

「待つて。魔導器で天候を操るなんて可能なの？ 私はそんな話、聞いたことないリタは？」

魔導器で天候を操るなど聞いたことがない。そもそも、そんな便利なものがあるのなら、砂漠が生まれることなんてないし、水不足に悩まされることもない。有り得ないのだ。

もし発掘されていれば、リインズゲート遺構の門から何か発表でもあるだろう。

遺構の門は発掘を専門に行うギルドで、アスピオの魔導器研究所と共同で魔導器の発掘を一手に引き受けているのだ。

まだ公式に発表されていない事態だつてあり得る。魔導器研究家のリタならあるいは、と思いリタを見るが、表情を見る限り彼女も知らないようだった。

「あたしは……天候を制御できるような魔導器の話なんて聞いたことないわ。そんなもの発掘もされてないし……いえ、下町の水道魔導器に遺跡の盗掘……まさか……」

リタは顎に手を当て、何やら呟き始める。

心辺りでもあるのだろうか。下町から盗まれた水道魔導器の魔核に遺跡の盗掘、全ては繋がっているのかもしれない。考えてはみたものの、さっぱり分からない。

「執政官様が魔導器使つて、天候を自由にしてるってわけか」

「街の人にしてみれば迷惑な話ね。聞いた所、そのラゴウって人、随分評判が悪いみたいだし。ほぼ間違いない。でも決定的な証拠がなければ貴方たちは動けない」

呆れたようなユーリにエリシアも同意する。ほぼ間違い無いだろうが、ここで問題が一つ。

ラゴウ執政官は貴族、つまりは評議会の人間だ。皇帝が空位の今、帝国は二つの組織によって支えられている。一つはフレンたちの所属する騎士団、そしてもう一つが貴族によって纏められる評議会だ。平民でもなれる騎士とは違い、評議会は貴族でなければ所属することが出来ない。

そうなれば当然、二つの組織には溝が出来るだろう。皇帝がいなと言うことは、どちらかが帝国の実権を握ると言うことである。それがまた両者の溝を深めていると言っても過言ではなかった。

「……ええ、ラゴウは悪天候を理由に港を封鎖し出航する船があれば法令違反で攻撃を受けたとか」

「それじゃ、トリム港に渡れねえな……」

「で、そんな大事な話、部外者の私たちに話していいの？」

一通りの話を聞いたエリシアは視線をフレンに向けた。

つまり雨を、と言うよりその天候を操る魔導器をどうにかしなければ、トリム港には渡れない。それはそうとして、そんな大事な話を一般人に聞かせていいものか。

敵対しているとは言え、ラゴウとて帝国の人間だろう。貴族であるエステルや、魔導器研究者のリタは別として、自分やユーリは全くもって関係ないのだから。

もつともな問いにフレンは頷く。

「確かに君たちは民間人だ。だが信頼しているからね。それに執政官の悪い噂はそれだけではない。リブガ口という魔物を野に放って税金を払えない住人たちと戦わせて遊んでいるんだ。リブガ口を捕まえてくれれば、税金を免除すると言ってるね」

エステルが口を抑えてひどい、と呟いた。

魔物を目にするかもしれない人々がいきなり魔物を捕まえるなんて土台無理な話だ。そもそも捕まえるというのは殺すよりも難しい。ラゴウは初めから無理だと分かっているにやらせているのだ。

「……最低、外道よ。人は玩具なんかじゃないのに」

出来ることなら一発殴ってやりたいくらいだ。何が貴族だ。何が執政官だ。先程の夫婦の怪我也その魔物を捕まえるために負ったものなのだろう。下手をすれば死んでいたかもしれないのに。

「入り口で会った夫婦の怪我って、そういうからくりなんだ。やりたい放題ね」

「そういえば、子供が……」

夫婦のことを思い出すと同時に、彼らの会話も。子供がどうかしたと言っていないかっただろうか。

言いかけたカロルにフレンが首を傾げる。

「子供がどうかしたのかい？」

「なんでもねえよ。色々ありすぎて疲れたし、オレらこのまま宿屋

で休ませてもらうわ」

カロルが言う前に、背を向けたユーリが遮った。

そう、フレンは前だけを見ていればいいのだ。余計な事は全て自分に任せて置けば。そのための自分だ。フレンが光ならユーリは影でいい。

そのまま余計な事を口走らないようにカロルを伴って部屋を出る。リタも二人に続き、エリシアも僅かに考えた後、直ぐに後に続いた。

「それと……例の『探し物』の件ですが……」

皆と同じように背を向け、歩き出そうとしたエステルに耳にソデイアの声が入って来る。小声であつたために聞き取れなかったが、探し物と言つたのは確かだ。

探し物とは何だろう。エステルの頭の中で何か引つ掛かったが、それ以上は聞こえない。深く考えること無く、直ぐに諦めて部屋を出た。

穏便な方法とは

雨脚は僅かにマシにはなったものの、まだ雨は降り続けている。中々止まない異常とも言える雨も魔導器が起こしているとなれば納得出来た。

しかし宿屋を出たのはいいが、港が閉鎖されている事を考えるとエリシアたちが出来ることは少ない。全てはどう動くかにかかってくると言えるだろう。

一向に止む気配がない雨を見せられては、気分まで憂鬱になってくるというもの。エリシアと同じように空を見上げたカロールが誰にともなく尋ねた。

「これからどうする？」

「わたし、ラゴウ執政官に会いに行ってきます」

フレンが無理でも、自分なら何とかなるかもしれない。そう思ったエステルは、今にも駆け出しそうな勢いで言う。

いくら執政官と言えども“エステル”の存在は無視できないはず。そう考えたからだ。

「え？　ボクらなんか行っても門前払いだよ。いくらエステルが貴族の人でも無駄だって」

「とは言っても、港が封鎖されてちゃトリム港に渡れねえしな。デッキリってこそ泥も、隻眼の大男も海の向こうにいやがんだ」

カロールが驚いたような顔をするが、今出来ることがそれしかないのだ。

ユーリの言う通り、港が封鎖されていてはノール港から動けない。隣の大陸、トリム港に渡る事が出来なかった。

魔核泥棒であるデデツキは勿論、隻眼の大男が誰であるのか、エリシアは確かめなければならぬ。

もし男がエリシアの想像通りの人物なら、この一件の裏には大きなものが隠れているかもしれないのだ。場合によっては父に連絡を取る事態もありうる。

「うだうだ考えてないで、行けばいいじゃない」

「今はそれしか選択肢はないみたいだしね」

何にしても今は情報が欲しい。隻眼の大男のこともラゴウの目的も。

闇雲に動く事は危険だが、今は正に手詰まり状態。このまま手をこまねいている訳にもいかなかった。多少の危険を覚悟して動かなければ。

「話の分かる相手じゃねえなら別の方法を考えればいいんだしな」

「ちょっと物騒だけど仕方ないわよ。大方、話の分かる相手じゃないと思うけど」

ユーリの言う別の方法が十中八九、穩便ではないことくらい付き合い合いの浅いエリシアでも分かる。どうせ話の分かるような人物ではないのだ。

ここの人々を散々な目に合わせて来たのだから、それくらいは許容範囲内だろう。

「では、ラゴウ執政官の屋敷に向かいましょう」

「ねえ、何なら話が分かる相手が賭ける？ あ、ボクは分からないに10000ガルドね」

雨の中、歩き出したカロルが胸を張って提案する。

ユーリからは分からない方に10000ガルドな、との答えが返って来た。

「私も分からないに10000ガルド」

「……あたしも」

「もお。それじゃあ賭けにならないじゃん！」

エリシアとリタも分からない方に賭けると、カロルが不満気に頬を膨らませた。そんな事言われても、今までの話を聞いて、話が分かる人物だと思う方がおかしいのではないだろうか。

「話せばきつと分かってくれます！」

「……前言撤回。ここに一名いたか」

空気を読まず、と言うかいつそ清々しいまでに力説するエステルに、ユーリとエリシアは思わず頭を抱えなくなった。

一行は宿屋を出ると、ラゴウ執政官の屋敷を目指す。

屋敷の前には先程も見た傭兵二人が佇んでいる。こちらにやって来るエリシアたちを目にした傭兵は、あからさまに訝しげな顔をした。

「なんだ、貴様ら」

「ラゴウ執政官に会わせて頂きたいんですが」

エステルはそんな傭兵の態度には気付かず、丁寧にお辞儀をする。勿論、ただお願いしただけで会わせて貰えるとは思えないのだが。カロルはそんな傭兵を見て、不安気にユーリを見た。

「ユーリ、この人たち、傭兵だよ。どこのギルドだろう……」

「道理でガラが悪いわけだ」

「ブラッドアライアンス紅の絆傭兵団でしょ。でも傭兵が皆が皆、ガラが悪い訳じゃないから」

紅の絆傭兵団は五大ギルドの一つに数えられると言うのに、信義に反する行いが多い。おまけにギルドに所属している傭兵のガラも悪かった。

父が率いる獅子の咆哮も護衛はするが、こんな奴らと一緒にされ
レオンハルトては、皆がかわいそうではないか。奮然とした様子で語るエリシアに、事情を知らないユーリとカロルは首を傾げるしかない。彼女はどうして怒っているのだろう、と。

「エリイ？ どうしたの？」

「別に何でもないから！」

「何でもなくねえだろ」

不思議そうな顔をする仲間たちに何でもないと首を振る。

ユーリたちがギルドに対していい印象を抱いていないのは仕方が

ない。確かにギルドの中でもガラの悪いギルドや評判のよくないギルドだってある。

だがそれと同じ、いやそれ以上に良いギルドだってあるのだ。ユーリに怒っている訳ではない。ただ、道理でガラが悪い、と言われたのは正直悲しかった。

「ふん、帰れ、帰れ！ 執政官殿はお忙しいんだよ」

「街の連中痛めつけるのにか？」

案の定、簡単に通してくれるはずがなかった。傭兵はさも面倒くさそうと言った顔で一行を追い払おうとする。ユーリは挑発するように傭兵を見た。

何が忙しいのだろう。散々人で遊んでおいて。

「そうよ。そんなくだらない事をするのが執政官の仕事じゃないでしょう？」

「おい、貴様ら、口には気をつけろよ」

傭兵たちは武器こそ抜かなかったものの、言葉には僅かな殺気が込められている。望むところよ、と乗ってもいいのだが、騒ぎを起こす訳にはいかない。

二人共、見た所、たいした実力ではないだろうが。

「だから、相手にされないって言ったじゃないか。大事になる前に退散しようよ」

カロルが不満そうに唇を尖らせる。もつとも、この中で話を聞いてくれると思っていたのはエステル一人だろうが。決定的な動きこ

そないものの、正に一触即発と言った雰囲気である。

ユーリもここはカロール先生に賛成だな、と返す。ここで騒ぎを起こしても意味が無い。

「でも、他に方法が……」

「エステル、今は行こう。ここにいっても出来ることはないから」

どうにかエステルを宥めに掛かる。

方法ならまた考えればいい。ここに居座って揉め事を起こした方がまずい。

自分たちだけでなく、フレンにまで迷惑がかかるだろう。エステルは最後まで渋っていたが、皆が引き返す中、遂に諦めて後に続いた。

執政官の館から少し離れた場所で行は思案していた。分かってはいたが、やはりそう簡単にはいかないらしい。

「正面からの正攻法は騎士様に任せるしかないな」

とユーリ。所詮、一般人である自分たちに出来ることは限られている。

強硬突破は可能だが、少なくとも波風は立てたくないのが本音だ。自分たちは騎士では無いのだから。

では他にどんな方法があるだろう。

「それが上手くいかないから、あのフレンってのが困ってるんじゃないの？」

「まあな。となると、献上品でも持って参上するしかないか」

丁度、街についた時に役人が言っていたではないか。ユーリの顔が不敵な笑みへと変わる。

こんな時のユーリは何か悪知恵が働くらしい。本人に言えば怒られそうなので、エリシアは言葉を呑み込んだ。

執政官なんて偉そうな人間への貢ぎ物なら当然、それなりの物でなければならぬだろう。

「献上品ってまさか……リブガロ？」

「そつ、価値あんだろ？」

な、と笑うユーリはどうやら本気らしい。

言われてみれば、角を持ってくれば一生分の税金を納められると
か言っていた気がする。一番手っ取り早くて、尚且つ波風を立てない
穏便な方法だろう。

「あ、なるほど。一生分の価値になるなら、もしかして……」

「まあ、そんだけ高価なもんなら面ぐらい拝ませてくれるだろ」

天候を操る魔導器のことなどは、角を渡す時に調べればいい。我ながら良い考えだとユーリは思う。いくら忙しくても、角さえ手に入ればラゴウは姿を見せるに違いない。

するとそれまで黙って話を聞いていたリタが口を挟んだ。

「リブガロってのを捕まえるつもり？」

「だったら今がチャンスだよ！ 雨降ってるし」

チャンスだよ、と元気に声を出したのはカロールである。まるで水

を得た魚のように生き生きしている。

でも、そのリブガ口と雨に何の関係があるのか。

彼の言葉の意味を測りかねているのは何もエリシアだけではない。
エステルやリタ、ユーリもだ。

「雨がどうかしたんです?」

「リブガ口は雨が降ると出てくるんだよ。天気が変わった時にしか活動しない魔物つてのが、時たまいるんだよね」

それならエリシアも聞いたことがある。リブガ口については知らないが、小耳に挟んだことがあった。

身体構造が関係しているのか何なのか、雨や曇りの日にしか姿を見せない魔物がいるらしい。とは言え、魔物の生態にはまだ謎が多いため、詳しくは分かっていないらしいが。

得意げに教えてくれたまではよかったが、肝心な所が抜けている。ユーリもエリシア同様、それに気づいたようだ。

「よく知ってるな、カロール先生。それで?」

「……それでつて? それだけだよ?」

カロールは本当に不思議そうな顔をしている。

傍らのリタが深いため息をついた。ため息をつきなくなる気持ちも分かるというもの。呆れ顔でリタが口を開く。

「場所が分からないと捕まえられないじゃない。どこにいるの?」

「さ、さあ……」

カロルはユーリやエリシアから瞳を逸らし、視線を宙にさまよわせるだけ。

エリシアも少しだけ後悔していた。こんな事になるなら、もっと真面目に魔物について勉強すれば良かった。魔導器同様、多少の知識ならあるが、特殊な魔物は専門外だ。

「じゃあ、街の人に話を聞きましょう」

「聞きましょうって、いいのかよ、エステル」

名案です、と楽しみに言ったのは緑の瞳を輝かせるエステルだ。邪険されても全く意に介していない様は流石というべきか。

自分が口にした言葉の意味を分かっている彼女は、はい？ とこてんと小首を傾げる。

今のノール港では執政官が正義だ。いくらエステルが貴族と言えど、ラゴウに逆らって無事でいられるのか。

「下手すりゃ、こっちが犯罪者にされんだぞ。この街のルール作ってんのは帝国の執政官様だ。そいつに逆らおうってんだからな」

「私とユーリはもう犯罪者だけどね」

ね、と笑いながらユーリを見ると、それは言うなって、と軽口が返ってくるが、本当のことだ。エリシアやユーリは既に賞金首だ。手配書が出回っている時点で犯罪者なのなら、今更執政官に逆らったってなんてことはない。

それにあんな場面、を見せられたのに引き下がる訳がなかった。一発どころか何発も殴りたい気分である。

「……わたしも行きます」

「いいんだな」

「はい」

顔を上げたエステルはもう、晴れやかな顔をしていた。

この中で一番辛いのは間違いなくエステルだろう。自分と同じ貴族が街の人々を虐げ、我が物顔で街を仕切っているのだ。優しい彼女はきつと心を痛めているに違いない。

「リタもいいんだよね？」

「天候操れる魔導器っていうのすごい気になるしね」

ユーリが尋ねると、彼女は思いの外けろりとしていた。リタにとってラゴウなど、天候を操る魔導器に比べれば、どうでもいいのだろう。

天候を操るとなれば、当然仰々しいものになる。魔導器研究者である彼女には興味深いものだろう。先程のエステル同様、瞳を輝かせるリタは既に魔導士としての顔だ。

「決まりですね！」

「じゃあ、まずリブガ口を探すのでしょうか」

「おー！」

すべき事が決まったら後は行動あるのみ。まずは街の人々からリブガ口の場所を聞いてからだ。

気合い十分に街中に下りて行く一行に、取り残された、と言うか

雰囲気に乗れなかったカロールがぐりと肩を落とした。

「ボクは聞いてもくれないんだね……」

「そりゃあ、リブガロの場所は知らなかったけど、雨の日に姿を見せるって分かっただけでもお手柄だよ。そう思わない、ラピード？」

同意を求めるように足元のラピードを見れば、彼はカロールを一瞥した。顔を逸らされ、大きい息を吐かれる始末である。これは完全に馬鹿にされている。カロールが確信した瞬間、エリシアの声に走り出すラピード。

カロールは置いていかれないよう、慌ててラピードの後を追った。

「なに、今、ボク馬鹿にされた！？ わー、待ってよみんな！！」

真っ直ぐな彼

大所帯で聞き込みをするのも何なので、二人一組に別れることになった。ユーリとエリシア、リタとエステル、カロルとラピードである。それぞれ、リタがエステルのストッパー役でラピードがカロルのお目付け役とも言えるだろう。

街の人々から話を聞いた結果、リブガロの住処と思われる所は一カ所しかなかった。街の南に位置する高台である。

何でもリブガロは子を宿しているため、普段より凶暴になっているらしい。

兎に角、行ってみなければ始まらない。合流した一行が街を出ようとしたその時、入り口近くからフレンと少年魔導士ウィチルが歩いて来る。

明らかに出掛ける様のユーリを見てフレンは苦笑した。

「相変わらず、じつとしてるのは苦手みたいだな」

「人をガキみたいに言うな」

心外だとユーリが首を竦める。それだけで、二人が互いをどれだけ“信頼”しているかが窺い知れた。短い付き合いのエリシアでも、だ。

ユーリを見つめていたフレンが、一転して真剣な顔に変わる。

「ユーリ、無茶はもう……」

「オレは生まれてこのかた、無茶なんてしたことないぜ。今も魔核泥棒を追ってるだけだ」

言いかけたフレンをユーリが遮った。あくまで自分の目的は魔核泥棒だと。

ユーリは分かっているはず。どれだけ自分が無茶をしているか。でも彼は知っていて無茶をするのだ。自分が守ると決めたもののために。普段は斜めに構えているため分かりづらいが、その思いはすごく真っ直ぐで曇りがない。

ユーリとフレンの会話には、とても第三者であるエリシアが口を挟める雰囲気ではなかった。

「ユーリ……」

「お前こそ、無理はほどほどにな」

ユーリは咎めるように名を呼ぶフレンにも、話すことはないと言うように背を向けて歩き出す。リタやカロル、ラピードがそれに続く中、エステルとエリシアだけがその場に佇んでいた。

フレンは控えていたウィチルの方を振りむいて指示を出している。ウィチル、魔導器研究所の強制捜査権限が使えないか確認を取っておいてくれ、と。

フレンの言葉を聞いたウィチルは無言で頷き、駆けて行く。き真面目な騎士は、幼なじみの後ろ姿を見つめると呆れるように呟いた。

「まったく、帝都を出て少しは変わったかと思えば……これでは無茶の規模が膨れあがっただけだ。ユーリは守るべきもののためならとても真っ直ぐなんですよ。そのために自分が傷付くことを厭わない。それが羨ましくもあり、そのための無茶が不安でもあるんだがね」

それを本人の前で言おうなら、お前にだけは言われたくない、と

威勢よく返ってくるだろうが。

フレンが語ったことはエリシアと同じだった。ユーリは自分が守ると決めたものに対して真摯だ。エステルの事にしても、巻き込まれる形になったエリシアに対しても。

どんなに傷付こうともユーリは己の思いを曲げない。

苦しくても、痛くてもそれを他人に見せようとしないのだ。気付かせようもしない。

見ていて辛かった。『エリシア』はそんなに頼りないのだろうか。何もユーリだけが背負う必要はない。エリシアだって、こうなったのは自分で選んだからなのに。

「……君がエリシアだね？」

「え……、あ、はい」

「そんなに畏まらなくていいよ」

柔らかく笑うフレンに、エリシアは更に恥ずかしくなった。一人で何を焦っているのだろう。

自分が“エリシア”だと分かったのはやはり、あの下手くそな似顔絵からだ。性別すら判別が付かないが、ユーリと一緒にいる人間で、手配書に書かれた特徴に当て嵌まるのはエリシアだけだ。分かっただけかもしれない。

「どうかユーリを……エステル様のことを頼むよ。ユーリはあ言って無茶するだろうし、エステル様もきっと同じだ。君に頼むのも、何だかおかしい感じだけだね」

「私が言えた義理でもないけど任せて。でも、いいの？ 私もフレンの言う犯罪者だよ？」

エリシアもユーリと同じ賞金首だ。そんな自分に頼むのも、変な話かもしれない。

ユーリがフレンを気にかけているように、彼も彼なりにユーリを心配しているのだ。ばつが悪そうに、あるいは言いづらそうに苦笑する彼女を見て、フレンは小さく笑った。

「さっきも言ったと思うけど、君が賞金首になりたいわれはエステル・ゼ様から聞いた。心配しなくていい。感謝こそすれ、責めるつもりはないよ」

独房に入れられた経緯も、子供を助けたためだと聞いたし、脱獄する気もなかったと。城の中で騎士に追われていたエステルを助けたことも全て。

今まで彼女を守ってくれたことに感謝こそすれ、罰するつもりは毛頭ない。ただ手配書の方はフレンの一存ではどうにもならないのだ。フレンは一騎士でしかない。手配書を撤回する命など出せなかった。

「そっか、なら安心した。でも出来ればユーリを許してあげて。ユーリは分かっでて、全部一人で背負ってきたから」

幼なじみであるフレンには、言わずとも分かっているのだろう。自分などよりずっと長い付き合いなのだから。

しかし言わずにはいられなかった。気付いてあげられなかったことが悔しくて、支えになれない自分が情けない。フレンなら、ユーリの無茶に気づいて、それを諫めることが出来たかもしれない。彼一人に重荷を背負わせることだって。

「……君は優しいんだね。ユーリに代わって礼を言うよ。ありがとう

う」

ありがとう、とにこやかに微笑むフレンにどう答えていいか困ってしまう。改めて礼を言われることなんてないし、何より気恥ずかしい。

すると二人を待っていたカロールからおーいと声上がる。

「エリイ、エステル、もう行こう。ユーリに置いていかれるよ」

「ええ、わたしたちもこれで」

「ありがとう、フレン」

エリシアはフレンに礼を言ってカロールの後に続く。エステルも同じように歩き出そうとするが、フレンが彼女を呼び止めた。

エリシアも知っていながら立ち止まることはない。前だけを見て歩く。

二人には二人の話がある。事情を知らない自分が立ち聞きする訳にもいかないだろう。

「……その、どうですか？ 外を、自由に歩くと言うのは？」

呼び止めたままではいいものの、フレンは聞きあぐねていた。

一瞬、悩んだ上、怖ず怖ずと切り出したのは“外”について。エステルはしばらく考えた後、自分の考えを纏めるようにこう言った。

「全部をよかったというのは、難しいことですけど……わたしにもなすべきことがあるのだと分かり、それがうれしくて、楽しいです」

城にいた頃は自分に価値を見出せなかった。鳥籠の世界から外に

飛び出した事をよかつたと言で済ませてしまふことは出来ない。

だが今の“エステル”にはなすべきことがある。大切な仲間と呼べる人たちもいる。

今もまだ自分がやりたい事は分からないけれど、今は毎日がとても充実しているとエステルは胸を張って言えるだろう。全ては仲間たちのお陰だ。

「そうですか。それはよかつた……」

淀みなく答えた彼女にフレンは顔を綻ばせた。

城から出ることにすら出来なかった彼女が、外の世界を目にするこ
とが出来た。それにエステルにも良い影響を与えているようだ。

本来なら心配するところだが、彼女の側には心強い幼なじみと親
身になってくれる少女がいるのだ。

「フレンと何話してたんだ？」

先頭を歩いていたユーリが前を向いたまま、エリシアに聞いた。

高台へ向かう道中である。

何だかんだ言っても、やはり気になっていたのだろう。エリシア
は周囲を見回しながら何気なく答えた。

「ユーリのこととか、エステルのことかな？ フレンから二人のこと
と任せちゃった。やっぱり持つべきものは友だちね。フレン、ユ
ーリのこと凄く心配してたし」

その瞬間、ユーリからはあ、あのフレンが？ と返ってくる。

フレンもユーリも意地っ張りと言うかお互い、あまり弱い部分を見せようとはしないのだろう。幼なじみであり、友人であるなら当たり前かもしれないが。

流石は友人、似た者同士である。正直、他人を任せられるほどではないが、任されたからにはやるしかない。

「ユーリもエステルも危なっかしいんだって」

エステルは他人を助けるためなら平気で無茶するし、一見ストッパー役に見えるユーリも同じだ。

ユーリからエリィには言われたくねえけど、と言われたかと思うと後ろを歩いていたエステルからは危なっかしくないです！ と返って来た。

「あれ、そう言えば雨、止んだみたいだけど、天候を操る魔導器はノール港周辺に雨降らせてるのかな？」

後カロルが疑問の声を上げた。歩き始めてしばらくすると、今まで雨が降っていたとは思えないほど、空は青く澄み渡っている。雨の気配など皆無である。ノール港付近だけが分厚い雨雲に覆われているのだ。

ならばやはり、魔導器はノール港周辺だけに雨を降らせているのだろう。

「実際、見てみないと分かんないけど、規模から考えるとまず間違いないわね」

カロルの問いに答えたのは専門家のリタ。

“天候”を操る魔導器など存在しない。恐らく、寄せ集めの魔核

で作っているのだろうが、あまりに危険過ぎる。ろくな知識を持たないものが使っている代物ではないのだ。

ただでさえ、寄せ集めの魔導器である。重大な事故を起こさないと限らない。

「でも大丈夫なのですか？ リブガロは雨の日しか現れないと……」

「多分大丈夫じゃない。高台の辺りに雨雲が集まってるから、直ぐに降り出すと思うけど」

エリシアが指差す先、木々が生い茂る高台の上空は灰色の雲が覆っている。近い内に雨が降り出すだろう。

癒しの光

エリシアの言う通り、高台に辿り着く頃にはぼつぼつと雨が降り始めていた。しばらく休憩したからまだ良かったものの、雨に打たれ続けては流石に風邪を引いてしまう。雨は容赦なく体温を奪って行くのだから。

そう考えれば、ノール港の入り口で出会った夫婦、夫のティグルはユーリが止めて正解だ。体力が落ちている上にあの傷では、本当に死ぬところである。

「あの、カロール。リブガ口ってどんな魔物なんですか？」

鬱蒼を茂る森を歩きながら、エステルが聞いた。ちなみに先頭が剣を扱うユーリとカロール、真ん中に治癒術の使い手のエステルと魔導士であるリタ、しんがりが鼻が利くラピードと背後からの強襲にも対応しやすい銃使いのエリシアである。

「えつと動物に例えるなら馬に似てるらしいよ。黄金の鬣^{たてがみ}と角、体毛は金だったと思う」

流石はカロール先生。伊達に魔狩りの剣の一員ではない。

しかし雨が続いているためか、地面がかなりぬかるんでいる。足を取られれば危険だし、何より問題は足だ。黒いブーツのユーリと素足のラピードはまだいいが、エリシアとエステルのブーツは白である。

泥まみれになった上に気持ち悪い。念入りに洗おうと決意して、エリシアは前を向いた。

すると、前を歩いていたエステルからきゃ、と短い悲鳴が上がる。案の定、泥に足を取られて滑らせたらしい。危うく倒れそうにな

ったエステルを慌てて受け止めた。流石に彼女の体重を支えきれずに一緒に倒れるという失態は、いくら何でもおかさない。

「大丈夫？」

「はい、ありがとうございます」

エステルの後ろにいたのがまだエリシアでよかったくらいだ。カロールやリタなら、彼女を支えきれずに一緒に倒れていただろう。気を取りなおして前に進む。それからどれくらい歩いただろう。先頭を歩いていたユーリが何かを見つけた。

「おい、カロール先生、あれがそのリブガロじゃねえか？」

「さっき聞いた特徴には一致するわね。多分、そうなんじゃない？」

ユーリが指差したのは少し先、余計な木々がない開けた場所だ。そこにうずくまるようにして座っているのは、金色の体毛に立派な黄金の鬘、頭に角を持つ馬に似た生物。

リタの言うように先程、カロールが言っていたリブガロの特徴、全てが一致している。

「間違いないよ！ リブガロだ！」

幸い周辺に他の魔物の気配はない。目の前にいるのはリブガロ一体だけだ。

しかし遠くからでは分からなかったものの、近くまでくればリブガロの様子がおかしいことに一行は気付く。

「何だか様子がおかしいよ」

「……怪我してる？」

リブガロが座り込んだ地面には血溜まりが出来ており、切り傷が多数。どれも深い傷ではないが、放って置けば危険だ。遠からず命を落とすだろう。

一行に気付いたリブガロが警戒心を露にし、立ち上がろうと脚に力を入れるが、立ち上がれない。

エリシアは思わずリブガロに近寄った。攻撃してはこないものの（あるいは攻撃するだけの力がないのかもしれない）、人間であるエリシアを警戒して唸り声を上げる。

「酷い傷……街の人に付けられたんだ。大丈夫、私たちは敵じゃない。大人しくして」

リブガロの傷は全て刃物による裂傷だ。リブガロを連れて来れば税金を免除すると言う言葉につられた街の人間に追い回されたのだろう。

安心させるように言うと、今まで低い唸り声を上げていた魔物が静かになった。リブガロの瞳は試すようにエリシアを見つめている。リブガロは人を見かければ見境なく襲ってくる魔物ではない。

「どうすんの？ 戦う？ それとも……」

腕を組んだままのリタがユーリとエステルを見た。ユーリは相変わらずのポーカークフェイスでエステルは眉を潜め、戦いたくないといった感じだろうか。

すると何を思ったのか、ユーリが無言でリブガロに近寄る。

訝しげに名前を呼ぶエリシアには答えず、ユーリは鞘から抜いた剣をリブガロに向けて振り上げた。エステルが最悪の事態を予想し

て目をつむる。

しかし聞こえて来たのは剣が肉を裂く音ではない。何かが地面に落ちる鈍い音。

「手土産ならこれでいいだろ？」

ユーリの手にはリブガロの黄金の角が握られている。確かに役人の一人がリブガロの角は価値があると言っていた。

それにしてもハラハラさせないで欲しい。エリシアでさえ一瞬、ユーリがリブガロを斬るかと思ったのだ。

「……でも、いいの？ 魔物だよ」

「私はこの子より、ラゴウの方がよっぽど許せない。魔物だからって全てを否定するなんて私はしたくないの。こんなに怯えてるのに……怖がらせてごめんね」

カロルは正しい。それが魔物に対する正しい見解なのだろう。

では魔物とは何なのだろう。人間に害をなす存在？ ならば人が善で魔物は全て悪だと言うのか。カロルに言っただうにかなる事でもないと分かっていたが、思わず口にしてしまったのだ。

それにリブガロは人を脅かす魔物ではない。人が自ら関わらなければ森の中でひっそりと暮らしていたのだろう。

リブガロは酷く怯えている。街の人々に追い回されたのだから、自分達に敵意を剥き出しにするのも当たり前だ。

「まあ、そうだな」

「わたしも……そう思います」

エリシアの言葉にユーリが同意し、エステルも頷いた。既に手土産を得るという目的は果たしたのだから、傷ついている魔物を倒そうとは思わない。

向こうから襲い掛かれたのなら仕方はないが、リブガロからはもう敵意を感じないのだ。リタやカロールもそれならば、と納得してくれたようだ。

「いいんじゃない」

「みんなが良いならボクも異論はないよ」

エリシアはリブガロを落ち着かせるように鬣を撫でると、精神を集中させる。

リブガロの傷は体全体に及んでおり、ファーストエイドでは少々心もとない。彼女の足元にファーストエイドよりも複雑な魔法陣が浮かび上がった。

「燦然たる癒しの光を。ヒール」

花卉に似た温かな光がリブガロを包み込んだかと思うと足や顔、体に付いた傷を塞いでいった。失った血までは戻せないが、これで命を落とす事はまずないだろう。

リブガロはゆっくりと立ち上がり、塗れた体を乾かすために身震いさせた。

これからは気をつけてね、と声を掛けると、言葉を理解したのかどうかは分からないが、リブガロは何度もこちらを振り返りながら、森の奥に消えて行った。もう人里近くに現れることはないだろう。

「……俺達も行くか」

「……ありがとう」

魔物は倒すべき敵なのに、みんなはエリシアの思いを分かってくれた。魔狩りの剣の一員であるカロルもだ。礼を言うエリシアにエステルは静かに首を振った。

「お礼を言われることじゃありません。わたしもエリイと同じ思いですから」

「そうそう。取り合えずノール港に戻ったらまず体を暖めないかね。これじゃ凍えちゃうよ」

自分で自分を抱きしめるようにカロルは肩を抱いた。ただでさえ森の中であるし、雨が降ったことで周囲の気温が下がっているのだ。雨に濡れた体は冷たく、風邪を引いてしまいそう。

「ちゃっっちゃつと戻るわよ。こんな木しかない場所に長居する理由ないし」

「確かに。これ以上、雨に濡れると風邪引いちゃいそうだしね」

言ったそばからカロルが盛大なくしゃみをする。

リタがちよつ、汚っ！ 飛ばさないでよ、と容赦なくカロルの頭を叩く。それを見たラピードが呆れるようにくうんと鳴いた。

「べくしゅ！　べつくしゅん！！」

「だから飛ばさないでって言ってるでしょ！」

盛大なくしゃみと共に一筋、カロルの鼻から鼻水が垂れた。ノール港に戻った一行は宿屋に直行した。窓の外を見れば、雨は未だ止むことなく降り続けている。

頭にタオルを乗せたまま言うリタも随分寒そうだ。

次の瞬間、扉が開いたかと思いきや、トレイを持ったエリシアが入ってくる。

「お待ちせー。ホットミルク貰って来たよ」

ユーリやラピードは平気そうだったが、エステルにリタ、カロルの三人はかなり体が冷えているようだったので、気を利かせてホットミルクを貰って来たのだ。

カロルやエステルにも飲みやすいように蜂蜜も入れてある。ちなみにラピードにも人肌程度に温めたミルクを用意してあった。

「ありがと、エリイ……」

「カロル、鼻垂れてるよ」

そばにあったティッシュの箱を手渡すと、カロルは思い切り鼻をかんだ。

あー、すっきりした、と晴れやかな顔をしているとまたリタに頭を叩かれたらしい。つくづく不幸な少年である。

「はい、カロールとエステルは蜂蜜多めに入れてあるから」

トレイに乗せていたマグカップをそれぞれに手渡す。

宿屋の人がわざわざ用意してくれたマグカップは柄も多彩だ。カロールはクマでエステルが花、リタがボーダー柄でエリシアは月、ユーリはシンプルな黒である。

「一休みしたらラゴウの屋敷に突入？」

「だな。これ持っていれば門前払いつてことはねえだろ」

ユーリが取り出したのはリブガロから手に入れた黄金の角。一生分の税金の価値があるかどうかは分からないが、光を弾いてキラキラと輝く角は確かに美しい。

だが、元はと言えば、街の人々もリブガロもラゴウに振り回されたと陰で酷い目にあつたのだ。いい迷惑である。

「そのラゴウの面つてのは是非、おがんでみたいわね。どうせ口くね顔じゃないだろうけど。魔導器をあんな事に使うなんて絶対に許さない」

右手にマグカップを持ったりリタは、空いている左手をきつく握りしめた。魔導器はただの道具ではないのに。魔導器だけではない。人もリブガロも。

「私だって。面白半分に街の皆やリブガロを傷付けて何様のつもりなの？」

誰もラゴウに逆らえないというのなら、自分が言ってやる。エリシアの気持ちはリブガロを目にしたことで更に高まっていた。

ラゴウは神でも何でもなし。ただの人間だ。どう繕っても命を弄ぶ権利なんてありはしない。

ホットミルクで体を温めた一行は早速、ラゴウの屋敷に向かうべく宿屋を出た。

するとその時、知った声が耳に入ってくる。反射的にそちらを見れば、そこにはあの夫婦の姿があった。

妻——ケラスが出て行こうとする夫、ティグルを止めようとするが夫は全く意に介さない。しかも手には剣まで握られているではないか。

見兼ねたユーリがティグルの前に出る。

「そんな物騒なもの持ってどこに行こうってんだ？」

「あなた方には関係ない。好奇心で首を突っ込まれては迷惑だ」

ユーリは答えず、無言で取り出したものを彼の前に投げた。瞬時にティグルの目の色が変わる。何故ならそれは彼等が探し求めているものだからだ。

金色の角。リブガ口の角である。

「こ、これは……っ!？」

「あんたの活躍の場奪って悪かったな。それは、お詫びだ」

ユーリはティグルの返事も聞かず、彼に背を向けて歩き出す。ティグルと彼に追いついたケラスは、突然の事態に戸惑いながら

も地面に座り込み、ありがとうございますと頭を下げる。

ユーリの行動に驚きながらも、エリシアたちは、宿屋の前に戻って来た。

「ちょ、ちよつと！ あげちゃってもいいの？」

「あれでガキが助かるなら安いもんだろ」

何考えてんの、と慌てるカロールに対して、あくまでもユーリは軽い。そんな二人が面白くて、エリシアとエステルは顔を見合わせて笑った。

エステルもユーリを見ながら、最初からこうするつもりだったんですね、と小さく笑う。

だからユーリはわざわざリブガロの元に行ったのだ。ただ屋敷に入るだけなら、手段を選ばなければ他の方法だってある。あえてリブガロを探す必要はなかった。

しかし、それならそれで、一言くらい相談してくれても良かったのではないか。

「教えてくれたって良かったのに」

「思いつき思いつき」

「その思いつきで献上品がなくなっちゃったわよ。どうすんの」

エステルの指摘にもユーリは、思いつきと答えるだけで認めようとしなかった。

あー、呆れたとリタが腕を組んでユーリを睨む。これでリブガロの角を献上品に、ラゴウに会うと言う事は出来なくなった。つまり、何か別の手を考えなければならぬ。

何か考えているんでしょうね、とりたの無言の圧力に、エリシアも苦笑するしかなかった。素直じゃないのは彼女も同じだ。

「ま、執政官邸には、別の方法で乗り込めばいいだろ」

付け足すようにユーリが言うと、リタはやっぱりねと深くため息をついた。

早速行き詰まった所で何やら思いついたらしいエステルが提案する。

「なら、フレンがどうなったか確認に戻りませんか？」

「とつくにラゴウの屋敷に入って、解決してるかもしれないしね」

カロルが言うように、フレンが解決してくれているのなら、わざわざ自分たちが乗り込む必要はない。

だが先程、話を聞いた限りではそう都合よく行かないことも分かっている。腐った人物とは言え、ラゴウは仮にも執政官であり、騎士であるフレンとて迂闊な行動は出来ないだろう。

「フレンたち宿屋に居たっけ？」

「さあな。でも他に場所もないだろ」

ノール港に戻って来てから騎士の姿は見えていなかった。他に拠点となる場所がない以上、フレンがいるとすれば宿屋だろう。どの道、行ってみなければ分からない。

ここで話していても埒があかないので、エリシアたちは出てきたばかりの宿屋に逆戻りすることになった。

理想と現実

宿屋の主人に聞いてみると、やはりフレンたちは戻っているらしい。ならば会って話が聞けるだろう。

ユーリはノックすらせず、遠慮なく扉を開けた。室内には真剣な表情をするフレンとソディア、暗い顔をしたウィチルがいる。

「相変わらず辛気臭い顔してるな」

「色々考えることが多いんだ。君と違って」

普通の人間からすれば皮肉と取るだろうが、慣れているのかフレンも軽く答える。ただし、思いつめたような顔のままだ。

友人が友人ならユーリもそうなのか、フレンの君と違って発言にもふーんと返すだけである。

（そこ怒るところじゃないんだね、ユーリ。普通に返すフレンも凄いいけど）

その辺りは流石は幼なじみと言ったところだろう。飄々とするユーリを見て、フレンは心配そうに尋ねた。

「また無茶をして賞金額を上げて来たんじゃないだろうね」

ユーリを心から案じているのだろう。彼の態度を見ているだけでそれが分かる。ただ、フレンの中ではユーリ＝無茶と言う図式が成り立つのだろうか。

いつかユーリがフレンは心配性だと言っていたが、あながち間違いではないかもしれない。ユーリはそれには答えず、確かめるように聞いた。

「執政官とこに行かなかったのか」

「行つた。魔導器研究所から調査執行書を取り寄せてね。……ただ、執政官にはあつさり拒否された」

「なんで!？」

カロルから驚きの声が上がる。

いくら執政官とは言え、騎士団は無視出来ない存在ではないのか。それとも、帝国の法に詳しくないエリシアとカロルには分からない、込み入った事情でもあるのだろうか。

「魔導器が本当にあると思うなら正面から乗り込んでみたまえ、と安い挑発までくれましたよ」

「私たちにその権限がないから、馬鹿にしているんだ!」

怒り半分、悔しさ半分で唇を噛んだのはウィチルとソディア。そう、つまりは彼等には権限がないのだ。証拠がない限り、フレンは動けない。ラゴウはそれを知っていて、わざと挑発している。そしてラゴウの挑発に乗ってはいけない事もフレンは重々承知していた。

ソディアも悔しそうにきつく手を握り締める。そんな三人から話を聞いたユーリは一言。

「でも、そりゃそいつの言う通りじゃねえの?」

「何だと!？」

「はいはい。今ここで貴方が怒るべきなのはユーリじゃないでしょ」

声を荒げてユーリに詰め寄ろうとするソディアを、慌ててエリシアが止める。

こんな狭い部屋で剣など振り回されてはたまったものではない。ユーリもユーリで、わざとソディアを挑発しているのではないだろうか。

「ユーリ、どっちの味方なのさ？」

「敵味方の問題じゃねえ。自信があんなら乗り込めよ」

もう、と呆れて口を挟んだカロールに、ユーリは不敵な笑みを浮かべたままフレンを見た。

敵味方などどうでもいい。自信があるのなら、踏み込めばいいではないか。そんな彼とは対照的に、フレンの表情は晴れない。

「いや、これは罠だ。ラグウは騎士団の失態を演出して評議会の権力強化を狙っている。今、下手に踏み込んでも、証拠は隠蔽され、しらを切られるだろう」

評議会と騎士団は正に犬猿の中だ。下手に動けば失態を犯す危険もある。

わざわざ安い挑発をしたのがその証拠。もしここでラグウの挑発に乗っても証拠は見つからないだろう。

「動きたくても動けない、それがフレンの今の状況ってこと？」

「……そう言うことになるね。明らかに黒だと分かっているのに動けない。これほど悔しいことはないよ」

エリシアの問いにフレンは重々しく頷いた。

踏み込みたくとも罍である可能性がある以上、迂闊な真似は出来ない。これは騎士団全体にも関わることなのだ。

動きたくても動けない、フレンはそんなもどかしさに捕われていた。

「ラゴウ執政官も評議会の人間なんです？」

「ええ。騎士団も評議会も帝国を支える重要な組織です。なのに、ラゴウはそれを忘れている」

「とにかく、ただの執政官様ってわけじゃないってことが。で、次の手考えてあんのか？」

本来なら皇帝が不在である以上、騎士団と評議会は協力して帝国を支えなければならない。

今彼等がすべき事はいがみ合うことではないのに。ラゴウはそれを忘れて、騎士団をおとしめようとしている。

一筋縄で行かないのなら、他の方法を考えればいい。部外者である自分たちならまだしも、騎士であるならまだ他の手はあるだろう。ユーリはそう聞いたつもりだったのだが、フレンは答えない。悔しそうに瞳を閉じただけだ。

「なんだよ、打つ手なしか？」

（お前はそんな奴じゃないだろう、フレン）

打つ手がなければ自分を使えばいい。フレンは騎士で自分は犯罪者だ。何を躊躇うことがある。押し黙ったフレンに代わり、ウィチルが口を開いた。

「……中で騒ぎでも起これば、騎士団の有事特権が優先され、突入出来るんですけどね」

「騎士団は有事に際してのみ、有事特権により、あらゆる状況への介入を許される、ですね」

ウィチルの言葉をエステルが続く。帝国の法に詳しくないエリシアとカロルのためにだろう。

つまり今の状況では屋敷の中で騒ぎが起きない以上、フレンたちは動けない。ならばユーリがやるべきことは一つしかなかった。

「なるほど、屋敷に泥棒でも入って、ボヤ騒ぎでも起こればいいんだな」

わざわざ宣言するようにユーリは言う。

彼らしい笑みを浮かべるユーリにフレンの表情は未だ硬い。ここまで言えば、事情が分からないエリシアにだって分かる。

ユーリはラゴウの屋敷に乗り込むつもりなのだ。そんなユーリの演技に、エリシアも白々しく乗った。

「フレンたちは見回りに出た方がいいんじゃない？ 手配書に書かれた犯罪者が街をうろついていたみたいだし」

犯罪者は勿論、エリシアとユーリのことである。

見回りと言う名目があれば、街の中を自由に動き回れるだろう。

ユーリはその辺りも計算していたのだ。

「ユーリ、それとエリシアもしつこいようだけど……」

「無茶するな、だろ？」

「無茶するな、でしょ？」

見事に二人の声が重なる。

顔を見合わせて悪戯っ子のような笑みを浮かべるユーリとエリシアを見て、フレンもまた微かに笑った。青年騎士は顔を引き締め、ソディアとウィチルに向き直ると、迷いなく言い放った。

「市中の見回りに出る。手配書で見た窃盗犯が執政官邸を狙うとの情報を得た」

「……よろしいのですか？」

一行が部屋を出た後、それまで沈黙を保っていたソディアが尋ねる。今、フレンがしようとしている事は犯罪を見て見ぬふりをすると言うことだ。

いくらくくでもない執政官とは言え、許可なく屋敷に入ることは犯罪である。

他に手はないとは言え、犯罪を黙認していいのか。ソディアはそう言いたいのだろう。

「ソディア、君には分からないかもしれないが、綺麗事や正論だけでは守れないものもある。時には彼の言うような手段が必要となる時もあるのだと僕は思っている。それにユーリなら必ずやってくれると信じているよ」

ラゴウに正論は通用しない。理想と現実は違う。

例えそれが正しいことであつたとしても現実には正しいものの全てが通る訳ではない。

騎士団に入団し、少隊長となつた彼には嫌と言つほどよく分かっ

ている。分かっている、ユーリのように実行することは出来なかった。

ユーリがしようとしている事が正しいことなのか、それはフレンにも分からない。

だが今のフレンには、友人を信じることしか出来ないのだ。

「フレン様がそうおっしゃるのなら、僕たちは従うまでです。そうでしょう、ソディア」

黙ってしまったソディアにウィチルは諭すように同意を求めた。
何故、フレンが手配書の人物と付き合いがあるのかソディアには理解出来ないが、ウィチルの言う通り、自分達はフレンに従うだけだ。釈然としない思いを抱いたまま、ソディアは頷く。

「……分かりました。では早速参りましょう」

顔を上げた彼女はそう言う一人先に部屋を出て行った。

生真面目で融通のきかないソディアには敬愛するフレンが、賞金首と友人であるとは信じられないのだろうとウィチルは思う。

「大丈夫でしょうか？」

「こればかりは納得して貰うしかない。今の彼女には分からないことなのかもしれないが……」

それは果たして出て行った彼女のことなのか、或いはラゴウの屋敷に向かったユーリたちのことか。

ソディアは真っ直ぐ過ぎるのだ。騎士になったばかりの、かつての自分と重なるほど。だからこそ彼女の気持ちはよく分かる。

今すぐには言わない。世の中の全てが正論で回っている訳では

ないと、ソディアにも気付いて欲しい。

「ウィチル、僕たちも行こう」

彼らは彼らにしか出来ないことをやろうとしている。

こちらものんびりしている訳にはいかない。フレンはウィチルを伴って部屋を出た。

硝子のハート

雨は飽きることなく降り続けている。

宿屋を出た一行は屋敷からやや離れた場所にいた。勢の限りを尽くされた豪華な屋敷は頑丈な壁に囲まれ、出入口も正面しか見当たらない。

しかも唯一の出入口である門の前には、数刻前に訪れた時と同じく、傭兵らしき二人の男が佇んでいる。

「で、来たのはいいけど、どうやって入るの？」

木の影からそろりと屋敷を覗くのはカロル。万が一にも気付かれないように声を潜めて、である。

正面から正々堂々とは不可能だし、かといって高い塀はとても乗り越えられるような高さではない。正面が駄目なら裏口はどうだろう。エステルがそう提案した直後、背後から見知らぬ声が聞こえた。

「残念、外壁に囲まれてて、あそこを通らにや入れんのよね」

ユーリたちには見知らぬ、エリシアには耳慣れた声に一同は振り返る。

そこには一人の男の姿。驚いて思わず叫びそうになったエステルに、男はしつ、と唇に人差し指を当てた。こんな所で叫んだら見つかったらうよ、お嬢さん、と。

見た所、外見は三十代半ばだと思われる。ユーリよりも色の薄い黒髪を無造作に頭上で束ね、無精髭を生やしている。

服装も一風変わった異国情緒溢れる装束だ。ユーリにとっては帝都で会った、というより隣の牢だった男である。エリシアにしてみればよく知る、と言うか一応は“知り合い”に分類される男だ。

「えっと、失礼ですが、どちら様です？」

「なぐに、そっちのかっこいい兄ちゃんとかちょっとした仲なのよ。な？」

「いや、違うから、ほっとけ」

エリシア以外の視線が全員、ユーリに集中する。

あのなあ、誤解を招く発言は止めるよ、おっさん。そう言わんばかりに男を見るユーリ。

呆れたユーリのそっけない言葉に、男はさも悲しいと言わんばかりにエリシアに向き直ってみせた。

「おいおい、ひどいじゃないの。お城の牢屋で仲良くしたじゃない、ユーリ・ローウェル君よ。ねえ、エリシアちゃん」

「私に同意を求められても困るんだけど、レイヴン？」

あの時、自分が何をしたのか覚えていないのだろうか。自分は騎士団長と出ていった拳句、姿も現さなかったのだから。

エリシアが満面の笑顔で睨み返してやれば、男——レイヴンはわざとらしく、あちゃーと額に手を当ててみせた。

「ありゃー、まだ怒ってんの？ ごめんね。おっさんにも色々あるのよ、ホント」

「どうだか」

エリシアは適当に返事をしてそっぽを向いた。言い訳はもう沢山

だ。

「ごめんね、と謝るレイヴンは反省しているように見える。少なくとも表向きは。」

確かに彼はこう見えても、五大ギルドの一つ、天アルトスを射る矢の幹部である。言動と見た目からとても想像出来ないが、ギルドユニオンの長からの信頼も厚い。おまけの父の友人でもある。

だがレイヴンは飄々とし過ぎていて、時々何を考えているのかわからない。

「え？ 何？ エリイ、このおじさんと知り合い？」

「んー……。一応は知り合いでいいのかな？」

「オレに聞かれてもな」

エステルもカロルも訳が分からずに目を白黒させている。リタも同様だ。

どうやら状況を飲み込めていたのは、エリシアと事情を知るユーリだけのようである。

帝都では知り合いって言うてただろ、と頭をかくユーリに、腕を組んでもう一度レイヴンを見つめた。レイヴンは含みのある笑顔で、相変わらず何を考えているかわからない。

「一応って、おっさんとエリシアちゃんの仲じゃない。そんな冷たい態度取られるとおっさん傷付くなあ。それでも硝子のハートなのよ？」

「違うから。それに硝子のハートって何？ 試してみようかな。ねっ、レイヴン？」

顔には笑顔をはり付けたまま、エリシアは瞬時に腰の銃を抜き放った。そのままレイヴンの心臓に銃口を突き付ける。

隣でエステルが何やら青くなっているが、何も本気で撃つつもりはない。いつもの悪ふざけ。それはレイヴンとて分かっているだろう。現に彼は笑っていた。

「お、怖い怖い。ちょっとした冗談だつて」

怖いくらいに満面の笑顔を浮かべるエリシアに対し、レイヴンはやる気なさげに両手を上げ、降参のポーズを取った。

焦っている訳でもなく、慌ててもいない。表情にはまだ余裕があるし、飄々としている。

仕方なく銃を下ろし、ホルスターに納めた。ほっとエステルが胸を撫で下ろしたのが分かる。本当に何を考えてるのか分からない。

「それより、青年とエリシアちゃんったら随分有名になったみたいじゃないの」

レイヴンが無造作に懷から取り出した二枚の紙。ノール港に来てからも何回か見かけたユーリとエリシアの手配書である。

レイヴンがユーリの名前を知っていたのも、その辺からだろう。間延びした声でカロールが二人は有名だからね、と言うが、エリシアにしてみれば全く嬉しくない。

しかしレイヴンが手配書のことを知っている。とてつもなく嫌な予感がした。

「もしかして、この事……父さんも知ってる……よね」

返事は聞かなくても分かる。

レイヴンが手配書を持っているということは、十中八九知られて

いると考えていい。父にどうやって言い訳するか、考えただけで早速頭が痛くなってきた。

「まあ……そりゃあ、知ってるっしょ。逆に知らない方がおかしいとおっさん思うけど」

一人どつと疲れたような顔をするエリシアをそつとして置いて、ユーリは見るからに鬱陶しいと言った様子でレイヴンに向かってひらひらと手を振った。んじゃ、レイヴンさん、達者で暮らせよ、と実にそっけないユーリだが、レイヴンはめげずに話を続けようとする。

「つれないこと言わないの。屋敷に入りたいんでしょ？ ま、おっさんに任せときなつて」

ユーリが何か言いかける前にレイヴンは木の側を離れ、歩いて行く。どこに行くかと思えば、そのまま門に向かったではないか。

ちなみに本来なら止めに入るはずのエリシアは、父への言い訳を考えているのか反応がない。

「どんだけふざけたやつなのよ。にしても止めないとまずいんじゃない？」

レイヴンの一連の行動を黙って見ていたリタがユーリを見る。完全に信用出来るわけでもないが、今はまだ様子を見てもいいだろう。

「あんなんでも城抜け出す時は、本当に助けてくれたんだよな」

ユーリが言う通り、ああ見えても助けてはくれたのだ。

何故か牢の鍵を持っていたようだし、隠し通路の存在も知っていた。城にいるはずのエステルでさえ知らないのに、だ。

ユーリの言葉にエステルが少し驚いた顔をする。そう言えば、彼女には詳しい話をしていなかった。

「そうだったんです？　だったら、信用できるかも」

「だいいいけどな。おい、エリイ、いい加減、目え覚ませよ」

「んあ、あー……はいはい」

ぺしり、とユーリに軽く頭を叩^{はた}かれた。

（いや、寝てたわけじゃないんですけどね。ただ父さんと会った時の言い訳を考えてただけで。まあ、その時はユーリに何とかして貰おう、うん。我ながら良い考えかも。父さんならユーリのこと気に入るそうだし）

エリシアはそこで初めて、レイヴンがいないことに気付いた。レイヴンは、屋敷の前にいる門番に近付いたかと思えば、何やら耳打ちしている。

しかも今、レイヴンが一瞬だけこちらに視線を向けた。これはもう完全にはめられた、と全員が思ったその時、

「な、なんかこつちくるよ？」

突然、門番が一行が隠れていた木を目指して駆けて来る。

一方、背後ではレイヴンがエリシアたちに向かって満面の笑みを浮かべると、屋敷内へ消えて行った。思った通り、まんまと一杯食わされたのだ。

「あいつ、馬鹿にして！　あたしは誰かに利用されるのが大っ嫌い

なのよ！」

「また一人抜け駆けしたじゃない！ 何が事情よ！ 知ったこつちやない！」

ユーリが止める暇もない。リタとエリシアが勢いよく門番たちの前に飛び出した。二人とも怒りに我を忘れているようだが、その手元は全く危ない。

素早く胸の前で印を組んだ二人は瞬時に詠唱に入る。浮かび上がるのは赤と緑、鮮やかな魔法陣。

「――揺らめく炎、猛追！ ファイアボール！」

「――舞い踊る風霊、刹那にて軌跡を描け！ ウィンドカッター」

リタが放った火球とエリシアが生み出した風は苦もなく門番を吹き飛ばした。本来ならレイヴンをぶっ飛ばしたい所だが、流石にこの距離では届かない。

あゝあゝ、やっちゃったよ。どうすんの？ と、呆れたように肩を竦めるカロルの前で綺麗に気絶している二人の男。

二人共もちろんと手加減していたのか、火傷をしている様子もなければ裂傷も見当たらない。

「どうするって、そりゃ、行くに決まってるだろ？ 見張りもいなくなっただし」

結果はどうあれ見張りがいなくなったのだから、この期を逃さない手はない。レイヴンを追い掛けて、おとしまえを付けさせるのだ。エリシアは出来るだけ冷静に門番二人を木陰に隠し、武器を草むらに投げ込んで置いた。

「はい、これで当分は大丈夫。安心してレイヴンを追いましょ」

「えっと、エリイ。わたしたちの目的とは違いませんか？」

一仕事を終え、晴れやかに言うエリシアに、意外と冷静に突っ込むエステル。カロールもそんなエステルにうんうんと同意する。え？レイヴンをぶっ飛ばすことじゃないの。すると痺れを切らしたリタが真っ先に駆け出して行った。

「ほら、そうと決まったら早く行く！」

「ちよい、待った。正面はさすがにやめとけ。裏に回って通用口でも探すぞ」

つい正面玄関から入るとした彼女をユーリが止める。

このまま正面から突っ込むのはいくら何でも無策過ぎた。ユーリを先頭にしてエリシアにエステル、リタにカロールと続き、ラピードが最後尾に行く。

「よう、また会ったね、無事でなによりだ、んじゃ」

通用口に向かった一行の目に入ったのはレイヴン。

エリシアたちを見ても悪びれる様子は一切ない。男は直ぐさま昇降機に飛び乗って視界から消えて行った。

「待て、こら！」

レイヴンを追うように一行も残った昇降機に乗り込んだ。ただ、向かう先はレイヴンが消えた上ではなく下、地下である。乗ってし

まってはもう戻れない。抵抗虚しく一行は地下へと降り立った。

それはまさしく腐臭と言っても違いなかった。ただ腐った臭いだけではなく、血と何かが混ざった異様な臭気。それを一言で表すなんてとても出来ない。

昇降機から降りた先は、かなりの広さだろう地下室だった。日光を取り入れる窓は勿論ない訳で辺りは薄闇に包まれている。設置された僅かな明かりから周囲がぼんやりと分かる程度だ。

思わずエステルが口元を覆った。流石に彼女やカロルはキツイだろう。まだ慣れているはずのエリシアでさえ顔をしかめるほどのだから。

「なんか、くさいね……」

顔を青くしてカロルが呟く。周囲を確認するにも明かりが少なく、とても部屋全体は見渡せない。

地下室はこの部屋だけでなく、他にもあるらしい。風の流れて分かる。一方、リタの方は昇降機のパネルを見て悪態をついた。

「あゝもう！ ここからじゃ、操作出来ないようになってる……」

「……血と、あとはなんだ？ 何かの腐った臭いだな」

ユーリはエステルやカロルのように取り乱してはいない。紫掛かった黒の瞳は鋭く部屋の中を見つめている。それにこの気配。何かいるのは間違いない。

「凄く嫌な臭い…… エステル、大丈夫？」

「は、はい。何とか……」

エリシアの心配げな声を聞き、エステルは何とか笑みを返すが、顔色は悪い。大丈夫です、そう言いかけた時、ラピードが牙を剥き出し、低い唸り声を上げた。

一行の前に現れたのは、黒い体毛にカロールよりも一回り大きい体躯。狼、だろうか。

しかし牙は狼のそれより鋭く尖り、口端からは涎を垂れ流している。

「……魔物！　ち、地下室で飼ってたの？」

「かもね、リブガロもラゴウが放したみたいだったし。カロール、びくびくしないで武器構える」

恐怖から体を震わせるカロール。

エリシアはホルスターから銃を抜き放ち、油断なく辺りを見回した。魔物は前と右だ。ユーリも素早く剣を抜き、リタも精神を集中させ、詠唱に入る。

「ユーリとラピードは前をお願い。エステルは援護を。カロールとリタは右お願い！」

「言われなくても！　——蒼き命をたたえし母よ、破断し清冽なる産声を上げよ。アクアレイザー！」

瞬間、リタが描いた立体魔法陣がまばゆい光を放つ。リタから魔物を結ぶ、直線上に吹き上がる水流。時には石すら削り取る水の刃は苦もなく魔物の体を切り裂いた。

踊り出たラピードが狼の喉笛を切り裂き、ユーリが振るう剣が銀色の光となって軌跡を描く。

カロールも負けじと大斧を振るい、エステルも後方から援護する。

エリシアもリタと同じように魔術で、時には銃を使ってユーリたちをフォローした。

「これで最後！」

銃口から放たれた光は瞬時に魔物の体を焼き尽くす。魔物の姿がないことを確認し、武器を納めた。エリシアたちの耳に、か細い声が入って来たのはその時だった。

「パ……パ、マ……助けて……！」

ラゴウ執政官

か細い声を聞き、反射的に駆け出したのはエリシアとエステルだ。ユーリたちも二人の後を追って部屋を出る。

次の部屋も今までいた場所と代わり映えない部屋だった。広さも同じくらいで相変わらず暗い。

ユーリに続いたカロルが悲鳴を上げる。石の床に散乱していたのは性別すら分らない人骨。中には肉が付いたものもあった。

血と腐った肉の臭いは、先程よりも酷い。普通の人間がここにいれば、あまりの臭いに嘔吐してもおかしくない。それほどまでに酷い臭いだった。

「えつぐ、えつぐ……。パパ……。ママ……」

部屋の隅からはっきりと聞こえた子供の声。声の方に視線を向けると、少年が膝を抱え、俯いたまま座っていた。

魔物の姿がないことがせめてもの幸いか。

真っ先にエステルの足が動き、少年と視線を合わせるようにしゃがみ込む。エリシアも同じように体勢を変えた。

「怖かったね。でも、もう大丈夫」

優しい声に少年は怖ず怖ずと顔を上げた。ずっと泣いていたのだろう。目は痛々しいくらいに腫れ、頬は流した涙で濡れている。

少年は不安そうな眼差しでエリシアとエステルを見上げた。

エリシアは安心させるように微笑んで、ゆっくりと腕を伸ばすと、少年の背中を摩った。

「何があつたのか、話せる？」

それからしばらくして、彼が落ち着いた事を確認してエステルは優しく問うた。

エステルの自分を氣遣うような声に少年は嗚咽を堪え、意を決して口を開く。

「こわいおじさんにつれてこられて……パパとママがぜいきんをは
らえないからって……」

「ねえ、もしかしてこの子、さっきの人たちの……」

街で出会ったあの夫婦、ティグルとケラス。確か税金を払えなければ俺たちの子供はどうなるんだ、そう言うてはいなかっただろう
か。

少年の話を聞いたエステルは顔を伏せ、なんてひどいこと、と呟
いた。年端もいかぬ少年をこんな所に閉じ込めるなんて。下手をす
れば魔物に襲われていたかもしれないのに。

「……あれは元は連れて来られた人たちなのね」

鼻を突く血と腐った肉の臭い、転がった人骨。それはかつて人で
あつたものの成れの果て。

恐らくラゴウは、税金を払えない人々を連れて来て魔物に食わせ
ていたのだ。こんなこと、許されるはずがない。人を人とも思わぬ
所業である。

エリシアは沸き上がる怒りを抑えられずにいた。生きながら魔物
に食われる恐怖は相当だったはず。

どれほど辛かっただろう、痛かっただろう。死んでいった人々の
思いを考えれば到底、許せるものではなかった。

「パパ……ママ……。帰りたいよ……」

少しは落ち着いたとは言え、少年はエリシアにしがみついて、中々離れようとはしなかった。それも仕方がない。大の大人でも辛い中、暗闇で恐怖と戦いながら一人耐えて来たのだ。

そんな少年を見ていたエステルは、これ以上怖がらせないように、につこりと微笑んだ。

「だいじょうぶ。もう、だいじょうぶだからね。お名前は？」

「ポリー……」

やはり少年はあの夫婦の子供なのだろう。夫婦の子供の名前もポリーと言ったはずだ。

それまで黙って話を聞いていたユーリが膝を付き、ポリーに視線を合わせた。彼が少年を見る瞳はユーリにしては珍しく、第三者から見ても分かる優しいものだ。

「ポリー、男だろ、めそめそすんな。すぐに父ちゃんと母ちゃんにはあわせてやるから」

「うん……」

「で、どうするの？ 連れてくんでしょ？」

そこで口を挟んだのはリタ。街に戻ることは出来ない。引き返せない以上、ポリーを連れて行くしかないだろう。それならば細心の注意を払う必要がある。

ユーリはしばらく考えた後、行儀よく座るラピードに目を向けた。

「よし、じゃあポリー、あのでっかい犬の傍から離れるなよ。頼んだぞ、ラピード」

「う、うん……」

やや不安そうに頷くポリーに、ラピードは任せると言う風に元気よく、うおんと吠えた。

「あの階段、屋敷の中に続いているみたいね」

恐らくは地下室の終わりを告げる最後の部屋は、冷たい鉄格子で仕切られていた。

奥に伸びる階段の先は屋敷の中だろう。

階段の先を見上げるエリシアは、ポリーと手を繋いでいる。ただし何があっても動けるよう、利き手である右手は空けてあった。

「ああ。やっぱり、鉄格子は鍵がかってんな」

ユーリの視線の先、頑丈とまではいかないものの、唯一の扉には鍵がかかっている。

例え、連れて来られた人々がここまで辿り着けたとしても到底、出ることは叶わない。或はここを作った人物はそれが見たくて、わざとこんな作りにしたのだとしたら。悪趣味なことこの上ない。そこへ、階段から何者かが降りて来る。

「はて、これはどうしたことが、おいしい餌が増えてますね」

年配の男だった。というより老人と言ってもいいだろう。

細いフレームの眼鏡を掛け、白い顎髭をたくわえている。帽子から覗く髪もまた白い。細められた瞳は明らかに他者を見下すような光に満ちている。

纏った服も金にあかせて作ったであろう豪華なものだ。生地を見ればすぐ分かった。

とても街人が買える生地ではない。あれは絹だ。これから考えられる人物は一人しかない。

そう、目の前の老人はラゴウ執政官に違いなかった。

「あんたがラゴウさん？ 随分と胸糞悪い趣味をお持ちじゃねえか」

「趣味？ ああ、地下室のことですか。これは私のような高雅な者にしか理解できない楽しみですよ。評議会の小心な老人どもときたら退屈な駆け引きばかりで、私を楽しませてくれませんか。その退屈を平民で紛らわすのは私のような選ばれた人間の特権というものでしょう？」

エステルやエリシアを庇うように、ユーリが一步前に出た。

ユーリの問いを否定しなかった。つまり彼がこの街の執政官、ラゴウということになる。

老人は一行を馬鹿にしたかと思うと、とても執政官とは思えない言葉を平気で口にした。後ろにいるエステルがぎゅっと目を閉じ、

エリシアが唇を噛む。

「まさか、ただそれだけの理由でこんなことを……？」

エステルは、エリシアの耳に入ることはない。

「何が選ばれた人間の特権だ？　ふざけるな、エリシアは出来るならそう叫びたかった。」

「繋いだポリーの手が震えている。連れて来られた時のことを思い出したのかもしれない。」

「さて、リブガ口を連れ帰ってくるとしますか。これだけ獲物が増えたなら、面白い見世物になります。ま、それまで生きていれば、ですが」

「リブガ口なら探しても無駄だぜ。オレらがやっちまったから」

「……なんですって？」

「ラゴウは嫌らしい笑みを作ると、エリシアたちから背を向け、歩き出そうとした。そんなラゴウの背中にユーリが言葉を投げかける。振り返ったラゴウの顔からは初めて笑みが消えていた。」

「ラゴウからすれば、角を失ったリブガ口に価値はないだろう。もし見つければ殺そうとするかもしれない。」

「顔を歪め、怒りに肩を震わせるラゴウを見つつ、ユーリは不敵に笑う。」

「聞こえなかったか？　オレらが倒したって、言ったんだよ」

「くっ………なんということを………」

「飼ってるなら、わかるように鈴でもつけときゃよかったんだ」

馬鹿にするようにユーリは肩を竦めてみせる。そんな青年を見たラゴウは、さも忌ま忌ましいと言った風に唇を噛み締めた。

飼っているなら、鈴をつけておけばよかった。辛辣な、と言うより、ユーリらしい皮肉である。

ラゴウの表情が変わった。元の人を小馬鹿にしたような顔に、だ。

「まあ、いいでしょう。金さえ積みめば、すぐ手に入ります」

この男は金さえ出せば、全てが解決するとも思っているのだろうか。

遂に我慢出来なくなったエリシアはユーリの後ろから飛び出した。

「ふざけないで！ 何様のつもりなの！？ 命は貴方の玩具じゃないのよ！」

「ふん、平民如きが偉そうに」

執政官だから何だというのだ。

ラゴウに人の命を弄ぶ権利などない。他人を苦しめて何が楽しいのだろう。理解出来ない。

しかしエリシアの怒りの声にも、ラゴウは鼻で笑うだけだ。我慢の限界を通り越したのは何も彼女だけではない。黙って見守っていたはずのエステルも。

「ラゴウ！ それでもあなたは帝国に仕える人間ですか！」

「むむっ……あなたは……まさか？」

普段のエステルからは考えられない強い口調だった。

笑い飛ばそうとしたラゴウは、視界にエステルの姿を捉えて首を捻る。まさかこんな所にいるはずがない、と。

ラゴウは何を思ったのか、もつと良くエステルの顔を見ようと鉄格子に近寄った。

ユーリは突然、鞘から剣を抜き放つと勢いよく振り上げた。瞬間、剣から生まれた青い衝撃波が鉄格子に襲い掛かる。

鉄格子そのものは脆くはない。

だがユーリの蒼破刃を正面から喰らって耐えられるはずがなかった。

大の魔物でも仕留める牙え渡った剣技を受けた鉄格子は激しく揺れる。継いで響いた甲高い音。

鉄格子を繋いでいた止め具が外れたのだ。支えを失った鉄格子は、激しい音を立ててラゴウの方に倒れた。

「き、貴様！ な、なにをするのですか！ 誰か！ この者たちを捕らえなさい！」

「早いとこ用事すませねえと敵がそろそろ出てくんぞ？」

喚くだけ喚くと、ラゴウは驚くべき速さで走り去って行く。

この状況で傭兵たちに出てこれれば、とても証拠を抑えるどころではない。振り返った先のリタは既に印を組み、術の詠唱に入っている。

後少しで魔術が完成する。その時、ユーリがちょっと待て、とおリタを止めた。術の発動を直前で止められたリタは、無然とした顔で呟く。

「……何よ、騎士団が踏み込むための有事ってやつが必要じゃない

の？」

「まだ早い。まずは証拠の確認だ」

騎士団は有事に際してのみ有事特権により、あらゆる状況への介入が許される。そう、エステルが教えてくれたはず。

ただ、その前にすべきことがあるではないか。天候を操る魔導器を見つけなければ、今までと同じようにしらを切られるだけ。それどころか下手をすれば、エリシアたちの立場も悪くなる。

自分たちの目的と役割を間違えてはならない。ここで失敗すれば、フレンたちにも迷惑が掛かるのだ。

「天候を操る魔導器を探しましょ」

エリシアの言葉に一行は頷き合つと、ラゴウを追って屋敷の中に足を踏み入れた。

自称冒険者

幾度夜が明け、日が暮れ、時が過ぎたか。遙か悠久の時に流れ、世界が忘れた友の名をこの瞬間、この場所で万の想いと共に叫ぼう。果てなき運命を繰り返す、愚かで愛しい世界の為に。

友よ、お前の魂は今何処に在る？ 世界と共にあるのか、それとも泡沫と消えたか。

その想い、私が代わりに引き継ごう。その願い、私が代わりに叶えよう。光と消えた友の為に。

なだらかな曲線を描く草原を、一人の男が歩いていた。

若い、恐らくは二十代であろう男だ。鮮やかなルビーを思わせる瞳に、光を反射する艶やかなシルバーブロードがふわりと風に揺れた。

身に纏う服は鎧ではなく、血の色をした長衣。荷物という荷物は持っておらず、一振りの剣を携えている。

複雑な模様が彫り込まれた刃は一種の芸術品と言ってもいい。

果てしなく広がる青々とした草原にそよ風に草花。自然の雄大さを感じさせる風景がそこにはあった。周囲には魔物の姿もない。

もしここに、エリシアが居れば彼を見て驚いていたかもしれない。エフミドの丘で数度だけ言葉を交わした男。デュークである。

「……祈ってよかった、か」

デュークは歩みは止めずに突然、ぽつりと呟いた。

思い出すのは友の墓前で会った少女。何故彼女は、見ず知らずの自分と話し、友の墓に祈りを捧げる気になったのか。デュークには理解出来ない。

もし、もしも人間が皆あの少女のようだったのなら友は死なずに済んだのだろうか。過ぎた事を言っても仕方がないのは分かる。

どうしても考えてしまうのだ。

だがデュークには友に代わってやらなければならないことがある。過ぎたる薬が毒となるように、増えすぎたエアルは世界にとって毒となる。友の名に誓った。そのために彼は世界を回るのだ。

「……エルシフル」

デュークは遂に立ち止まり、今は亡き友の名を口にする。するとどうした事だろう。デュークに応えるように優しく、柔らかな風が吹き、彼の長い髪を揺らした。

階段を上がった先は、いかにも貴族らしい豪華な屋敷だった。敷かれた真紅の絨毯に、調度品の類は住民ならばとても手が出せない値段なのだろう。何にしても、エリシアたちには部屋をじっくり見ている暇などなかった。

部屋数が多過ぎて、ラゴウがどこに逃げ込んだのか分からないのである。

恐らく天候を操る魔導器が置かれた部屋だろうが、ちんたらして
いる暇なんて皆無だ。証拠を隠滅されれば元もこもない。

「ああ、もう！ 部屋が多過ぎて分かんないよ！」

真っ先に耐え切れなくなったカロールが叫ぶ。

このまま迷い続けるのは出来れば遠慮したい。フレンたちが来て
しまうのではないか。こうなったら、もう頼れる人物は一人しかい
なかった。

エリシアは勢いよく、考え事をしていたリタの方を振り向いた。

「ねえ、リタ、魔導器が置いてある部屋の見当付かない？」

「魔導器の力を十分に発揮するには、なるべく外に近い方がいいか
ら。踏み込まれることを考えても奥の方じゃない？」

「じゃあ、こっちだね！」

一つ一つ部屋を探す暇はない。研究者である彼女なら、魔導器が
置かれた場所も見当がついているかもしれない。そう思ったのだ。
そして予想通り、暫しの沈黙の後、リタが口を開く。

推測を聞いたカロールが勢いよく扉を開ける。

次の瞬間、目の前に飛び込んで来た光景に一向は言葉を失った。

何故なら部屋の天井から伸びたロープに、寝具ごとぐるぐる巻き
になった少女が吊り上げられていたからだ。

「いーい眺めなのじゃ……」

少女は吊り上がったまま、体を揺らして脳天気と言った。遊んで
いる訳ではない……と思う。

彼女はあれだ。三つ編みにした金髪に丸い碧眼。レースの付いた海賊帽を被っている。

屋敷の前で会った奇妙な少女だ。まんまと傭兵たちを撒いたのかと思っていたのだが、どうやら違らしい。

「そこで何してんだ？」

「見ての通り、高みの見物なのじゃ」

呆れたようなユーリの声に、少女はえっへんと胸を張って答える。一行を目にしても驚くこともなく、またここにいる理由を尋ねる訳でもない。

高みの見物だと彼女は言うが、体は未だぐるぐる巻きのまま。どう見ても高見の見物ではないだろう。

「ふーん、オレはてつきり捕まってるのかと思ったよ」

「あの……捕まってるんだと思うんですけど……」

控えめに言葉を挟むエステル。彼女の正しい、と言うか分かりきった指摘にも少女は首を振って、そんなことないぞ、と反論した。少女が捕まっていないように見える人物がいれば病院に行ったほうがいい。これが捕まっている以外の何に見えるのだろう。新しい貴族の遊びだとも言うのだろうか。

「その格好で言っても全然説得力ないって」

「お……？ おまえたち、知ってるのじゃ。えーと、名前は……ジャックとメアリー？」

エリシアも冗談半分に、尚も楽しそうにぶら下がる彼女に突っ込んでみる。

ふとユーリと自分を見た少女は眉を潜め、頭を捻った。

しかし次に少女から出た名は全くの別人。あまりに適当すぎるジヤックとメアリー発言に、思わずずっとこけそうになったのは何も、エリシアだけではないはずだ。

「えっと、誰なんです？」

少女に気圧されたように、躊躇いがちに、エステルは面識があるらしいユーリとエリシアを見る。

誰と言われても、自分もユーリも知らない。顔見知りではないし、そもそも一度会ったきりだ。取り敢えず、不思議そうな顔をする彼女にかいつまんで事情を説明した。

「オレはユーリだ。こっちはエリイ。おまえ、名前は？」

「パティなのじゃ」

ユーリが自己紹介をすれば、少女はパティ、と名乗った。

気のせいかもしれないが、少女——パティがユーリを見る目が少し違う気がする。違うといっても、何がどう違うのか、エリシアも上手く言えない。言うなれば女の勘である。

「パティか。さっき、屋敷の前で会ったよな」

「おお、そうなのじゃ。うちの手のぬくもりを忘れられなくて、追いかけてきたんじゃない」

「どう考えたらその答えに行き着くのか教えて欲しいかも」

ユーリはパティの置き土産である彼女そっくりの人形を掲げる。瞳を輝かせてユーリを見るパティには呆れるしかない。やはりエリシアの勘は当たっていたようだ。

確か初めて会った時もそんな事を言っていなかったか。

(……まあ、ユーリ、格好いいし)

「あの、エリイ、どうしたんです？　難しい顔して」

「難しい？　私が？」

怪訝そうな表情のエステルが顔を覗き込んでくる。

難しい顔をしていたのだろうか。難しい顔になる理由なんてないはず。そんな必要などないはずだ。

そもそも、何に対して怒っていたのだろう。一人青くなったり悩んだり、忙しいエリシアにエステルは不思議に首を傾けた。

「もしかして自覚なかったんです？　眉間にシワ寄ってましたよ？」

「あ、そう。ありがとう、エステル」

答えたエリシアは上の空というかどこか元気がない。わたし、何か変なこと言ったでしょうか、とエステルはおろおろしていた。もしかして余計な一言だったろうか。

しかし壊滅的に鈍い彼女に分かるはずもなく。

一人慌てるエステルと、暗くなっているエリシアを尻目にカロルが尋ねる。

「ね、こんな所で何してたの？」

「何って捕まってたんでしょ」

「失敬な。宝を探していたのじゃ」

リタから鋭い指摘が飛ぶ。確かにそうなのだが、それでは流石に身も蓋も無い。

リタの捕まっていた、が気に入らなかったのか、パティは心外そうな顔をしていた。言動も妙に年寄り臭いパティだが、ラゴウの屋敷に侵入した目的もぶっ飛んでいたようである。

まさか宝探しのためにこんな危険を侵すとは誰も思っまい。

「宝？　こんなところに？」

「あの道楽腹黒ジジイのことだし、そういうのがめてても不思議じゃないけど……」

「宝って言うより税金でしょ。街の人たちからも随分絞り取ってるみたいだし」

首を傾げるカロルに、あながち間違いではないと同意するリタ。しかし、今までの話の流れから行くと、溜め込んでいるのは宝というより税金ではないだろうか。この屋敷だけでなく、外の庭園にもかなりの金がかかっているのだろう。

屋敷の内装も勿論、明らかに高価なキャビネット、シャンデリア。上げればきりが無い。

その全てが街の人々から巻き上げた税金が使われているのだ。怒りを通り越して呆れすら抱く。

「だろうな。ったく、無駄なものばっかだな」

ユーリは近くにあった獅子の置物を蹴った。恐らくは大理石で出来ているのだろう。磨き上げられた鏡のような像はかなり重い。

倒れて壊れました、ではザーフィアスの城の二の舞である。ただ、犯罪者になった時点で気にするだけ無駄であり、そもそもユーリが気にするはずがない。

「パティは何してる人？」

「冒険家なのじゃ」

パティの一言に凍り付いたのは、カロールとエステルである。

ユーリは相変わらずなにを考えているか分からないし、リタも動揺した様子はない。こんな年端もいかない少女が冒険者とは。

嘘をついているとも思えないし、誤魔化している訳でもなさそうだ。

「と、ともかく、女の子ひとりでこんなところウロウロするのは危ないです」

「そうだね。ボクたちと一緒に行こう」

コホン、と咳払いをして落ち着いてから、エステルは話の方向を逸らした。カロールもそれに便乗する。

その点はエリシアも同じだ。

流石にこのまま——天井からぶら下がったまま放置するのはかわいそうだと思う。捕らえれた彼女が危険な目に合わないという保証はない。

「この際、宝は諦めた方が賢明だと思うけど、どうする？ どうしても天井からぶら下がったままがいいなら、無理強いはいしないけど」

「人のこと言えた義理じゃねえがおまえ、やってること冒険家っていうより泥棒だぞ。ま、まだ宝探しするってんなら、オレも止めないけどな」

不法侵入をした時点で、冒険者ではなく犯罪者だろう。しかもお目当ての宝を見つけたなら、当然持つて行く気なのだから、やはり泥棒である。

それでも宝を探したいなら、ユーリもエリシアも止めない。パティを説得する余裕も猶予もないからだ。

「冒険家というのは、常に探究心を持ち、未知に分け入る精神を持つ者のことなのじゃ。だから泥棒に見えても、これは泥棒ではないのじゃ。……しかし、たぶん、このお屋敷にはもうお宝はないのじゃ」

色々並べ立てているが、つまりは一緒に来たいということなのだろう。素直ではないというか、変な少女である。ただ、憎めないのは確かだ。

「それじゃ行くか」

「ちょっと待つじゃ！　うちを降ろすという肝心なことを忘れておる！」

「ほんの冗談だって」

「ユーリが言うと冗談に聞こえないから」

部屋を出て行こうとするユーリに、パティは体を揺らして叫んだ。

悪戯っ子のような笑みを浮かべるユーリを見ても、本気なのか冗談なのか分からない。そのままパティを放って置きそうな気もする。

エリシアが苦笑しながら言っと、そうか？、と軽い声が返って来た。

ユーリと旅をするようになって結構経つが、未だにふとした時の考えが読めない。

レースのついた海賊帽に、大人用の紺の上着をワンピース代わりに着ているパティ。見た目は普通の少女なのだが、どこか変わっているというか喋り方がかなり年寄り臭い。

「これで……！」

エリシアの愛銃の銃口からほとばしる雷撃が、寸分の狂いもなく、剣を振り上げた傭兵を捕らえた。

バチツ、と鈍い音がした瞬間、傭兵は冷たい床に崩れ落ちる。気絶させるにはこれが一番手っ取り早いのだ。

「こいつで……ラストだ！」

ユーリが振り上げた剣から発生する衝撃波——既に旅の中で見慣れたものになりつつある蒼破刃である。蒼い衝撃波は、防御もままならぬ男を容赦なく壁へとたたき付けた。

ユーリは襲いかかって来た傭兵全員が昏倒したことを確認して、

剣を鞘に納める。

「急がないといけませんね」

「進む度に傭兵の数が増えてる事を考えると、この先に魔導器があるのはまず間違いないわね」

やや焦ったように剣を納めるエステルに、確信を得たりタは組んでいた手を下ろした。

しかし本来の目的では絶対に使われない、戦闘を繰り広げたお陰で、部屋の中は例えようなない有様だった。あえて言うなら、空き巣に入られたような感じが。

高価な絵画には弾け飛んだ傭兵の剣が突き刺さっているし、部屋の隅に置かれた観用植物は、吹っ飛ばされた傭兵のお陰でめちゃくちゃである。

「こんな危険な連中のいる屋敷をよくひとりでウロウロしてたな」

「危険を冒してでも、手に入れる価値のあるお宝なのじゃ」

仲良くおねんねしている男たちを見下ろし、ユーリは言った。

門番たちを出し抜いたのは見事だったが、捕まったのでは元も子もない。そんな危険を冒してまで、パーティが求める宝とは何なのだろう。

「それってどんな宝？」

「アイフリードが隠したお宝なのじゃ」

興味津々と言った様子で尋ねたカロールにパーティは何気なく答えた。

アイフリードが隠した宝だと。

“アイフリード”。その一言を聞いた瞬間、カロルが驚愕し、リタが微かに眉を吊り上げる。

ユーリは相変わらずのポーカーフェイスで、エリシアは僅かに目を見開き、エステルはカロルと同様に驚いていた。

「有名人なのか？」

場違いな質問を投げかけたのはなんと、ユーリである。

さっきのあれはポーカーフェイスというより単に知らなかっただけらしい。それもある意味では仕方がないのだろう。彼はザーフィアスで暮らしていたのだから。博識なエステルは恐らく、本で知っていたに違いない。

アイフリードの名はギルドに属する、或いは関係者なら知らない者はいなかった。

「ってユーリ、一人驚いてなかったのは、知らなかっただけ？」

「ん？ ああ、さっぱりな」

別の意味で驚く皆にユーリは飄々と笑った。やはりユーリは大物に違いない。

誇れるような生き方

「う、海を荒らしまわった大悪党だよ」

カロルがややつつかえながら、アイフリードがどんな人物であったかを語る。

アイフリードの名は、ギルドの人間なら知らぬ者はいない。それくらいアイフリードと、アイフリードが率いたギルドは有名だった。しかしアイフリード率いるギルドが起こしたある事件から、ギルドの人間でなくとも有名である。

「海賊ギルド、^{セイレン}海精の牙を率いた首領。^{アルトスク}天を射る矢とも並び称されていたんだけど……」

「アイフリード……移民船を襲い、数百人という民間人を殺害した海賊として騎士団に追われている。その消息は不明だが、既に死んでいるのではとされている、です」

言い淀んだエリシアに、ユーリは首を傾げる。何か言いづらいことでもあるのだろうか。

彼女に代わって答えたのはエステルだった。

移民船を襲い、民間人を虐殺したとされるアイフリードが表舞台から姿を消して数年という時が流れた。

本来ならギルドには干渉しないはずの騎士団に追われていたアイフリードは、生きてはいないというのがもっぱらの噂だ。

「ブラックホープ号事件って呼ばれてるんだけど、もうひどかったんだって」

「……ま、そう言われとるの」

呟いたパティは前を向いたまま。一行からは彼女がどんな表情をしているか分からない。

だがその声音は変わらぬものの、少しだけ悲しそうだった。少なくともエリシアはそう感じる。パティはもしかして、アイフリードの関係者なのだろうか。

宝を探していると言っし、纏う服もどこか海賊を思わせる。悲しげな声も、彼女がアイフリードの関係者だからではないのだろうか。

「パティ？」

「なんでもないのじゃ」

元気よく振り返った彼女に、先程の憂いはない。わざと元気に振る舞っているような感じがするのは、エリシアの気のせいだろうか。何にしても、無理に聞く必要はないだろう。パティとて聞かれたくないに違いない。

「でも、あんたそんなもん手に入れて、どうすんのよ」

「どうする……？ 決まってるのじゃ、大海賊の宝を手にして冒険家としての名を上げるのじゃ」

リタの疑問はもつともである。海賊の宝を手にしてどうするのか。確かに大海賊の宝を手にしたとなれば当然、冒険家としての名を上げることは出来るだろう。

しかしそれは、こんな少女が危険を冒してまで、手に入れなければならないものだろうか。事情があるのかもしれないが、それにしても危険過ぎる。雲を掴むような話だ。

「危ない目に遭っても、か？」

「それが冒険家という生き方なのじゃ」

パティはユーリの問いに淀みなく答える。

冒険家であれ騎士であれ、生き方というものは簡単に曲げられるものではない。まだ十三、四歳だというのに妙に達観している所もあった。

エリシアは思う。パティは凄い。自分などよりずっと。誰かに誇れるような生き方なんて、出来るのだろうか。

「ふっ……面白いじゃねえか」

「面白いか？ どうじゃ、うちと一緒にやらんか」

パティの言葉を聞いたユーリは、感心するように微笑んだ。言動もそうだが、この少女はユーリを驚かせる何かがあるらしい。

そんなユーリを見てパティにもやりと笑う。

一緒にということはパティと共に冒険家をするということだろう。しかも彼もまんざらでもないような感じだ。もしかしくなくても受けるのだろうか。

エリシアが固唾を飲んで見守っていると、

「性には合いそうだけど、遠慮しとくわ。そんなに暇じゃないんな」

「ユーリは冷たいのじゃ。サメの肌より冷たいのじゃ」

「サメの肌……？」

ユーリは肩をすくめただけで、誘いを断わった。パティは残念そうにふうと息を吐く。

何だかほっとしたように息を吐く。その事実、エリシアは自分では気付かなかった。

そんな事より、もっと分かり易い例えの方がいいのではないだろうか。そもそもサメの肌<ユーリなのだろうか。

イマイチ例えば飲み込めない一行などそっちのけで、パティは悪戯っ子のように微笑む。

「でも、そこが素敵なのじゃ」

「素敵か……？」

顔を輝かせるパティを横目に、突っ込みを入れるリタ。

つまり、と言うかやはり、パティはユーリのこと好きなのだろう。ここまで来れば誰にだって分かる。

現にカロールだって気付いているだろう。

「もしかしてパティってユーリのこと……」

「ひとめぼれなのじゃ」

「ひとめぼれ……」

パティは片目を瞑ってみせる。その後ろではリタが盛大に息を吐いた。

すると今度は、リタの隣にいたエステルがいつも以上にニコニコしている。エリシアが彼女の前で手を振ってみても全く反応がない。

「おーい、エステル？」

エリシアが話しかけても反応がない。それ所か、まだひとめぼれ、ひとめぼれと繰り返している。本当に大丈夫だろうか。

かく言うエリシアも少なからずショック——とまでは行かないが、を受けていたと言ってもいい。エステルが普通であれば顔に出ていただろう。

「何でもいいけどさっさと行くわよ。一刻の猶予もないんだから」

相変わらずポーカーフェイスのユーリに、我関せずと言ったラピードとカロール。

機嫌よさそうにふんふん鼻歌を歌うパーティに、ニコニコ微笑むエステルと、彼女の肩を持って揺さぶるエリシア。

まったくと言っていいほど纏まりの無いパーティーを一瞥し、リタは深くため息をついた。駄目だわ、こりゃ、と。

それはきつと魔導器なのだろう。低い駆動音は魔導器が稼動している証だ。

強大な、天井に届かんばかりに伸びた魔導器は青白い光を放っている。一般に魔導器と呼ばれるものと比べてやけに大きく、全体は洗練されたとは言い難いフォルムを描いていた。

部屋全体を覆うそれが、フレンが言っていた天候を操る魔導器に間違いない。

部屋に入って魔導器を見るなり、リタは真っ先に駆けて行く。そしてスロープを見つけて、魔導器の正面に立った。かと思うと一行に背を向け、虚空に指を走らせる。

現れたのは半透明の制御パネルである。恐ろしい速さで指が動くのをユーリたちは呆然と見守っていた。

「ストリムにレイトス、ロクラーにフレック……複数の魔導器をツギハギにして組み合わせている……この術式なら大気に干渉して天候操れるけど……こんな無茶な使い方して……エフミドの丘のといい、あたしよりも進んでるくせに、魔導器に愛情のカケラもない！」

半ば怒りながら、しかしそれでもパネルを走る指が遅くなることはない。途切れ途切れに聞こえて来るリタの独り言から推測するに、この魔導器は複数の魔導器を組み合わせて作られたらしい。
（でも、リタより進んでるってあれを作った魔導士って誰なんだろう……？）

「これで証拠は確認出来ましたね。リタ、調べるのは後にして……」

「……もうちょっと、もうちょっと調べさせて……」

エステルに言われても、リタは中々離れようとはしない。

呆れたユーリが仕方なく声をかけた。このままではリタが納得行くまでここを離れられない。

「あとでフレンにその魔導器まわしてもらえばいいだろ？ さっさと有事を始めようぜ」

「そうだよな。有事じゃないとフレンたちは突入出来ないし」

とりあえず派手にぶっこわせばいいだろう。との考え方はエリシア自身は否定するかもしれないが流石、ギルドの人間である。彼等は何にしても豪快なのだ。

そんな彼女にエステルもすっかりその気になったのか、何か壊しているものは……と呟いて辺りを見回している。そして、ここにもその気になった人間が一名。

「よし、何か知らんが、うちも手伝うのじゃ」

パーティが楽しそうな顔でどこから取り出したもの。

何と銃である。少女が扱うにしてはやや大きい、ゴツめのものだ。フォルムを見れば分かる。エリシアのような魔導器ではない。

いっちょ前に銃を構えた彼女は、適当な的はないのかとキョロキョロするが、それはあえなくユーリに阻まれることとなった。

「お前は大人しくしてろって」

「あう？」

思わぬところからやって来た衝撃にパーティは思わず尻餅を付いた。余計なことはいしないで貰いたいものだ。変な所を壊されては堪らない。

一方、カロルは魔導器を操作するために、組上げられた足場を支える柱に狙いを定め、思い切り斧を振り上げる。次いで衝撃。

その時、カロルの頭上でパネルを操作していたリタの中で何かが切れた。

「あゝっ!! もう!!」

「うわあっ! いきなり何すんだよっ!」

浮かび上がる赤い魔法陣。彼女が得意とする最もポピュラーな魔術、ファイアボール。それにより発生した火球が、カロルの直ぐ近

くに着弾する。

突然飛んで来た炎にカロルは堪らず、後ろに下がるしかなかった。一歩間違えば火傷では済まない。リタが手加減していれば別だが、あれは本気だろう。

エリシアはリタのファイアボールに巻き込まれないように壁際に移動して、天井の装飾を撃ち落とす。

「うーん……動かない的撃つても練習にもならないかあ」

いくら天井が高くて狙いづらい位置にあるとは言え、魔物に比べれば断然当てやすい。が、動いてもいない的を撃つてもちつとも練習にならないのだ。

普通の人間から見れば、あんな位置の装飾を狙って撃ち落とすのは十分凄い。

しかしエリシアにとっては、見て驚くような距離を狙い撃つのは朝飯前である。

でなければ獅子の娘などやっていられない。父の名に恥じぬよう、鍛錬を欠かさないのだ。

「こんくらいしてやないと、騎士団が来にくいでしょうっ！」

リタが掲げた手から絶え間なく放たれるファイアボール。

部屋に大きな衝撃が走る。無数の火球は壁に激突すると白い壁を黒く焦がした。

流石にやり過ぎではないだろうか。あまりのリタの勢いに、エステルは壊している物を探していることさえ忘れていた。

「でも、これはちょっと……」

「なに、悪人にお灸を据えるにはちょうどいいくらいなのじゃ」

ユーリに大人しくしろと言われたパーティは目を閉じ、悟ったように後ろで手を組んだ。

悪人と言っているが、そもそも彼女はラゴウの所業を知っていたのだろうか。

その時、騒ぎを聞きつけたのか、赤い装束を纏った傭兵たちを引き連れたラゴウが姿を現した。

「人の屋敷でなんたる暴挙です！ お前たち、報酬に見合った働きをしてもらいますよ。あの者たちを捕らえなさい。ただし、くれぐれもあの女を殺してはなりません！」

「まさか、こいつらって、ブラッドアライアンス紅の絆傭兵団？」

ラゴウが指差したのはエステルである。
何故エステルなのか。その答えは先ほど口を滑らせた一言にあった。

命令を受けた傭兵が武器を構え、一行を包囲する。

斧を構え、臨戦態勢を取ったカロールが男達の服装を見て叫んだ。

紅の絆傭兵団は、主に護衛を主とするギルドである。彼らの服には五大ギルドの一つ、紅の絆傭兵団ブラッドアライアンスを示す徽章が付けられている。

「そうよ！」

傭兵たちを見てエリシアが頷く。父のギルド、獅子レオンハルトの咆哮と敵対しているギルド、紅の絆傭兵団を自分が見間違えるはずがない。

彼らは仮にもギルドを纏めるはずの五大ギルドの一つだと言うのに、ここ最近、信義に反する行いが目立っている。

「それ、もういっちょー！！」

リタの方は視界の下で戦っている仲間たちには目もくれない。無駄のない動作で印を切り、手を掲げる。何度目かの炎の玉は、今まで以上に室内を縦横無尽に駆け巡った。

やや危なげなもの、カロルの斧が傭兵の武器を弾き飛ばし、ラピードがいつか帝都で見せたような足払いを華麗に披露する。

エステルは危なげなく盾で剣を受け止めると、隙についてサーベルを振るった。

エリシアは愛銃で器用に傭兵たちの武器を弾き飛ばし、ユーリは遠慮なく峰打ちで男たちを気絶させる。

ちなみにこの峰打ちというのは物凄く痛い。思いきり殴り付けられたのだから当たり前だが、手加減したとは言え、ユーリのことだ。恐らく青痣となって残ることだろう。

「十分だ、退くぞ!!」

「何言ってるの、まだ暴れ足りないわよ!」

「リタは十分暴れたでしょ」

あらかた片付けた後、退くぞ、と皆に聞こえるようにユーリが叫ぶ。すると抗議の声は上から降って来た。声の主はリタである。

それともあれだけファイアボールを連射していたのは、彼女の基準では、暴れる内に入っていないのか。

エリシアにしてみれば本来、怒りをぶつきたい相手はレイヴンいないのだから。

「早く逃げないとフレンと御対面だ。そういう間抜けは御免だぜ」

「まさか、こんなに早く来れるわけ……」

直後、リタの手から炸裂する火球。まだ来るわけがない、そう反論しようとしたところに響く複数の足音。

扉から姿を現したのは紛れもなく彼である。

鮮やかな金の髪に帝国騎士であることを表す鎧。ユーリにしてみれば、厭味なくらい貴公子然とした顔立ちの青年、フレン・シーフオとその部下、ソディアとウィチルだった。

竜と竜使い

「執政官、何事かは存じませんが、事態の対処に協力致します」

エステルがフレン、と彼の名を呼ぶ。この友人を侮ってはならない。自分たちが“騒ぎ”を起こして間もないというのに、フレンは部下を引き連れてやって来た。

（つたく、ちよつとは遅れて来いよな、フレン）

無駄だと分かっているにもユーリは苦笑するしかない。ほらみろ、と。

「ちつ、仕事熱心な騎士ですね……」

ラゴウが忌まじましいといった風に舌打ちした瞬間だった。天井近くに設置されている硝子張りの窓が甲高い音を立てて砕け散る。割れた窓から現れた影は見たこともない異形だった。体の両側から広がるのは固い鱗に包まれた青い翼。長い尾に鋭い瞳は薄い青色をしている。

鳥でもなく、爬虫類でもない。数多くいる魔物の中でも滅多に目にすることのないもの、それは“竜”。

しかも竜の背に、何者かが跨がっているではないか。

顔を含めた全身を覆う白い鎧を身につけているため、年齢も性別すらも分からない。ただ、身の丈もある業物の槍を携えている。

「うわあ……！！ あ、あれって、竜使い！？」

竜使いの姿を認めたフレンは部下たちを即座に散開させる。

ウィチルが援護するようにファイアボールを放つが、燃え盛る火

の球もフレンとソディアの剣も当たらない。

竜が空中を泳ぐように優雅に魔導器に近付くと、竜使いは一瞬で中央に象眼されていた魔核を薙いだ。

ばちばちと奇妙な音を立て、魔導器から黒煙が上がる。ここまで壊されてしまえば誰も修復出来ない。あまりに突然の出来事に呆然とするラゴウとリタ。

だが魔導器を愛するリタの方はたまったものではない。それが例えリタの魔導器でなくとも。

「ちょっと！！ 何してくれてんのよ！ 魔導器を壊すなんて！」

「人が魔物に…… 本当だったんだ」

しかし、リタの叫びも竜使いには届かない。魔導器を破壊したことで、もう用は済んだとばかりに飛び去ろうとする。

エリシアは空中の竜と竜使いを見上げた。エフミドの丘でカロルが聞いた話は本当だったのだ。あれが竜使い。でも何のために魔導器を壊すのだろう。

「待て、こら！」

リタが再度ファイアボールを放つが、これも竜には届かない。フレンとソディアも後を追おうと走り出したが、竜が放った灼熱の吐息に阻まれる。

竜の口から放たれた息吹は、容赦なく室内を燃やして行く。このままでは部屋全体に炎が広がるのも時間の問題だった。

「くっ、これでは！」

悔しげにフレンが叫ぶ。

このまま炎が燃え広がれば証拠である魔導器を調べることが出来なくなる。魔導器はラゴウが天候を操る魔導器を所有していた事を裏付ける貴重なものだ。

しかし混乱する騎士たちを尻目に、ラゴウは部下の傭兵たちに命じる。船の用意を、と。

混乱に乗じて逃げるつもりだ。証拠を手に入れるためにもフレンはラゴウを追うことが出来ない。ここで追ってしまえば全てが水の泡になる。

ユーリはそんな幼なじみの心情を十分承知していたので、仲間たちに聞こえるように叫ぶ。

「ちっ、逃がすかつー！　追うぞ」

燃え盛る部屋を抜け出し、エリシアたちは屋敷に隣接する庭園にいた。空は相変わらぬ曇り空であったが、長い間港を濡らしていた雨はもう上がっている。

そこにはもう、ラゴウと傭兵たちの姿はなかった。

船の準備をと口にしていたことから、船着き場に向かったのだろう。

「まったく、なんなのよ！　あの魔物に乗ってんの！」

それまで抑えていた怒りを遂に抑えきれなくなり、リタは叫んだ。理由は至極簡単である。調べていた魔導器をあんな形で破壊されたのだから。ただでさえ、魔導器を愛するリタにしてみれば許せな

いことだというのに。

「あれが竜使いだよ」

「竜使いね……エフミドの丘といい、どうして魔導器を破壊して回ってるのか疑問じゃない？」

カロルの呟きにエリシアは首を傾げた。

ノール港とエフミド丘。破壊された二つの魔導器に類似、あるいは一致するものとは何なのか。

前者は天候を制御するもので、後者は結界魔導器である。共通するのは魔導器ということだけ。

「そんな理由どうでもいいわ！ それに何が竜使いよ！ あんなの、バカドラで十分よ！ あたしの魔導器を壊して！」

「バカドラって……。それにリタの魔導器じゃないし」

冷静なカロルのつつこみも、頭上から降って来たリタのきつい一撃に阻まれる。

訂正、リタは随分ご立腹のようだ。こうなった彼女は誰にも止められない。よって、嵐が過ぎるのを待つしかないように、リタの怒りがおさまる時を待つしかないのだろ。諦めに似た達観が必要なのだ。

（それにしてもレイヴンはどこに行ったんだろ？）

屋敷にはレイヴンの姿はなかった。そもそも何故、屋敷に入ろうとしていたのかも聞いていない。天を射る矢が関係しているのか、それとも……

分からない。レイヴンの行動は、エリシアにも全く読めなかった。

「おまえらとはここでお別れだ」

「ラゴウってわるい人をやっつけに行くんだね」

言いながらユーリは振り返った。

視線の先にはラピードの傍に立つ小さな男の子、ポリーと頭に海賊がかぶるような帽子を乗せたパティ。するとポリーは頷き、逆にラゴウを倒しに行くのかと問うた。

ユーリはにっと笑うとポリーの頭を乱暴に撫でる。くすぐったそうにはしているが、嫌ではないらしい。

「ああ。急いでんだ」

「うん。だいじょうぶ。ひとりで帰れるよ」

「いい子だ。お前も危ないことに首突っ込むんじゃないぞ」

流石は男の子。たくましいものだ。ポリーが無事だということを早く両親に見せ、二人を安心させてあげなければならないだろう。

ユーリはもう一度だけポリーの頭を撫でると、今度はパティに向き直った。行動を共にしたのは短い間でしかなかったが、この少女に釘を刺しても無駄だろうとは薄々感じていた。

だが何も言わないよりはマシだろう。……恐らくは。

「分かっているのじゃ」

「気をつけてね」

ユーリの注意とエリシアの言葉に、パティはうんうんと頷くとポ

リーと共に、街の方へと駆け出して行く。
その後ろ姿に一抹の不安が拭えないのは、ユーリとエリシアだけではないはず。

「あれ、絶対分かってないわよ」

「多分、ね……」

そもそもそんなに物分かりがいいなら、彼女は一人でラゴウの屋敷に侵入しないだろう。

明らかに期待していないと言ったように片目をつむるリタに、エリシアも同意するしかなかった。

「エステル、どうしたの？」

先程から全く会話に加わらないエステルを見て、カロールが心配そうに声をかけた。顔色が悪いのは気のせいではないだろう。

エステルはすみません、と言った後、ゆっくりと語り出す。

「わたし、まだ信じられないんです。執政官があんな酷いことをしていたなんて……」

「よくあることだよ」

帝国はこの世界唯一の国。

光があればまた影が生まれるように、帝国の影の部分を垣間見ることは何も珍しいことではない。カロールだってエリシアだって、何度もそんな場面を目にしている。

世界は弱いものに辛く、強いものに優しい。それが今のテルカ・リュミレースの摂理だ。

「帝国がつてんなら、この旅の中でも何度か見てきたろ？」

「……ハルルではフレン以外の騎士は助けてもくれなかった」

結界が消失し、魔物の脅威に怯える住民たちに、フレンと彼の部下以外は、手を差し延べさえしなかった。民間人を守ることが騎士のつとめではないのか。

そして魔導器を管理という名目で独占する帝国。

「でも……いいえ、今は執政官を追いましょう」

言いかけて、エステルは止めた。考えることは後でも出来る。

しかし今、フレンのためにも執政官を逃がすわけには行かない。悩みながらも彼女はそれを分かっていた。葛藤は後でいい。今はラゴウを追わなければ始まらない。

「その意気だ」

「取っ捕まえてフレンの前に出してあげましょ」

ユーリが頷き、エリシアがエステルに向けて悪戯っ子のように笑う。エステルも同じように笑い返すと、皆の後を追って走り出す。

一行が船着き場に到着した時には、既に豪華な船は今正に出港しようとしてた。緩やかに波に乗り、陸から離れて行く。

あたしはこんなところで何やってんのよ……。船を追いかけるように走るリタがぼつりと呟く。

答えるなら、船を追いかけてるんだと思います、だろう。

同じように並走するユーリが静かに言った。

「行くぞ」

言うなり、ユーリはカロルの体をひょいと横から抱えあげた。抵抗する暇も抗議の声をあげる暇もない。一瞬の早技である。

そしてそのまま大きく地面を蹴った。ふわり、と体が宙を浮く。

「ちょっと待つて待つて待つて！ 心の準備が~~~~~！！」

カロルの叫びも虚しく、高く飛び上がったユーリはそのまま、船に飛び移った。

ラピードとエリシアも難無く後に続くと、ユーリとエリシアが手を伸ばし、残りの二人を引き上げる。

甲板に乗り移った一行は一通り、船の中を見渡す。

特に変わったものは……あった。リタの目の前に置かれた木箱。箱自体は何の変哲もない箱そのものだったが、中身が問題である。何気なく箱を開けたリタは途端、絶句した。

「……これ、魔導器の魔核じゃない！」

リタの声に驚き、エリシアたちも箱の中身が見える位置に移動する。

確かにリタの言う通り、木箱の中には種類も色も全く違う魔核が詰め込まれていた。

「なんでこんなにたくさん魔核だけ？」

「知らないわよ。研究所にだって、こんな数揃わないってのに！」

魔導器を研究しているアスピオの研究所にだって、ここまでの数は揃わない。魔核が貴重だからこそだが、それがこんな船の中に無

造作に置かれているなんて。

驚くりたにエリシアは確信していた。

「正規のルートで手に入れた魔核じゃない。全ては魔核ドロボウと繋がってる、か」

これほどの魔核を集めるのは容易ではない。しかも研究所ですら揃わない数なのだ。

そうなれば目の前にある魔核は当然、正規のルートで手に入れた品ではありえない。

「やはり関係があるんでしょうか？」

「かもな」

後ろから魔核を覗き込むエステルに、ユーリが同意した。エリシアが言ったように全ては繋がっている。

既にその時、確信していた。屋敷に紅の傭兵団がいたのだ。あの男が無関係とは考えられない。むしろラゴウと手を組んでいたと考える方が自然だろう。

「けど、黒幕は隻眼の大男でしょ？ ラゴウとは一致しないよ」

「だとすると、他にも黒幕がいるってことだな。ここに下町の魔核、混ざってねえか？」

だがエリシアの考えを知るよしもないカロルは、首を傾げてみせる。ラゴウはどうみても隻眼でも、大男でもない。

ユーリは難無くその“答え”にいきついた。これほどまでの魔核を集める理由はわからないが、ラゴウだけが黒幕ではない。

実行犯は別にいる。それも手慣れていなければ、大量の魔核は手に入れられない。盗まれた下町の魔核も、もしやと思ったのだが……。

「残念だけど、それほど大型の魔核はないわ」

瞬間、ラピードが真っ先に反応する。

沸き上がった殺気。現れたのは数人の男たちだった。一目で傭兵だと分かる服装に短刀。彼らが何者であるかを確信したカロールが叫ぶ。

「こいつら、やっぱり五大ギルドのひとつ、『紅の絆傭兵団』だ」

「どうしてこんな……ラゴウの悪事に加担してるの？」

前々から氣にくわれないと思っていたが、ここまで腐っているとは思わなかった。

そもそもギルドとは本来、帝国の支配に抵抗して作り上げられた組織だ。帝国の法によって守られることはないが、完全に“帝国”の支配から抜け出した者たちの集団でもある。

基本的にギルドと帝国の仲は良好とは言えない。

他のギルドを纏める立場にある五大ギルドが、政府の要人であるラゴウと手を組むというのは考えられないことだ。

その時、隻眼の大男が船室から現れる。

「はんつ、ラゴウの腰抜けはこんなガキから逃げてんのか」

血のように赤い服を身に纏い、巨大な片刃の剣を携えている。筋骨隆々でお世辞にも人受けするような顔ではない。正に悪人面だ。

片方の瞳には恐らく刃物による裂傷が走り、左腕は生身ではなく、奇妙な形の義手であった。

「……バルボス」

「ん？ てめえ、どつかで見たことあるな」

自らの名を呼ぶエリシアに、男の視線が彼女に向いた。

男は隻眼の大男と聞いた時、頭に浮かんだ人物と同じだった。五大ギルドの一つ、紅の絆傭兵団の首領、バルボス。
ブラッドアライアンス

「バ、バルボスって紅の絆傭兵団の首領だよ！」
ブラッドアライアンス

エリシアの呟きを聞いたカロルが悲鳴を上げる。そして次の瞬間、バルボスの背後に回ったユーリが首筋に剣を突き付けていた。

「隻眼の大男……あんたか。人使って魔核盗ませてるのは」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8121x/>

金の満月が昇る時

2011年12月30日22時49分発行